

14.5

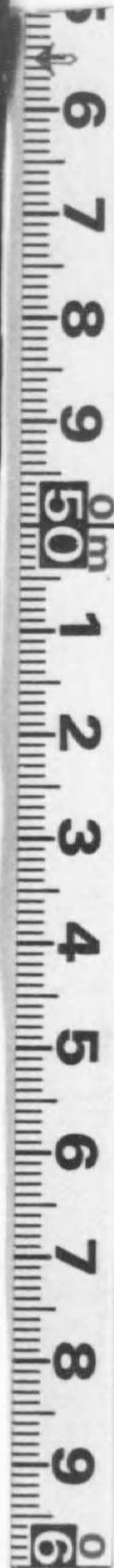
14. 5-563



3

"SOVIET FAR EAST AND OUTER MONGOLIA RESEARCH SERIES" No. 27,

"EXPLORATION OF THE SEKHOTE-ALINA MOUNTAINS"



始



14.5
563

譯文
ソ聯極東及外蒙調査資料 第四十七編

シホタ・アリン山脈踏査記

滿鐵調査部



翻譯文

ソ聯極東及外蒙調査資料 第四十七編

シホ
タ・アリン山脈踏査記



南海鉄道株式会社
東京支社 寄贈本

滿鐵調査部

14.5
563

露文
翻譯
ソ聯極東及外蒙調查資料發刊の辭

ソ聯極東地方及外蒙の地は日滿兩國の隣接地として、之れが真相を究明するの必要なのは言を俟たない。嘗て當會の前身たる調査課が十餘年の日子を費し、露西亞諸官廳の各方面に對する調査研究の結果たる權威ある文献を網羅し、之を翻譯して露西亞經濟調査叢書全九十卷、約三萬頁の浩瀚なる資料を江湖に發表した所以も茲にある。

同叢書は其後益々我國の關心を要するに至つたソ聯極東、西比利亞、滿蒙に關して精密な知識を與ふる唯一の資料として現に尙ほ我國各方面に多大の便宜を提供しつゝあるは周知の事實である。而も世界各地の狀勢は日に月に變化して低止する所を知らず、前著露西亞經濟調査叢書の提供する知識が如何に詳細且豊富なるものにせよ、發刊以來十餘年其自然地理的部分を除き現狀と多大の懸隔を見るに至つたこと亦た已むを得ないところである。抑々露西亞經濟調査叢書の原本となつた資料は主として露西亞革命前、即ち帝政露西亞時代に刊行せられたものであつたから、其純然たる自然地理的部分に於てこそ今日に於ても變化する所はないが、其文化的方面、政治經濟に關する分野に於ては根本的な改革變遷を見、最早舊日の佛を留めない状態に在る。又自然資源の方面に於てすら近年ソ聯政府の積極的な探査事業の成果として幾多の新發見があり、從來未調査の爲めに無きものと推定せられたものにして今日全然認識を改むるを要するに至つたもの一にして足らぬ。

何れの意味に於てもソ聯極東、西比利亞、蒙古は新たに見直さねばならぬこととなつた。此必要に應ずるため當會は曩に『ソ聯極東及び西比利亞總攪』發刊の計畫を立て自然、社會各方面に互る資料を周到に網羅し且檢討を加へて之が整備に努

めつゝあるのであるが、時局は益々此地方の實情を一日も速かに一般に知らしめることを要求してやまぬので飽迄巧遅主義に膠著するを容されない。乃ち時勢の要求に順應し、ソ聯極東、蒙古、新疆各方面に互る最新の資料の略描つたことを機会とし之を翻譯し單純な素材の儘急速之を刊行することゝした。本資料が江湖の急需に應じ國家國民の進運に貢献せむことを庶幾ふ。

昭和九年八月

滿鐵經濟調査會委員長

河本大作

4.11
300

ソ聯極東及外蒙調査資料發刊の辭

例言

一、本編はウ・カ・アルセニエフの一九〇八年より一九一〇年に至るシホタ・アリン山脈踏査記 (B. K. Apchenov, B. Popov, Сихота-Алиня) の全譯である。邊疆探検家として知られたアルセニエフはこの踏査日誌を出版すべく加筆中死去し、爾後エム・チューリンが主となつてこれを編纂し一九三七年に出版したものである。内容は所謂昔嘶的冒險奇譚に富むも、その間前人未踏の自然・人文地理を知るに足り、この地方の好地誌として推奨出来る。

一、本編は社外に翻譯を囑し、當部囑託高素榮之助これを校閲した。

昭和十三年九月

滿鐵調査部

北方調査役

度量衡換算表

材積 (木材)	容積	重量	面積	距離	區分
一立方 米	一「フ ツセル」 一「ウ ッド ロ」	一「ブ ン ト」 一「ツ ント ネル」 一布 度	一「ヘ クタ ール」 一「デ シヤ チン」	一「露 里」 一「サ ー ジ ン」	ソ聯單位
二尺 九 九 四 八	〇石 一 九 五 三	〇石 〇 六 八 二	一町 〇 〇 八 三 一町 〇 一 〇 一 六	七尺 〇 四 〇 九	日本尺貫法
一立 方 米	三五 ・ 二 五 二	〇石 四 〇 九 五	一〇、〇〇〇平方 米 一〇、九二五平方 米	一「米」 〇六六 八 二「米」 一三三 三 六	「メートル」法

第九章 魚取りおほみづく……………一七一

第十章 狩 獵……………一七五

第十一章 吹雪……………一八〇

第十二章 谷川傳ひに……………一八三

第十三章 シホタ・アリンの裏峠……………一九四

第十四章 再び海へ……………二一五

著者の言葉

一九〇八年にロシア地理學協會アムール沿岸支部は、極東の一部地方―西はアムール下流、東はネヴスキ―(韃靼)海峡、南はホル及サマルガ河の圏内に包括される地方を調査するために探検隊を組織した。探検隊の目的は自然史調査で期間は九月月間(一九〇八年六月二四日から一九一〇年一月二〇日まで)である。



探検隊員は次のような顔觸れであつた。隊長は本書の著者ウ・カ・アルセニフ。協力者は、組織及經濟並組織部の擔當者デ・ア・ニコラエフ、有名な植物學家エン・ア・デスラヴィ、自然地質學者エス・エフ・グゼフ、及「ナリシヤ・オホータ」誌記者であり狩獵通でもあるイ・ア・デューリである。この外に探検隊には、七名の射手―東部シベリヤ狙撃第二三聯隊からビ・トール・ウイロフ、スタニスラフ・グレゴラ、ミハイル・マルニチ及イワン・トルトイギン、東部シベリヤ狙撃第二四聯隊から、ハイル・クラシニフ、イリヤ・ロシコフ及バヴェル・ノズドリシ並にウスリースキイ・コザック大隊のコザック二名、グルゴリイ・チモフ及イワン・クルイロフとが加へられた。

六月の初めにニコラエフは、海路インベラトルスカヤ(現ソヴエト)灣へ赴いて三つの食糧基地―第一、サマルガ河口附近、第二、ボツチャ河附近、第三、アンドレエフ灣を設置する命令に接した。彼はインベラトルスカヤ灣に到着の上、オロチンの世話役に會つて、探検隊がシホタ・アリン山嶺を越えたと如何なる河の流域に出るかを訊き質し、そして食糧品を携行してその河で隊を迎へなければならなかつた。ニコラエフは射手全部を連れて出發し、一方筆者は、デスラヴィ、グーセフ、デューリ、チャン・バオ及二名のコザック―イワン・クルイロフとグリゴリイ・デューリと共に發足した。

探検隊員は凡て一様の服装であつた。夏服はカーキ色上衣、同じズボン、腰バンド、軍帽及びシャツの着換へ三枚であつ

著者の言葉

た。寄生蟲豫防用として一揃のタール加工下着が用意された。それは必要があつた際交替で着用するのである。靴はハバロフスクでオロチンの長靴を型どつて調製した。筆者はそれらを現地の土民部落で手に入れることも考慮した。それ以外に一行の者は蚊の豫防用に、頭の網、袖當及絲製手袋を携帯した。冬の着衣は耳覆の附いた毛皮製帽子、毛皮裏牛外套、暖いシャツ、羅紗製短袴、毛絲手袋及前同の土民靴（但しサイズが若干大きいもの）であつた。各探検隊員は脛には羅紗の巻ゲートルを用ひた。それは脛骨の打撲を防ぐのに充分で且皮製ゲートルよりは遙かに便利である。

一九〇六—一九〇七年の旅行時のやうな夏用天幕は携帯しなかつた。その代りに蚊帳を携帯した。隊員の冬期の準備は一層よく整つてゐた。第一に羅紗製の大天幕があつた。それは約二〇人の人員を自由に收容出来たのである。その形は六角柱状であり、同六角ピラミッド状の屋根を持ち、中央に建てられた一本の棒で支へられた。その角には長い紐を付けた環がしつかり縫ひ附けられ、そしてその紐によつて天幕は四方へ張り擴げられたのである。その内部への明りは厚ガラスを用ひた二ヶの小窓から這入つた。冬の大天幕の家具は、コレクション用小箱、折疊式小卓とそして椅子の代用をする樹幹の切断片とであつた。煙突中に廻轉通風装置を持つ鑄物ストーヴは、必要以上に暖氣を興へた。その上でお茶を立てまた下着類洗濯のための湯を沸かした。晝食と夕飯の料理は外で行つた。天幕内の床には樺の小枝と干草とを敷きつめた。全部の者は一諸に臥し、互にびつたり寄添つて、上から毛布及び毛皮外套を掛けた。

探検隊長及隊員たちは、モーゼル式及ウインチヌスター式小銃やザウエル及レミングトン式霰弾銃で武装し、火薬及彈の豊富な豫備を携帯した。射手たちは銃剣を取り去つた三旋條小銃、彈藥盒及各自三百發宛の小銃弾を携帯した。

露營裝備品は横挽鋸、シャベル二挺、斧數挺、把手付きの重ねの大小鍋、フライパン、料理用具、食食用琺瑯引きの茶碗湯飲等であつた。

一揃への大工用及鍛冶用道具は凡ゆる長期探検旅行の不可欠の要品である。充分な纒帶材料及共に道中藥も亦忘れなかつた。

特に注意を拂つたのは探検の學術用器具であつた。

筆者の事業の全成功は、若き協力者たちの堅忍不拔の獻身的盡力の御蔭である。同輩らが滿期除隊となつたにも拘らず、インベラトルスカヤ灣から浦鹽斯德へ歸還することが全く可能なるにも拘らず、彼らは、一人でも隊から手を引くことは影響大なるものあるを理解し、探検の終るまで進んで居るとどまつたのである。如何なる射手やコザックたちの皆めた困窮も、眞摯なこれらの辛勞者たちの皆めたそれには較ぶべくもないだらう。絶えざる過勞やまた言語に絶した寒氣と飢餓とによる肉體的苦難にも拘らず、彼らは自然を相手に堂々と闘ひ、愚痴をこぼすやうなことはなかつた。彼らの多くは歐洲大戰時に陣歿した。その他のものは如何なる運命に陥つたかは、分らない。

筆者は、デスラヴィの退去後、海岸で採集された植物を判定したパリビンの非常な盡力を忘れない。パリビンの依頼によつて、吾類はヘルシングフォールのプロテウス教授が、地衣類はウキーンのツアリアクブルクネル博士が、また海藻類は東京の岡村教授が判定した。他の専門家たちもそれぞれ綿密に研究した。例へば、エデリシュタインは岩石資料の研究を、またブツルリンは鳥類の分類に當つた。

筆者はかやうな諸資料を武器とし、一九〇八—一九一〇年に踏破した行路の地文學的報告を確信を以つて執筆してゐる。極東地方の地圖を一瞥して、吾人が氣付くことは、その踏査中若干の行路が特に偏重してゐたことである。一人の學者の後を踏んで多くの人達は踏み均された道を續ける。吾人は一致コースの大多數を次のやうに見る。(一) 緩芬河地方及ニコリスタ・ウスリースキイ市近傍のコース、(二) 興凱湖東岸、スンガチヤ河及びウスリー河を辿るコース、(三) ダウビヘ、ウラヘ、フージン河を傳ひ、更にシホタ・アリンを越えて海に出るコース、(四) ビキン、イマン及ワク河の下流を辿るコースである。

オリガ灣以北の沿岸地方及シホタ・アリンの山嶽州の中央部の調査は最も不完全であつた。

アムール下流の最初の踏査者はコザツク隊長ワシリエフ・ボヤルコフで、彼はヤクツク軍司令官ベトロ・ゴロヴィヌイの命で派遣され、一六四三年に一三二名のコザツクを伴ひ、アムール地方を通過したのであるが、その後その途を再度踏んだロシヤ人は一人もなかつた。ボヤルコフはヤクツクからアルダン河、ウチル及ゴナムに沿ひ、スタノヴォイ山脈を越え、ブリト及ゼーヤ河を下つてアムールへ出で、次でそれを航行して河口に至りオコツク海へ出た。一六四六年にボヤルコフは、大損害を伴つた四ヶ年の旅行後、一部分はツングス人との交戦で、また一部分は飢餓と疾病とによつて部隊の半数を失ひ、ヤクツクへ無事に歸つた。^(註)

【註】ベ・スロフツォフ「史的概観」、シビリ、一八八六年。エヌ・ボゴリ「アムール地方誌」一八七六年参照。

その後を追つて一六四七年にコザツク人セミヨン・シチルコフニコフは、アムール河を下り、河灣に達し、方向を北にとつてオコツク河の口へ向つた。

ボヤルコフの後約一五〇年を経て日本の二人の探検家がアムールへ現はれた。即ち、一七七八五年に最上徳内及一八〇八年に間宮林蔵であつた。

前記ワシリエフはアムール河口まで三回航行した(一八一五—一八二六年)が、滿洲人はその都度歸途で彼を抑留し、吾々の政府に引渡した。彼は取調べに際して、邊境の風土、自然及埋藏資源に就て詳細な知識を披瀝した。それは後に一八三二年にラド・イゼンスキイによつて確かめられた。

一八四五年に佛蘭西の宣教師デ・ラ・ブリュニエルは、支那皇帝宣宗^{ウツン}の委囑によつてアムール河の踏査を企てた。六月十六日、彼は三姓市を出發し方向を東に取り隘路を辿つて、百二〇哩を踏破し、九月十九日にアムール河に到着し、そしてゴリド部落^(註)フルムで越年した。一八四六年四月五日、彼はアムール河に航し、グトング部落附近で土民らに無残に虐殺された。

眼玉は剝り取られ、齒は引き抜かれ、また屍體は岸邊に遺棄され、アムールの波が海へ持ち去るまで放置された。^(註二)

【註一】ヘタチル山脈の麓、本文参照。

【註二】アー・ミチ「西部シベリヤ踏記」一八六八年。

他の宣教師レノは、デラ・ブリュニエルの行衛調査の爲滿洲司教ヴェロールの命を受け、一八五〇年、キジ湖附近に位するフ・ド・ン部落邊までアムール河を下つた。レノの探査は、何の効果もなく、デラ・ブリュニエルの横死の悲しい物語を得たに過ぎなかつた。

一八四九年の極東は目覚ましいものがある。ゲ・イ・ネヴリスキイはアムール河口の探査によつて、樺太は島であり、以前考へられたやうに半島ではないと云ふ事實を確定した。この發見の結果、北米の或る會社とアムール河の土民たちとの通商が始まつたが、支那との紛争を避けるために、商人がアムール附近へ立入ることは禁ぜられた。

ネヴリスキイは、大支那帝國の民の主權がそれ程強くは極東に浸透してないことを識り、與へられた權限を侵し、アムール河へ入り込み、後にニコラエフスタ市になるニコラエフスタ哨所の基を開き、また河に沿ひキジ湖まで約百露里を航行した。一八五〇年八月一日彼はロシヤ國旗を掲揚し、またそれに禮砲を發した。^(註)

【註】「一八四九—一八五二年のロシヤ極東に於けるロシヤ船員の功績」及「海軍叢書」、一八七八年、第三號及び第四號。

一八五二年に海軍中尉イー・ボシニクも又キジ湖に達し、其處から陸路でデ・カストリ灣へ入つた。彼はハチ灣の發見の功績を擔つた。それは彼によつてインペラトルスカヤ灣と命名されたのである。^(註)

【註】イー・ボシニク「アムール地方の探検」、海軍叢書、一八五八年、第二二號。インペラトルスカヤ灣は現在ソヴエト國に改稱されてゐる。

一八五四年航行期が始まると共に東部シベリヤ總督ムラヴィヨフは、後バイカルのコザツク隊とそして第一三、第一四常備大隊の一部とを引き連れ、傳馬船及筏に乗り、ウスト・ストレロチヌイ衛兵所からマリンスク哨所へ彼によつてキジ湖の入

口附近に建設されたもの)までアムール河を下つた。^(註)

【註】スヴルベエフの「アムール河の航行記」。(一八五四年の東部シベリヤ總督の遠征)、ロシア地理學協會シベリヤ支部報告、一八五七年、第三卷。

同年八月に汽船「ナデジダ」號でアムール河口からウスチ・ストレロチヌイ衛兵所へ、プチャティン提督とそして後に交通大臣になつたボシエトとが到着した。後者は三橋艦隊「デアナ」號で世界一週の途に上つた。その難破の後海兵團はカムチャツカのベテロバヴロフスタ市に着き、アムールを經由してイルタウツクに赴き、次でベテロブルグに赴いた。^(註)

【註】エル・カ・ボグダノフの「アムールコサツクの過去の思ひ出」、ロシア地理學協會のシベリヤ支部報告、一九〇〇年、第五卷第三分册。及び「シウマヘル」の「アムール獲得史」、一八四八—一八六〇年の我が對支關係、「ロシア文庫」、一八七八年、第一一號二五七—三四三頁參照。

年代順による次の探査者エル・シレンク教授は、一八五四—一八五六年にアムールを下つてその河口まで、またウスチ・ストレロチヌイ衛兵所からマリンスク哨所からザバイカル地方へ歸還したが、兵士たちは嚴冬のため陸路行軍の困難を傳つてノル河までの各踏査を完成した。彼の人種誌學的研究は、主としてゴリド、オロチン及ギリヤクに關するものである。^(註)

【註】エル・シレンク「アムール地方の異民族誌」、アカデミー・ナウク發行、一八八三年、及び「ロシア地理學協會報」、一八五七年第一九卷。一八五六年の春、ウスチ・ストレロチヌイ衛兵所からニコラエフスク哨所に至る踏査は、拓務局役人ゲ・ベルムイキンによつて試みられた。^(註)

【註】ゲ・ベルムイキン「アムール河旅行記」、ロシア地理學協會シベリヤ支部報告、一八五七年第二卷。

一八五六年に常備第一三大隊は舟でマリンスク哨所からザバイカル地方へ歸還したが、兵士たちは嚴冬のため陸路行軍の困難に至つた。不幸にも、彼らに向けて發送された穀物を積んだ荷船は、アムールの上流の或る地點で淺瀬に坐洲した。

不十分な服装をし且つ飢えた兵士たちのこの破天荒の行軍は、餘り世間には知られてゐない。第一三大隊の全行路は結氷期以來バタバタと死者を數へた。人々は死者の肉をも喰ふほどであつたが、それでも彼らを悲惨な運命から救ふことは出来なかつた。粗衣を纏ひまた足は殆んど跣足に等しい彼等は宿營で凍死し、消えかゝつた焚火の火を保つために立ち上る氣力もなかつた。

一八五七年はロシア政府と支那との談判が始まるや、ムラヴィヨフ・アムルスキイ伯によつて、測地學者ウツリツェフがウスチ地方へ派遣された。彼はウスチリ及スングチヤ河を航行して興凱湖へ出た。次で彼はレフ河を廻つたが、水源までは達せず、略々中程から南西へ折れて綏芬河に出で、それを下つてアムール灣へ着いた。アムール灣が斯く呼ばれるのは當時綏芬の河口がアムールの河口のやうに考へられたからである。ウツリツェフはこの誤りを明らかにした。^(註)

【註】ウツリツェフ「ザハンカイスキイ地方」、ロシア地理學協會報、一八五七年、二三卷。及海軍報告、一八六四年、第六號。同一八五七年に鑛山技師エヌ・ビ・アノソフは、アムール河を航行してその河口に出た。そして次に、一八五八年に、ウスチリ河を廻つてイマンに着き、またイマンを廻つてカルツン地點に着いた。續いて彼はスングチヤ河並に興凱湖の東岸及南岸を通過してモール河に達した。アノソフは最後の旅行をダウビヘ河に試み、殆んどその水源まで極はめた。^(註)

【註】沿海州に於て一八五七—一八五八年の調査隊の活動報告、「イルクーツク縣新聞」、一八六〇年、第七、八、二、一四、一六、一七號。最初にシホタ・アリンを横斷したのは、エム・イー・ウニニコフである。彼は一八五七年にムラヴィヨフ・アムルスキイ伯の委嘱により、ウスチリ河へ、次でその支流ウラヘ及びフジン河へ赴き、そしてシホタ・アリン山脈を越えてタドシ河へ出た。ウニニコフは聖ウラチミル灣を通過しようとしたが、多數結集した武装支那人によつて途中で阻止され、後へ引き返すことを強要された。それでウニニコフはタドシ河口附近の海岸に標柱を打ち建て、その上に「余は一八五八年此處に來る。エム・ウニニコフ」と刻みつけた。

彼は六月十八日に引き返し、二二日目に同一コースを経てウスリーリに歸還した。^(註)

【註】 エム・ウ・ニ・ゴフ「ウスリーリ河並にウスリーリ河以東海岸までの土地の踏査」、ロシア地理學協會々報、一八五九年、第二三第四號。

一八五九年は踏査活動がとり分け賑つた。探査は相次いで行はれた。それはウスリーリの右側支流並に南方朝鮮國境地帯に對する調査時代であつた。天文學者ガモフはアムール及ウスリーリに對して若干の測地學的調査を行つてゐる。彼はウラヘ河に於て(フージンとフト河との河口間)地理學的最後の座標を決定し、續いてスンガチ河を通過して興凱湖に達し同一コースを経て歸還した。ポシエト灣の岬の**一**は彼の名をもつて呼ばれてゐる。^(註)

【註】 「一八五九年にアムール及ウスリーリの地形を決定した天文學家ガモフ大尉の旅行記から」ロシア地理學協會々報、一八六二年第一及第二卷。

同一八五九年にはカ・イ・マキシモヴィチ教授がウスリーリ地方を訪れた。彼はウスリーリ河谷を、次でウラヘ河を廻りフージンの河口に到り、この後者の河谷を辿つて水源に達し、シホタ・アリンの分水嶺を越えて、ワイ・フージン河(アヴヅクモフカ)に下りオリガ灣に向つた。植物學の該博な著述はこの踏査の結果であつた。それに對して彼はビ・エヌ・デミドフの名によつて表彰を受けた。マキシモヴィチの諸著作の價值に就ては喋々を要しない。地方植物の文獻に多少でも通じる程の者には誰にでも知られてゐる。彼が最初に規定したことは、ウスリーリ地方の植物群は滿洲の植物區系であることである。多數の植物はこの研究家の名を冠せられてゐる。^(註)

【註】 カ・マキシモヴィチ「上部ウスリーリ及滿洲南東沿岸の概要」、ロシア地理學協會々報、一八六一年第三號。

大藏省はウスリーリ地方の森林調査のために、林務官ブデシエフ並に地形測量家コルズン、ルベンスキイ及ベトロヴィチの一團を派遣した。ブデシエフ探査隊は一八六七年以來活動した。これらの辛勞者たちは、シホタ・アリンの南部の地理を一般に紹介した。彼らは分水嶺以東の沿海地方をザウスリーリ地方と命名した。^(註)ブデシエフは自身でウスリーリ河谷、ダウビ

ヘ及レフ河、興凱湖を調査し、次で國境に沿つて下り緩分河に達し、バラバン、ニコリスコエ、ノヴィキエフスクの部落の近傍に於て、またムラヴイヨフ・アムルスキイ半島に於て森林を調査し、ウラヘ、フージンを踏査してシホタ・アリンを越え、ワイ・フージン(現在のアフワクモフケ)を下つて海に出た。地形測量家コルズンは、イマン及ワク河を約半分以上またビキン河をその上部支流ビザムまで遡つたが、シホタ・アリンには達することが出来なかつた。食糧の不足はウスリーリへ引き返すことを餘儀なくした。ブデシエフの第三の仲間ベトロヴィチは、アムールの右岸に沿つてアニユイ(ドンドン)河口からキジ湖までの沼澤低地と森林とを調査した。次で彼はデ・カストリ灣に向ひ、更に海岸を傳つてホイ河に到り其處からウムニン河に分け入り、それを下つて河口に達した。最後にルベンスキイはアムール河の底地に沿つてハバロフスクからニコラエフスク哨所までの森林を調査した。

【註】 「東部シベリヤ管理部の主要公文書集第五卷、沿海州の森林、一八九八年。

ブデシエフと時を同じくして有名な博物學者エル・マークがウスリーリ地方を歴訪した。一八六九年に地形測量家ブルイルキンと共に、彼はウスリーリ河口に來航し、それを遡つてスンガチ河に達した。そしてこの後者を遡つて興凱湖に到り、その東側、南側及西側を一巡した。ウスリーリ河を更に遡行する企が失敗した後、マークはアムールへ引き返した。この學者の探査は、念入りな調査とそして蒐集せる資料の豊富なこととで有名である。昆蟲類や植物類の多くは彼の名によつて呼ばれてゐる。^(註)

【註】 「エス・エフ・ツロガイエフの出資になるウスリーリ河谷探査」、ロシア地理學協會シベリヤ支部報告書、一八六一年、第一卷。

一八六一年には第三人目のフランス宣教師チルピリオンが探査の爲にウスリーリへ遠征した。彼は松花江口の近くで數名のロシア人に遭遇し、彼らの提案を容れて共にニコラエフスク哨所へ赴いた。その年にチルピリオンは歸還した。^(註)

【註】 ア・ミーチ「シベリヤ部の旅行」、一八六八年。

一八六〇年にマールクに續いて、有名な地質學者であり古生物學者なるエフ・ビ・シュミットが、三ヶ年邊境の探査を行つた。一八六〇年の早春以來彼はアムールの河岸の調査に當り、松花江口からニコラエフスク哨所に達し、キジ湖及びビデ・カストリ灣にも立寄つた。シュミットは樺太島に於て調査の後、一八六一年六月、海を渡つてウラチウ・ストック・ヘ歸つた。そして其處を起點に二旅行を試みた。即ち、ボシト灣から綏芬河口を経て興凱湖に及ぶ旅行、第二は、スンガチ、及ウ・ス・トリ河に沿つてハバロフカ部落に到る旅行とである。

【註】地文學調査に關してシベリヤ探險隊物理學部部長の史的報告、「ロシア地理學協會のシベリヤ探險研究彙報」、物理學部、一八六六—一八六八年、第一卷。

一八六七—一八六九年には、後に著名になつた旅行家エヌ・エム・ブルゼワリスキイが新たに獲得された地方を遊歴してゐる。彼の旅行コースはウソリツフ、ブディシチフ及ヴェニニコフと同一であつた。彼はウ・ス・トリ及スンガチ河を遡つて興凱湖の周圍を調査し、續いてレフ河を下つてウラチウ・ストックに出た。ブルゼワリスキイは、ウラチウ・ストックから海岸傳ひにスチヤン河、スド・エ河へ航行し、更にオリガ哨所にもウラチミル灣にも赴いた。そして自分の探査をシホタ・アリンを越えてフージン、ウラヘ及ウ・ス・トリへ出るコースを以つて完成した。

【註】エヌ・エム・ブルゼワリスキイ「ウ・ス・トリ地方の旅行」、一八七〇年。

更に一年後（一八七〇年）には鑛山技師イー・ボゴリユブスキイが鑛脈探査のためにウ・ス・トリ河を通つてウラチウ・ストックへ、そして其處から小路を辿つてスチヤン河やまたワンチン河を踏査してオリガ灣に立寄つた。オリガ哨所以北の沿海地方の土地に關する資料を蒐集し、彼は支那人を案内としてチュティへ河の奥を探らんとしたが、案内の支那人は故意か偶然か道を失ひ、そして彼は、目標地點まで七露里を残して、引き返したのである。

【註】イー・ボゴリユブスキイ「一八七〇—一八七二年、沿海州の鑛脈探査」、ロシア地理學協會シベリヤ支部の報告、一八七二年。

一八七一年には當時の有数の支那學者パツラチイ僧上がウ・ス・トリ地方を訪れてゐる。極東の考古學上及歴史上の注目すべき發見は彼の功績である。彼はウ・ス・トリ及スンガチ河を航行し、興凱湖に足を停め、其處から綏芬河を経てニコリスコエ村を訪れ、そしてウラチウ・ストック哨所に到着した。残念にも、この學者の諸著作の中で保存されたものは僅かに斷片的書簡のみであつた。パツラチイはロシアへの歸途一八七二年に死去した。

【註】パツラチイ、(一)「滿洲史との關聯に於けるウ・ス・トリ地方史の概要」、ロシア地理學協會報告、一八七八年、第八卷。(二)「アムール及ウ・ス・トリ地方の旅行」、「ロシア地理學協會の二五年」記念出版、一八七二年。(三)「ロシア地理學協會報告」、一八七二年、第七卷。

更に三ヶ年後には地形測量家の一隊はエル・エル・ポリシニフに引率されてザウ・ス・トリ地方の沿岸地帯（幅員一露里乃至五露里）の器械測量を、ルインド灣以北デ・カストリイ灣までに互つて行つてゐる。當時測量家たちが荒涼たる海岸で嘗めざるを得なかつた困難な諸事態は、エヌ・ウ・マキシモフの小説に豊富な材料を提供した。

【註】エヌ・ウ・マキシモフ「極東に於て」、ビオニール、一八八七年。ポリシニフ大佐を隊長とする地形測量家の活動資料は、「ロシア地理學協會報告」一八七六年第三號に記載される。

年代順に於てウ・ス・トリ地方の歴史順の探査者は、イ・ベ・ナダロフである。一八八二年に彼はビキンを遡つてツァモ・ド・インザ地方に、またイマンを遡つてツイイベリ河口に達した。又他日彼はワク河からウラヘ河へ來、それを中程まで遡つて引返し、天然境界アニチに出て、其處から更にウ・ス・トリ鐵道へ出た。イ・ベ・ナダロフは極東地理に對して多くの資料を提供し、またウ・ス・トリ Mana の生活情態を世に紹介した。

【註】イ・ナダロフ「北ウ・ス・トリ地方」、(ウ・ス・トリ地方の研究資料)、「アジアに關する資料集」、一八八七年、第二六、二七分冊参照。

イ・ポリ・コフの人類誌學的考古學的調査は主として樺太島に關するものであるが、彼は南ウ・ス・トリ地方に於ても同様に活動した。一八八二年六月彼はウラチウ・ストックに上陸し、綏芬河谷に方向をとりニコリスコヘ村（後にニコリスク・ウ・ス・

リスキイ)に向つた。^(註)

【註】イ・ポリヤコフ「樺太島及南ウスリー地方の踏査記」アカデミー・ナウク発行、一八八六年。「アカデミー・ナウク報告」第一四卷附録一八八四年六號参照。

アムール地方調査會の創立者エフ・エフ・ブッセはバラヂイの仕事の後継者である。彼の活動は一八八三—一八八九年のことである。ブッセは、移民事業主任として諸地方を巡歴し、地方に於て最初の移民として見棄てられた古都の廢墟の部落に注意を向け、それらの若干を遍歴した。^(註)ブッセの事業はその後ア・ア・クロボトキン公によつて繼續された。

【註】エフ・ブッセ「アムール地方の遺跡」アムール地方調査會報告、一九〇八年第二卷。

太平洋の水路探査はその活動をアムール河灣に極限するものでなく、むしろそれをアムール河そのものへも延長する。一八八六年に端艇からなる二隻の艇「ゴルノスタイ」が、測量しながら河を通航して松花江口まで凡そ一、一七五軒航行した。^(註)

【註】エム・ジダンコ「アムール河灣調査に對するロシア海員の活動」ロシア地理學協會々報、一九一六年、第三卷第一〇分册。

鑛山技師デ・エル・イワノフは一八八八年から一八九四年まで、ノヴ・キエフスタク及バラバシフスキイ地方に於て、またスイファン、スプチンタ、マイヘ、スチヤン及スズヘの諸河に沿つて若干の地質探査を行つた。次で彼はレフ河を遡つてウラヘに赴き、更にシホタ・アリンを越えてオリガ哨所に出た。付け加へるべき彼の旅行コースがまだ一つある。即ち、シコトヴ、村から海岸に沿つて、タウヂミ、スチヤン、スズヘ及タウヘの諸河を辿るコースである。

一八九四年から一八九七年までは探査の最高潮時代である。

一八九四年に參謀本部のエス・レオンツヴィチ大尉は、ツムニン河の測量を行ひまたオロチン・ロシア語辭典を編纂した。^(註)

【註】エス・レオンツヴィチ「オロチン・ロシア語辭典」アムール地方調査會報告、一八九六年、第五卷第二分册。

同一八九四年と翌年の一八九五年とはデ・ウ・イワノフが、四つの旅行コースを作つてゐる。第一、ハバロフスタク市から

キジ湖までアムールに沿ひ、次でホユリ河を傳つてシホタ・アリン山脈を越えインベラトルスカヤ灣に到る。第二、アニユイゴビツリ、ブト、フト、河を経てツムニンに到る。第三、サマルギ河を遡りシホタ・アリンを越えスルバイ河に出で、それを傳つてホル河へ出てウスリー鐵道に到る。第四、海岸に沿ひ一部分は小舟、一部分は蒸氣スクーター「ストロジ」號でオリガ灣からインベラトルスカヤ灣に到る。^(註)

【註】デ・ウ・イワノフ「シホタ・アリン山脈の山嶽地質構成の基本的特徴」ロシア地理學協會アムール沿岸支部報告、一八九七年、第一卷第三分册。

同じ年にウスリー地方の中央部探査のために、常備第一〇大隊及狙撃第二旅團の狩獵隊が差遣されてゐる。各狩獵隊の行軍路は、各コースを交叉せしめるように配分された。一隊は出来るだけ奥深く侵入し、他隊は聯絡の任務を持ちまた彼らに食糧を補給すべき營であつたが、密林に於て彼らの行動を一致せしめることは不可能に終つたので、各狩獵隊は獨自に行動した、それがためシホタ・アリンを越えて海に出ることは失敗に歸し、人命的犠牲をも出だした程測る可からざる損害の結果、彼らは歸還した。^(註)

【註】「ロシア地理學協會アムール沿岸支部研究彙報」一八九五年。

一八九五年より一八九七年に至る期間中に、有名な植物學者ウ・エル・コマロフが南ウスリー地方を遊歴した。彼は緩芬河の流域のニコリスク・ウスリースキイ以西を調査し、次で滿洲に分け入り南に出て、自然境界ノヴ・キエフスタクに達した。^(註)

【註】ウ・エル・コマロフ「滿洲の植物系統」第一卷、一九〇一年。

吾人は人種學文獻の領域に於ては、一八九六年にスチヤン及スズヘ河谷を遍歴し、また翌一八九七年には沿海州知事の依頼によつて、韃靼海峡に沿つてテルネイ入江以南オリガ灣まで、土民状態の調査を行つたエス・ブライロフスキイの名を發見する。エス・ブライロフスキイはこの旅行を端艇でまた部分的には汽船を利用して行つた。^(註)

【註】 エス・ブライロフスキイ「人種誌探査の経験」、「元氣な老人」、一九〇一年第二分冊。

更にウスリー地方の北部の探検家の中には鑛山技師ヤ・エス・エデリシタインが居る。彼は一八九一—一九〇一年に次のやうな旅行コースを完成した。

- 一、ギジ湖—ホユリ河—ツムニン河。
- 二、ツムニン河—ムリ・ダター—ファンガリ—アムール。
- 三、アヌイ河（ドンドン）—ズインミー—コビを経て海に至る。
- 四、サマルギ河—スルバイ—ホルを経てウスリーに至る。
- 五、ナフトフ河—ビュキンを経てウスリー鐵道に至る。^(註)

【註】 ヤ・エデリシタイン「北部及中部シホタ・アリン」、一九〇五年。

鑛山技師エム・エム・イワノフ（以前に南ウスリー地方で活動した鑛山技師と同姓）は、一八九八年から一九〇〇年までに若干の地質學的調査を行つてゐる。彼はビキン河をツァモ・ズインザ地點まで、またイマンをカルツンまで（ナイツへとワク河との間では脇路をして）踏査した。次で彼はウスリー及ウラへを遡つてフト・ホイザに達した。他のコースは、ウスリーとスンガチャ河との合流地點から方向を南にとり、ウスリー鐵道に沿つてニコリスク・ウスリースキイ市に至るもの、及興凱湖—週コースと東清鐵道一周コースとであつた。^(註)

【註】 エム・エム・イワノフ「ウスリー北部地方の地質調査の報告」、「シベリヤ鐵道沿線の地質調査と捜査活動」、第四分冊、サンクト・ペテルブルグ、一八九七年。

地質學者ベ・イ・ヤウールスキイの調査はウスリー地方と境を接するアムグン流域に關するものである。それ故こゝでは單に一九〇三年にアムールを傳つてハバロフスタ市からウズル湖へ赴いた彼のコースだけを附け加へておく。^(註)

【註】 ベ・ヤウールスキイ、一九〇一年のケルベ、ニマン及セレムチ流域の地質踏査（附圖つき）。「シベリヤの産金地方の地質踏査。アムール沿海産金地方」、第四分冊、サンクト・ペテルブルグ、一九〇四年。

極東探査者のこれらの列の中に、ウラヂウオストク港灣にまだ白鳥が泳ぎまだ山には虎が彷徨した當時に、この地を訪れた二人の開拓者を更に付け加へておく必要がある。それはエム・イ・ヤンコフスキイとエム・ゲ・シウ・レフとである。前者は朝鮮北部に於てまたボシト地方に於て鳥類學上及昆蟲學上の多くの仕事をした。^(註) 後者は書齋的研究家であり、一生の大部分をカンゴウズ入江で過した。彼の名と地方史の研究とは密接な關係がある。彼は支那語に堪能で、また漢字を自由に理解した。彼は古代の多くの文献に精通した。唯一つ、彼が適當な時機に自分の知識を公表しておかうとはせず、その儘墓場に去つたことは、遺憾に思はれる。吾人に遺されたものは、僅かに彼の仕事の若干の断片に過ぎなかつたが、それでも非常に有益なものであつた。それらは、渤海王國（七一—二世紀）が太平洋に於て東部滿洲、北部朝鮮及ウスリー地方を占めたこと云ふ事實を、極めて確定的なものにした。

【註】 エム・イ・ヤンコフスキイ「一八九七年五月七日から十一月五日までの鳥類學日記、附録、鱗翅類に關する注意事項」、「一八九七年にロシア地理學協會のウ・エル・コマロフの引率せる朝鮮及滿洲の探検」、「ロシア地理學協會アムール沿岸支那報告書」第三卷第三分冊、一八九八年。

最後に付け加へる可きは陸軍地形測量師たちの活動である。それは一八八八年に支那國境（ボシエト—興凱湖）以東ウラへ及ス。ズ。へまで南ウスリー地方全體を一露里及二露里を規準に測量したのである。

彼らの平板測器はまたウスリー河底地に沿つてアムールまで延び、ビキンの流域では約六〇軒に擴がり、ロンチャコフ附近では約二〇軒に窄まつた。陸軍測量師の活動と並んで、ウスリー測量隊の測量も行はれた。

現在吾人はウスリー地方の地圖に、七世紀と一三世紀との間の時代に滿洲族が残して行つた舊耕地の遺跡を書き入れようとしてゐる。またコザックの移住まで支那農民が占めた土地を、その上に書き加へる。そして最後に、同じ地圖上にロシア

ヤ人村を書き入れる。吾人は凡て三つの面積が一致するものであることを認める。三民族は、入れ替りに、同じ場所に移住した。アムール及ウスリー河底地、それらの右側諸支流の下流、タウビへ及ウラへ河の流域は、容易に文化を受け入れるであらう。南ウスリー地方、並にインペラトルスカヤ灣までの沿海地方の狹隘地帯は、一方シホタ・アリンの山嶽地方の中央及北部地帯は、今も昔と同様に荒蕪地である。

密林の荒蕪、無道路及住居地の全く缺如することが、シホタ・アリンとそしてその以東地帯が斯様に久しきに亙り世間から見棄てられてゐたことの主要原因である。余はウスリー地方のこの未踏部分の探査のために、探検を企てた。本書は一九〇八—一九一〇年に敢行した余の三度目の踏査の物語である。

シホタ・アリン山脈踏査記

第一章 アムール河の下流

一九〇八年六月二十三日正午余らの小部隊は汽船に乗込んだ。気分は快よく朗らかであつた。諸々の都會的煩しさは振落され、役所廻りは片付いた。明日は出帆だ。

夕方余の同行者たちは友と別れを惜しむために町へ赴いたが、余は余を見送りに來た友人らと共に船に止まつた。余らは甲板に出て入り日に惚々と見入つた。天映はアムールがウスリーと合流する邊りで廣々とした水面に反射した。

初夏の靜かな夕であつた。琥珀色の太陽は正に地平線の彼方に没せんとして、その燃えつきんとする光は空の雲の壁を黄色に染めた。光は空に、水にまた遙か彼方の部落の家の窓に反射して、明日の上天氣を思はせた。

ハバロフスクの向う側のアムール河の左岸は低地である。無数の水路、曖昧な支流及湖は、土地に明るい案内者なしには無事に通り抜けられないやうな迷路を造つてゐる。アムールが緯度の方向にエカテリン・ニコリスタ村(コサツク村)からボレン・オヂャル湖まで延長約五〇〇軒、幅員一五〇軒に亙つて流れる全曠野は、曾つては、水を湛へた廣濶な凹みであつた。ウスリーとアムール河との合流地點に在る高地は、この廣大な貯水池の昔の岸である。

ハバロフスク市は、一八五八年五月三十一日にムラウ・ヨフ・アムールスキイ伯によつて、ゴリド人^(註)の一寒村ブーリの所在地に建設された。支那人の訛り呼名「ウーリ」はこゝから生じ、滿洲では今でも用ひられてゐる。軍事監視哨として配置された第一三常備大隊は、最初にこゝに駐屯した。全行政機關は一八八〇年にニコラエフスクからこゝへ移され、ハバロフ

スタ村もハバロフスタ市と改稱された。

【註】「ゴリド」(蒙古族の一)は、ソヴエト以前のナナイツ族の名稱である。アルセニエフは到る所で「ゴリド」の言葉を用ひてゐる。編者は、原文には訂正を加へないが、寫眞の説明には現在のソヴエト用語を用ひることにした。

當時それは密林中の亂雑な一寒村であり、森林の遺跡は市の中心に猶久しい間残つてゐた。唯一の交通路はアムールであつた。秋春の河の凍結期と解氷期とは、ハバロフスタは數ヶ月間他の都市との交通を斷たれた。この杜絶は「驛遞停止」と呼ばれた。

汽船の甲板上は靜かであり寂しがつた。僅かに町の方から、通例日中の間は聞えない不明瞭な騒音が聞えた。

空氣は日が暮れるに従つてより、良く音波を傳へるやうに思はれる。西の方では徐々に天映は靛色して、六月の生暖かい夜が東の方から忍び寄つた。廣漠たるアムールの水上には既に薄いつ闇が漂ひ、地平線上の雲は薄ぼんやりと霞んで、空には初星がまたゞき出した。

この時機の音が余の注意を惹いた、汽船の體の向うから、二艇櫓の小船が現はれた。若い蒙口人が櫓を漕ぎ、老人は體に座つて、ボロ船の先をウスリー河口の方へ向けた。彼は自分の若い相棒に向つて何ごとか呼び掛け、手で南の方を指して、「ヘフツイル」と二回繰り返へした。餘は機械的に眼を雄大な山脈の方に轉じた。それは方向を緯線にとり、ベトロバウロフスキイ湖からウスリー河までの間を走り、老ゴリド人が今呼んだ名稱を持つのである。ヘフツイルの最も高い所は三、〇〇〇呎である。鐵道はハバロフスタから三四軒距たるその最も低い地帯を横切つてゐる。この山脈は史的資料の上では、ホフツスキイ山脈、亦ヘクツイルとも命名されてゐるが、學士院會員ワシリエフ博士譯述の支那のシュイ・ダオ・チガンの地理學中のウスリーに關する章では、それはフフギル(フルチン)と呼ばれてゐる。ヘフツイル山脈の西部斜面のウスリー河の間近にはコザツク村カザケウチウ、が在るが、以前にはこゝには、ゴリド人の小部落フルメ(トルメ)―戸數四があつた。

【註一】アー・ミチ著「東部シベリヤ踏査記」一八六八年、三三五頁。

【註二】エム・ウ・ニ・コフ、「ウスリー河遡要とウスリー河以東海岸に至る地帯」、「ロシア地理學協會々報」一八五九年、第二五部。

【註三】バルチ・フスキ、「一八五六―一八五七年のアムール上流地の冬期旅行」、「ロシア地理學協會々報」一八五八年、第二一部一六八頁。

エル・マークは一九五九年にこゝで既にロシア人に出會つた。ゴリド部落は跡形もなかつたが、土民らの記憶の中にはあつた。

大昔一軒の淋しい小屋にヘクテル・フエングニと呼ぶゴリドが住んでゐた。彼は腕の利く獵師であり、常に飼犬のため澤山の乾魚の貯藏を持つてゐた。ヘクテルは或る日松花江畔の三姓へ出掛け、其處から白色の雄鷄を持つて歸つた。その後彼は孤獨生活に煩悶するやうになり、夜間も熟睡が出来ず、食慾も失つた。或る夜のこと彼は戶外に出て、自宅の鷄の側に立寄つた。突然彼は話しかけられた。

「且那さま、窓をお閉めなさい、夜明けには雷雨がありますよ」と。

ヘクテルは振返り、雄鷄から人語でもつて話しかけられたことを知つた。次で彼は河邊に行つたが、其處では頭の上で囁き聲を聞いた。それは樹同志の談合であつた。老樅樹はサラサラと葉音を立て乍ら、若いトネリコに、二百有餘年間に眼にして來た事などを談して居た。ヘクテルは魂消けて仕舞つた。彼は家に歸り、炕の上に横になつたが、しかし假睡ろみかけるや、再び私語を耳にした。それは、爐に使つてある石同志の物語りであつた。彼等はまだ一度こんなに焼かれるなら割れようと相談してゐたのである。その時ヘクテルは、シャーマン教徒にならうと思ひ付いた。彼はノル河へ赴いた。其處では滿洲シャーマン僧は彼の魂ヘウイエンカの精靈を吹込んだ。ヘクテルは間もなく榮光に包まれた。彼は雜病を治癒し、失物を發見し、また亡靈を「來世」へ導いたのである。彼の名聲は、ウスリーの底地やアムール及松花江全體に擴がつた。

程なく彼の小屋の附近に他の小屋が建つやうになつた。斯うしてフルメ村が出来上つた。其の後ロシヤ人が立ち現はれてゴリド人を壓迫した。後者は住み慣れた土地を放棄し、亂暴な「ロツァ」(アロシヤ人)の手を逃れてウスリー河の上流へ立ち去らねばならなかつた。フルメ村は消滅し、またヘクテルの名はヘフツイルと變つた。後にコザクたちはこの名稱を、單に以前にゴリドが居た部落だけではなく、山脈全體にも冠するやうになつた。

以上の物語には南方滿洲からアムールのコリド人に影響があつた。

座談の間に可なり時間が経つた。余は友人らを岸邊へ送り付けて船に立歸つた。既に遅かつた。夕日の最後の映えも全く消え失せて、宵闇が地上に垂れ込めてゐた。哀愁をそよるやうに浪の洗ふ音が何處か下の方で聞えた。濕つぽい、機械油を含んだ風が吹いた。余は船室へ去り、間もなく熟睡に入つた。

翌日早朝余らはハバロフスクを發つた。

出帆の利那から船の乗客一同は水上生活を始めた。様々の公衆が余らと一語に旅立つた。「小」賭博に興じる官吏、商取引を語る實業家、町から仕入れものを持ち歸る農民等。或る者は讀書し、或る者は座つたまゝで遠くを眺め、また或る者は船室に閉ぢ籠り、そして機械のリズムに惹き込まれて死んだ様に眠りを貪つた。數で一番多いのは第三階級である。其處では船客は板寢床にぎつしり詰つて横になり乗船の際に然るべき努力によつて獲た座席を失ひ度くないため立たうとしない。ハバロフスクは段々後へ遠ざかつて行く。アムールは廣い帯のえうに擴がり、それは宏大な湖の姿に見え、どう見ても河とは見えない。

アムールと云ふ名稱の由來に就いては色々の説がある。それは、「アモール」即ちツングース語の「良き世界」と云ふ言葉から來てゐるとも、アルバジン附近で右側から注ぎ入る小河「エムール」から來てゐるとも、またギリヤク語の「ガムール」、「ヤムール」(「大河」の意)から來てゐるとも傳へられる。歴史學者ミルレルは、ナトカンが住む河をマムールと名付

けてゐる。滿洲人はアムールを「サハリヤン・ウラ」(黒い水の河と呼び、また支那人は、「フント・ン・ツイン」、松花江と合流後を「ゲロン・キャン」(黒龍江)及「エイ・シイ」(即ち「黒水」)と呼び、一方ヤクーツク語では「カラ・ト・ガン」(「黒河」と呼んだ。現在の土民はそれをダイ・マンダ、またオリチ人(チン)人はマンダインと名付けてゐる。

【註一】 イアキンフ、「支那帝國の統計資料」。

【註二】 ウ・ビー・ワシリエフ、「滿洲記」、「ロシヤ地理學協會報告」一八五七年、九一頁。

【註三】 イアキンフ、「支那帝國の統計資料」第二部一八四二年。

アムールの下流の一般方向は北東である。左側からは、ツングーズカ、ダルギ、ガイ及ガルカの諸河が、右側からはベトロバヴロフスキ湖から出る支流が流れ入る。ベトロバヴロフスキ湖の長さ約二〇軒、幅約八軒である。これはさまで遠くない以前は現在よりも著しく大きく、南方及南西方に向つてヘフツイルの山麓まで擴がつてゐた。シートは小河であり、またオポールは獨立に湖へ注いだ。現在ウールコンスコエ村がある高地は人湖水の昔の岸であり、また廣潤な諸沼澤の西側には極めて最近水が涸れたばかりの場所であることを示してゐる。乾涸過程はまだ完了し切つてゐない。現在のベトロバヴロフスコエ湖は急激に狭小化し、それが同様に沼澤になるには遠いことではない。アムールの廣潤な底地は、諸支流の沖積土——洪水が普通運んで來る粘土及砂土——によつて埋まつてゐる。洗はれた岸邊附近の崩れ落ちた場所には、それらが連続した順序に配列するのが見える。最下部には砂礫層、その上には下層沖積粘土、またその上には砂土層、更にその上には粘土、その上に腐蝕土層があり、その表面には丈高い蘆やワイニクが成長し、白紫色の長い根は沖積土層に喰ひ込んでゐる。ベトロバヴロフスキ湖から流れ出る水路の附近には多くの砂質粘土の島が在る。それらの或るものは水面上へ辛うじて凸出するか、或は草及ウミヤナギの灌木で蔽はれた平坦なレルク(沼澤中の小島)を造つてゐる。砂洲は、夏期は水で冬期は風で場所を變へる。時には冬期雪の上に砂土層を見ることがある。それは河の解氷期には氷と一語に可なりの距離へ移動

するのである。

夕方には余らの船は、アムールの右岸高地に位置するヴトスコエ村^(註)に着いた。薪を積取るためにこゝでは数時間碇泊した。余は部落視察のために直ちに上陸した。村の姿は愉快なものではなかつた。先づ第一に眼に止まつたのは無数の薪の堆積であり、その背後の更に高い岸上には、どつしりと頑丈に建てられた住宅と物置き小舎とが見え、圍ひさへも丸太棒で作られてゐた。總ては住民の裕福を物語つてゐたが、それと共に不潔さ、内庭の亂雑、馬糞の山及通路を遮ぎる藁芥が眼についた。部落に沿つて一本の街路がある。二頭の栗毛の瘦馬がのろろと街路を歩み、時々立ち寄り、口唇を鳴らし、草を喰ひ、そして埃を立てた。それを追つて一人の老人が行つた。彼は馬を罵り、怒鳴りちらして手を振り上げた。アムールの住民は、馬車を持たず、夏期はアムールを船で往来し、また冬は氷上を橇で往来した。各戸毎に二―三對の橇があるのはその故である。余は歸り途で再び前の百姓老人を見た。彼は一軒の家の門前に置かれた腰掛に掛けて、通りを距て、誰かと談し合つてゐた。余の會釋に答へようとはせず、彼は余に、余が新來の教師であるかどうかを訊ねた。余の否定的答へは、彼を安堵させたらしい。彼は席を少し譲つて、余に一服して行く様に勧めた。余が老人から聞いた所では、百姓たちはヴトスカヤ縣からこゝへは約五〇年前に移住して來たのである。彼等は満足して住み、冬期運輸に従ひ、汽船へ薪を供給した。農業は重要視されてゐない。と云ふのは、附近に良い土地が無いからであるが、また他に最も割の良い儲けがあるからでもある。宜なる哉！ 罇一ブード(一六・三八疋)の賣價は四〇留、また黒イクラは三二〇留である。鮭漁が甘く當たれば、平均一家族から四名の成人が漁撈出來たから、それを鹽引にして賣れば、鹽、樽、運賃その他を控除しても、新漁期までの生活を充分保證するのみでなく、不祥時に於ける貯蓄さへも出來たのである。

【註】一九二六年のヴトスコエ村の戸數は六一、住民數は男女二七八名であつた。

余は若干時ヴツカの老人と對話して岸に歸つた。汽船は電燈の光に包まれてゐた。目映い光は凡ての扉、昇降口及明り

窓から洩れ出て、黒い水面に映した。新運搬の鮮人らは歩行橋を右往左往した。余は寝る積りで自分のキャビンへ行つたが、甲板上に何か騒ぎが起つたので寢ることが出來ず、再び服を着て上甲板へ出た。

夜半の一時過ぎであつた。空天には満月が懸かり、廣茫たるアムールの河區は掃めく光によつて銀色に輝いてゐた。前方には或る岬の姿がおぼろげに見えた。ヴトスコエ林は眠りに就き、其處此處の農家からはまだ火が洩れてゐた。

この夜更けに、無数の蜉蝋が水面から出て空中へ揚つてゐた。一般人はこれを「ボジ・ンカ」(蜉蝋)と呼ぶ。幼蟲は水中に棲息し、他の小蟲を捕食して生活する。だが次でそれらは皆一齊に水面から出て、透明な小翅と三ヶの尾毛とを持つ淡青色の優美な擬脈翅類の昆蟲に成る。澤山の蜉蝋は、暖かい夏の夜でなく、また何處かで早く刈り取られた干草の蒸るやうな匂ひがないならば、雪と見紛ふばかりであつた。それは幾千幾百萬とも數知れなかつた。それらは文字通り空全體を埋め船室の照明窓につどひ、甲板を塞ぎまた水面を泳いだのである。蜉蝋の生活は儂いものであり、價かに二四時間の命である。それらが暗い深淵から空へ揚がるのも、同族を送り出して死ぬためであつた。

余は甲板上に長く居ることは出來なかつた。昆蟲は文字通り余に群がりたかつた。そして頭に飛びつき、袖に忍び入り、頭髮にかき上り、耳へ飛込んだのである。余はこれを拂ひ退けて見たが、全然何の効もなかつた。キャビンは蒸し暑かつたが、飛び廻る蜉蝋のために、窓を開けるわけには行かなかつた。余は暫らく右に左に寝返りを打ち、やつと夜明け前に少し假睡ろんだ。

翌日余が眼覺めたときには、汽船は既に船路にあつた。カタル湖とヴトスコエ村との間ではアムールは、暫くの間緯度の方向に流れるが、間もなく再び北東へ轉じる。こゝでは右岸は、深い谷間で刻まれた若干の平坦な高原を成してゐる。それは玄武熔岩と最古の鑛層とから成る。高原はエラプチスコエ村附近では、アムールを去つて奥地へ退ぞき、ガシンスキの水路(同名の湖から流出する)を過ぎて後再び現はれる。

ボヤルコフの説に従へば、ウスリー河口よりアムールを降ること四日間の下流には、デニチュル人が、またその下流にはナトカ人が居住した。^(註)斯やうな名を持つ人は指示された地帯には現在には全然見當らない。最近の探査者たちはホーゼン人及ゴリドに就て發表してゐる。最大のゴリド村は、アムールの右岸、ハバロフスクからトロイツコヘ村までの間では、次の様な順序で存在する。チヌブチキ、ホワンダ、サカチ・アリン、リニモミ、ホウホリミ、ムフ・ガシ、ダド・イ、ズィエルガ、ナイホン・ダグリ。

【註】ナザロフ、「アムール沿岸地方の軍事統計一覽」、「アジヤ資料集」一八八三年、三一號、二三頁。

サカチ、アリン村附近のアムール河岸には、春の増水時には水に浸かる彫像岩が在る。岩の一つには荒刻みに人間の顔が描いてある。眼、鼻、眉、口及頬を明瞭に見分けることが出来る。他の岩には、二ヶの人間の顔が在る。眼、口及鼻さへも、同心円で描かれてあるが、額には、若干八の字を寄せた驚愕の表情があつた。長い尾と七本の足を持つ怪異な何かの動物の横顔が、隣合つて刻んである。それは四ヶの同心円によつて描かれ、それらの中後の圓が最も大きく、次の二つは小さく頭部にあるのは中程であつた。圓をかたどる線は、一部分は断片、一部分は曲線でもつて、動物の姿を現はしてゐる。最後の岩には鹿の横顔が可なり精確に描かれてゐる。動物の臀部は同じく同心円で描かれ、脇腹には曲線の形で肋骨が示され、また頸と肩附近の背とは何かわけの解らぬ捲毛が見えた。

午前一〇時に汽船は、同様アムールの右岸に在るトロイツコヘ村に着いた。それはヴァトスコヘ村とは僅かに大きさのみの相異であつた。一般の感じは古びた村であつた。昔こゝにはゴリド村トルチエカがあつた。

汽船は可なり頻繁にアムールを往來するにも拘らず、アムール農民にとつてはこれは常に一事件である。總ての住民は、汽笛を聞き、家から飛出し岸邊に殺到して、ハバロフスクから届いた食糧を受取り、誰か知人が訪れたか如何かを見、または單に甲板を見物せんとしたのである。今回もさう云ふ風であつた。岸邊の群集中に余は、ナイヒン村から二雙のゴリド船

で乗りつけて來たコシコフを認めた。余らを出迎へ、最後に何かを買付けんとして來たのである。仕事を済まし、余らは手荷物を持つて小船に乗り移つた。その傍の岸邊の砂利洲には五人のゴリドが待つてゐた。彼等は總て中背で體格は立派であつた。また顔は卵形であり、頬骨は一寸突張り、鼻は小さく、眼は黒褐色であつた。彼等の黒い長髪は、滿洲風に辮髪に結つてあつた。余らの新知己の服は、肌下に着る白色の短かいルバシカと膝頭までの長さの色模様の一二着の上張とであり、その前端は左右から重ねられ、小鈴に似た金屬製の小鈕で留めてあつた。袖は手頸の邊りで袖當で締めてあり、また脚には、藍衣で造つた股引、腰の所で革紐で締めた膝掛、及羚羊の厚い皮で造られた柔かい靴を着けてゐた。

アムールの土著民族中ゴリド位お洒落の好きな國民はあるまい。彼等の服装全體は頭の端から爪先に至るまで美しい縫ひ着けで飾り立て、ある。腕の重々しい腕環とそして手指の若干の指環とを之に付け加へたならば、休日でも平日でも派手な服装でお洒落する若いゴリドの姿が浮び上がるであらう。余らが手荷物を持ち込むや、ゴリドは船の中を取り片づけて船客の座席を割當てにかゝつた、ゴリド船は底板一枚を舷側二枚の都合三枚の板から出來てゐる。船尾の恰好は梯形である。底板は彎曲し、それは他のものよりも長く且著しく出張つてゐる。船首は二枚の短かい板で六〇度の角度に圍はれてゐる。斯様な造りによつて船は向ひ浪をかぶる惧れはないが、その代りに、舷側は水中に深く沈む、漕手は前の方で小足臺の上に場所を占め、荷物は船の中央に置かれ、また舵手は櫂を握つて後方に陣取る。

午前一時に余らは、トロイツコエ村を去り、ド・イレン水路を遡つてゴリド村ナイヒンに向つた。蒸し暑い一日であつた。空に一點の雲もない晴れた風とそして鏡の如き河面とで特徴づけられた。水に反射する陽光は、眼を刺戟し視力を疲らし、またのたりのたりに進む小船の中の長座は眠む氣を誘つた。二時間程進んでゴリドは、休憩して煙草を喫むために岸邊へ漕ぎ寄つた。

休憩を利用し、余は少し足を伸ばさうと思ひ、岸邊を散歩した。左には高い草の繁つた廣い草原が繰り擴げられてゐた。



アムールのナナイ族(ゴリド)部落

草原植物の大部分は、悉く、非木質性の葉を持つ藁の様な高さ一米半程のウニクであつた。それは怖ろしく密生し、殆んど他の草の介入を排除して廣潤な地域を占めてゐる。乾地には、手で揉めば芳香を發する羽状の葉を持つ普通のヨモギとそして全くその名の示す如く凡ゆる植物を驅逐したロシヤ蘆とがある。特異な姿を持つロシヤ蘆は、風の吹く方へ容易に靡く長い葉を持つてゐる。恰かもそれは誰かが態と撫で付けて眞直ぐにするかのやうである。次には半木質半灌木性の或る植物が眼についた。余はその方へ足を運んだ。それはサルヤナギと赤楊とであり、それらは水路の岸と水を湛へた湖の岸邊とを凡で縁取るやうに取り圍んでゐた。

草原は植物が良く繁茂するだけに、鳥類も可なり豊富に棲息してゐた。非常に暑いこの日中には彼等の大部分は草葉に隠れたが、それでも若干の大食の鳥は、空腹のため活動を餘儀なくされた。先づ最初に余が認めたのは、半定住の雜食の一般鳥としての東部の黒鴉である。それはヨーロッパの同族とは紫青色がかつた黒色の羽色が異なつてゐる。鴉は地下に降りて何ものかを狙つた。多分鼠らしい。それは余が近づいたので驚き飛び立つて、猥て、柳の灌木林の方へ飛び去つた。同様傍らの稍疎らな赤楊にはカササギが居た。それは落着きがなく、尾を

上へピンと揚げ、始終そはそはし、枝から枝を跳び廻り、不意に磔の様に草の中へ落ちたが、間もなく樹の低い小枝の一本へ再び現はれた。余が近づくと思病な鳥は、鋭い喙がれた鳴聲を空に響かせ乍ら飛び立つて鴉の去つた方へ飛んで行つた。續いて余は東部の大きいヴェレンニク(水鳥の一)を見た。それは草原濕地の代表的住者である。ヴェレンニクは思ひがけなく蘆の中から立ち現はれ、余のそばに飛び來り、次で急いで脇へ逸れ、再び姿を隠した。それは、多分、雄であり雌が抱卵してゐる場所を警戒してゐたものであらう。歸り途で余は更にカワラヒワを發見した。この鳥は、沼澤や草深い水路の中で獨り住居する小鳥である。それは灌木に留まり、余が非常に接近しても、極めて落着き拂つてゐた。

余らの船は夕方には、アムール河口の附近にあるゴリド村ナナイヒンに着いた。晩方余らは土地の小學校で宿泊した。コザックたちは夕飯後青々した草を持込んだ。一同は寝る積りで床の上で横になつたが、蚊は夜明けまで誰一人寝かさなかつた。

翌朝九時に余はコシヤコフと共にゴリド村ナナイヒンの視察に赴いた。先づ第一に余の眼にとまつたのは、網を吊つた林立せる棒杙と魚類の干し場とである。少し脇には杙の上に丸太造りの納屋が建ち、その中にはゴリドの總ての貴重な財産が収めてあつた。鼠が納屋を喰ひ破り得ない様に、各杙の上には廢物の古い琺瑯引き小皿が底を上にして被せてある。水路の岸邊には澤山の小船があつた。使用中のものは、單に砂洲の上へ曳摺り上げてあるだけで、必要に応じて再び水中へ引き卸すことが出来たが、他のものは、底を上引繰返してあり、ローラの上に置かれて既に久しいものゝやうに思はれた。數百の犬が眼を瞋らして余らに吠えかゝつて來た。ゴリドが杖で追拂つたので、犬は遊々乍らまた元の場所に横になつた。彼等は蚊や蛇を避けるため地上を掘り始めた。砂は彼等の頭に降りかつた。犬たちは鼻面を足で強く擦るので、兩眼の周圍の毛は擦り切れ、そのために丸で眼鏡を掛けてゐるやうな觀を與へた。

ゴリド部落ナナイヒンの戸數は當時一八戸、住民は男女合して一三六人であつた。村外れの一軒の小舎から、三〇才位の男余が後に親しくなつたニコライ・ペリドスが迎へに出た。彼は余らに然るべく挨拶し、彼の宅へ這入るやうに勧めた。

【註】一九二六年にはナイヒンの戸数は二二ヶ、住民は男女合して一四四名であつた。

蒙古人の小屋は外見は支那人の小屋に似てゐる。それは二斜面の屋根を持つ四角い建物である。骨組は柱から出来、窓や出入口に當る場所を除き、柱と柱との間の空間は柳の枝によつて塞がれ、そして兩側から粘土を塗つてゐる。蒼蒼きの屋根は、風で塵が飛散らないやうに、その下層は同様に粘土が塗られ、上部は棒で押へられてゐる。

闕を跨いで入り、余らは部屋が可なり広いことに氣付いた。三方の壁一ぱいに石で造つた床が張つてあつた。その上には人の丈程の幅を持つ、藎で編んで作つた清潔な疊が敷いてあつた。住宅への明りは、特異な紙障子の篋まつた三つの窓から這入つた。小屋には天井が全然ない。屋根が直接に壁に喰付き、上部の積木の下には煙の出口として小さい間隙が造つてある。それは冬は襤褸切れもしくは干草で閉塞される。土間は堅く掻き固められてゐる。竈は二ヶある。一は出入口の傍に、他は床の壁の反対側の炕の端にある。

竈とはどんなものであらうか？ それは花崗岩で造られた低い爐であり、その上部には可なり大きな鍋が塗り込められる。煙道は床の下を貫通し、外に出て煙突に導かれる。煙突は、洞ろの樹幹で作られ、小屋よりも若干高く突立つ。通常は出入口の最寄にある爐が焚かれる。第二の爐は冬期の嚴寒時のみ用ひられるのである。無論、炕は煙道の出口よりも火口に近い方がより強く熱くなる。時としては炕は、敷板を用ひないではその上で寝ることが出来ない位に酷く熱くなる。竈の側には棚があり、その上には一二本の壺、木製の小槽、白樺皮製食器、臺所用庖丁及箸を入れた小籠を普通見ることが出来る。少し離れた直接土間に大きな水瓶が置かれる。それは高さ一米、容積は二〇ヴドロー（一ヴドロー＝二・三立）である。ゴリドは以前にこの釉薬のかゝつた焼物食器を滿洲で得たのである。小屋の中央には支柱の上に二本の竿を渡し、その上に色んな獵具、例へば、魚叔、オストログ（特殊漁撈具）槍、弓矢等を載せてゐる。小屋内に渡した竿や床の上には、雪靴、船の櫂、白樺皮の大束及乾燥した魚皮がある。煙道は非常に長く且炕の下に平に通じないから、爐の燃え工合

はいつも同じ調子でなく、屢々燻ぶるのである。それ故に室内の人間の背丈より高い所に在る總ての物品は煤煙を浴びて何が何だかよく判別し難い程煤けてゐる。遠つかしい人間がそれに一寸觸れただけでも澤山の黒い粉がポロポロ落ちるのである。

室の上座は炕の中央の部分である。こゝには往々、長椅子の枕に似た色模様の一―二の枕を、またその前には高さ三〇釐の上部に孔のある彫刻細工の木筒（その中には煙管が挿入してある）を見ることがある。ゴリドの信仰によれば、こゝはシャーマン僧があつた世へ導いて呉れる筈の死んだ縁者の靈の安息所である。一隅には木製の大きな偶像が壁に立てかけてある。それは、手のない、大根のやうな頭をした長い曲つた足の瘦癯の人間像である。このカルガマドフは「惡魔」から家を護つて呉れる。二ヶの小足臺、背の低い小卓、炕の一隅に在る戸棚若しくは箆筒に似たもの、及銅製の留金で煌やかに裝飾したトランク等は、ゴリド小屋の補助裝飾物である。室の内外の夥しい裝飾は、觀る者をして驚歎させる。總ての物には多かれ少なかれ彫刻が施されてある。家畜小舎、木の小槽、獵具、櫂、匙、箸、就中白樺皮製の器具、小箱、鉢、茶盆及その他は、悉く皆染料と彫刀によつて裝飾されてゐるのである。

余らは小屋で二人の婦人と老人に出會つた。幾分若い方の一婦人は晝飯の仕度をし、少し老けた方は、床の上に座つて何か縫ひものをしてゐた。その側には子供の搖籃が在り、中には未來の漁師獵師が眠つてゐた。

ゴリドの搖籃は、一二〇度の角度をなした二ヶの部分から出来てゐる。だから子供はその中で寄り掛かゝる姿勢でゐる。搖籃は上覆ひの側面に玩具として、硝子玉、銃の空の藥夾、麝香猫の爪及山猫の牙が吊るされ、それはまた小供の魔除けにもなるのである。

ゴリド男子が蒙古人タイプから遠ざかつてゐるだけ（彼等の中に鼻筋の通つた頬骨の突出しない卵形顔を見ることがも少なくない）、婦人の方は蒙古人タイプが残つてゐる。二婦人の顔は典型的蒙古人顔であり、それは頬骨の高い平面的な顔、歴し

潰された鼻梁、蒙古人特有の眼瞼を持つ眼の細い裂れによつて特徴付けられてゐる。一般にゴリド婦人は背が低く且手足が小さい。

婦人服が男子服と相異なる點は、僅かに上衣の長いこと、刺繡や裝飾の多いことであつた。その外にまた上衣には襟に銅の薄板金の縁縫ひがあつた。腕環や指環の外に、彼女らは耳に玉髓及硝子玉の付いた耳飾をつけてゐた。彼女らが分けても注意を拂つてゐるのは鼻の飾りである。若い婦人は一ヶの鼻輪を佩用し、鼻中隔を通してブラ下げた。また老婦人は斯様な鼻飾を二ヶ用ひ、兩側の鼻翼に吊り下げたのである。

主人は余らを上座に据え、そして御馳走をするやうに家人に命じた。子供の側で縫物してゐた婦人は、虎模様を一はいに描いた毛氈を坑の上に敷き、彫物のある小卓袱臺を持ち出した。そして他の婦人は白樺製の茶盆で乾魚、揚菓子、魚のフライ、莓、硝子のコップ及急須と一諸に廉ものの固形茶を運んで来た。

直ちに小屋では他のゴリドたちの寄り合ひも始まつた。彼等は疊の上に思ひ思ひに席を占め、余らと談合するために、黙つて余らの食事の終るのを待つた。余は、兀鷹の様な白髪の腰の曲つた老人に眼を付けた。そして彼から、ドンドン河は全く存在しないと云ふ事實を聞き知つた。ドンドン河は、鳥の名で、其處に在る部落及それと隣接する水路の名稱であり、余らが踏査せんとする河は、オニユイと呼ぶのである。オロチン河は、河口に在るゴリド村の名稱で、それをナイヒンと呼んでゐる。

オニユイとは何を意味するか？ ゴリドはアムールの右岸支流の名稱にアネイの冠詞を付け加へる。例へば、アネイ・ソングールイ、アネイ・ピラ、アネイ、アネイ・ビヒツ等々。余はこの言葉の語源を明らかにすることは出来なかつた。面白いことには、北方、コルイムスキ地方には、同じ名稱を持つコルイマの二支流——ボルシ、イ・アネイ及マールイ・アネイがある。ウデへ人はドンドンをウニと呼んでゐる。オニユイ（「ウ」は「オ」に轉じ易い）は、こゝから生じ、それが後にアネイに轉じた様に考へられる。

余らがアネイを踏査せんとすることを知つて、ゴリドは河に就いて凡ゆる恐怖を物語り始めた。その話によれば、この航行は、流れの激しいこと、障礙物の多いこと、極めて危険であると。彈藥附きで小銃を興へることを條件にしてさへ、彼らは水源に舟行することを断然拒絶し、そしてこの冒險的企てに彼らを誘ひ込むことは出来なかつた。更に質問によつて判明したことは、アネイの下流にはゴリドが、また上流にはウデへ人が住むことであつた。

アムールのゴリドがアネイを怖れてゐるのは明らかであつた。そのことは疑ひない。彼等の船は、アムールの穩かな流れの航行には便利だが、激しい溪流には全然適してゐない。余はこの旅行に對して彼等を説得しようとはしなかつた（それは効果のないことでもあつた）が、彼等は余らを最寄の部落小屋ドゥリルまで案内して呉れることを約し、其處から向うは余らが新しい案内者を探すことにした。それが済んでニコライ・ペリドスは、余らの案内役に當つたゴリドたちに家に引取つて旅の仕度をするやう命じた。

なほ暫く話して、余らは主人に別れを告げた。彼は余らに夕方もう一度来て呉れるやうにと乞うた。

學校と村との間の端に毀れかゝつた小屋が一軒あつた。粘土壁は崩れ落ち、朽ち古びた薬屋根は地上に倒れてゐた。小屋の周圍全體には丈高い雜草が生ひ茂つてゐた。偶々余は先に立ち、コシヤコフは少し後に遅れた。小屋の側に來て余はフト小猫の悲しうな鳴聲を聞いた。最初余はそれには意も拂はなかつたが、小屋の間近に近づいた時、再び悲しい鳴き聲を聞きつけた。それは或る音を含んでゐたのである。猫が何處かへ落ち込みそして誰かの救けなしには上がれないのだらうと考へ、余は路を横切り雜草をかき分けて、眞直ぐに破れ小屋の方へ進んだ。

鳴き聲によつて余は直ちに小猫を發見した。それは白い鼻面と白い前脚とを持つた普通の灰色猫であつた。猫は何かに脅えてゐた。そして背を弓形に反り曲げ、尻尾を上方に揚げて全身の毛を逆立てゝゐたのである。初め余は彼の怖れるわけを

知ることが出来なかつた。其處には藁芥の山が在り、その中からは澤山の棒切れが突出てゐたのである。余が如何に注意を拂はうとも、發見する何ものもなかつた。

そのとき猫は再び鳴聲を上げ、右方へ跳び上つた。と直ちに棒切れの一本が右方へ動いた。猫が左方へ跳び上がると、棒切れも亦左へ揺れ、それが数回繰返された。余は靜かに猫に近づき、其處に大きな赤色の毒蛇を發見した。地から鎌首をもち上げる身體の部分から推して、爬行蟲は長さ一米半、太さ約五厘であつた。蛇の頭は猫の方を振り向き、その口からは又狀の黒い舌が出てゐた。

猫は立ちすくんでゐる様であつた。それは、逃走して免れようとはせず、徒らに狙へて跳ね廻つた。だが蛇は、少しも彼から眼を離さず、左右に身體を泳がせて次第にその生體に迫つて來た。このときにコシコフが側を通つた。余は手招きで彼を呼んだ。彼は事態を看取するや、棒を取り上げ、そして力委せに蛇を打つた。蛇は草叢の方へ、丁度倒れた屋根の方へ向つた。草叢の中では逃げ行く爬行蟲の草すれの音がシュー／＼と聞え、次で總ては靜かになつた。余は小猫を手に抱き上げて撫で、やつた。それはなほ哀れた聲で鳴き続け、熱病にかゝつたやうに慄へてゐた。

破れ小屋の傍を偶々二人のゴリド娘が通りかゝつた。コシコフは彼女ら呼び止め、人々を呼ぶやうに頼み、そして自分は屋根をブチ毀しにかゝり大きな埃を立てた。娘の一人は余から小猫を受取り、他の娘は村へ驅けて行つた。間もなくナイヒンから四人のゴリドが鋤と斧を持つてやつて來た。彼らは破れ小屋全體を引繰返し、地上に石塊一つも止どめなかつたが、蛇の姿は見えなかつた。余が若干驚ろいたことは、ゴリドらが蛇を探し出すその熱心さであり、彼らが蛇に寄せたその憎しみも亦余を驚かせた。このことは、彼らが他の蛇に對しては可なり無頓着であるだけに、尙更奇妙であつた。正直な話赤蛇は余には大變氣味悪い感じを與へた。余はアムールではこの様な大きな爬行蟲を會つて見たことがなかつた。周知のやうに、蛇類は鼠、鴉栗鼠及色々の小鳥類を呑み込むが、それが仔犬もしくは小猫を襲ふやうな事はまだ會つてなかつたのである。

ある。

蛇が秘かに逃亡しそしてそれを見出す望みが遂に絶望であることが判ると、ゴリドたちは鋤を取り上げ、丈高い雜草を掻き分けて河邊に出た。そして引繰り返へされた船底の上に腰を卸して煙草を喫ひにかゝつた。彼等の顔色から見ても、余は彼等が何ごとかを心配してゐる様に思つた。どうしたのかと云ふ余の質問に對して、一人のゴリドは答へた。即ち、これは只の蛇ではなく、惡魔のお使ひ者であるシューマン娘であり、今に部落には何か不吉なことが起きるに違ひがないと。赤い蛇の出現は何かの出來事と關聯があることを余は直ぐに理解し、晩方に土人に詳しく訊いて見度いと思つた。煙草を喫み終りゴリドらは村へ引揚げ、余はコシコフと共に、宿舎たる學校に向つた。

日が暮れる頃、余はコシコフを伴ひ、世話役の宅を訪問した。ゴリドは夕飯を食ひ終つたところであつた。女房連は遠から火を掻き出して熱え火を火鉢に移した。余らは火を圍んで、お茶を飲み始めた。談しは種族の問題から始まつた。主人は語り、老人は熱心に耳を傾け、そして時折自分の意見を差しはさんだ。

總てのゴリド族は分散的であり、それらの名稱は大部分、あれこれの氏族が昔から居住する地方名を示してゐる。例へばデオнка族は、エリビン河へ注ぐ同名の水源地がその發祥地であり、ベルミンカ族の名稱は、ベルミンカ地方から生じ、アリテンカはムヘニヤ河から、ツヤンカはツヤンカ地方(トロイツコへ村の下方)から、コフィンカはコフィン地方から、マリヤンカはマリヤンカから生じたのである。マリヤンはアムールの左岸、サラブリスコへ村の眞向ひに在る。サラブリスコへ村の場所には遊牧小舎ウリシヤマがあつた。ウクサメンカ族はこゝから起つたのである。オチャール人は、昔銀鉛鑛が採掘されたボレン湖畔に發生し且居住した。鑛を含む巖はオチャール・ホンコンと命名され、湖はボレン・オチャールと呼ばれた。ホチャール族は、アツア水路(「銀」巖よりも少し上部)から發祥し、ツアホウリ族は同名の地方から、またウディンカ及ニコミカ族は、ツングースカ河に住んだ。

ロシア人が来る以前はゴリドは滿洲人にヤサーク（毛皮等の貢税）を支拂つた。そして各氏族は各個別にそれを支拂つたが、その結果は、ベリドイ族は最も割がよく、デオンカ族が最も割が悪かつたのである。それで、デオンカ、ベルミンカ、アクテンカ、ソヤンカツ、リウツァンカ及コフィンカ族出の非常に多くのゴリドは、滿洲人に訊問された際にはベリドイと自稱した。その他の氏族、マリヤン、ボサル、オチー、モリヤール、ツァクスール及ユコミカは、従前通りの名稱を保持した。

アムールに於てはハイヒン、ズレン及バオツツは最も古い部落であつた。ロシア人の到来前にはゴリドは、滿洲人と商取引を行つた。後者は大きな船で年に一―二回河流を下つて来て、色々な商品を輸入し、それらを毛皮と交換した。當時總ては、就中鐵釜及銃砲は高價であつた。老人の話によれば、彼がまだ幼少の頃は、アムール全體でゴリドの持つ火繩銃は二挺であり、その代價としては精選された黒貂皮が一〇〇枚支拂はれたのである。釜は黒貂約一〇枚、火藥一ポンドは黒貂四枚の價であつた。驚く可きことには、ゴリドが茶を飲むことを教はつたのは、滿洲人ではなくて、ロシア人だつたのだ。以前には彼等の手許には、現在よりも多量の酒精があつた。支那人がそれを三姓から供給したのである。

老人は次でロシア人のアムールへの最初の出現に就て物語つた。滿洲人ですら恐れた白眼の怖ろしいロッパ（ロシア人の異名）の噂を彼に傳へたのは、バオツツ村のシャーマン僧であつた。ロッパは、人々を不快にした程非常に石鹼とバタ臭さかつたのである。當時總ての近在のシャーマンは、ハイヒン村で寄合ひを開き、厄拂ひの呪ひによつてロッパを追拂ふことを決定した。新月の第一夜の丑滿時に各小屋は火を消して呪咀するやうに部落全體に命ぜられた。そしてさう云ふ風に取り行つたが、翌朝河には二隻の傳馬船を曳いた汽船を發見した。ゴリドは仰天し、自分の小舎を打ち棄て、思ひ思ひに逃亡した。ナイヒンのゴリドは船でアムールの上流へ去つた。當時小舎の主人が老人連から聞いたところでは、ロシア人の最初の到来は海からのやうであつて、それが何者でありまた何の目的でアムールに來たかは誰一人知る者がなく、翌年にはロッパは上

陸してキジ湖の附近で足を止めた。アムールの上流へ去つた若干のゴリドは、そのまゝ其處で永住した。斯うして出來た部落が、ドリラ、シラ及タクサレなのである。他のゴリドは、ボレン・オチャール湖畔へ逃げて、同様歸村しなかつた。この時以來アムールではゴリトが漸次減少し始め、それに引換へロシア人の數は頓に増加し、そして彼らの動きを抑止することは不可能であつたのである。

ナイヒン村は五〇年程前に落雷によつて火災を發して全焼した。ゴリドは殊更悲しまなかつた。そのわけは、彼らの見解によれば、雷は常に、惡魔が久しく棲息する場所に落ちるからである。時には電光は、人間の中に秘んでゐる惡魔に衝擊を與へる。雷によつて火災が起らないならば、惡魔はその奸策によつて多くの人々を破滅させたかも知れない。問題を斯う説明して、老人は言つた。落雷による火災は不幸を救ふものであり、凡ての者は満足してゐると。部落は同じ土地の上に再建されたのである。

老人は黙し、或る一點をじつと見詰めて、過ぎ來し遠い昔の追憶に沈んだ。その時余は老人に、赤蛇とシャーマン娘と云ふ名に關聯ある意見を乞うた。最初彼は一寸言ひ淀んだが、それから詳しく次のやうに物語つた。

約六〇年前にガシ湖畔のゴリドの大部落ホヴィンで人蔘色の毛髪を持つた娘が生れた。既にそのことだけでも土地の人々は驚ろいた。彼女は長ずるに及んで諸々の擧動すべき動作をとり始めた。例へば、仕事を嫌ひ、年長者に露骨に反抗し他の子供達と喧嘩するのが常であつたのである。彼女は成人になるや、狂暴な亂暴を伴ふ發作を起すやうになつた。そして部落中を驅け巡り、人々に挑みかゝり、小屋の窓を破壊し、漁網を引裂き、また犬の食物を奪つた。一度ならずゴリドは彼女を縛り上げたが、いつも巧みに革紐を脱け出して仕舞ひ、そして尙更狂暴を逞しくしたのである。幾度かシャーマン僧が招かれ、幾度かシャーマンのお呪ひと惡魔退散の祈りがなされた。何の効もなかつた。それでゴリドらは彼女を森の奥へ連れて行き樹の幹に縛り付けておくことにした。數日を経て彼等は、人蔘娘が餓死しては居ないか、何かの野獸の

餌になつてはゐないかと視察に行つた。ところが彼等がびつくり仰天したときには、娘の姿は消え失せて、彼女を縛つておいた繩はその場に残り、結び目にも異状はなかつた。また彼女が立つてゐた丁度その場所には、大蛇の脱皮が横たはつてゐたのである。その時總ての人々は、赤髪の娘が悪魔に捉へられたことを覺つた。そのことあつて間もなくガシ村では次から次へと人が死に始めた。一年後には百戸の家の中残るものは僅かに四〇戸、次で二〇戸になつた。驚ろいたゴリドたちは他部落へ逃亡し始めた。ガシ村には僅かに二老人だけが残つたが、彼等も死によつて罪を償つた。或る日のこと二人は死骸となつて發見されたのである。このとき以來この場所は放棄されて、誰一人再び移住しようとするものは無くなつた。そして死んだシャーマン娘は、赤い狼になつたり、見たこともない鳥になつたり、不自然な色彩を帯びた變な魚になつたり、赤い蛇の姿になつたりして、他の部落を彷徨し始め、またその出現の度毎に何らかの不幸を齎したのである。このとき赤ん坊が泣いた。余は時計を眺めた。既に真夜中であつた。總ての家人及客人の或る者は、炕の上で寝入つてゐた。老人は自分の妻に聲をかけた。彼女は起き直り、欠伸をし、頭を掻きそして半分夢心地で子供に乳房を含まし始めた。主人に別れの挨拶をし、余は帽子を取り外に出た。月は昇る所であり、そのために空は地上よりも一段と明るかつた。微動だもしない生温い濕つた空は、蟬と蚊とで一ぱいであつた。遙かに非常に遠い、多分アムールの對岸と思はれる邊りに、火がチラチラ見えた。水路の黒い水面は、涼しさうな光りで輝き始めた。犬の遠吠、森には何か鳥らしいものゝ叫び聲、草地の兎の驅ける音は、深々たる夜の靜寂を掻き亂した。

學校では余の従者たちは既に遙か以前に寢込んでゐた。余は自分の場所にもぐり込んだが、寢つかれなかつた。ゴリドたちが傳へた色々の事情は余を不安がらしたのである。彼等の知るところは、僅かに同族たちの棲小屋のみであり、ウデへ人に就ては何らの事情も知らないし、余らはシホタ・アリンの峠越えの後に如何なる河の流域へ出るかも、また峠の向う側には直ぐに土民が居住するか如何かも知らなかつたのである。余は漸く疲れが出て、思念は亂れ始め、そして次第に深い眠りに落ちて行つた。

二十九日の朝、ゴリドが迎ひに來た。朝食は簡単に済ませ、荷物を纏めて余らは河岸に向ひ、間もなく船に乗り込んだ。荷物を運び込み、人々が各自の席に落着くや、船は岸を離れた。アヌイ河は河口では、三角洲を造り、六つの支流に分れてゐる。そしてその清澄な河水はズレン水路へ強力に流入するので、アムールの濁流は對岸の方へ壓迫されてゐる。ズレン水路は淺瀬である。洪水時にアヌイから押し流された枝折れた樹の幹が、到る所の洲上に散見された。アムールの岸及島嶼は砂土と粘土との交互層から成るが、バイヒン村からトロイツコエ村に至る河岸の基盤とドイレン水路の河底とは、アヌイによつて沖積された圓礫の有力な層が在る。ムイヌイム。高地まで深く五軒方入り込む右岸の低地帯全體も亦この礫で充たされてゐる。

アヌイは以前にはトロイツコヘ村附近で流れ込んでゐた。それはムイヌイム。河口から北東へ曲り、暫くの間同名の山脈に沿つて流れたのである。こゝではその夥しい舊河床を見ることが出来る。それらは平行列をなし、ドイレン水路に對して鉛直をなしてゐる。舊河床各間には、同様平行列をなす長いレクタ(河沼内の島)があり、楡樹の疎林で掩はれてゐる。それを辿れば、アヌイは次第に南西方に轉じて、バイヒン河岸の高地に達してゐることが判る。一方ドイレン水路は塞がりかゝつてゐた。そして程なくそれは砂利で全然埋まつてゐる。無數の洲及砂洲が既に出現し、水面に凸出してゐる。またアヌイは水路を通つてトルゴン村を過ぎ、行く先はドンドン島附近邊りでアムールへ注ぎ入る。

余らが岸から離れると、不意に横合の簑影からサモロチカ(小舟)が出て來た。その上には魚掬を手にした婦人が突立つてゐた。余の従者は彼女に呼びかけた。婦人は急いで振り返り、余らを認め、舟の中に魚掬を置いた。そして舟底に腰を卸ろして、棹を取り、岸に漕ぎ寄り、余らの近づくのを待ち受けにかゝつた。間もなく余らはそれに近づいた。

讀者は、多分、オモロチカとは何であるかを知りたい。それは白楊若しくはサルヤナギを割り抜いた小舟である。ロシア

名「オモロチカ」は、オモ（一）とオロチ（人間）の二語から生れた。直譯すれば、「一人の人間」となる。その外ロシヤ人は時には冗談に「獨木舟」とも云ふ。それは非常に不安定である。そして一寸した不注意でも顛覆し、慣れない人間は水に落ち込むのである。

婦人は四五才位であり、カメヂチ族であつた。少し頬骨の高い、色の淺黒い、日焦けた顔、黒褐色の黒色に近い眼、及辨髪にした同様な黒髪、尖つた顎、鼻梁の眞直ぐな低い鼻、斯くの如きが彼女の顔立であつた。彼女の動作は穩やかであつた。そして品位を保ち、話の受け應へは簡單であつた。彼女の服装は、その同族の婦人のもと同様であつたが、裝飾はなかつた。余が従者から聞いた所では、彼女は寡婦であり、成人した二人の息子を持ち、その中の一人はホルへ出隊に行き、他は柴の狩獵に出掛けてゐた。余の何者なるやを知り、彼女は僅かに余に一瞥を與へたのみで、微塵も好奇心を現はさなかつた。暫く話を交し、コリドは棹を取り、先へ漕ぎ出した。婦人も亦岸を離れてから、立ち上つた。軽い小舟は水面で跳ね揺れた。婦人は魚掬を取り上げ、水中へ突き入れるや、直ちに大きな魚を空へ突き上げた。彼女はそれを舟中に投げ込み、再び魚掬を河底へ突き込んだ。また突き上げた。第二の魚は舟の中でピンピン跳ね廻つた。それから第三、第四……と突き上げたのである。

『何とまあ婦人が！』と、彼女の巧みな身のこなし振りに見惚れ乍ら、余は考へた。「小舟に突立つて河の早瀬を行くばかりか、魚掬で魚を突くと云ふことは、男にだつてザラに出来る業ではあるまい。この婦人は生活のための嚴しい學校を終へたことは明らかである。』

その内に舟は分れた。余らは右岸の方へ轉じ、婦人は水路の一つへ曲つた。夕方には余らはリュウダニ河の河口に着いた。それと隣り合はす一寸上流には、小舎が二軒立つてゐた。余らはこれ以上進まず、直ちに夜營の仕度に取りかゝつた。既に間は深かつた。余らは一斜面の天幕内に座を占め、枯れ薪の愉快に燃え上る火を眺めた。余は昔の暮しを語るゴリド

たちの物語りに耳を傾けた。土民の定住するこの地方を余はまさまざと思ひ浮べた。それらの生活はニインカ（支那人）やロツツ（ロシヤ人）が入り込むまでは安穩であつたのだ。彼等が疫病、酒精及貨幣を持ち込んだが爲に、多くの人々が破滅したのである。

この時河では靜かな水を跳ねる音が聞え、次で間もなく間の中から小舟に乗つた婦人の姿が現はれた。彼女は火の傍に來り、余に二尾の大魚と二羽の鴨（同様な魚掬で刺しとつた）とを呉れた。余はお禮を述べ、彼女の息子に銃の彈藥を與へることを約した。余が察知せるやうに、彼らはそれに非常に缺乏してゐたのである。

婦人は余らの焚火の傍で煙草を吸つてから、自分の舟に戻り、間の中に消えて行つた。間もなく槳で水を切る音が聞えた。

第二章 アニユイ河の上流

余らは船を後に戻すことが出来ない程狭い水路を航行した。それらは互に交錯して長い編目を作つてゐた。既に羅針盤は役に立たなかつたので、間もなく余は方角を失つた。

遂に水路は盡き、余らは偶々側面の南側の河へ入つた。こゝでは流れは激流であるから、棹を使つて前進することは思ひも及ばなかつた。ゴリドたちは棹を擱んだ。斯う云ふ航行方法は、至難な業である。舟足を押し止めなければならぬ。そのためには腕力、忍耐及技術が必要である。舟の地位は極めて不安定である。それは始終動揺するのである。均衡を計り、また注意深く前方を注視する必要があるのである。初心者は不慣のため眩暈し、また不注意な凡ゆる動作は破滅を招くに至るのである。それ故にゴリドらは余らに静座すること並に仕事の邪魔をしないやうに乞うた。こゝはアニユイの河幅が如何であるかを言ふことは困難だ。何となればそれは若干の水路に分れ、時には一〇杆に互り横に横がつてゐるからである。若干の支流を一つに合してゐる所では、河幅は二〇〇米から三〇〇米、流水時速は約八杆であつた。凡ゆる溪流がさうである様に、水路（航行可能な）は一の岸寄から他の岸寄りへ屢々轉じ、その結果砂洲は河筋に碁盤縞の様に出来てゐる。

アニユイ下流の植物は人して種類に富んでゐない。河の兩側には肥沃草原が濶り擴げられ、水路の邊りには孤生の樹木や丈高い灌木が成長してゐる。エン・ア・デスラヴィがその日記の中で指摘したアムール菩提樹は、空洞のある瘤だらけの樹幹節くれ立つた樹枝及極めて芳香に富む花を持ち、またコルク樹は手觸りが天鵞絨のやうな皺の多い灰色の樹皮を持つてゐる。この樹は鮮黄色の白木質とそして外見が柳葉に似た葉とを持つのである。此處彼處にはアムール・ライラックが灌木林をなして成長するのが見られたが、その大きさは、地から出る樹枝が辛じ二樹と呼ばれ得る程度のものである。ライラックは

白色味の斑點ある黒色の滑らかな樹皮と白色の芳香ある花房とを持つ。ライラックの近くには炎暑の中にハイナカリが成長し、大きな葉柄と二種の花（中央に結實する杯状の花と、縁の雪白の不結實の花）とを持つ小枝の多い灌木を示してゐた。こゝにも亦野生葡萄が在り、他の植物に絡り付いてゐた。そして時には絡り付かれた樹木の葉を全く掩ひ盡して仕舞ふ程繁茂してゐたのである。

ゴリドたちは絶えず岸をあらゆる間切り、さまざま深くない場所や流の緩やかな所を選び漕いで行つた。船が曲り角で急流に出喰すと、棹は河底にとどかず、彼等は棹を操つて力の限り水を掻いた。流れは船を押し流して向う岸へ追ひやつた。それでゴリドらは再び棹を使つて流れに抗し次の曲角まで間切つて進み、河を漕ぎ進んだ。そして時折は洲の方へ漕ぎ寄せて休息し喫煙もしたのである。余らのこの日の行程は僅かに八杆に過ぎず、早くもスイレン・カタニ附近で夜營に取りかゝつた。

森の方から長く尾を曳く何か陸クヒナの鳴き聲に似たしかも一層メロディカルな響が絶えず聞えた。余はそれが何の聲であるかをゴリドに訊ねた。土民はそれがミキ、即ち蛇の鳴き聲であると答へた。彼らの話しが餘りにも斷定的なので、余は聲の主を見に行く氣になつた。百歩ばかり行つて余はとある小さい草地に出た。聲の所在は丁度この邊であつた。然るに聲の主は極めて要心深く且つ鋭い聴覺を持つてゐた。聲はハタと息んだり、また聲を落したりしたのである。どうも余の足音を聞きつけたらしい。そのことは余を屢々停止せしめ且つ要慎深く歩ましめた。漸くにして余は蘆の邊に近づき、その低地に昨年の草の厚い層が在るを發見した。大蛇は正に斯う云ふ場所を好むのである。余も蛇も要慎深く、雙者共聴き耳を澄ました。ミキは全然沈黙して仕舞つたが、余は我慢をして、その場に久しく立ち寄り、少しの身じろぎもしなかつた。思ひもかけず全く間近の余の右手で、サラサラと云ふ物音が聞え、實際大きな爬虫類らしきものを認めた。それは枯草の下を這ひ時々その身體を外に現はしたのである。と忽ち、少し進んだ所で、再び歌ふ様な囁れた鳴聲に似た良く徹る聲が響いた。



ア ニ ュ イ 河

そして静寂に返つた。暫く余は佇んでゐたが、最早鳴き聲は繰り返されなかつた。余は後へ引返した。既にとつぷり暮れてゐた。晩は明るく且つ静かであつた。空にはまばらな雲が泳ぎ、恰かも月がそれに向つて追つかけてゐるやうに見えた。干上つた池の方から従前通りにメロデイカルな寂しい鳴き聲が聞え、向う岸では蛙が他のコーラスでこれに和してゐた。

夕飯の仕度中に、余は次の旅日程を作製し上げた。暗くなつてから、クルイロフ、チャン・ペオ及コシヤコフが魚獲りに出掛けた。そして小さい漁網でシベリヤ鮭一尾と鯉一尾とを捉へた。余らを案内せるゴリドの話によれば、シベリヤ鮭はアニユイでは一般に稀にしか見かけないが、鯉は河の下流では可なり棲息してゐる。河口附近の静かな河淵には形の大きい梭魚屬及鮫が棲む。鮭屬の内アニユイでは單に白鮭のみが群棲し、鱒は全然居ないのである。

余らが漁撈から歸つた時は、既に暗闇であつた。露營地では景氣よく焚火が燃えてゐた。燃え盛る鮮かな光りは、樹々の幹や頂きを照らした。余ら一同は晝間に疲れたので、早く就眠した。犬が見張りを勤めて呉れた。

翌日ゴリドらは明け行く朝の空氣の中に一齊に起き出た。そして余らを急がせて、天氣が悪くなることを告げた。全くその通り、空には縁の裂けた大密雲が驅けてゐた。雨を覺悟しなければならぬ。

アニユイは三〇軒に亙る低地では南東より北西に向つて流れる。そして次で大きな輪を描き、西方に轉じ、アムールに注ぐまでその方向を保つてゐる。この地域では、河口から上流に向つて順番に、次のやうな河と方位標定地點とを指摘することが出来る。河の右側では、ムロムイ河、それから若干距つてムイヌイ河、次でベレグズイム水路及ホクトアツ地點、また左側では、小水路ダレコ及クアテ、次でスイレン・カタニ水路及ヤウカ、荒れ小舎の在るスーアレン地點、ホウロス。水路。アニユイが東から北西へ折れる地點の土地は、バガン（ロシア語では「バラガン」）と呼ばれる。その更に東方にカン水路の口がある。

ゴリドらは河筋に精通し、出来るだけ、水路を利用して路を短縮し、偶には舊河床を擇ぶことがあり、それは新河床よりも更に長いこともあつたが、しかしその代りに流れは一層緩慢だつたのである。土民たちは、彼らが「砂洲」と稱する砂利洲の一つをも見落すことなく、彼らのアニユイ舟行の最終點たるド・リヤラ小屋まで豫定のコースを進んだ。

アニユイの低地帯はアムールでのぶよの産地である。事實、こゝではこの羽を持つギャングは、見ることも呼吸することも全く不可能な位澤山ゐたのである。それらは眼に、口に飛び込み、耳に入り込んだ。顔を掩ふ防禦網なしに、また袖當や手袋なしには、露天で仕事することは全く絶望であつた。ぶよは雙翅類に屬し、小蠅のやうな姿を持つてゐるが、翅は後者よりも幾分長い。その外にその胸と腹部とは判然と區別され、その點では黄蜂と若干似てゐる。見た所、ぶよが皮膚の上衣を咬み破り、外部に出る血を吸ふことが、刺された箇所が猛烈に痒いことで説明される。

余らは約一時間後にド・リヤラ小屋に着いた。小屋は他のゴリド小屋ナイヒンと全く異なる所がなく、相異と云へば、僅かに規模が小造りであること、手の込んだ彫刻がより多いことであつた。船が岸に繋がれたとき、小屋の中から五―六才の

二人の子供が駆けつけて来た。子供らは釘のない上衣を着、股引もなく素足であつた。その皮膚はどうしてこの様に淺黒いのか一寸判断し兼ねる。それは日焼けか、煤か、垢か、それとも彼らの自然的色素によるものであつたか。船中にロツペロシヤ人の居るのを認め、子供らは忽ち驚いた顔色をして後ろへ逃げて行つた。間もなく主人が立ち現はれた。彼は余に手を差し出して岸に上がるのを救けた。小屋には三人の男子、二人の婦人及三人の子供が住んでゐた。こゝでも御馳走―茶及乾魚―が始まつた。

ゴリドは、明日は雨天を覺悟しなければならぬと語つた。と云ふのは、澤山のおよぶが現れて猛烈に刺したからである。更に、水路では魚が水面に現れ、アブアブと空氣を吸つてゐたことも注目された。既に午後には空は累々たる密雲で蔽はれ始めた。

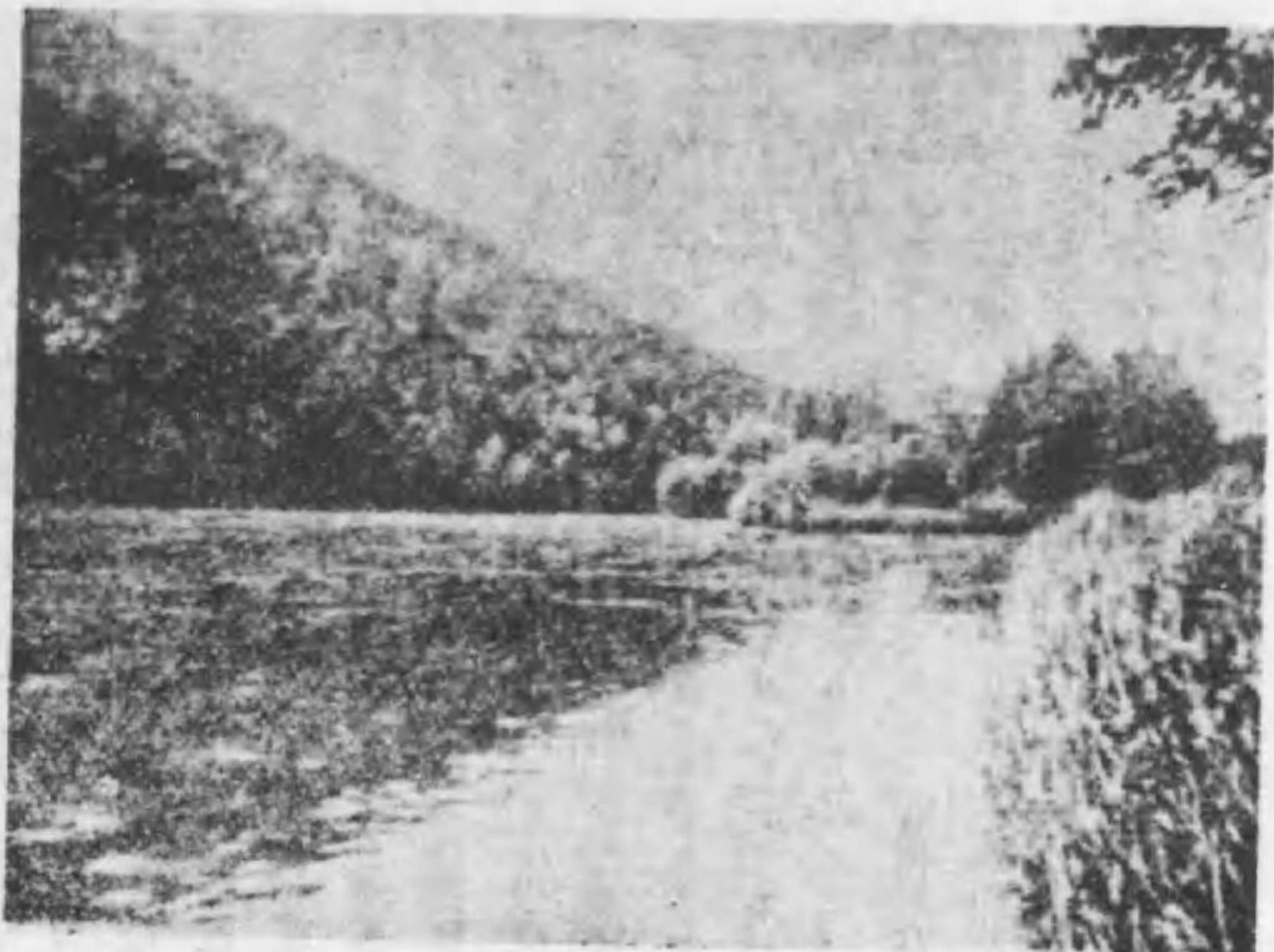
日の暮には、空は雲で完全に蔽はれてゐた。面が降り出した。それは二晝夜ブツ通しに降つたのである。雨空が長期的性質を帯びることを見て、余は悪天候を侵して前進する決心をした。アムールのゴリドは此處から歸つたが、彼の代りとして余はド。リャラ小屋の住人を案内役に雇ひ入れた。彼らの話では、河は増水する惧れがあり、さうなれば船での航行は全く不可能になる。これは尤もな話であつた。余らの決意を識り、ゴリドたちは直ちに旅仕度に取りかゝつた。

然るにその時珍らしい出来ごとが起つた。それまで愉快さうであり、また談笑してゐた小屋の主人が、遽かに怒り出したのである。彼は、昨日一度履いたばかりの長靴を取り出したが、その底には既に孔が明いてゐた。彼は罵り出し、それから靴を取り上げて隅の方へ投げ棄てた。程なく一切は明らかになつた。長靴の耐久力は使ひ方によるものである。それは夏期には二週間保つのが普通だが、これが一日で摺り切れて仕舞つたのだ。縁起でもない！ 長靴は人を評價する。履く人が、心してそれを取扱ふならば、久しく用に堪へるであらうが、さもないならば、直ぐに摺り減つて仕舞ふのである。小屋の主人は茫然としてゐた。妻君は彼に新しい長靴を渡し、眞面目な面持ちで孔の明いた靴を杖で吊上げてそれを小屋の外へ持

出しそして罵り乍ら犬の側へほうり投げた。

漸く總ては覺がついた。雨も止みにかゝつた様である。ゴリドたちは荷物を船に積み込み、乗り手に座席を與へ、棹、棹を吟味し、そして出發した。けれども天候は余らに一ぱい喰はした。一寸中休みして再び降り出し、そして不幸の總決算として難船が起つた。ゴリドは水路の一つで流木に近づき、フトした機みに不注意から流れに向つて船を横にしたのである。忽ち水は舷側から浸入し、間もなく船の縁まで一ぱいになつた。幸ひにも其處は淺瀬であつた。一同は船から飛出し、手でそれを岸まで曳いて來た。この水難によつて之と云ふ不幸は起らなかつたが、余らの荷物の總ては濡れ鼠になり、それが爲に余らは、定刻よりもずつと早く露營して總ての衣類を火で乾かさねばならなかつた。

エルダ及カウアスの水路を過ぎ、ゴリドらは岸邊に漕ぎ寄せた。そして船を整頓し、いつも手許において在る豫備の橈と棹とを分配した。彼等は何ごとかを心配してゐる様子であつた。余らが暫らく進んだ時、船首に居るゴリドの一人は時々立ち上り、ちつと前方を見守つた。余はどうしたのかと訊ねた。彼はこれに對して、黙つてゐて呉れるやうにと手で余を制した。余は丁度この時、何かの物音を耳にした。それは段々明白になりハッキリして來た。その時、船の軸に座つてゐた土民は、指で前方を指して只一語「イオカ」と叫んだ。余も亦立ち上り、二水路の會流する所、其處に大渦流を認めた。イオカ渦卷は一の大水塊であり、高さ約一米半、直径約八米であつた。こゝでは二つの水流が相會してブツ突かつた。大水量は二水路から持ち運ばれ、河床では包容し切れなかつた。それは大きな山を造り、それは始終あちらの岸寄こちらの岸寄と位置を轉じたのである。水は沸騰する様に、急速な廻轉運動をなし、八方に白い泡を吹き立たせた。大きな水丘の頂きには時折巨大な漏斗が出來た。それは突然現はれ、見る見る内に大きくなり、吸込む響を發し、そしてまた不意に姿を消すのであつた。土民たちは岸に漕ぎ寄せて船の陸揚に取りかゝつた。一部のゴリドは荷物を運搬し、また他の者は木材曳き出しのため



ア ニ ュ イ 河

ものであり、危険な渦巻を迂回するために余らがその儘利用出来るものではないことを示した。

ゴリドは二匹の獵犬を連れてゐた。余らはそれらを船中に繋いでおいたが、今やこの四足の乗客は岸邊に駆け上りまた屢々水路を泳がずにはをられなかつた。余らの犬と土民の獵犬との最初の顔合せは敵對的なものであつた。彼等は敵意を含んで互に睨み合ひ、齒を剥き合つたが、間もなく仲良くなり、既に遠くへ運び去られた船を一諸に追かけてゐたのである。百姓犬は前を、余らの犬は後を驅けた。最後に余らはそれらの總てをアニウイの左岸に發見し、それらは運搬が終つた後に驅けつけて来るものと思つた、然るに余らが合流地點を迂回して船を運び終へても、犬たちは向ふ側に居た。百姓犬と余らの犬とはドンドン先きに驅けたが、百姓犬の一匹はアニウイを横切つて眞直ぐに此方へ渡らうとした。コサックたちは惡戯に之を追拂ひ、石を投げつけた。犬は危険を省みず漸く岸を離れたが、忽ち激流はそれを捲き込み渦巻の方へ運んで行つた。不幸な動物は渦巻に呑み込まれて余らの視界から去つて仕舞つた。

余らはこの日僅かに八軒進みコトフ・ダタニ小舎で夜營した。

小舎は三戸、住人は男子六人、婦人五人及小供二人であつた。

夕方前に余は銃を取り岸邊傳ひに散策せんとしたが、無数の蚊は途中から引返すことを餘儀なからしめた。一同は休息をとり熟睡せんと期待したが、無数の蚤の襲撃に遭ひ、一睡も許されなかつた。夜が白んで来たので、余は起きて外に出た。

冷々として濕つぽかつた。程なく空は細雨で煙り始めた。足を濡すことなく余が昨日渡つた乾いた水路(ゴリド小屋の後方)は、水を湛へてゐた。即ち、アニウイの河水は岸から溢れ始めたのである。余は立ち戻つてゴリドたちを起こしにかゝつた。

一時間半後には余らは、コトフ・ダタニ小舎を棄て、再び流れに抗して棹さしてゐた。アニウイはこの地帯では廣い流れをなし、北方へ軽く弧を描いてゐる。左側には二つの小支流があり、更に廻つてコルドン水路が在る。コルドンの河口附近には更に一戸のゴリド小屋シーラが在つた。余は更に前進し度い考へであつたが、累加した障礙は、辛うじて最後のゴリド小屋タフサレまで行くことしか出来なかつた。

到着後一時間半程過ぎ、余らが炕に上つて茶を飲んでゐる所へ、主婦が這入つて来て、河が猛烈に増水してゐるから船を押し流される恐れがあることを告げた。ゴリドらは少し岸の上方へそれらを遽に引摺り上げた、けれどもそれは不十分であつた。夜遅くと夜中に更に二回船を引摺り上げたのである。河水は水路と云はず舊河床と云はず一ぱいに漲ぎり、小屋そのものも危なくなつた。

この出水は丸一週間余らをもつ所で足止めさした。苛立しい程時間の経つのが遅かつた。余は人種誌學を研究し、ゴリドやまたその隣人のウデへ人たちに關する資料を蒐集した。一方余がこゝで聞き知つた所では、アニウイはホラ水源を合せ上流地帯では暫くの間シホタ・アリンの西部斜面に沿つて流れ、合流し来るゴビリ支流を合したる後、西方に轉じ、若干北轉し南轉しつゝ、ズイレン水路に注ぎ入る。余が更にゴリドから知つた所では、彼等の同族は單に河の下流地方にのみ、また

ウデへ人は上流、ウレマ地方に至る地帯に居住し、アニーの上半地方は全く無人である、同様にゴリドの傳へるところでは、海岸へ達せんとする爲には、余らは尠く共三〇日間の期間を見積る必要がある。

その後余は、余らの滞泊の理由は單に増水ばかりではなくて他の事情にもよることを知つた。問題は、ゴリドらがアニーを恐れ、タクサレ小屋より上流へは足を入れたことが全然ないと云ふことであつた。彼らは、ウデへ人が小舟で河を下つて來ることを知つてゐた。それで彼らはこゝで待ち受けて、余らを彼らに引渡し、自分らは歸宅しようと思ふ腹であつたのである。この期待は誤つてゐなかつた。實際に、七月九日、上流からウデへ人が二隻の舟で到來した。

この日の朝余らはゴリドらと別れを告げ、文化に溶することの尠ない眞の野人の手に自分の運命を托した。

余らの新しい知己はキ・ロンドイグ族であつた。その中の最年長者は四〇才、他は二〇から二五才の青年であつた。彼等の顔は日焦してた上に若干オリヅ赤色を帯びてゐた。ウデへ人の頭は、赤い紐で堅く結び且金色の留金で飾つた二本の短かい辨髪であつた。年輩のウデへ人は左の耳に銀色の小さい飾り輪を付けてゐた。帽子は誰も着けてゐなかつた。彼らの着物は、支那製藍衣で造り、横に紐を付けそして腰の所を革紐で締めた長いルバシカであつた。また脚に着けたものは、細短かい股引と藍衣で作つた膝當とであつた。一般にはウデへ人の上衣は、鹿の角を想はす様な螺状と波形模様とで飾られ、美しい優雅なものであつた。

野人の小舟は、長い刳貫き槽様のものであり、平底、傾斜した船尾及船先にも小仕切り壁をもつ。この小仕切り壁から、船先は木の大きな圓形の形で前方へ出張つてゐる。舟は幾分卵形の形態を持ち、水面に浮ぶときは、その端と舷側とが水平をなしてゐる。斯様な舟は「ウリマグダ」と稱せられ、白楊から造られる。そして軽く、操縦容易で、水を切つて進むと云ふよりは寧ろその上を滑るが如くであり、極めて小さな淺瀬を通り抜けることが出来るのである。中型のウリマグダの長さは五―六米、高さ五〇―六〇釐、二人乗る場合の積載量は約三〇―三五ブート（一ブード、一六・三八疋）である。積荷は船

の全長に平均に配置される。乗員は、船底に平に敷かれた白樺皮製の敷物へ着座する。兩舷が開かないやうに、船には數ヶ所に船梁が渡されてゐる。土民は先首と艫とに席を取るのである。

河は今怖しい觀を呈した。總ての島及洲は水で掩はれ、水流は時速約一〇軒に増大してゐた。

悪天候が長かつた後だけに、お天氣も定まつたやうである。暖かい陽光は萬物を甦らした。樹々の葉や草葉に宿る雨水の露はキラキラと輝き、まだ風で振り拂はれてはゐなかつた。昆蟲は空に飛立ち、穏やかな黄色の蝶らは花の上を舞つた。それらは、餘らと同様、一週間の長きに亘つて足止めを喰つた昨日の不幸を全く忘れ去つてゐるかのやうであつた。

土民らは力一ばい漕ぎ、大水に乗じて可なり速く前進した。

タクサレ小屋を過ぎれば河の（流れによる）右岸には若干の森林地帯がある。即ち、コンコ及アヂ、それより少し上流には小水路ドイグリド、またその對岸には天然境界マサムボと共に小河ハスカンデオニがある。

余らは正午に大休憩をとつた。快晴、麗しい河、ウデへ人との會合は、余の従者たちの氣分を浮き立たした。昨日までの不幸は忘れて仕舞つた。

晝飯の出來上るのを待つ間に、余は植物類を視察せんとて少しばかり密林へ分け入つた。先づ最初に余の眼に止つたのは滿洲トネリコである。その樹幹は、樹皮を縦に規則正しく條を引く割目と先の尖つた長卵形の葉とによつて容易に識別される。其處には淡緑色の特徴的な樹皮を持つ楡が成長した。楡の木質は見たところ多くの水分を含んでゐる。銃弾は、二―三本の乾いた樹を貫通するが、楡樹が一抱半から二抱への太さを持つ場合は、一本を貫ぬくことが稀である。次で余はアムールの菩提樹を發見した。余はそれを太短かい幹、角張つた大きい樹枝及黒光りのする葉によつて識別した。其處から若干離れた所に滿洲胡桃樹の眞直ぐな樹幹がチラと見えた。その大きな葉は稍の頂きに菊花狀に配列され、故にそれらの各個は棕櫚に酷似するのである。恐らくこゝには滿洲潤葉樹屬の他の代表者も成育することであらうが、余は植物見學を打切ら

ざるを得なかつた。と云ふのは余の従者たちが、露营地になるべく早く引返すやうに呼び立てたからである。この密林の森縁灌木はソルバリアである。それは正に花が咲き始めたばかりである。陽光が差し透す場所には、ルリトラノオが成長した。それは先端の尖つた冠毛の様な淡紫青色花と菊花状に配列された六枚の長卵形葉とを持つ。余は歸りを急ぎ、偶々只眼に映するものだけに注意を拂つたのである。或る場所で余は、鬘を付けた鋭端的な大きい葉と暗色の花とを持つ大きな或るヘレボルス属を認めた。傍らには、駝鳥の羽に酷似せる葉を持つ羊齒屬がチラホラし、また到る所に、皮の割けた褐色の樹皮を持つアムール葡萄が繁生した。それは灌木を掩ひ、太陽に向つて樹に攀縁上昇してゐた。

露营地では既に全部の用意が調ひ、余を待つばかりであつた。急いで余は半分冷めた茶を飲み終り、荷物を船に積み込むことを命じた。

ウデへ人は概ね大水路を行き本流を避けた。そして時には、船の兩舷が一度に相摩する程倒壊木で塞がつた狭い場所を通り抜けた。余は彼らの機敏奇智に見惚れた。彼等は屢々斧で切り開き、流木の中の狭い通路を突破して、思ひがけなくも再びアムールへ出た。

余らの案内者の言葉によれば、河は屢々氾濫して森林に浸水する。その際にはウデへ人らは小舎を棄て、一生懸命にアムールへ下つて来る。時には、彼等は一日中火を焚く爲の乾いた土地を發見することが出来ないこともある。寝ることや食物の煮炊きも舟の中でやるのである。

間もなく余らはモチ河及ヘリチオニ地帯を過ぎ、次でシニアダ、クズイグゼ及チ。グド。オニの水路を過ぎて、明るい内にホンコ遊牧小舎に到着した。それは同名稱を持つ小山の附近に存在してゐる。

餘暇を利用して余は従者たちに夜營の準備を命じ置き、山へ登つた。そして西洋杉を交へた壯麗な混合林の中を行つた。ホンコ山の頂きは平坦であつた。それがため余は樹に登らざるを得なかつた。先づ最初に余が認めたことは、ホンコ山は延

延たる山脈の末端の峯であり、山脈は南西に走り、見た所、ホル河と下流アムール（ハバロフスクからアムールまで）の流域地帯との間に分水界をなしてゐると云ふことであつた。この方面で余の視野に映じたのは、チ。支流を合流するモチ河の小底である。アムールはホンコ山から方向を北東に急轉し、そしてこの底地の右邊を洗つてゐる。若干眼を西方に轉すれば、繰り擴げられた樹海である。此處彼處樹々の合間には水が光つてゐた。見下ろせば小山の麓には餘らの一隊の者が見え隠れした。船は夜間に水で流されないやうに少し遠く砂洲へ引摺り上げてあつた。夜營地では焚火が燃え、其處から煙が細い流れを作つて立昇つてゐた。

餘は樹から下りて後へ立戻らんとした所、或る大きな鳥を發見し、直ちにそれが尾白鷺であることを見知つた。それは翼の端が黒く且全身に暗色の斑點を持ち白色であつた。尾白鷺は爪で魚を掴み、枯木に向つて飛んだ。その頂きには彼の巢があつたのである。鳥を良く視んものと、余は注意深く足を運んだが、鳥は自分の獲物を棄て、向うへ飛び去つた。魚は枝から枝を渡つて落ちて来たが、一本の小枝に引懸つて仕舞つた。余は樹トに近づいて、その根が鳥の糞で非常に汚された地上には悪臭を放つ更に四尾の鰻魚が轉がつてゐるのを發見した。余が如何に雛鷺を見ようとしても、それらは姿を見せなかつた。鳥は母の驚愕を見て隠れたのである。

次に余は大きな鴉を見た。猛禽類のやうに、それは高く空に舞上つた。余はメロディカルな鳴聲によつてそれを見識つたのである。鴉は空に旋廻を描き、上へ上へと揚つて行つた。間もなく、樹の梢が空を遮ぎつたので、余は彼の姿を全く見失つた。

小水路の附近では草叢から二羽のエゾ山鳥が飛び出した。そして特徴的な羽音を立て、地上から飛立ち、藪に隠れ、互に鳴き交はした。程なく余は一羽のニゾ山鳥を見付けた。それはトネリコ樹の枝を靜かに歩き、頸を伸ばし、聴き耳を立て、そして鳴き始めた。エゾ山鳥は余の不注意な動きに驚かされて、遠くの森の茂みへ飛び去つた。余は河に近づくと、水邊で



アニイ河の水路

何かキラキラする鮮緑のものを直ぐに認めた。それは翡翠であつた。一寸ばかり飛び離れ、そして再び柳にとまつた。余はこゝで仔細にそれを観察することが出来た。小柄な鳥は、屈んで、長い嘴だけを前へ突出し、肩の所へ頭を隠してゐるかの様に見えた。その全體の色合は横腹に青色を持つ赤褐色であつた。余は更に二歩ばかり歩み寄り、鳥を驚かした。空にはエメラルド緑色の背中が再びキラキラした。翡翠は弱い鳴聲を上げて河沿ひの茂みに姿を消した。余が露營地に近づいた時には、太陽は恰かも地平線に没したばかりであつた。山の彼方にその姿は見えず、既に黄昏の迫るのが感ぜられた。

従者たちは全部揃つてゐた。夕飯後余は眠氣を催し始めた。毛布にくるまり、余は火の側に臥して、假睡ろみながら、チャン・バオが支那の萬里の長城に就て物語るのを聞いた。延々七千支里（一支里約五百米）に亘り、それは世界に比類なきものであると語つてゐた。

余は聯想によつてチャキリ・ムズンの防壁を想ひ浮べた。それはウスリー地方のダウビへの邊で始まり、密林を

横断して東から西に向つて延々數十軒餘に及んでゐるのである。其處ではそれは山へ登り、遠方に従つて姿は段々薄くなりそして最後には深い霧の中に全く消え失せてゐる。

朝余は誰よりも早く眼覺めた。焚火は燃えつきてゐた。コサツグたちは雜魚寝し、粗亞麻製の一枚の天幕に蔽はれてゐた。土民たちは船の下で夜を過した。

一時間半後には余らは再びアニイを遡つた。現在山は河の右側から迫つた。こゝには、前に述べたムイヌイム河の底地へ向ふ峠がある。他方には極めて麗しい長い水路ブンチが延びてゐる。これへはアチュ小河が流入し、その河口の向ひには同名稱の小ウデへ入小舎がある。ブンチは所々で若干の小支流を分つてゐる。それは倒壊木で塞がり、洪水時には甚だ危険であつた。水路の左岸は岩石地である。河岸の斷崖の根元の深淵には、多くの魚族、取り分け岩魚が棲息してゐる。

七月二十四日余らはウレマ地點に着いた。そこには五戸の遊牧小舎が在つた。余がこゝで土民から知つた所では、アニイからハチ河へは行くことが不可能であり、アニイの上流地方は、北はフツ一流域にまた南はコビ及サマルギ河に接してゐる。ハチは小河であり、夏期でも冬期でもこの河を行つたものは誰もないのである。コビに行くべきかそれ共フツウを擇ぶべきか？ 余は決しなければならなかつた。余は後者をとつた。翌日余は前進せんとしたが、この時案内者の一人が癩癩を起した。彼は地上に倒れて『アナナ！ アナナ！』（痛い、痛い）と呼んだ。その他の土民たち全部は非常に懇ろに病人をいたはり、手を盡して彼の苦痛を和らげることに努めた。直ちに二人の者がアチュへ走つた。そして夕方にはキムンカ族出のシャーマン僧を伴つて歸つた。それは中背の男で、満五〇才、極めて無口であつた。彼は赤味を帯びて淺黒い日焦けた顔で、口髭も頸髭もなかつた。彼は一本の辮髪を垂れた長い髪を持ち、身には刺繍も如何なる裝飾もない同民族の衣服を着けてゐた。

婦人たちは岸邊へ老人を迎へに出て、彼の持物を小舎へ運び入れた。部屋に通り、シャーマンは敷物の上に座り、煙草を吹



サマルガ河の支流

かした。ウデへ人らは彼に病人の様子を物語つた。彼はそれを無感な顔で聞き、時たま質問を發しただけであつた。それから彼は婦人たちに若干の石を持つて来るやうに命じ、自分は徐ろに岸邊に沿つて歩んだ。

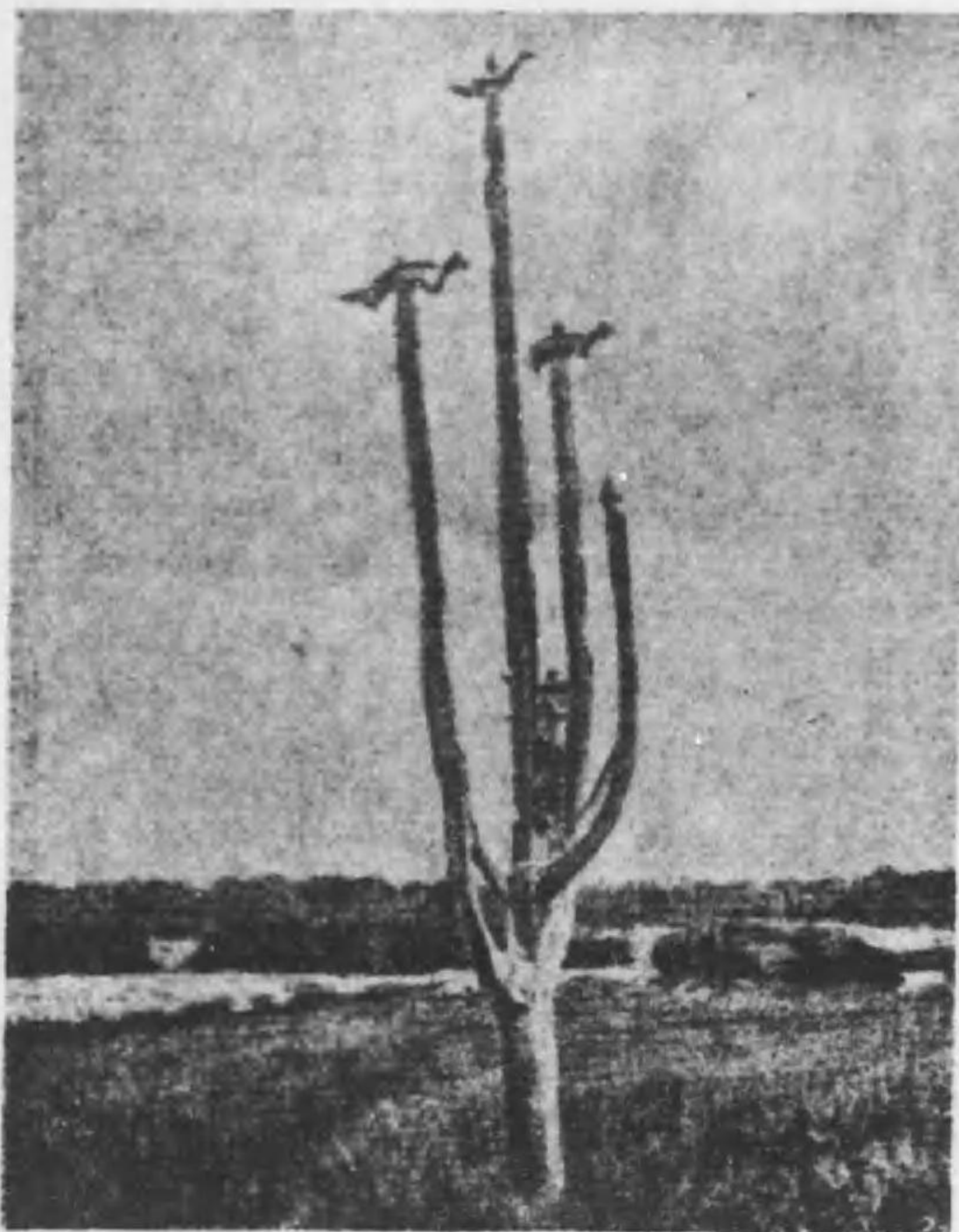
余は彼の仕種を見守つた。シャーマンは屢々立寄り、まるで地上に何ものかを探し求めるかの様に見入り、また四邊に眼をとめた。彼の認める最初の生物が病魔を撃退し得るセヴン（魔神の化身）である筈である。數分を経て、彼は引返し來り、「ツクソク」（藁）を見たことを傳へた。それから彼は用意された石塊を取り上げ、地上に數回ばら撒き、それらの病人の臥す小舎に對する配置及石相互間の間配り模様を檢分した、これは一種の占ひであつた。一個の石を擇び出し、彼はそれに臙糸を結び付け、その端を右手で持つた。次でシャーマンは地上にあぐらを組んで坐つた。ウデへ人の一人は彼の頭に或る布切れを被せた。シャーマンは石を地上から拾つて病人を「安靜」せしめる様にした。彼は暫らく不動の姿勢で座し、居眠りしてゐる様に見えた。余が後に聞く所では、この時彼は知る限りの凡てのセヴン（人間に憑くことの出來た悪魔の化身）を頭の中で擇り分けてゐたのである。當のセヴンが見付ければ石

は動くことになつてゐる。程なく、石はシャーマンの慣れた手中でかすかに揺れたのだ。シャーマンは石が左から右に徐々に揺れるやうに巧みに手品を施したのである。「悪魔」のセヴンは見付かつた。それは狐——「チガリ」であつた。シャーマンは立ち上つて病人を小舎の方に向けた。病人は近づくと人々を認めて愈々暴れ叫び出した。シャーマン教の呪なひが始まつた。老人は小鈴の付いた帯を締め、大きな手太鼓を左手に、右手には撞槌をとつた。シャーマンは、始めは低音でそして徐々に高く高く呪文を唱へ出した。そして大鼓を叩き鈴を振り動かしたのである。病人は酷く興奮して來た。數人の人々は彼の手と足を押さへた。その時一人のウデへ人は、草で拵へた狐の不細工な人形を小舎へ待ち込み、爐の傍らに置いた。シャーマンは踊りながら病人に近づいた。そして病人の上に屈み込み、撞槌で以つて患者から病魔を拂ひ除け、且それを薬人形へ引き移すやうな身こなしを始め、それから不意にゆつたりした大聲で「エ・ヘ・エ」と叫んだ。それで人々は「チガリ」を小舎から持ち出し、何處かの森で仕末をつけ、一方病人の側には地上に棒を打ち立て、その端には白樺皮で造つた藁の模造を縛りつけたのである。烈しい興奮後に非常に衰弱した病人は、二〇分程経て沈滞し始め、間もなく熟睡に入つた。

翌日は彼は衰弱してゐたので、余らと同行することは不可能であつた。致し方なく、もう一日滞在せざるを得なかつた。それで余は河の右岸を視察するために出掛けることにした。小舎から三百歩程離れ、余は砂土で埋まつた洲の邊りに出た。こゝで余の眼を惹いたのは、前翅に白斑點を有する淡褐色の小昆虫であつた。それらは輕快に飛び、敏捷に砂洲の上を駆けまわつた。昆虫は始終注意深かつた。余は接近しようと凡ゆる努力を拂つたが、それらは空に飛び立ち、少しばかり飛び離れて、再び砂洲に降りた。それで余は動かすに、それが進んで余の傍に近づくと、期待通りであつた。昆虫は活潑に飛び廻り、停止しそして傍らへ不意の跳躍を試みた。そして其處で食を求める昆虫を襲つたのである。思ひがけなく余の足許で何ものか、羽音を立てて地を衝いた。大きな黄蜂が蜘蛛を襲つたのである。それを地上に押し倒し、

黄蜂は小腹を折り屈がめて剣で二回それを刺した。忽ち蜘蛛は參つて仕舞つた。次で黄蜂はその生鱗を口で銜へ、足で抱へて空へ持ち揚つた。痲痺した蜘蛛は仔蜂の餌食になるのである。

水邊附近の泥濘の上には、趣に黒い斑點を持つ赤煉瓦色の中位の大きさの蝶が夥しくとまつてゐた。それらは翅を始終開いたり閉じたりし、その度に翅の小鱗は青色及薄紫色に色調を變化した。



シホタ・アリンに於けるウデへ人の禮拜所

時折、暗緑色の前翅とそして金屬的に輝くエメラルド緑色の後翅とを持つマハオン（蝶の一種）の素晴しく美しい姿が、河の上を飛んだ。後翅には邊緣に長い突起があつた。アヌイのこの邊ではそれらの大きさは、南ウスリー地方産のものには及ばなかつた。

余は鳥類の中ではミコアイサを發見した。時は丁度脱羽期であつた、驚いた鳥は空へ飛び立つことは出来なかつた。河流の激流にも拘らず、それらは、翼を櫂のやうに使つて水の上を驚くべき速さで駆け渡つた。

偶々余は空を見上げて二羽の鷺を認めた。それらは悠々と大きな圓を描き、段々高く舞ひ揚り、遂に一黒點になつた。彼等が餌を採

し求めるために斯やうな雲間へ飛翔したものは思へないし、また其處から地上の獲物が見えやうとも思へない。察するに、斯やうな飛翔は彼等の有機的要求である。

歸り途で余はセキレイを見付けた。スマートな鳥は水の邊の小石の上にとまり、尾を優美に振つてゐた。そして不意に空に飛び揚り、時折面白い恰好をして見せ、前につんのめつたり、一つ所に停つて腰を振つたりし始めた。セキレイは何かの昆蟲を追つた。それは蟲を捉へんとするものらしく、丸で空を啄むやうにする様が見えた。見たところ、セキレイは昆蟲を捉へたか、それとも余に驚いたものらしく、不意に脇へ去り、岸邊傳ひに飛び、水に下りたり、再び上へ揚つたりした。正午頃に余は露營地に歸り、測量圖の作製にとりかゝつた。

天幕から出て、余は、チャン・バオとウデへ人マハとが何處かへ出掛ける仕度をしてゐるのを見た。二人は小さい方の舟を擇び、其の中の全部の荷物を岸へ運び出し、それから舟底へ樹皮と一抱への青々とした刈り草とを敷いたのである。何處へ行くのかとの余の質問に答へて、チャン・バオが言つた。

「アアン・チャン　ダ・ルー」（鹿を撃ちに）

余は彼等と同行し度い旨を述べた。彼は余の希望をウデへ人に傳へた。ウデへ人は領づいて船の眞中の場所を黙つて余に指し示した。數分後には余らは既に、河の右岸に沿つてアヌイを遡つてゐた。

黄昏れて來た。西の方には夕焼けが燃えた。それは森に遮られて見えなかつたが、空にも地上にも到る所に光と闇との闘争が感じられた。宵闇は靜々と既に森の中に忍び込み、樹々の頂きを薄霧の中に包んだ。樹々の梢を透して星及三日月の尖つた先端がチラホラ見えた。

三〇分を経て余らはアチニー水路に着いた。こゝで余の従者は、休憩し煙草を吹かす爲に船を停めた。ウデへ人は支那人に何ごとかを物靜かに語り出し、水路を指さして、同じ言葉「キヤン」ガを二回繰返した。余は既にウスリー地方に住む

土民の言葉に多少共通して来てゐたので、通譯の辯を待たずとも、それが鹿——何故か水中にゐる筈になつてゐる——狩の話であることは判つた。説明を求めて余はチャン・バオに振りむいた。彼の話によれば、鹿は毎年此頃には山から河へ下りて来て、森中の静かな水路の邊の水中に成長する特殊の草を求め食ふのである。余はその草を教へて貰ひ度いと頼んだ。ウデへ人は船から上つてそれを求めに岸へ行つた。程なく彼は立ち歸り、小さい葉の可なり貧弱な植物を杖に引かけて来た。それは水生キンボウゲであつた。

喫煙を終りチャン・バオとマハは小刀で樹の枝を切り取り、舟の船先と艫とだけを明けておき、それで船の舷を掩ひにかゝつた。そしてこの仕事が終わつた頃には、夕焼けの最後の映えは全く消え去つた。空は著しく暗くなり、地上には闇夜が見る間に迫り始めた。

「且那、靜かにしてゐて下さいよ、しやべつてはなりません」と、チャン・バオが余に注意した。

それから余らは座席を極めた。チャン・バオは銃を待つて前方に、余は真中に、そしてウデへ人は手に櫂を握つて艫に陣取つた。數本の棹は傍に置き、何時でも手に取れるやうにしておいたのである。全部の準備が成つたとき、マハは合圖として櫂で岸を突いて舟を出した。舟は輕快に水上を滑つた。程なく其れは、水路の兩側に灌木と相交又して繁る樹の暗いアーチの中に入つた。ウデへ人は二回櫂を漕いで、後は舟を流れに委した。櫂を水から揚げないで、彼は極めて緩慢な輕い手捌きで舟の方向をとつたので、舟は河底の倒木やまた水路の上に低く伸び出る樹の枝へブツ突からなかつた。余は最初舟は停つてゐるやうに思つてゐたが、間もなく、余らを迎へて岸が動いてゐることに氣が付いた。何處からと云ふこともなく水に現はれる灌木や倒木の暗いシルエツトは、次々と相續いて、丸で幽靈のやうに音もなく闇の中から現はれ、水路の曲り角で隠れては過ぎた。

夜は異常な靜けさであつた。偉大な靜寂の中に一種の緊張を覺えた。

チャン・バオは全身を耳と目にしてゐた。余は動くことを慎しみ身じろぎもせず、またウデへ人は櫂を使つてゐても全然音を立てなかつたのである。舟は衝かれて前に進み、微かに水の上で揺れた。何一つ前方には見えず、水路が右に曲つてゐると思ふ時でも、ウデへ人は舟を反對の側へ向けるか又は籤に向つて眞直ぐに突進したのである。土民はこれらの場所を熟知し、記憶によつて舟を捌いた。チャン・バオは一度余に何かの合圖をしたが、余は解せなかつた。續いてマハは余を櫂の頭にたざらへてそれを軽く壓へた。余はそれで譯が解つて、屈むが速いか、非常に曲りくねつた姿の巨木の枝が余の上をすれすれに通つて過ぎた。舟は暗い廊下を滑り、一本の枝が余の顔を痛く鞭打つた。余は眼を塞いだ。周圍に浪の音が聞え、そして直ぐにあたりが一度に靜かになつた。余は後ろを凝視したが、暗闇の茂みの中には、今穩やかな廣い河區へ出た余らの出口を見付けることは出来なかつた。最初は余はこれを湖と思つたが、程なく森の繁る兩岸をハッキリ見分けたのである。この時チャン・バオは舟の右舷を手で軽くつゝいた。ウデへ人はこの暗號を覺り、直ちに舟を岸邊に漕ぎ寄せた。そして間もなく舟は砂洲に軽く舟底を摺つた。余はその譯が訊きたかつたが、従者らが沈黙を守つてゐるのを認め、話すことを思ひ止まり注意深く坐り直しただけであつた。

余らが漕ぎ寄つた岸邊は、丈高い草で蔽はれてゐた。それらの中には白い何かの大きな花がチラホラ見えた。それは芍薬に違ひない。草の向うには灌木類が、そのまた向うには沈黙の神秘的な森が聳えてゐた。

不意に余らの右手で草を踏む音が聞えた。それは余らが三人一齊に頭を振り向けた程明瞭なものであつた。物音は直に靜まり、次で再び起つたが、今度は前よりも一層明瞭であつた。恰かも誰かが籤を行くやうに、繁つた草叢が分れ、草の揺れるのを、余は認めた。周圍を支配する靜寂のとき、この物音は余には一際物凄いのにも思はれた。チャン・バオは銃を構へ、動物が草から現はれる機會を待つたが、ウデへ人は出て来ないお客さんの現はれるのを待たうとはしなかつた。彼は素早く櫂を水に入れ、砂底を衝き、手捌き軽く、だが力強い動作で舟を水路の真中へ押し出した。それは直ちに流水に乗り、再び

岸に沿つて進んだ。最初の繫船地から百ヤード（一三四米）過ぎ、余らは茂みに再び近づいた。舟の軸先が岸に着くか着かない内に、またもや叢の中で草を踏む音が聞えた。その時チャン・バオは舟の左舷を二度つゝいた。ウデへ人はこの合図によつて、舟を若干岸から離し、槳で流れを防いで静かに停止し、時には流れのまゝに委し始めた。岸邊の叢の物音は、余らと並行して追つて来た。怪しの獸が余らの舟を追跡してゐることは明かであつた。間もなくそれは、一層大膽になり、時には前方へ抜け駆けし、立停つては、青い小枝の着く流木に似た譯の判らぬ物が一諸の所へ来るのを待つたが、彼としては、この流木の中に生物が居ることを感付き、或は見たのかも知れない。

余は岸邊や揺れ立つ草から眼を離さずに、野獸の所在地を確かめることに勉めた。一度は余は長い何かの影が見えるやうに思へたが、それが果して動物であるや否やには確信がなかつた。不意にチャン・バオが動き、發砲の身構をし始めた。余らを去る二百歩程の前方に、何ものかが鼻息を立て、河の中でチン・ブチ・ブ音を立てた。

こゝでは廣い水路は屈曲してゐたので、水に映る星空のバックの内に色々のものを観ることが出来た。支那人は急に手の上に掲げた。するとウデへ人は直ぐに、射撃に都合の良い地位に舟を測いた。この瞬間に余は鹿を見た。上品な鹿は水中に立ち、時折暗い冷水の中に鼻面を浸し、河底の水生キンボウゲを漁つた。静かな流れに乗つた舟は、緩やかに動物に近づいて行つた。けれども鹿は用心深かつた。それは頭をもち上げてじつと動かなかつた。鼻面から水の滴り落ちるのが聞えた。

恣然、余らの舟の眞向ひの藪の中で強い物音が起つた。余らの後を始終つけて来た怪獸が密林中へ駆け込んだのである。それは人を認めて驚いたのか、それとも鹿を嗅ぎつけたのか、余には判らない。鹿は河から急に駆け上つた。チャン・バオが引金を引いたのは丁度その時である。銃の轟音は一切の他の物音を壓倒し、余ら三人は木魂の反響を通して、鹿の悲し氣な叫び、何ものかの荒々しい唸り聲及踏みくだかれる木折れの音を明らかに聞いた。山鶴が砂洲から飛立ち、哀れな鳴聲を發し乍ら水路の上を飛んだ。

一切が沈靜に歸するやマハは鹿がゐた場所へ舟を向けた。だが其處は淺瀬であつた。更に數ヤード下る必要があつた。そして直ぐに岸邊に漕ぎ寄せることが出来た。二人の獵師たちは、直ちに白樺皮をとりて飛出し、余は舟の側に居残つた。數分経つても、彼等は歸つて來なかつた。不意に余の左側で草が揺れた。余はギョツとしたが、この時聲が聞へた。余は恐怖を壓へて一散に従者たちの方へ駆け出した。ウデへ人は取つて來た白樺皮で炬火を焚いた。それを燃し付けて余らは鹿の居た跡に血が零れてゐるかどうかを調べた。血の跡は見られなかつた。チャン・バオは撃ち損じたのである。岸邊へ後戻りし、マハは炬火を地上に置き、その上に一抱への干草を投じた。直ぐに赤々と炎が燃え上り、それと共に、直接間近のあたり一體は揺らめく眞赤な光で照し出された。

チャン・バオとウデへ人は、煙草を吹かしながら、出來事を批評し始めた。二人の見解では、岸に沿つて舟の後を着けた獸は虎であつた。支那人は虎を「ロマザ」と、またウデへ人は「クティ・マフ」と呼んだ。これに襲はれたために鹿は、チャン・バオが適當に射撃する前に駆け出し、従つてチャン・バオは少し早目に發砲せざるを得なかつたのである。彼は不満であり、虎を罵りそして憤つて焚火に唾を引掛けた。ウデへ人はムツとしてゐたが、しかしそれは獵が失敗したからではなく他の理由からであつた。虎に對する罵倒及火に對する唾棄は、彼には二重の冒瀆に思はれたのである。

「ア タ テ・エ マンガ・マンガラ ビ」(「アー、アー、全く仕様がなない」と、彼は怖れるでもなく、殘念がるでもなく言つて、焚火の火を直しそしてせめてさうすることによつて、支那人の唾棄から受けた侮辱を打ち忘れようと思つた。チャン・バオは腹の蟲が治まらず、またウデへ人は自分の同僚の無作法に心から惱れた。余は口を入れても宜い頃合ひと思つた。

「マアいゝぢやないか、怒ることはない。今度は失敗だつたが、その代り次のときには甘く行くさ。鹿を撃てなかつた代りに、氣付かなかつたとは言へ、虎の寸前に居るのを聞いたから」と、余はチャン・バオに言つた。

余の取りなしに、支那人は平靜になつたらしい。彼は罵詈を止めて冗談を言ひ始めた。マハも朗らかになつた。三〇分後余らは歸り仕度にかゝつた。ウデへ人は一抱の濡れた草で燻つてゐる焚火を掩ひ、その上へ砂をかぶせた。そして余らは舟へ乗つた。マハはそれを水上へ衝き出し、さうしておいて自分の席へ着いた。余の従者たちは櫂を手にした。余らは急スピードで舟を漕ぎ、賑やかに雑談を交はした。余は後ろを見返つた。細い一條の白煙が揉消された焚火からなほも上へ立ち昇つてゐた。静かな滑らかな水面には、舟の過ぎた跡とそして跳ねた魚の造つた波紋とがぼんやりと見えた。一羽の大きな夜鳥が、水路に沿つて飛んでゐたが、舟を追かけ、脇へ飛び退き、そして間もなく最寄りの灌木林の影に隠れ去つた。

余らは更に約一露里（一〇・六七軒）廣い河區を漕ぎ進んだ。其處から流れは一層速くなり、水路は狭まりかゝりそして二つの支流に分れた。一つは大きく右轉し、他は小さく真直ぐに森の中に通じた。舟は、マハの巧みな手で捌かれ、藪の中へ滑り込んだ。余らは一時に暗黒の中に呑まれたのである。前方に走る水の騒ぎが聞えた。

「アニイ」とウデへ人は言葉短かく言つた。事實余らは全く思ひがけなく不意に河へ出た。今度は余らは流れに遭つて進まねばならなくなつた。従者らは櫂を棄て、棹を取つた。

獵は失敗したが、余はこの旅行には大變満足だつた。程なく余らは或る懸崖を過ぎ、砂利洲を迂回し、そこから背の低い柳林の繁つた岸に再び近づいた。灌木林の遙か向うには、一面に星を撒いた暗黒の空をバックに、節くれ立つた枝を持つ大きな樹木の頂きが描き出されてゐた。白楊、楓、黒楊樹、菩提樹等の總ては、今は何れが何れだか判らず、凡ては、黒でもなく暗緑でもない一枚の色に塗り潰されてゐた。右岸には面洋杉の巨木が見えた。これはこの一帯では唯一のものであり、丸で巨人番兵の様に、森の「秩序」を維持してゐた。それは堂々と謹嚴に睥睨し、潤葉樹のグループには眼も呉れず、それらの頂きを飛越して自分の同僚や同年輩のゐる遙か彼方を見守つてゐた。

遂に火が見えた。それは余らの露营地であつた。それは森の茂みに隠れたり、また現はれたり、恰かも岸によつて位置を

變へるかのやうであつた。更に一轉すれば、眞向に水に映じた一條の揺らめく長い光影が余らを迎へた。それは露营地が間近に迫つたことの確かな標しである。一五分を経て余らは岸邊に着いた。露营地では皆の者は既に就寝し、犬が人々の安眠を見張つてゐた。余の愛犬アリバは焚火の側で圓こまつて臥してゐた。それは余らを聲によつて識つてゐながらも、お體裁に頭を擡げないで、もの憂さうに二回吠えた。余は一寸撫で、やり、火に薪を燻べて、自分の天幕に入り、毛布にくるまつて熟睡した。

翌日余らは非常に早く起きた。天候は再び潰れ出した。空は雲で掩はれ、眞黒の密雲が現はれた。それは非常な濕氣を帯びて雨にはならずしてぐずつた。余らが河を廻り、山の深みに進むに従つて、流れは益々烈しくなつた。奔流する水の音は遠くから聞えた。土民は度々岸邊に漕ぎ寄せ、相談をしながら休息をとつた。そしてどうして進むべきかを豫め打合し、且激流に抗して舟を捌くために全力を傾注した。棹は曲がつた、震ひ、そして水は舟の舷側を太鼓打ちしたのである。一つの早瀬を通り越す毎に、余は土民案内者らの顔色にホッとした安心の色を認めた。

この二週間に余の従者たちは舟に慣れ、左程危険でない場所では、土民を助けて棹をさしてやつた。不慣れから彼等は手に肉刺を拵らへ、身體の節々を痛めた。夜間、余の隣人が、不注意に寝返りした痛む腕節や肩を壓し、そして悲鳴を揚げるのが聞えた。

空には高く鷺が舞ひ、悠々と圓を描いてゐる。一切のものが彼には見える。それは鋭い眼で下界を視下し、獲物を探してゐる。最後の水路はウバ山附近で終つた。人々は休息のためにアニイの左岸の砂洲上に陣取つた。傍らには焚火が燃え上る。三〇分後には人々は動き始めた。一部の者は棹を握り、他の者は茶道具を運び、食器及七つ道具を持運ぶ。次で彼等は舟に座して漕ぎ出した。人が立去るのを待つて、直ぐに鴉が現はれた。あたりを見廻し、それらは残り物を拾ひ上げ、何でもないことから唯み合ひを始めた。突然總ての鴉は一度に空に飛立ち、隣りの森に散つた。それらを驚かしたのは、もち

やもぢや毛の小動物浣熊犬である。それはいきなり飛出して忙がしさに地上を喫き廻り、鴉が拾ひ損ねたものを喰ひ漁つた。鷲は、西から動いて来る更に大きな黒雲を認め、更に高く舞ひ揚つた。雲は敏速に空を飛び、濃く廣くなつた。人々も亦迫つて来る夕立に氣付いた。狼て、巖の蔭に逃れ、手當り次第天幕布、大外套にくるまり、蔭に雨宿りをする。所へ先驅けの雨滴が落ちて来て、電火が閃めき、雷が鳴り出した。天地鳴動して豪雨となり、間もなく更に或る物音が聞え出した。それは森を打つ大きな雹であり、小さな氷塊は岩に弾いて地に躍つた。水上には白い無数の泡が現はれた。樹からは葉が吹飛び草は地上に打倒れ、不意に雷雨に見舞はれた蝶は、逃げ場を求めて楓の葉の裏に隠れたが、雹は恰かもその避難所を襲ひ、翅の一枚を打ち砕いた。蝶は草蔭に逃げようとしたが、突風はそれを河の方へ吹飛ばした。濁流は不具にされた昆蟲を乗せて急湍泡立つ早瀬へ持ち去つた。

夕立は来るのが速いだけに、去るのも速かつた。雨は止み、太陽が顔を出し、虹が現はれた。地上の世界は再び楽しい姿に返つた。樹々の梢に、草の葉末に雨滴が宿り、太陽の光を浴びて閃めく寶石に變つた。舟の上でも煮き出した。人々は濡れた掩ひを取り除け、棹をとつて再びアニニイを遡つて行く。

ウレマを過ぎて潤葉樹には少しづつ西洋杉が混じり始めた。サルヤナギの或るものはピラミッド形白楊の姿を持ち、また或るものは砂利洲において灌木林をなした。枯草の叢とそしてその中に散在した凡ゆる瓦礫とは、これらの地帯は毎年浸水することを物語つてゐた。

アニニイ第一の大支流にトルスマン、もしくはトンマスト（土民の呼稱）がある。土民の言によれば、それはアニニイ流域の最急流である。單に乾水時にのみそれを上ることが許される。トルスマンは主流に對して鋭角をなして流れる。その水源地方にはホル河の低い早瀬がある。舟はそれを辛うじて手で漕ぎ上るのである。

アニニイはトルスマンを過ぎれば一本の河床になる。ところどころ河の真中にはまだ植物によつて掩はれない小さい島が

ある。アニニイのこの地帯は極めて美景である。谷を圍繞する山脈は、奇巖を頂き、塔や銃眼を具へた古城の廢墟の觀を呈した。土地の土民はそれらをシャーマン巖と名付け、昔こゝには天狗が棲んだと傳へてゐる。

七月十一日余らの小部隊は、アニニイの右側へ落ちるゴビッリ河に着いた。それは丁度其處で方向を變へてゐるのである。降り続く雨と絶えざる河の増水とは土民を非常に不安がらせた。彼等は妻や小供らを心配し歸宅し度いと歎願しだした。

余はこれに對して、余らをシホタ・アリンの山麓まで案内し次第直ぐに引留めないで歸すことを約束した。余らはゴビッリ河口附近でサルヤナギ林の中に露營地を設けた。

空を掩ふ雲の重い帷は夕暮前に散り始めた。その間から夕日がさした。それまで眠つたやうであつた空氣は、遽かに動き始めた。森はざわめき、樹は廻返り揺れ立ちて、雨の滴を下に振り落した。

そこで余は自分の犬を連れ出し、高い白楊やトネリコの茂るゴビッリ河畔に出掛けた。その背後の山の近くには西洋杉が見え、更にその向ふには潤葉樹、樅及シベリヤ樺がかすかに見えた。アクテ、チヤヤや葡萄類の絡み着いた素馨、ハイナカリ屬、スグリ屬、ソルバリア及エレウテロクツイスの低い灌木林は、歩行困難な藪をなし、そしてその中には野獸の造つた良い通路が出来てゐた。

余は注意深く進み、時には立寄り且耳を澄した。犬は後に従つた。路は方向を右へと開始した。そして余はそれは山へ通じるものと考へた。所が前方は明るく透いてゐた。茂みを押し分けて進み、余は河の急流を發見した。泡の塊や凡ゆる塵芥が勢よく流れてゐた。

雨は全く止み、氣温は低下し、また河からは霧が立ち昇り始めた。その時余は通路の上に、人間の足跡に酷似した熊の足跡を發見した。アリバ（愛犬）は尾を逆立て、唸つた。それと共に何ものかが茂みを破つて脇へ勢よく驅け込んだ。けれ共獸は逡巡し、近くに足を停めて釘付けになつた。余らも數分間同様に立往生した。遂に余は痺れを切らしてわざと踵を返へ

した。アリバはピタリと余の足許に寄添った。余が移動するや、怪獣も亦數米逃げて再び隠れた。余はそれが何ものなるやを知らんとて徒らに森中を覗き見たが、茂みは、大木の幹さへ見えない位に薄暗く、霧もまた深かつた。それで余は屈んで石塊を拾ひ上げ、そしてそれを怪物潜む邊りへ投げつけた。忽ち全く思ひもかけぬことが起つた。余は羽搏きの音を聞いたのである。大きな何かの黒い塊が霧の中から不意に現はれて出て、河の上を飛んだ。直ちにそれは地上高く立ち籠める濃霧の中に隠れ去つた。犬は非常な恐怖を示し、始終余の足許に寄添つた。不可思議な空氣、森の靜寂、河の騒々しい水音、魚の跳ねる音、風に揺れ立つ草のさわめき等の一種のコンビされたものが、余の周圍にあつた。そのとき向う側から、婦人の泣き聲に似た叫びが聞えた。苛々したときの梟の鳴き聲そのまゝである。最早躊躇なく、余は犬を勵まして路を引返した。遽だしく夜の帷は地に下りて、霧は益々濃くなつて來たが、余は道を失ふ惧れはなかつた。河岸、獸の通路及犬は程なく余を露營地へ導いた。折から丁度ウデへ人たちも獵から歸つて來た。

余は夕飯後土民たちに密林での出來ごとを物語つた。彼らを膝を乗り出して、この邊に空を飛び得る人間が住むと云ふことを語り出した。獵師たちは屢々その足跡に出會す。その人間は不意に地上に現はれ、また不意に姿を消すのである。それを見ることが出来るのは、單にその人間が空から地上へ下りる時か、再び空へ揚がる場合だけである。ウデへ人はその跡をつけて見ようとしたが、それは、恰かも余が今日聞いたときのやうに、いつも騒音と叫喚とを以つて人を嚇かしたのである。

ウデへ人は言葉を切つたが、同時にチャン・バオが口を挿んだ。彼は支那にも飛ぶ人間があることを話した。それは「リ・チュン・ツイ」と名付けられる。彼等は、人里離れて山に棲み、穀物も肉類も食はず、僅かに植物「リ・チュン・ツウ」のみを食してゐる。その植物は、單に月のある夜にのみ識ることが出来る。と云ふのはその上には露玉が宿るからである。チャン・バオは自分でもさう云ふ人間を見たのである。話は古い、彼がまだ子供であつた時代のことである。或る冬の日のこと、非常に



ゴビッリ河（アニイ河の右岸支流）

輕装した支那人が彼の家を訪れた。彼は炕の上に座つたが、焚められた食物を拒つた。皆の者が就寝するために衣服を脱ぎにかゝつたとき、來客は上衣を脱いでそれを背中に掛けた。そして勉めて、その肩を誰にも見えないやうに振舞つたのである。それから彼は小屋から出て、長く経ても歸つて來なかつた。風邪でも引きはすまいかと心配して、誰かが外に出て彼を呼んだが、戸外には誰の答がなかつた。それで人々は着物を着、提灯をつけてその人間を探しに出た。雪の上の足跡は垣の所までつき、こゝで消えてゐた。翌日、部落から二百里距つた他の家で朝彼を見たものと云ふことを知つた。彼は不意に現はれて、また秘かに消え去つたのである。リ・チュン・ツイは、雷と稲妻の息子であつて、幼時雷雨の時に地上に落ちた。それは神々しい人間であり、怒つばい者の代表であり、英雄である。彼の訪問を受けた人は商賣や争ひごとに成功する。チャン・バオの意見によれば、ゴビッリ河の飛ぶ人間は「リ・チュン・ツイ」の一人であり、最早決して土民ではない。余がこれによつて引出した結論は、天狗に關するウデへ人の話は昔の支那人の受け賣りであることだ。

翌日ウデへ人たちは早く起床した。そして余らを成る可く速く約束の場所へ送りつけようとした。余は彼等の急ぐわけを理解して氣を利かしてやつた。

霧は日出と共に飛散し始め、上空に揚つた。このことは快時を豫示する好徴候であつた。寸刻も躊躇せず余らは出發した。ウデへ人らの云つたことは正しい。彼等は少しの誇張もなく、寧ろ控目にすら、ゴビッリ河の逕行の困難を説明したのだ。「航行する」と云ふ表現は、不適當であり、正しく言へば、早潮や瀧を攀登ると云ふべきものであつた。幾度か余らの舟は危殆に瀕し、僅かにウデへ人らの熟練と頓智によつて切抜けたのである。全く垂直に等しい壁を持つ狭い廊下を想像して見給へ。其處を目まぐるしい速さで水が走る。棹は底に届かず、突出た巖にすがり着くか、岩の裂目を掴んで手で掻き上らなくてはならないのだ。或る場所では、河の全幅に亘つて高さ一米の瀧が行手を塞いだ。その真中に通路があり、その中を坂になつて水が急送してゐるのである。舟がそれに近づきかゝると、水は噴水の様に上へ揚つた。そのとき余はウリマダダ（ウデへ人の小舟）の軸先の効果を知つた。それがなければ舟は忽ち水浸しになつたであらう。

ゴビッリ航行の第二日目に余らは遂に舟行の最終點たる小溪流に着いた。それをウデへ人らはチャンゲ・ウオリ、ニと呼ぶ。それは「チャンゲへ通ずる峠の泉」の意である。一九〇八年に彼等は余にさう云ふ風に言つた。

夕方余は火のそばでウデへ人にゴビッリやまた分水嶺の向う側のフツ河の上流地帯に就て色々訊き質した。彼らの一人は白樺皮の上に圖面さへ書いて呉れた。余はそれによつて、ゴビッリ河はシホタ・アリン山脈附近及それとは幾分斜めをなして流れることを知つた。その下流の右側諸支流はアニイと、また上流地方はフンガリの分水嶺をなしてゐる。ゴビッリの最上流地方には何も行つたことがない。例の如くこの際、その水源地帯に關しては芳しくない噂がある。其處は暗黒であり、始終降雨があり、寒風が吹く。其處は飢餓と死とが支配する。次で彼等の語る所によれば、余らは二日間の行程を経てシホタ・アリンに着き、また七八日間の行程の後にフツ河に着くと。そして其處では多分居住者に遭へるだらうと。

第三章 峠

翌日余らは袂を別つた。ウデへ人らは舟に乗り、余らの無事な旅路を祈つて岸を離れた。二隻のウリコグダが早瀬に乗入つたとき、ウデへ人らはもう一度手を振つて別れを惜み、岩蔭に隠れ去つた。余らは單り取残され、人間界から絶縁されたものの感を一度に感じた。今余らは旅程中の最難所を踏破しなければならなかつた。

余は時間を徒らに空費することを好まず、従者たちに出發の仕度すべきことを命じた。重いルツクサックを背負ひ、余らはチャンゲ・ウオリ、ニ水源に沿つて進んだ。この水源は主要分水嶺の二つの支脈の間小溪谷を流れる長さ二〇軒の山河である。ゴビッリ河に面したシホタ・アリンの西部斜面は、火事跡をとゞめた混合林で蔽はれてゐた。火事跡の諸地帯には樹齡一五年から二〇年位までの細幹の白樺林が成長してゐた。樹は時折は非常に面白く垂れ下つて成長し、或る時は頂が地上に全く折れ曲つてゐた。それは、多分冬期水が凍結する所爲かも知れない。河は水源の間近くで三小支流に分れた。ウデへ人が教へて呉れた注意を忘れずに、余らは右の方へ進んだ。シホタ・アリン山脈への登り勾配は峻しかつたから、余らはジグザクに前進し、樹の根に手を掛け四這ひになつて攀ち上らざるを得なかつた。峠の頂上は海拔一、二〇〇米の鞍地であり、それは縦、シベリヤ縦、白樺及落葉松から成る森林で掩はれてゐた。頂上に辿り着いて余らは休息した。チャン・バオは地上に臥しそして直ぐに起き上つた。

『スイ・ニユ（水がある）』と彼は斷定的に言つた。

余らは耳を澄した。實際、さまで深くない地下の何處かに可成り細い泉が流れてゐた。余らは急いで石を掘り除けにかゝり、間もなく水のやうな清水の泉を掘り開いた。余らはこゝで露營した。

翌朝一同は日の出前に起床して三手に分れた。余とチャン・バオとは分水嶺を傳つて南に進んだ。

シホタ・アリンは高い脊陵である。それは北東から南西の方向に走り、砂礫で掩はれた一聯の高原から成る。岩脈の破片はピタリと喰付いた様に横たはり、恰かも誰かが態と密着せしめたかの様に思はれる程である。分水嶺の頂きには森はなく僅かに地衣様の廣いツンドラのおちらこちらに、ヒメシタナゲや西洋杉倭林の孤生の茂みが散在するに過ぎない。雨が上れば大気は晴れるものと期待したが、見事に豫想は裏切られて空は濃霧で充滿してゐた。その中に閉ぢ込められてゐるのは、單に遠くの小山のみではなく、直接近隣もさうであつた。空には大きな雲が走り、太陽の光を通したり閉ぢたりした。陽氣な姿をとつたり鬱陶しい姿をとつたりするバノラマは、その都度余らの心を明るくしたり暗くしたりした。

余は岩の上に腰を下して、遙かに見える山脈の横顔を測定し始めた。

余は暫くの間動かさず坐り、平板測器を見詰めた。そして顔を上げるや、直ぐに隣接の嶺の上に長く伸ばした美しい頭と枝の多い角とを持つ灰褐色の動物を見つけた。それは北部の鹿であつた。それは余に氣付いたらしく、逃げ出した。直ぐに動物は、西洋杉の倭林で蔽はれた凹地に隠れた。

こゝで北部の鹿のことを少し説明しておかう。ウスーリ地方に於てこの鹿の分布の南部境界は、サラス河からフンガリの上流を横断し、次でアエ、コピ上流を過ぎて海岸ウスベニヤ岬の附近で盡きる。けれどもそれはこれらの地帯でも數は尠なく、食物の豊富にある山の頂きの禿山に棲息するのである。オロチン人はそれをイユと名付け撃取る場合は僅かに獵の際にそれに偶然出遇つたときのみである。

七月二十七日金曜日に余らは分水嶺を下降し始めた。翌日余は測時計の誤差を決定し、正午に太陽の高さを測定した。

森の静寂、響く木葉及暗澹たる空は悪天候を豫示した。余らが露營地を出發する頃から雨がポツポツ降り出した。悪天候にも拘らず、一同は元氣旺盛であつた。余らはシホタ・アリンを越えて今海へ落ちる流れを辿つて下ると云ふ認識は、従者

たちを朗らかにした。けれどもその喜びは少し早過ぎた。と言ふのは、余らの事業の成否は諸々の諸條件、就中余らがどれだけ速くフツ河のオロチンに出遭へると言ふことに懸つてゐたからである。

シホタ・アリンの東部斜面は、西部のそれに比して遙かに緩やかであり、若干の大段丘から成るかのやうである。溪流は、余らの道しるべとして役立ち或る時は小瀑布となつて落下し、或る時は苔の下を滲透し、稀には著しい距離に亘つて土地を沼地の様にしてゐる。

八月二日余らの小部隊は、バルガミ河がフツへ落ちる場所へ着いた。余らの前には沼澤盆地が繰り擴げられ、それは風雨で洗はれた丘陵の姿を持つ小高い小山によつて四方を圍繞されてゐた。斯やうな景色はシホタ・アリンの山を背負ふ土地にとつて代表的のものである。弱い波状形の廣潤な平地は水蘚状の苔と落葉松の疎林とで蔽はれてゐる。こゝには獸も鳥も昆虫も見受けなかつた。半枯の樹木の梢を渡る風の音は、森の荒野の感を一層深めた。沼澤を過ぎて余は偶然隊から離れた。そして離れて自分の従者らを一瞥した時、彼等の何れもが、恰も軽い霧の雲にでも取圍まれてゐるかの様に見えた。それはぶよぶよ及蚊が彼等を取巻いてゐたのだ。余らは夕方にはバルガミ河の河口に着いた。雨後それは氾濫し到る所沼澤に浸水してゐた。

五軒を経て次第に山嶽地方の特徴が再現し始めた。より乾燥してゐたが、その代りに通行止に出會はすことになつた「通行止」とは何の意味であるかは恐らく讀者には判るまい。それは河岸一パイに迫つてゐる山の支脈である。その麓には深淵が出来てゐるから、河の方からはそれを通り抜けることは出来ない。重いルックサックを背負ひ込み峻嶮を攀ぢ登らねばならない。一つの通行止を突破する爲には、時には半日の手間と大きな努力とが必要である。

この行軍は誠に疲勞を感じた。とりわけそれは、密林の旅には初めてのエス・エフ・グーセヴには難事であつた。尊敬すべき地質學者はスッカリ方角を失ひ、屢々迷兒になり、余らの後を追へずして脇道に入つたのである。その度毎に搜索しなけれ

ばならず、徒らに貴重な時間を費した。近視眼の彼は、眼鏡なしには物が見えず、しかも眼鏡を屢々紛失した。さうなると彼は最早何ものも全く見えなくなつた。エス・エフ・グ・セフは枯れた樅樹を懸崖と取り違ひ、木株に話し掛けたり、また影も形もない溝渠を飛越えたのである。彼の最大の缺陷は完全な孤立主義であつた。斯う云ふ人には不愉快な凡ゆる事件が起るものである。一度彼は粥の入つた鍋に素足を突込み、或る時は石鹼を河へ落し、それを掴まうとして自身河へ落ちこちた。肩バンドの一本が解けてゐるのを氣付かず、グ・セフは長い間ルックサックを一方の肩で擔ひ、それが爲に肩を痛めた。或る時余らは彼にアルミニウム製の飯盒を持たした。グ・セフはその蓋がブラ下りそしてガラガラ鳴るやうに結び付けた。余は途中で何かの獸を撃ち取るつもりでゐたが、グ・セフはそのガラガラで獵を妨害した。彼は先へ行き、余は測量を行ひ若干後れた。余はコサツクに、グ・セフを追ひその飯盒を然るべく結び付けるやうに頼んだ。

「構ひませんよ」とコサツクは言つた。「放つておきませう。あの人が迷兒にでもなれば探し出すのに便利ですよ」。

粗忽に就て云へば、グ・セフは旅行の仕度に際して若干の下着類を持参した。即ち、ズボン下三着と着古しのルバシカ一着とを。それは間もなく摺り切れたのである。それで彼は創意性を出してルバシカ代用にズボン下を着用する工夫をした。彼の胸の所には卸付きの斜め十字形が、また背後には風で膨らんだ袋が出来上つた。彼は白パンツの紐を引裂いて、手製の所を縛つた。そしてそれが膨らんだ襷付きの袖になつたのである。彼のこの珍妙な恰好はランドクネヒト（ドイツ一五—六世紀傭兵）そつくりであつた。最初余ら一同は笑ひこけたものであるが、後にはそれにも押れてしまつた。

讀者はグ・セフを余ら一行の嗤ひ者に解してはならない。余ら一同は彼には尊敬を以つて接し、彼の不慣れに同情し、こゝと毎に勉めて彼を助けた。何よりも先づ責任は余にあつた。何故ならば、密林跋涉に不慣れた人間を同伴したのは余だからである。

八月五日余らはブツへ注ぐアデラミ河の河口へ着いた。こゝからは既に舟で行くことが出来る。余らは二隻の獨木舟を造

ることに決めた。適當な木を見付け伐倒して樹皮を剥いだ。舟の製作には四晝夜費やした。

夜明けの模様や、森の静寂やまた空を急に驅ける雲行きから見ても、再び天候が潰れ出すやうに見えた。事實、朝八時にはポツポツ雨が地を叩き始めた。食糧の不足は余らを急ぎ立たせた。河の水は濁り、増水し始めたが、一方舟の出来栄は芳しくなく、重く鈍重であつた。小獨木舟は初日に岩に當つて破碎した。人々は流木に攀ち上り得たが天幕、寫眞機及大部分の食糧は沈んでしまつたのである。それで余らは二隊に分れ、一隊は荷物を持つて舟で行き、他の一隊は徒歩で進んだのである。八月十一日の夕方余らは或る高い岩山に辿り着いた。コサツクたちは露營の仕度に取りかゝつたが、余は、人家の在處を示す煙を見んとて山に登つた。ブツ河谷は上から一望に眺められた。岩の多い左岸附近では水が岩を齧んでゐた。右岸低地は前方に岬の様に突出してゐた。河はこゝで曲つてゐた。低地の河岸には老樅の太木が傾いて生へてゐた。露營地に歸り、余はクルイロフに命じて、明日舟は成るべく老樅寄りの所を進め、危険な岩の多い左岸を成るべく避けるやうにと注意した。

一言説明しておき度いのは、ウスーリ地方の旅行、分けても山や密林の溪流の舟行は突發事が伴ひ勝ちであるから、豫定された日程の遂行を前以つて確信することは不可能であると云ふことである。余らの場合にもさうであつた。夜中に老樅は河中に倒れ、樹の頂きは左岸の岩の上へつかへてゐたが、余らは、一向心付かずに、乗船して流れを下り、成るべく右岸に沿つて進んだ。河の曲り角で激流は獨木舟を引摺らした。同時に余は不幸な樅樹を認めたのである。その根元は岸邊に在り幹は殆んど水に浸り、また枝は流れによつて折れ曲つてゐた。走る列車の速力で余らが樅に一度に迫つたときには、棹を使ふ暇はなかつた。次の瞬間にどんなことが起つたかは、余には説明する事が丸きり出来なかつた。憶えてゐるのは身の廻にある水である。續いて緑の何か條らしいものと樅の様にズラリと並んだ岩とが通り過ぎた。何か、余のルバシカに引掛つたが、直に離れた。間もなく余は水面に浮び出て、胸一ぱいに息を吐いた。前方には水面に毀れた舟の軸先が見え、それと並

んで棹や更に何かの品物が流れた。余は岸近に向つて流れを泳がねばならぬことを氣付いた。程なく手が底に觸れ、余は立上つた。

水難は人命の犠牲なしに済んだ。余らは大きな努力を拂つて舟を浮木の下から引上げた。それは空であり、航行の使用に耐へない程毀れてゐた。總ての荷物は沈没した。即ち、銃、食糧、行軍装具、豫備衣服。残つたのは身に付けてゐたものだけであつた。余の手許にあるのは、腰ナイフ、鉛筆、手帖、燐寸入りのエナメル塗小罐である。終日ばかりで沈んだものを探したが、何一つ見付からなかつた。

夜營地は憂愁に閉された。總ての者は危地に在るを理解した。退路は絶たれてゐる。ゴビリへ引返すためには舟も人も無かつたのである。残るは、救ひを得る何等の目當なく只前進あるのみであつた。河の何れの側を進むべきかを決しなければならなかつた。河は先へ行けば廣くなりまた水量も増し、渡河が困難になることは解り切つてゐる。一同はわけもなく左岸をとることがやはり好都合のように思つた。フツ河は或る場所で、流木で塞がつた二支流に分れた。余らはその上を河の向う側へ渡つた。このことは、數日後に明かになつた様に、誤であつた。左岸は岩石地であり、部分的通行止は、余らをして峻険を上りまた最後の努力を拂ふことを餘儀ならしめた。

飢餓感と言葉では盡し難い。途中で糞を探したが、それは嘔吐を催させた。従者たちは瘦せ衰へた。最初にグセフが落伍し始めた。彼は一度は暫らく経つても後から來なかつた。余は引返して、彼が或る大樹の下で横になつてゐるのを發見した。運命のまゝに居とゞまるつもりだと彼は言つた。余は歩く様にグセフを説き落したが、一ヴェルスト半程過ぎてもや別れた。それで余は、彼をコサックたちの間に入れて歩かせるやうにした。コサックたちは彼を見守り絶えず勵ました。

三日目の夕方チャン・ベオは悪嗅鼻を衝く屍魚を見付けた。人々はそれに馳け寄つたが、犬が先を制し、またゞ間に屍肉を平けてしまつた。飢を疲れた人々は元氣なく、お互に黙々として歩いた。只フツ河に辿り着き度いばかりである。余らはそこに救の望を掛けたのである。

余ら一同は恐ろしくぶよに惱まされた。それが取り分け澤山現はれるのは、午後、太陽が西に傾き始める頃であつた。余らは喜びを以つて日没を迎へた。薄暮と夜の闇とは、怖るべき「グヌス」(ぶよに對するシベリヤ人の呼稱)の厄から免れしめたのである。

第四日目に余らは泥濘の沼澤地に出喰はし、再び峻険を攀ち登らなければならなかつた。この時アリバは難のエゾヤ山鳥を捉へ、急いで食ひ始めた。余は獲物を奪ひ取る爲に追驅けた。犬は逃げながらエゾ山鳥を大急ぎで呑み込もうと勉めた。余は呼び寄せ、嘴み荒された鳥を取り上げ、生れて始めてアリバを蹴飛ばした。犬は脇へ遠退き、うらめし氣に余を見詰めたのである。この日の夕方余らは犬を撲殺して一同に肉を分配した。可哀さうなアリバ！それは八年間余と共に旅行生活の凡ゆる困厄を嘗めて來た。そしてその死によつて余や余の従者たちを救つたのである。

一方グセフが何だか變な工合になり出した。彼は無神經になつていつまでも黙り込んだり、不意に眼を剝いてわめき出したりしたのである。グセフは二度姿を晦まし、コサックたちが追驅けて行つて無理に引戻して來た。余らはポドベルの糞や實櫻を食べてゐたので、壞血病の心配はなく、またチフス菌は密林にはゐなかつたが、人々は衰弱によつて力を失ひ打ち倒れた。余は屢々休息を取ることに注意した。コサックたちは、坐ると云ふよりは、寧ろ地上にブ倒れ、そして手で顔を掩つて長い間横臥したのである。

八月十六日遂に余らはフツ河とフツ河の合流地點に辿り着いた。あつちへもこつちへも河を渡ることは出来なかつた。後を造るには、余らには斧も繩もなく、河を向うへ泳ぎ渡るには、力がなかつたのである。

一度、小さな流れを越して長さ七米、太さビール壘程の丸太棒を持運ぶ必要があつた。余らは總勢六人掛りで、それを六

○歩程の所へ持ち運ぶことが出来兼ねた。それは手から滑り落ち怖ろしく重いやうに感じられたのである。

八月十七日、起き上つたのは僅に余、チャン・バオ及デュリの三人切であつた。従者たちは一種の變な情態にあつた。そして迷信家になり、夢や前兆を擔ぎ出し、つまらぬ事で言ひ争ひをし始めたのである。余ら一同は神経衰弱患者のやうになつた。

一羽の鴉が河の上を飛び來り、岸邊で臥寝する人々を認め、隣の木に止まつてカアカアと二聲鳴いた。突然グッセフがその場から叫んだ。

「鴉だ、鴉だ！」と彼は鋭く叫び、鳥を追つて森の方へ驅け出した。その跡についてコシヤコフとディモフとが跳ね起き、「鴉、鴉」と叫びながらグセフの後を追つて驅け出した。余も亦驅け出したが、フト我に返つた。

「待て、氣違ひ！」と余は力一ぱいの聲で呼びとめた。「お前らは何處へ行くんだ?」

コシヤコフは足を停めてディモフを呼び止めた。皆は次第に落着きを戻してグセフを探しに出掛けた。そして藪の中の倒壊木の中で彼を見付けた。彼は地上に俯伏せに響て何か呪文を唱へてゐた。その眼には涙があつた。グセフは素直に露營に連れ戻された。

更に三日間は過ぎた。人々の形相は見るからに怖ろしくなつた。彼等は酷く憔悴し、重いチブス患者の様であつた。顔面は土色になり、皮膚を透して顔の骨格が露骨に現れた。蚊は地上に臥し寝た切りの人々の上に雲集した。余とデュリとは焚火を絶やさない様に勉め、風の向きから蚊遣りを焚いた。遂にチャン・バオが弊れた。余も又力の衰へを覺えた。脚の膝頭が震へ、風折木を跨ぎ越えることが出來ず、迂迴しなければならぬ程であつた。

岸邊には白楊の老木があつた。余はその樹皮を剥ぎ取り、一番見易い所に小刀で矢印を刻み、空洞の存在を指した。そして空洞内へは、余らの一同の姓名及び住所を記入した手帳を入れた。

現在萬事は盡きた。余らは死の至るを待つた。

九月が始まつた。秋の氣配が強くなつた。夜は冷やかになつた。余らは日中はぶよに惱まされ、夜は寒さに慄へた。余らの衣服は用をなさないうまで摺切れ、靴はそれ以上に慘澹たるものであつた。

九月四日は夜中寝入る者は誰一人なく、始終胃に苦しんだ、と云ふのは余らはあらゆるものを手當り次第に喰り喰つた爲に胃の活力がなく、嘔吐を催して腸がキリキリと痛んだ。恰かも河邊に設置された繃帶所に負傷者が臥して、その呻き聲で森を震はしてゐる様な觀があつた。余は我慢したが、それが最後の奮張りであると云ふことを感じた。

突然河下の何處か遠くの方で銃聲が響き、續いて二發、三發、四發と聞えた。一同は興奮して騒ぎ出した。一人が、發砲者に余らの悲境を報ずる何かの合圖を爲すべきことを主張すれば、次の者は、何んとかして河を泳ぎ渡り獵師を迎ひに行かねばならないと説き、第三者は大きな火を焚く可きことを提唱したのである。けれども銃聲はそれ切り聞えなかつた。

夜は非常に寒く、誰一人眼を閉ぢなかつた。余は火を見詰めたが考へに耽つた。土民が睨つたものは恐らく熊であらうが、河邊に熊が居ることは鮭の産卵期に入つたことを意味する。獵が上首尾に行つて土民が歸つて仕舞へば余らは破滅だ。反對に失敗して彼等は河を前方に上つて來るなら、余らは救はれるのである。次で余はアリバのことを憶ひ浮べ、そして不憫に思はれた。こんなことを考へ乍ら、余は倒木の上に掛けて假睡ろんだ。夢の中に澤山の人が居る舞踏會が現はれた。一組のダンサーは余の眼の前で廻轉し、絶えず火を遮ぎつた。音楽の代りに何か呻き聲のやうな歌が聞えた。ホールの窓が明いてゐるので寒かつた。不意にダンサーの中に一羽の鴉が現れ、地上を跳ね飛び、あたりを盗み見た。余はそれを引摘も掴まうとして手を伸ばし、動き、倒れかゝつてそして眼が覺めた。

夜が明けた。焚火は燃えつきてゐた。河の上には濃霧が懸つてゐる。それを透してフツ河の向う側に山が見えた。この時何か黒いものが河の真中程に現はれた。それは獨木舟であり、中には二人の土民が居た。余は手を延ばして、側に寝てゐる

従者の一人を揺り動かした。それはデリであると思つたのに、グセフであつた。彼は立ち上つて大きな聲で呼びかけた。するとその他の者も起き上り、同じく呼び始めた。土民が舟を止め、素早くそれを後に戻して、霧の中に隠れ去るのを余は見た。従者たちの歡喜は絶望に變つた。彼らは替る替る一人で叫んでゐたが、間もなく一度にガヤ／＼とお互に罵り合ひ始めた。單り平靜を失はなかつたのはデリとチャン・バオのみであつた。

二〇分程して霧が上り始めた。河は荒涼たるものであつた。余は従者たちに落着いて日の出を待つ様に注意した。舟が、或はもう一度戻つて来るかも知れぬと云ふ一縷の望があつたのだ。

刻々とは過ぎて、余の期待は既に崩れかゝつて来た。不意にクルイロフが余に何か合圖をした。余は直ぐには飲み込めなかつた。コサツクは地に屈み、出来るだけ自分の身體を隠すやうにして、小聲で一言繰り返した。

「犬ですよ！」

余は指された方向に眼を止め、成程、犬を認めた。それは對岸に居て、耳を聳て、余らの方を注視してゐた。一時に余はホッとした。土民らは逃げ去つたのではなくて、確かに何處かの茂みに隠れてゐるのである。それで余は岸邊へ出て大聲で呼びかけた。

「ビ、チャンゲ、ニユグ、ロツフ・アグデ、イニ、ブー、ツツツイ、マイコケ」(「わしはチャンゲだ。ロシヤ人六人、數日何も喰つてはないのだ」の意)。

間もなく茂みの中から人が立ち上つた。余は一目でそれがオロチン人であることを識つた。吾々は會話を交換し始めた。余の説明を聞き終り、彼は、舟が下流にあること、仲間を呼びに行き、それと一語に余らを助けに来ることを述べた。オロチンは去り、犬も亦その後を追つて行つた。そして余らは岸邊に坐して、辛抱しながら時の經つのを待つた。「来た」と不意にデリが言つた。

全く、一隻の小舟が曲り角から姿を出した。

「また一隻」とクルイロフが眼を輝かした。

「また一隻」だとコシヤコフが叫んだ。

「舟には澤山の人がある」と言つて、チャンバオが立ち上つた。

成る程その通り、三隻の小舟が浮び、その上では人々が懸命に棹を使つてゐた。一五分程して彼等は余らの露營へ遣ぎ着けた。それはテ・ア・ニコラエの迎への一隊であつた。そのとき余の全く思ひがけないことが突發した。余、デリ及クルイロフは氣が緩んで地上に倒れたのである。また既に數日間砂利洲で寝た切りであつたものは、起き上がることが出来たのである。

余らの救助者たちは軟かい米の粥を運んで来て呉れた。余らはガツガツしながら粥に飛ついたが、最初の一口から吐氣を催はした。烈しい吐瀉が始まつた。余らは數回食をとり、そしてその都度同じ結果を招いた。

質問によつて次のやうなことが明らかになつた。ニコラエフは到着後、余らを探す爲にハチ河の上流に向つて出發し、百軒程廻つたが、余らの足跡を發見することが出来ず空しく海の方へ引返した。そして二週間を経てオロチンと共にト・ムニ河から歸つた。フツ・ダタ村長フェドル・ブツンガリは、余がアニイに向つて去つたこと、及ニコラエフがハチ河で余を探がしてゐる事實を耳にして、彼の許へ飛脚を送り、フツ、ブツ及バルガミを進行すべき必要を進言したのである。

「日時からすれば、チャンゲは餘程前に既に海へ出てゐる筈だ。要するに、何か不幸が起つたのだ。だから急がにやならぬ」と、オロチンたちは言つたのである。

余の救助者は直ちに出發した。フェドル・ブツンガリは、何處でどうして余らを探すべきかを彼に詳しく教へ、案内人を付けて呉れた。ニコラエフは睡眠時間や休息時間を縮め、大急ぎでフツ河を廻つた。そして余らの露營から三軒離れた所で昨

夜を迎へたのである。偶々彼の前方に二人のオロチン獵師を乗せた一隻の獨木舟が来た。彼らは余らの消息を全く知らなかつたのである。ニコラエフは毎夕三〇發の空砲を放つた。余らが聞いたのはそれであつた。そして明方に余らは、土民（余らを浮浪人と誤り最寄の茂に隠れた）を發見したのである。

斯やうな極度の神経緊張の後には、異常な衰弱が現れた。余は舟に移り、設けの席に横ると、直ぐに、猛烈な睡魔に襲はれるのを感じた。余は口を利くことが煩しくなり、また何ごととも考へ度くなかつた。舟が岸を離れるや、余は、危く余ら一行の墓場にならうとした露營地に最後の一瞥を投げた。刻み跡を持つ空洞の樹、踏荒された雜草及消えた焚火跡の堆高い灰、總ては余の腦裡深く刻まれた。數年は過ぎ去つたが如何にしてもこの時の思出でを蔽ふことは出来ないものである。

フツ河は初めは北から南へ流れるが、フツ河を合して後北東に急轉してゐる。余らの饑餓の露營地は、讀者の記憶するが如く、二河の合流點にあつた。それらの何れもは、河口附近で大支流——ソドリソゴ及アデラミを合してゐる。この地域はチウサと呼ばれてゐる。フツ河右岸はこゝから長距離に亘つて高い丘陵を發し、そして結晶塊狀鑛脈から成る。左岸には出來て間のない河成段丘が突出し、それは粘土、砂及泥土を混和せる鑛脈の斷片から成つてゐる。

舟はオロチン・ヨンの老練な手で捌かれて、矢のやうに流を下つた。霧はスツカリ晴れ上つた。暖かく晴朗であつた。時折余は我に返り、眼を開けて、美しい山、清澄な河及沿岸の森林を眺めた。斑點のある何かの鳥がこちらを飛び廻り長い頸を伸して、舟の上を急がし氣に飛び過ぎた。エス・エフ・グ・ゼフはその都度、それらを鴉と間違へて驚かした。

森林の底地は潤葉樹屬であり、余は若干滿洲トネリコ、マキシモヅチ白楊、白樺及丈高い幹のサルヤナギの一種を發見した。落葉松は最も高い地帯に進出し、絶えず樺及シベリヤ樺を混へ、又山脈の絶頂を全面的に獨占して、その仲間の中へは僅かに岩白樺のみを許してゐた。

フト。河及その全支流は豊富な動物の棲息地である。フト。の上流地帯には麂、麝香猫、黒貂及穴熊が棲息する。中流

では左側の山中に北部鹿が棲む。土民は右側支流地帯に時折鹿、猪そして稀には虎を發見する。

黄昏が近づく頃、余らはレニエー地帯の島に夜營した。グ・セフの衣服と變つた素振とはオロチン・ヨンの注目を惹いた。彼等



シホタ・アリンの東傾斜面に於て類樹狀の地衣で蔽はれた森林

は彼を暫く見つめてから、彼はアヌイで如何云ふ風であつたかと質問した。彼等の話によれば、余らが獨木舟を造つた地帯は「不淨」地と見做されてゐる。土民らは其處へ行くことを嫌ひ、その上方もしくは下方で宿を取るやうに常に旅程を考慮するのである。人々が不意に理由なく何ものかに脅かされ、その後で精神病になると云ふやうなことは、其處では再三起る。そして彼等の意見によれば、グ・ゼフの上につつたやうなことも、矢張り起つた。彼が森を徘徊したのも、余らが水難に遭ひ、また危ふく餓死しかけたこともこの故である。

余らは始終喰氣を覚え、食物をガツガツ食したがその都度食後に眩暈と嘔吐とを催した。余らは夜通し焚火の側で臥し、病氣の發作に苦しんだ。夜が明けた時には、余は自分の従者たちが判らなかつた。余ら一同は顔も脚も腫れ上つてゐたのである。我慢して、

余は舟にやつと這ひ乗つた。日の出頃は既に道中に在つた。

フト。河は上流は静かで美しいが、河口附近は激流で且騒々しい。それはこゝでは若干の水路に分れ、時には舟を廻轉することがヤット出来る程度に狭まり、時には非常に廣く、早瀬が多く又倒木で塞がつてゐる。

「トムニに來た」と一人のオロチンが言つて、フト。河に直角に位してゐる山脈を指さした。

余らの航行する水路は方向を右に取り始めたが、左側からは更に他の或る大水路が近づいた。

太陽は空天に高く輝き、澄切つた秋晴であつた。河の水は穏やかに滑らかであり、銀色に輝やいてゐた。數羽の長嘴鷗が砂洲を歩いてゐた。そして舟が殆ど間近を通り過ぎたときでさへ微塵も怖れなかつた。一羽の初雪のやうな真白い鷗が碧空にヒラヒラ見えた。小島の一つから、重苦しい羽搏を立て、灰色の蒼鷺が飛立ち、嘎れ聲で鳴きながら水路に沿つて飛び隣りの沼澤に下りた。

オロチンは橈を取り、舟を流れの烈しい岸邊へ向けた。水路は廣がり、水量を増し、細長い湖となつた。

だがこれがツムニンなのだ！ ラデへ人はこれをトムチと呼び、またオロチンはトムニ（ロシア人はそれに「ン」を附け加へた）と稱する。廣潤な河は穩やかに海へ注いだ。その左岸は高地、右岸は所々低地及草地であつて、小高い段丘から成る。あちらこちらには小島が散在し、それらには木性植物が繁茂した。それらは鏡のやうな水面に克明にその姿を映じてゐた。水の下は、恰かも、余らの住む所と變りのない現實的な他の世界の様であつた。

陽光、廣潤な水の曠野、無涯の天地を繰擲げた遠景及嘗めた苦難後の心の平靜は、疲れ切つた有機體に好影響を與へて眠氣も誘つた。

トムニンを漕ぎ行くこと三軒、オロチンたちは曲つて右側水路の一つに出た。その岸にはフト。ダタ村があつた。數人の子供らが水の中をあちらこちらして馳け廻つてゐた。オロチンのこの子供らは小舟の中で戯れ遊んだ。楽しい叫喚

と笑ひが空に響いた。子供らは手に魚掬を持つて魚を突刺す練習をしてゐた。半裸體の年少の童らは、泥濘に膝を没して何かを水の中で漁つた。余らを認め、彼等は村の方へ馳け出した。直ぐに小屋からは大人たちが出て來た。そして暫くの間ちつと佇んだが、同族を認めて靜かに岸邊へ歩み寄つた。

「ヤー！今日は」とオロチンは言つて、余らに手を差伸べた。

フト。初めて見た時と、更に親しく彼等に接する現在とでは、彼等は同一タイプではなかつた。彼等の一人は髭髯のない卵形の顔、小鼻、淺黒い皮膚及整つた眼の裂れを具へてゐた。他の者は頬骨の高い平べたい顔、黒い髯、曲つた廣い鼻及蒙古人形の險の目を持つてゐた。前者は小脊であり、驚く程小さい手足を持ち、後者は身丈は中位以上であり、骨組太く且良く發達した手足を持つてゐた。

凡てのオロチンの纏ふ衣服は、ウデへ人の服装その儘であり、僅かに刺繡がないだけであつた。

男子の頭は一本辮髪であり、また婦人は二本辮髪であつた。これに腕環及指環、更に銀製の大きい耳飾を付け添へるなら、美しいオロチン婦人の明快な姿が出來上るのである。只老婦人のみは鼻に可愛らしい飾輪（デマツイニ）を下げたのである。

オロチン村長フエドル・ブトンは人類學上の第二部類に屬した。それは幅廣の頸髯を貯へた四〇年輩の大男であつた。彼は、資性明敏闊達であつて、トムニンの土民全體の中で大きな人望を持つてゐた。余は救援に對して彼にお禮を述べた。

「いや、いや、お禮には及びませんよ」とブトンは頷て、押へ直ぐに余らの荷物を自宅へ運び込むやう手配した。舟が荷揚げしてゐる間に、余は村を視察するため出掛けた。フト。ダタ村（「フト。河々ロ」の意）は、トムニン水路の兩岸に跨がり、丸太造り小家屋と若干の遊牧小舎から成つた。オロチンの家はロシア家屋風であるが、小窓や板戸の造りも建付けが亂暴であつた。そして無考へに亂雑に建ち並んでゐた。住家の裏の森の近くには、高い柵の上に納屋があつた。若

千の小舟が岸邊に散在した。犬が繫いであつた。丸で灰色の霧のやうな蚊群がそれらの上に群がつてゐた。蚊群を避けるために犬は地に深い穴を穿ち、僅かに尻尾だけを外部に窺かせるやうにして、その中に忍んでゐた。彼等の大部分は眼が爛れてゐた。

程なく部落は常態に復したのである。人々は各自家路につき、犬たちは更に深く穴を掘りそして子供らは再び岸邊を馳けた。これらの幼児らに眼をとめ、彼らが獨木舟を操り、魚を想定した木の小片に向つて魚獲を投げ撃つその手練と素早さには、余は思はず舌を巻いた。余らの子供らが小舟に乗り河の真中へ現れでもしたなら、母親たちはどんなに膽を潰すか知れないが、こゝではオロチョンたちは自分の子供らを平氣で見つてゐた。一婦人は自分の息子に呼び掛けて、何故だか河の向う側へ行くやうに叫んだ。その時余は小さな童に氣が付いた。それは自分の身體よりも著しく大きい粗朶の大束を背負つてゐた。

ブット・ンガリは余らを自宅に招待した。その家は大きな一室切の家で、街に向つて開放された扉とそして河に向いた二つの窓を持つてゐた。一隅には、中繼した煙突を備へた鐵の小さい煖爐があつた。他の二つの壁際には板寢床が横たへられ、その上には敷物の代りに栗の皮と熊の皮とが敷いてあつた。窓邊には腰掛けとそして二脚の椅子を備へたテーブルとがあつた。燻つたホヤ付きの普通のランプ、四枚の誰かの寫眞、トランク、白樺製小箱、弓、矢、銃二挺、槍及シューマン手太鼓が部屋に飾り付けてあつた。床や天井の建付けは粗相であつた。夥しい蚊、蠅及蛇が騒音を立て、硝子に打ち當つた。主婦は直ちにテーブルの上へ燻つた湯沸し、硝子コップ、白い皿及購入パンを持つて來た。

魚の漁獲期が待望されてゐた。鮭の春産期は非常な不漁で、悪天候のために増水を招いたのである。

「わしらの心配は一通りぢやない」とブット・ンガリは語つた。「魚が獲れないと、犬が死ぬ。犬が死ぬば、獵に行けません。獵に行かなくちや、何にも買へませんでな……」。

夕方余は再び吐氣を催し、戸外に出て河岸を散歩した。空には星も月もなく、風が海から吹き、雨がポツポツ降り始めた。河の向う側には焚火が燃えて、その明るい光が漆黒の河面に反射した。

フト余は或る人影を認めた。それは毛布を纏ひ手に杖を持ち、帽子を冠らずに大急ぎで余に近づいて來たのである。それはグゼフであつた。彼は立寄り、火の方を眺め、手を前方に差し延べて、靜かに言つた。

「ソラ、アレは何んだらう」。

余は彼に呼び掛けた。グゼフは身慄して小股で余の許に近づいた。

「わしらが何處にゐるのか御存知ですか？」と彼は速口でしゃべり出した。「わしらはまたアヌイへ來たんだ。わしやこの場所を知つてゐる。ソラ何でしょ、ソラ島でしょ、小山にも見覚えがある……」

余は寝るやうにと彼に勧めた。

「何處で？」と彼は訊ねた。「わしらの夜營は何處ですかい？ア、向う側だ。焚火を御覽なさい。わしらは今そこへどう云ふ風に行くんですかい」と彼は失神したやうに呟いた。

余は手で抱いて彼をブット・ンガリの家へ伴ひ歸つた。グゼフが落着いたとき、余は再び河岸へ出て、引繰り返してあつた舟底の上に暫く掛けた。露が着物の襜の下へ浸み通るのが感じられた。余は家に歸り、炕に臥したが眠れなかつた。グゼフの精神状態は余を不安にした。余は彼をインベラートルスカヤ灣（現ソヴァート灣）で然る可く保護し、汽船でウラヂウ、ストックへ送還することに決した。

戸外では何かサラサラと言ふ物音が聞えた。丸い忍び足で歩くやうに、雨が降つてゐた。その滴は窓硝子を打つた。折合の悪い犬らが附近で唸り合ひ、また誰かが寢言を言つた。

翌日は悪天候ではあつたが、余らはブット・ンガリに別れを告げ、二隻の小舟で海に向つた。

風は向ひ風であつた。それ故にオロチンは棹を使い、淺瀬を擇んで進んだ。河口までは四五軒あつた。フト。河はト。ムニンを容れた後若干の支流に分れる。主要河床の左側には疎らな落葉松の繁る泥炭の廣い丘が延び、その脊後には磁針の偏差一六度を示す大きな山イオドがかすかに見える。

ト。ムニンの最下流は廣い入江である。これは以前は陸地に深く喰込んだ灣であつた。そしてその後廣い砂洲によつて海から離れ、河の沖積土によつて絶えず埋められて灣になつたのである。即ち現在の灣は、灣の最深部であつた。河口附近に多數の小島があるが、その出來たのはまだ全く近頃のことである。それらは植物によつて蔽はれるにはまだ至らなかつた。玄武岩脈は、昔の灣の境界であつて、現在は灣の右縁を形成し、また左にはウリケ河の附近に同様な玄武岩の長い崎が在る。後者は昔は海へ直接注いだが、今はト。ムニンの現河口附近で灣へ注いでいる。

既に黄昏れる頃余らはダタ村に着いた。夜の影は音のない浪のよやに山、森及オロチン小家を蔽ふた。そして、恰も見すほらしい灰色の野獸のやうに、何ものかに脅えて、乾草の堆の中へ迷ひ込み、高い懸崖の邊りに隠れた。湯の鏡のやうな靜かな水面には、夕日の反射が映えた。磯の香が芳つた。ウリケだ！ オロチンは舟先を轉じた。余らの近づくのを知つて犬は一齊に咆え立てた。最寄の小舎から一人の男が出て來た。それは後に余の知己となるオロチン人のアントン・サグズィであつた。彼は自分の妻を呼び出し、余らを救けて荷物を持運ぶやう命じた。余らがこゝで知つたことは、部落の男子全部は海獸を狩るために獵に赴き、家にゐるのは老人、婦人及子供のみであることであつた。數分後には余らは小舎の中で爐の兩側を圍んで坐り、熱い茶を飲んだ。アムールから海までの第一の旅程は終了したのである。

夕飯後オロチンとその妻とは隣家へ赴き、小舎を余らに提供した。病弱状態のために余はまたもや眠ることが出来なかつた。余は眼を開けたまゝ、堅い寢床に横はり、そして何を考へるのも嫌であつた。海の岸打つ波の音が戸外から響いて來るのや、水の中で蛙がクワクワと鳴きまた蟋蟀が啼くのが聞えた。明け方にサグズィが小舎へ戻つて來て、海が時化出し航行出

來ないから起きるには及ばないと云ふことを傳へた。余は彼の忠告を承き入れ、寢返りを打つて熟睡に入つた。かうして餘程経つてから余は眼が醒めた。

晝間の明るい中ではダタ村の趣きは全く異なるものであつた。七戸の丸太造りの家と一〇戸の樹皮葺き小舎とが、ウリケ河岸に沿つて散在した。オロチンの小舎は、血族筋のウデへ人のものよりは、遙かに規模が大である。それらは、屋根の外に、更に横壁を持つてゐる。男子は床の上で火の兩側に坐を占め、婦人は戸の近くに席を取る。其處に在る樹皮で造つた棚の上には、木や白樺皮製の食器があつた。余はその中に數枚の白い皿を發見した。

オロチン婦人は働き者であり無口である。彼女らは一日中働く。薪を運び、獸の皮を剥ぎ或は魚皮を舂めし、食事を仕度し又は靴を縫ひ、そして衣服を繕るのである。多くは喫煙し、關係のない人を屋内へ入れることを全く許さないやうである。喜怒哀樂何れの感情も、彼女らの眼から視取することは出来ない。

オロチンは好んで自宅の附近に色々の鳥や動物を飼養する。ダタ村は全くの動物園であつた。サグズィの小舎の近くには太い丸太で造つた特殊の場所の中に熊がゐた。それが一人前に成育すれば、ギリヤク人やアイヌ人がやる様に、祭日に屠殺するのである。熊は意地悪であり、その檻を覗き込まうとする見物者を、丸太の隙間から爪で引摺まうとした。他家では余は若い狐を見た。その動作には、犬に見るやうな發作的なものとそして猫に見るやうな優美なものがあつた。物干場の隣りには、脚を縛られた鷺がゐた。それは監禁には既に慣れてしまひ、落着いて邊りを見守り、只時折嘴で胸の所の羽毛を梳いてゐた。村外れの家の附近では箱の中に捕り立ての二羽の若鴨がゐた。ピーピー鳴き、その無細工な頭を檻の網目へ挿込んだ。其處の小舎の内部には脚を縛られた悪戯者のカケスが床をピ。ンピ。ン跳ねてゐた。そして鋭い聲を擧げ、頭をか

しめて、空と太陽がチラリと見える屋根の煙拔きを眺めた。

彼と共に小舟に乗り河を渡つた。河と海とを分ける突出た砂洲は、余の豫想よりは遙かに廣いものであつた。そして樹齡一〇〇年から一五〇年を數へる落葉松が成長してゐた。廣い森林帯の後には砂洲が延び、そこには二枚貝の貝殻が夥しく打ち上げられてゐた。

ト。ムニンの河口そのものは狹隘である。河が吐き出す大量の水を容れることが出来ないのである。淡水の激流が遙か海の沖合へ奔流するのが岸から見え、そして恰もト。ムニンが猶其處に流れるかの様に見える。それを避へて暗色の浪が大きな波頭を立て、押し来る。それは益々高まるが、河の激流と衝突して、一度に白い玉となつて碎ける。

ダタ村のオロチンは斯う云ふ様な日にも海豹狩に海へ出るのだ。余は岸邊に坐して岸打つ怒濤を飽かず眺めたが、余の従者は煙管を煙らしながら、曾つて一七人のオロチンが三隻の大船に乗つて海獸狩に赴いたと言ふ話を物語つた。話は春三月のことである。氷原へ乗込む必要があつた。彼等はそこで海豹の大群に出遭ふことを豫想した。天氣は清朗にして波靜かであつた。今ニコラエフス燈臺のある岬が、水平線上に微かに見えた。晝過ぎにオロチンは氷原とそしてその上にゐる澤山の海豹とを發見した。彼等は勇躍して獵に従つた。そして僅かの間に九一頭の動物を捕獲したのである。俄かに北東の方から冷たい霧がかゝつて来て、雪になつた。老人連は若いオロチンを説いて、捕獲した動物を放棄して直ちに海岸へ引返へすやう命じた。その海岸は今は見えなかつたのである。澤山積込まれた舟は思ふやうに進まなかつた。空は愈々深く密雲で蔽はれた。土民たちは方向を失ひ、暗くなるまで盲滅法に漕いだが、風はそれを脇へ押し流した。こんな風に彼等は一夜を苦しみ通したが、朝、夜が明けて見れば、前方になほ氷原とそしてその上に自分らの殺した海豹の屍體とを見出したのである。それで彼等は氷上に舟を引摺り上げ、棧で天幕を張り、暴風の去るのを待つた。二晝夜海は大荒れに荒れた。激動で氷の破れるのを怖れ、老人たちは舟の側を離れないやうに命じた。また薪の缺乏のために焚火には海豹の脂肪を燃し、棧や坐席板を焚附けにしたのである。火を焚くのは、單に湯を沸す必要があつた場合のみに限られた。三日目の夕方に靜かになり

海は次第に穩やかになつた。大氣が晴れたときに、彼らは陸を見た。山の恰好から推して、老人たちはコビ河河口の沖合ひに居ることを知つた。氷塊を出發し、凡ての海豹を海に投棄して、海の神テムーの供養に捧げた。それは海神がかくも多量の愛犬の屠殺に對して神罰をあてたと言ふことを深く信じたからである。オロチンたちは將來は生活にとつて必要である以上には濫りに獸を屠殺しないことを誓つた。死んだものと思つてゐた自分の良夫や兄弟を見たダタ村の婦人たちの喜びは大變なものであつた。

第四章 燈臺守

九月十一日から十二日にかけて風は夜間に穏かになりはじめた。サグズイは海岸へ數回出て、遠方を展望し、雲行きによつて天候を豫測することに勉めた。彼の顔色から、空模様の方ばしくないことが想像された。余が探査のために既にイオド山へ赴かんとしたとき、俄かにオロチンたちは走り廻つて舟の手配をし始めた。

讀者は余について海岸に沿つて長い旅行を遂行しなければならぬ。それ故に航海用のオロチン舟(タムツイガ)の構造を心得ておく必要がある。それは非常に輕快であり、薄板から出来てゐる。オロチンは鐵釘の代りに木(落葉松)釘を用ひる。タムツイガは、平底舟であつて、水にかかる部分は主として中央、船先と舟尾とは若干高くなつてゐる。斯やうな構造であるから大變便利であつて、尖つた岩が無い限り、任意の場所で自由に岸邊に着けることが出来る。舟の積荷は、三分の二は艫の漕手と舵手との間に、そして三分の一は船先に配置される。舟底は彎曲してゐるから、間隙から滲透して來る水は總て中央に溜り、白樺皮製の杓で外へ汲み棄てるのが容易である。棹は槌子であり、握り柄、棹架の爲の孔、及根元の所が圓盤形で尖端が狭くなつてゐる槌身から成る。棹架は樞の枝で造り、柳の樹皮で以つて垂直に舟の舷に結び付ける。帆の代りには、四角の天幕用亞麻布が用ひられ、そして舟棚の一つに斜十字形に結び付けた帆柱に定着せしめられる。中形大の土民の航海舟は、漕手四人、舵手一人及乗客二人を乗せて、荷物は三〇—四〇ブード(一ブード約一六・三八疋)を積載することが出来る。

余らは午前十時に舟に乗込み、出發した。サグズイは世話人頭兼船長であつた。余は一隊を支配する規律に驚いた。オロチンの若者たちは彼の凡この命令を直ちに實行した。そして黙々と、機敏に、遲疑なく立ち働らいた。全航海における掟は

斯う云ふ風であつた。海上の風波を首尾よく乗り切ることは、最も嚴格な規律を遵奉するので可能とするのである。陸の



々は往々にこのことを理解しない。余らがウリケ河から出るや、忽ち流は舟を捉へて海へ持ち去つた。白い波頭や、巨浪が押寄せて來た。一は他のものより高く、一は他のものよりも物凄しい。

サグズイは漕ぎ方を中止するよう命じ、自分は艫に立ち上つて探ぐる様に前方を展望した。彼は好機を待つものゝやうであつた。機を見て、彼は叫んだ。

「ガー！」

オロチンは力を揃へて漕ぎ出した。舟が砂洲の外縁と平行するや、サグズイは急に右へ轉じた。忽ち左手には大きな浪が盛り上つた。そして眞直ぐに余らの方へ押寄せ來り、はね上げ、泡を立て、ザワめいた。舵手の艫槳に従つて、舟はそれを迎へて少し斜に突進んだ。續いてそれは上方へ跳び上り、右舷へ傾いた。波は過ぎた。漕手は力の限り力漕した。再び波が來て再び同じ操作がとられた。タムツイガ(舟)は浪の谷間に惹き込まれたかと思ふ間に、忽ち嶺を登り、艫を沈め、次で船先で白泡の中を驚進した。それは九番波であつた。間もなく舟は姿勢を直した。砂洲及寄波のウネリは後に去つた。それでサグズイは第二舟を待ち受け、舵手に若干の注意を與へそして漕ぐことを命じた。

フト、ト、ムニン及コビの各河の間の地域は玄武岩脈から成る。この熔岩流は西から東へ走り、長い崎となつて海へ突入し、そのためにこゝには多數の半島、入江及灣が出来上つた。インベラトルスカヤ灣は一の深い陥没であつた。その岸も亦玄武岩から成る。落葉松、ファン樞及白皮樞から成る森林は、岬全體を鬱蒼と蔽ひまた小谷間を傳つて海の眞端まで下つてゐる。

余はサグズイと一所に座し、彼の語る話を謹聴した。



舟材用に供する樹皮を丸太から剥く所

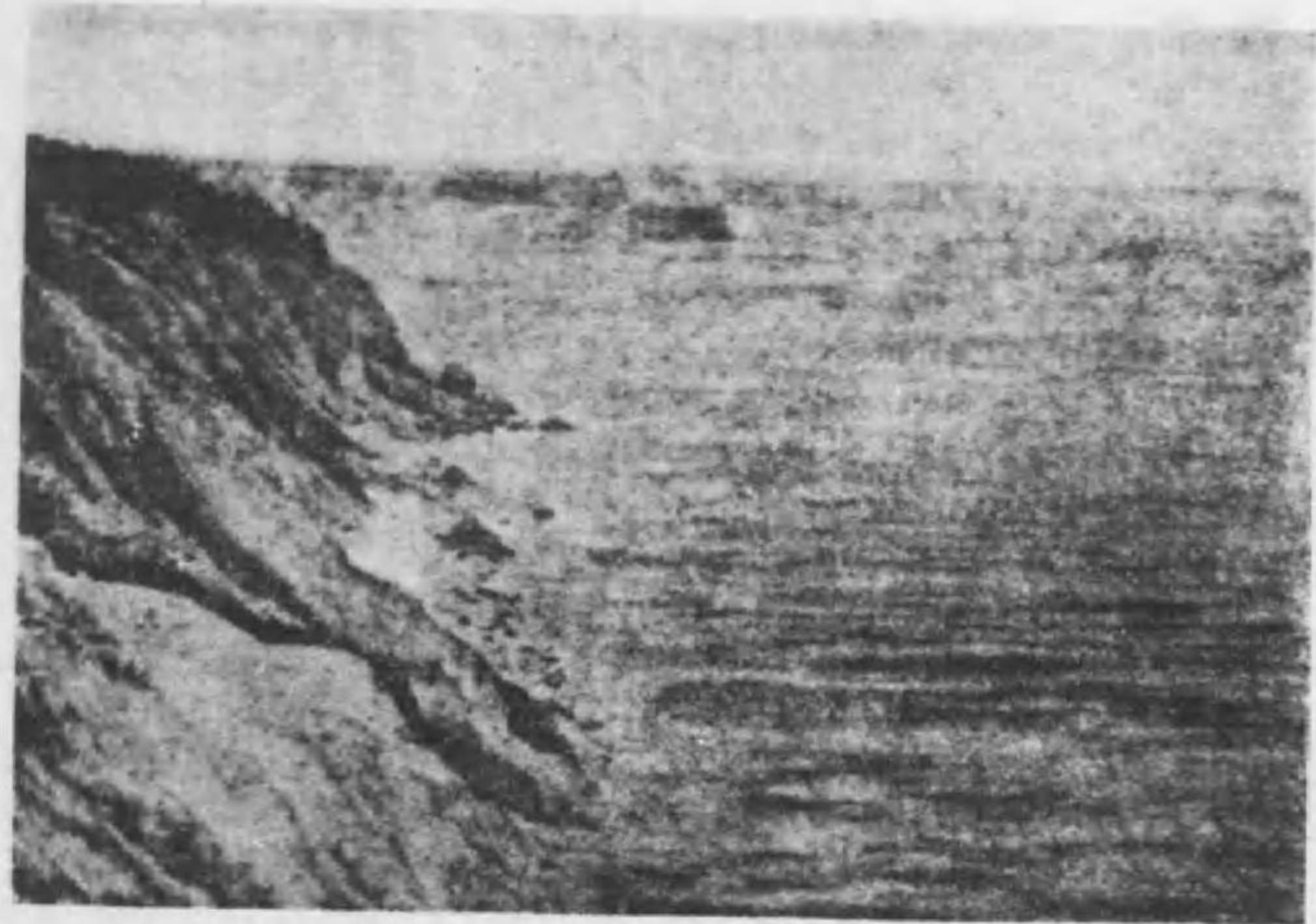
第一の小入江はナムシ。カと呼ばれた(「ナム」即ち海と云ふ言葉から生れた「ナムカ」の轉語)。次で更に南に進めばシナク岬とチウアンカ岬との間には大きな入江シランチエワがあつた。小河チアンカはこの入江へ注ぎ、その名稱は「ヂウ」即ち家と云ふ言葉から生じる「ヂウアンカ」は露語に翻譯すれば「小さい村」となる。實際、入江の奥の方にオロチンの小さい村が隠見した。それに續いてトシ岬とトン河を持つトン入江があり、更にそれに次で、小さいとは言へ整つた姿の小入江シクタがあり、これへ無名の小河が注いでゐる。その河には瀑布スイズニがあり、その附近には悪魔が棲む。其處では屢々地震があり、何者か、森を歩き、叫喚し、口笛を吹きそして人々を寢ささない。突出した岬アヤ(即ち「良い」の意)を更に附加しておかう。それが斯やうな奇妙な名稱をもつた理由は、現在その後ろに大きな入江ワニナがあることによるものである。オロチンは時化時に舟でこの岬へ無事に着ければ、アヤ、アヤ!と絶叫するのである。サグズも亦傳説的なこの感歎を發し乍ら、橈を力漕してワニナ入江へ方向を曲げた。

岩の多い高い岸、動かない暗い水及何ものにも破られない静謐は、周圍を陰氣な殺風景なものにした。岸に亂雑に打上げられた石の塊とそして無愛想な懸崖とには、何か無氣味なものが感ぜられた。一人の怪しい不審の者が森に隠れ、そして余らの舟をそつと窺つた。入江の奥の所では小さい河ウイが流入し、その河口附近には一軒のオロチン小家があつた。住人の居ることはワニナ入江の粗野な美を幾分和らげ、また奇異な風景によつて助成された暗い感じも次第に薄らいで來た。

オロチンらは岸邊に漕ぎつけるや、自分らの用達しに行つた。余は舟中でじつとしてゐるのが退屈だったので、波打際の沖積地帯を傳つて散策した。それは進む程に段々狭くなり、最後は消え去つてゐた。余は入江が非常に深いことに氣が付いた。左は高い絶壁であり、右は水であつた。海の潮が不意に退ぞかうものなら、余は斷崖に懸つた崖縁の上に自分を發見したであらう。小路の盡きる所まで行き、余は岩の一つに腰を掛けてあたりを眺め始めた。余の眼は水母にとまつた。それは傘を擴げたり、急に窄めたりして、水を衝き、跳躍によつて前へ泳いだ。不意に若干脇の水上に波紋が現はれ、續いて水面上に何か怪物の大きな頭が現はれた。それは色は灰褐色、小さい耳、黒い鼻及髭の生へた口を持ち、頭は人間の頭四倍大であつた。動物は深呼吸をし、次で口を開けて大きな齒を見せた。それから頭を振り向けてその凸起した黒眼で余を見つめた。それが汀の狭い沖積地帯へ攀ぢ登らうとしようものなら、余は後方に逃げ場を失ひ、岸の斷崖にしがみ付いたかも知れない。それで余は要慎にしくはなしと決心し、岩から跳び下りたが、獸もまた余に驚いた。それはもう一度音を立て、呼吸を吐き水中に沈んだ。

戻つて來て、余はオロチンに、海驢らしきものを見たことを物語つた。この巨大な大耳海豹の代表者は、最近までは非常に廣く分布してゐたが、人間の絶えざる追求によつてインペラトルスカヤ灣附近では大部分その跡を絶つた。現在では海驢はト・マンヌイ岬以南にゐる。

オロチンは海驢を、陸上の兄弟と仲違ひした海の熊と見做してゐる。そのワニナ入江に於ける出現は、それが傷を負



インベラートルスカヤ(現ソヴェート)灣以北の海岸

つてゐるかそれともライバルを恐れたものであることを意味する。オロチオンたちは数多の偏見の内の一を同様に余に傳へた。それによれば、海驢の皮を剥ぐ爲に一度でも使用した双物は、熊の肉を切ることは不可能であり、一般にはそれを獵に携帯してはならない。最も良いことはさう云ふ双物は海へ打棄てることである。

三〇分後に余らは出發した。一方天氣は再び潰れ出した。南東の風は寒を呼び、海は再び荒れて来た。幸ひインベラートルスカヤ(現ソヴェート)灣まではさまで遠くはなかつた。ト・マンヌイ岬を迂回して、船は開放入江ベズイミヤンナヤに入つた。左には大きなメンシコヴァ島が在つた。それは最近までは大陸と狭い砂洲によつて連なつてゐたものである。オロチオンたちは船を曳摺り揚げて砂洲を越し、一度にインベラートルスカヤ灣の一部であるウアヤ(セーヴェルナヤ)入江に遣入つた。インベラートルスカヤ灣は延長一、一杆、幅約三杆であり、結晶塊状鑛脈から成る、高いドコ山脈によつて海を仕切つてゐる。インベラートルスカヤ灣は南西より北東方に位置し、土民の命名(後にロシヤ名によつて排除された)を有する若干の入江及小灣を持つ。灣の入口から東岸に沿つて進み、絶端を廻り、西岸に沿つてメンシコヴァ半島に途をとるときは、これらの小入江は次のやうな

順序に配列する。即ち、第一はツツブカイ(マヤチナヤ)である。こゝでは燈臺向けの貨物を陸揚げする。次はダヤンカヤ(ヤボンスカヤ)入江である。その奥にはロシヤ人漁師の若干の住家が散在した。その次には二つの入江―チャバカヤ及オカチャが並んでゐる。其處には濠洲林業會社の建物があつた。丁度その真向ひには、淺瀬入江ハチがあり、それへは同名の海が流れ落ちる。それと隣接して更に北方に、パウチャ(コストレワ)入江が、また更に北東には、以下詳述する管のアーゲ(コンスタンチノウスキイ灣)が在り、そして最後には、余らがベズイミヤンナヤ入江から近道した所のウアヤが在る。マヤチナヤ入江の向ひには、小島セオゴビツツニが在り、それは現在はコヴリチカと命名されてゐる。

余らは暮れ方に利權會社(コンセルション)に着き、海岸の水の豊富にある泉の邊りに夜營を張つた。余らの疲れ切つた顔とそして余らの摺り切れた衣服とは衆目を惹いた。探検行路及深刻な饑餓に關するニュースは近隣全體に擴がつた。會社の勤務員たちは、探検を聴くために訪れ、また茶會に余らを招待した。このことは大變迷惑であつたが、如何とも致し方なく、斯くも苦しい價值によつて贏ち得た人氣に酬いなければならなかつた。新しい知己から余が聞き知つた所では、會社の事務所には、余ら宛の手紙や金が来て居り、また倉庫にはウラジウオストクから送達された着物、食糧及科學用装具を詰めた箱が保管されてゐた。翌日は日曜日ではあつたが、余らの爲に倉庫を開けて、余らの窮乏せる總てのものを手渡された。余らは入浴し、襤褸を棄て、新しい衣服に清潔な下着を着用した。

一週間後には汽船が到着し、余はクセフをそれに乗せて送還した。彼は同様に休養をとり、余ら一同が大變喜んだ程に精神安靜は恢復しつゝあつたのである。後に余は、彼がスツカリ恢復したと云ふことを知つた。

余は最初の視察をコンスタンチノウスキイ灣に試みた。讀者は水を湛へた延長八杆に互る陥落龜裂を想像されよ。その末端には小河マーが注ぎ入る。茂つた針葉樹林で蔽はれた高い岩石海岸は、非常に景勝であり、芝居の側面舞臺のやうに、一方から、或る時は他方から迫つてゐた。北海岸の最初の岬は「シグナルヌイ」岬と稱し、それを廻れば深さ三〇米の美し

い小入江ブタキ(ポストワヤ)がある。

こゝには三橋戦艦「バルラダ」號が沈没した。一八五四年—一八五五年のセヴァストポール戦役時代に、軍艦がニコラエフスクへ廻航された時、三橋戦艦「バルラダ」號はその深い吃水の故にアムールの砂洲を通過することが出来なくて、インペラトルスカヤ灣に留まつたのである。

余は海岸に漕ぎ寄るよう命じた。黄昏までにはまだ充分間があつたので、従者たちに夜營の用意を命じ置き、銃を手にしてこの地(地圖上ではコンスタンチノウスキヤ哨所の名稱が附されてゐる)の視察に赴いた。或る人達はこゝでは都市コンスタンチノウスクを建設することを夢見たが、總てはどう云ふわけか一朝の夢と化した。大きな船が灣底に埋没し、その上にはじつとして動かない漆黒の水が在り、岸の上には、崩壊した塚、腐つた垣及倒れた墓標(所々に文字跡をとめてゐる)を持つ墓地がある。兵舎及兵器庫は跡片もなかつた。一八五五年當時に急造された砲臺は、時代と共に朽ち、風雨に洗はれた土壁を残してゐた。断崖の邊緣の森の外には、鑄鐵製の傾いた記念碑が立ち、それには次の様な碑文があつた。「一八五三年イルツイシ河の輸送船の壞血病によつて歿した舵手チ。チーフ及船員一二名、米露會社の船員四名及兵卒二名のため」。灣上とそして墓上の林中を支配せるものは死の如き静寂であつた。人は滅び、希望は滅び、總ては滅んだ。そして死は僅かにその遺跡のみを遺したのである。余は人世の無情に對して沈思した。恰も余の考へに應ずるかのやうに、傾いてゐた一本の墓標が、鈍い音を立て、地上に倒れた。墓標板の裏に隠れてゐた蜘蛛は驚ろき、樹に逃げ走り、素早く草に隠れた。墓標の根本では蟻の群が右往左往してゐた。哨所の廢墟は余を感傷的にした。余は人が戀しくなり、銃を肩にしてぼつ／＼露營地に歸つた。

日は暮れて來た。太陽は今し方山の彼方に隠れたばかりであり、バラ色の光を上空に投げてゐた。空天には小さい綿雲が銀色に輝やいた。靜かな水面には樹の繁つた岸が映つた。下方の小川の邊りには二ヶの天幕が白い姿を見せ、その側には焚

火が燃えた。細い流れをなしてオパール色の煙が立ち昇り、そして清い爽やかな空にボンヤリと溶けて行つた。

露營では従者たちは揃つてゐた。翌日余らは早朝に利權會社へ引返した。

二日の後余は聖ニコラヤ燈臺へ出掛けた。余は其處で自分の測圖を天文學地點に照合し、また測時計の誤差修正を行ふ積りであつた。途は利權會社からインペラトルスカヤ灣の東岸に沿つて森を通じてゐる。この馬路は非常に泥濘みであり、また日中だけしか通ることが出来ない。それは六料を過ぎ、マヤチナヤ入江から波狀地帯に通じた通路に出、若干の溪流を横切つてゐる。その脇の古い山火事地帯には、若い落葉松や白樺の繁茂した空地が在る。

燈臺は一八九七年にドコ山脈の先端に設置された。この山脈は花崗岩から成り、且つそれには珍らしい柱狀節理を示してゐる。土民は地上に突出せる懸崖の中に石化した人間を發見し、其處を通行することを怖れた。これらの恐怖はその後燈臺の設置によつて去つた。

燈臺守は帆船隊の古參水夫長マイダノフであつた。彼は余を昇降口に出迎へて手を差出した。余は、頭に禿を持ち、黒い大きな顔と上唇の上に薄い髭を持つ四〇年輩の立派な人間を目前に見た。彼は金釧の着いた黒い船員上服、同じく黒色のズボン及長靴を着けてゐた。古參海員は特殊な歩き振りをした。正にマイダノフも歩く際に胴體を打振り、何かに掴みかゝらうとするかのやうに、變つた手つきをした。彼は絶えず微笑み、氣六づかしいところは全然なかつた。それは最も善良な人間であり且誠實な勤務員であつた。

彼が燈臺を模範的な整頓によつて維持したことを、彼のために是非一言せねばならない。行届いた管理とそして單に軍艦に於てのみ見得るような清潔とは、到る所に見られたのである。各床は光澤出しされ、ピカピカ光り、ベンキを塗つた壁は單に飾るだけでなく更に一週毎に洗ひ淨められた爐と清潔を競つた。全金屬部分は磨かれ、硝子は白堊で拭いてあつた。この整頓の全體は愉快に眺められた。そして余は燈臺に三日間滞在する喜びを拒み得なかつたのである。薄暮前に余はマイダ

ノフと一語に食卓に就いた。この時に一人の水夫が部屋に入り来り、海に濃霧がかゝつて来たことを報告した。

「蓄音機を掛け給へ」と、燈臺守は彼に命じた。

「ハイ！」と、マドロスは答へて引下つた。

十分程して怖ろしい放吼が、海のカスを立籠めた重い空気を打震はした。強烈は響は窓硝子をガタガタと鳴らす程であつた。余は思はずその場で聲を立てさへした。

「これはどうしたことだ？」と、余は相手に訊ねた。

「蓄音機です！」と、彼は答へた。

「蓄音機……？」と、余は訝かし乍ら再び彼に訊ねた。

「サイレンですよ」と、彼は簡単に言つた。

二分程経て音響は再び繰り返され、そしてさう云ふ風に夕方、全夜中を通じて次の日の夕方まで続けられたのである。程なく余の耳は慣れた。リズムカルなサイレンは氣にならなくなつた。それは單に余の仕事邪魔しなかつたばかりでなく、睡眠をさへも妨げなかつたのである。

翌朝マイダノフは余を起して、空はガスがかゝり雨天である旨を傳へた。そのことはサイレンが同様に證明した。それは休みなく唸り続け、強力な音波を霧の彼方へ轟かせたのである。

午前中は余は旅行日記の記入に過ごした。仕事を終り、余は、何か讀物があるかどうかを燈臺守に訊ねた。

「いや、それはこゝにありません」と彼は答へた。

退屈で死んでしまひさうに思はれる燈臺に書籍がないと云ふことは、余を驚かせた。

「わしらは讀書などする暇はありませんよ、晝も夜も仕事が深山あります」と彼は言つた。

余は彼に若干の書籍を注文することを勧め、カタログを送ることを述べたが、マイダノフはそれを押し止めた。そして余の記憶する書物の總ての題名を書取つたのである。

後に余が聞知した所では、彼はそれらの書籍を手に入れ、それを眼につき易い場所に飾つた。そして各訪問客にそれを示し、これは運命の悪戯で偶然こゝに舞込む客の讀書用に入手するやう、余が彼に勧めたやうなものであると語つたさうである。

暮方余は彼と共に燈明を見るために塔へ登つた。余は燈明を取巻く欄干付きのブリッジに出るや、光を慕つて飛ぶ大量の蝙蝠に喫驚した。直ちにシアン加里の入つた殺蟲器の中へそれらを採集しにかゝつた。晩には余は昆蟲を封筒に封入し、それに名稱を記入した。

八時半頃、マイダノフは机に倚りかゝつて居眠りをし始めた。

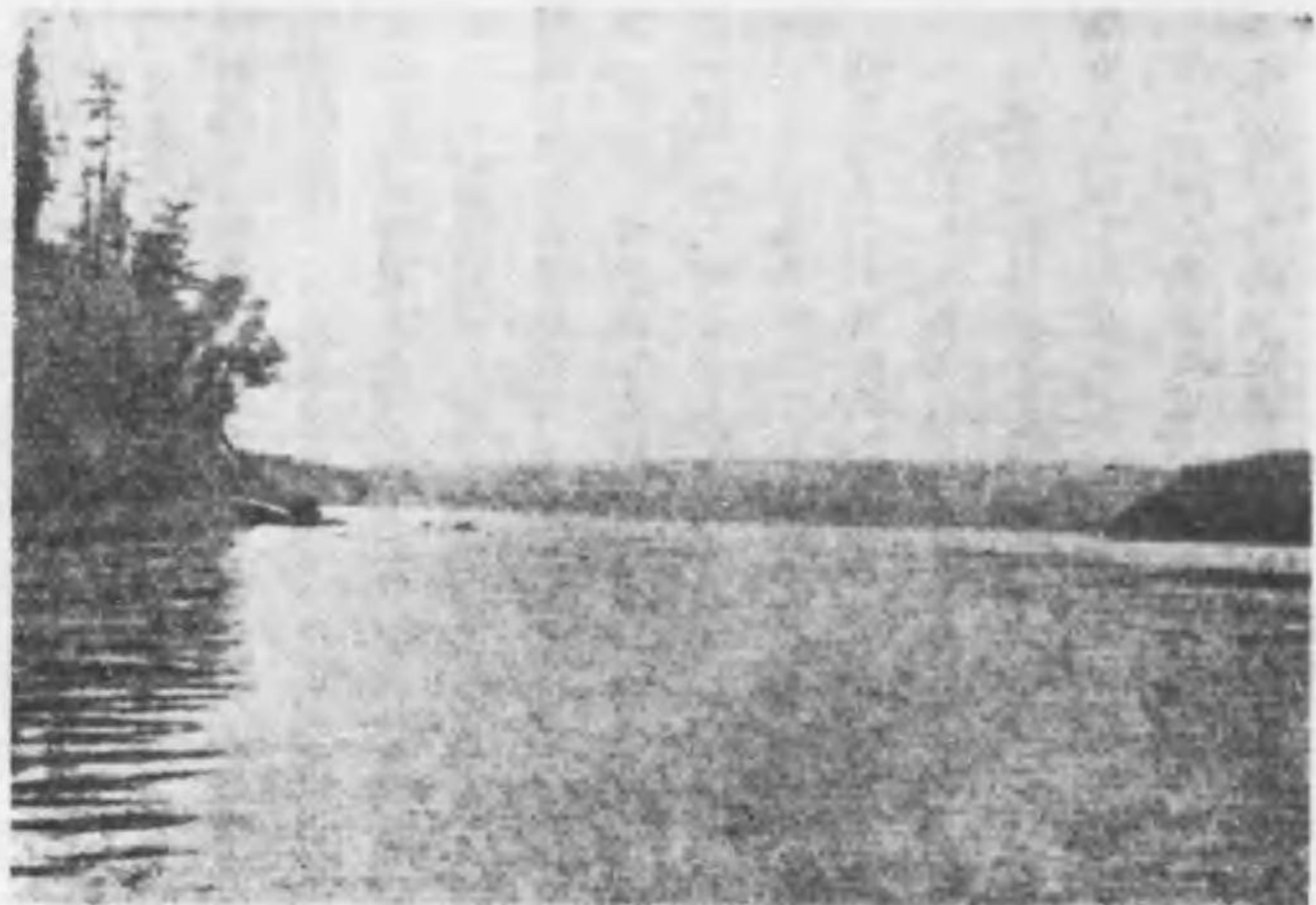
「お寝みなさいよ」と余は彼に言つた。

「いけません」と彼は答へた。

「何故？」と余は反問した。

「九時に氣象観測をやらなくてはなりません」。

彼は燈明に點火し、再び席に戻つて時計を見詰め始めた。九時五分前になつた時、余は、現在なら観測を行つて宜いと述べた。



江ノカヤアスカノチンスタンコ

「いや、時間はキツカリです」と彼は答へた。

それから彼は上服を引掛けて扉から出た。余が恚越しに見ると、彼は手に時計を持ち、氣象臺の前に立ち寄り、分秒針がキツカリ九時を指すのを待った。それは、極めて責任ある重要仕事を遂行する者の姿であつた。この仕事には極めて些細な時刻違背も非常に重大な結果を齎し得るのである。

観測を終へ、燈臺守は床に就いたが、何の爲か余を呼び込んだ。彼の「キャビン」(彼は自室をさう呼んでゐる)に入り、余はそれが實際キャビンの様に配置されてゐるのを認めた。開閉出来ない窓には明り窓が嵌まつてゐた。水を入れた玻璃壺とコップとが船の中の様に小棚の中に在つた。寢臺は外縁を持ち、机や椅子も床へ据ゑつけであり、其處には晴雨計と若干の海圖とが懸けてあつた。マイダノフは着衣し、靴履きのまゝ寢臺の上に横になつてゐた。

「どうして脱衣しないのですか？」と余は訊ねた。

「何、何と仰言る！」と彼は急ぎ込んで、丸で何かに驚いた様に言つた。「飛んでもない！」

「どう言ふわけ？」と余は訊いた。

「だつて、不意に船が現れますよ」と彼は、吊床に腰を掛けて答へた。

「それがどうしたんです。直く行けば良いでせう」と余は言つた。

「いや、駄目です。裸になつてゐて、この仕事はどうして勤まります！ わしらは唯ベッドの上で横になつて眼を閉ぢてゐるだけのものです。「監守長、上へ」と呼ばれたときには、着物を脱いだり着たりしてをれますか！」

彼は自分の職務に重大な意義を付け加へずには居られなかつたことは、余には諒解された。彼は自身を哨所の歩哨と見做した。彼の生活の全意義はこゝにあつたのだ。仕事の重要性のこの意識は、何よりも彼を緊張せしめ、彼を鼓舞しそして生活を晴がましいものにした。斯う言ふ場合の幻想を打砕くことが果して来るものか？

翌日余は未明に起床した。マイダノフは着衣のまゝ寢臺に臥して、安らかに眠つてゐた。後刻余は、彼が夜間に二回燈明臺に昇り、サイレンを鳴らし、海岸に出て久しく海を觀測したと言ふことを知つた。彼が就床したのは未明である。この時「キャビン」へコドロスが入つて來た。余は監守長を起さないやうに彼に注意しようとしたが、彼はその暇を與へず、大きな聲で叫んだ。

「水路に船が現れました！」

マイダノフは直ちに起き上つた。そして深刻な面持で、帽子を冠つて海岸に出た。余はその後について出た。

風は向を變へ、既に陸地から吹いた。見下す海上には霧が切れ切れになつて懸つてゐた。恰も余らが高く山の上に居て、そしてその下方を雲が彷徨つてゐるかの様に感じられた。波の間隔は遠方のために見え、僅かに岸邊の白い緑髪によつて海の荒れてゐることが想像された。マイダノフは双眼鏡を眼に當て、暫らく水平線を瞥めてゐた。それから彼は自分のキャビンに取つて返し、始終むつかしい顔付きをしながら布製表紙の普通の雜記帳(それを彼は重々しく「當直日誌」と呼んでゐる)に、水平線にやつと認め得られた船が燈臺の側を通過した日、時及分を記入した。

「それは書込む必要があるのですかね？」と余は訊ねた。

「無論ですとも！」と彼は答へた。當直日誌には、例へば、天候、船の上で起る一切のこと、他の船舶はどう言ふ風に途中で出遭ひ、またどう言ふコースを取るかと云ふことの總てが記入されてゐる。

余はこの監守長を非常に尊敬した。大氣がスッカリ晴上つた時、余は自身の測圖を、一九〇二年にエム・イ・ジダンコによつて決定された天文學的地點(北緯四八度五八分三三・六秒、東經一四〇度二五分九・五秒—グリニッチ標準)に照合し、また持參の測時計の誤差修正を行つた。

午後の八時に余は「歸宅」の仕度にかゝつた。マイダノフは不安がり、余を最初の小河の邊りまで案内して呉れた。彼は



インペラトルスカヤ湖

八六
余の手を両手で握りしめて懇ろに再會を約し、余がインペラトルスカヤ(ソヴート)湖を訪れるときは、必ず彼の燈臺に来て宿まつて呉れるやうに頼んだ。余らは袂を分つた。

既に更けてゐた。空には月が昇り、その蒼白の光によつて涯なき海を照した。四圍は絶對的靜寂が支配した。空氣は微動だもせず空には一點の雲もない。自然界の萬象は感覺を失ひ、假睡状態に在つた。樹木の葉、老樅の小枝の苔、枯草及、眞珠の様な夜露の玉を飾つた蜘蛛の巣——總ては眠れる王女と七勇士のお伽噺に於けるやうに不動であつた。

二五分間余は處女地を行つたが、程なく林業會社へ通じてゐると思はれる小路を發見した。

小路のあたりには平な玄武岩の大きな塊があつた。余はその上に腰を掛け、自然を觀賞し始めた。夜は壯麗であり、余はそれを終生記憶に止どめ度いと思つた程であつた。軟かい月光に照らされた空を背景に、樹々の枝、梢及草がそれぞれはつきりと描き出されてゐた。

満月は天空から物思はし氣に眠れる地上を見下し、憂し氣な靜かな光によつて苔蒸した樅、白樺の白い幹及遠くからは巨大な惡婆若

しくは石化せる古代の怪物と見紛ふばかりの溶岩の大地を照らした。空氣は清く透明であつた。灌林、顯花植物、路上の砂地上の枯れ松葉、一言にして云へば、些細な凡ゆる物象は、日中に於ける様に良く見えたのである。余の近くには、ツングス野薔薇の有刺灌木林が、またその後にはハンノ木林及西洋杉の矮林が、更にその向うには忍冬屬及ソルベリヤが繁茂した。

日中の炎熱のまだ冷め切らない大地は空に熱を放散し、それが爲に多少蒸し暑かつた。豊かなこの靜寂、明るいこの月夜は穩やかに一種異様に氣持に作用した。余は樹脂の多い針葉樹の芳香の充ちた夜の生暖かい空氣を吸ひ込み、自然を楽しんだ。蕨蟲らしい或る甲蟲が、羽搏し乍ら強く余の顔に當り、地上に落ちた。それが草の中で動くのが聞えた。清淨な場所へ移らうと努めてゐるらしい。それは成功した。彼は鈍い音を立て乍ら空に揚り、何處か脇の方へ飛び去つた。余は立ち上り歸途に就いた。

約三〇分を経て密林は盡き、余は丘へ出た。前方、余の面前にはなだらかな廣い斜面が繰り擴げられ、白樺、樺、ヤマナラシ及落葉松の疎林が蔽つてゐた。其處には灌木林や高い草が生繁り、その中には澤山の傘樹があつた。右手には、燒跡と思はれる空地があり、左手には魔法にかゝつた様な默々たる森林が繁つてゐた。

余は一寸足を停めると共に、前方に何か怪し氣な光を認めた。何者か、燈火を持つて向うからやつて來たのである。「變つてゐるぞ。こんな明るい晩に灯を持つて歩く者がある」と余は考へた。

數歩過ぎて余は、灯は眞圓くて光が鈍いことに氣付いた。余はまた考へた。「奇怪だ！ 月光に提灯を下げて森を行くと云ふ考へは、想像出来ない」。

この時余は、明るい物が地上可なり高い所にあり、人間の背丈を遙かに抜いてゐることに氣が付いた。「何のことだ。提灯を杖に付けて持つてゐたのか」と余は思はず口走つた。

怪しい火は近づいた。土地は平坦でなくて路が若干上つたり、凹所へ下つたりしてゐたので、余の眼に寫つた様に灯も、怪しい通行者の動きに連れて、低くなつたり高く揚つたりした。余は立寄り、耳を澄ました。人は一人ではなく、どうも二人連れらしかつた。彼等は、當然、互に話し合つてゐなければならぬ……はずである。

然るに眞の静寂であつた。聲も、足音も、咳拂ひも、全然聞えなかつたのである。近づく人達を驚かせ度くないので、余は故意に大きく咳拂ひをし、次で或るメロデーを口ずさみ、そして再び耳を澄ました。絶對的靜謐は眠れる空氣を押し包んでゐた。それで余はジツと視すかして、誰だ？ と誰何した。何の返事もなかつた。フト余は、灯が路を外れ、脇へ逸れて余の左手の灌木の茂みの上にゆらゆらしてゐるのを見た。

余は氣味が悪くなつて來た。と云ふのは、それが生物であるかそれとも無生物であるか判り兼ねたからである。それは、拳二つ程の大きさの鈍い白光を持つ或る球であつた。それは、地形の凹凸に従つて緩やかに空を泳ぎ、地形が凹んでゐた所や植物が低く生へた所では下降し、土地の高くなつてゐた所や背高く灌木が繁つてゐた所では上昇し、同時にまた樹の枝や草との接觸を事毎に避け、そして各樹枝や梢や草を勉めて迂回したのである。

光る玉が余の側らに來たときは、余とそれとは十歩も離れてゐなかつたので、余は充分に觀察することが出來た。その外皮は二回破裂したかの様であり、そして同時にその内部には蒼白い明るい光が見えた。葉、草及木の梢は、火の玉がその側を近く通るときには、蒼白い光でボンヤリ照され、そして恰かも動き出すかのやうであつた。稻妻の様な球體は、糸の様な細い火の尾を曳き、それは場所を異にして時折微かな閃火を發したのである。

余は、限りなく澄み切つた空とそして眞の靜謐のもとで、直面するものゝ正體が球體の稻妻であることを識つた。各草々は、球體の稻妻と同様の電氣を帯びてゐたに違ひない。球體がそれらとの接觸を避けたのはこの故である。余はそれに向つて發砲しようと思つたが、少し怖かつた。

發砲は疑ひもなく、球體の稻妻が濡ふ空氣を震撼さすことだらう。そしてそれは、何らかの物體との接觸によつて無音に消滅するかも知れないし、また爆發するかも知れないのだ。余は釘付けされたやうに立竦み、動くことが出來なかつた。灯の玉は絶えず一定の方向に正確に移動した。それは余の路を斜めに横切つて丘へ登り始めた。そして途中で可なり高く舞上り、灌木林の上を通過して後、地上に下降し、次で丘の彼方に隠れた。

余には不思議な氣持が動いて來た。余は喫驚したが、またこの現象に興味を感じたのである。恐怖感に忽ち好奇心に變つた……。余は急いで踵を返し、丘へ駆け上り、火玉が最後に見えた邊りの灌木の側へ分け入つた。球體稻妻は見えなかつた余は暫くそれを眼で探し求めたが、何處にも發見することが出來なかつた。それは丸で水の中へ姿を消したかのやうであつた。それで余は路に取つて返して歸路に就いた。

日は幾分場所を轉じた。樹々の黒い長い影は恰かも巨大な矢のやうに見え、月は空で移動して、午後の九時に位置すべき地點にあつた。四圍の萬象は眠りにあつた。樹木の梢を通して路上にはレース状の影が落ちてゐた。余がそれに足を入れるや、直ぐにそれらは余の靴や服の上に這ひ上つた。

何か黒色のものが余の前方にチラホラしたが、それが獸であるか又は鳥であるかは判斷することが出來なかつた。余は眼に映じたものから始終深い感動を受けた。余には球體の稻妻が始終氣にかゝり、その後を追つて行つて消滅の機會をつき止めなかつたことが非常に悔しまれたのである。

一時間後に余は田舎道に出た。それは余を眞直ぐに利權租借地へ導いた。

月光を浴びた余らの露營の天幕は、蒼白に見えた。その傍らには辛じて火が燃えてゐた。余の従者たちは既に眠りにあつた。天幕からは和やかな聲がもれてゐた。誰かゝ寢言を言つた。余は靜かに自分の床に忍び入り、間もなく熟睡に落ちた。

第五章 オロチン

翌日の朝余は天幕から出ると、ハチ河から来た三人のオロチンに會つた。彼等はダクツイ・ポッチニ村へ来て欲しいと云ふ招待をもつて来たのである。彼等の中の最年長者はチョチ・ビザンカであつた。これは勇敢な獵師であり、大膽な船乗りでありまた立派な鍛冶屋でもあつた。銃の打發機を修理出来るのは僅かに彼一人であつた。彼は若者の頃、旅の或る宣教師から洗禮を受け、イワント命名して貰つた。青年時代には彼はワニキ・クズネツフの名で知られてゐたが、三〇才を過ぎるに及んで、再びイワンと呼ばれるやうになつた。偶々接した或るロシア人ミハイルも亦彼の教父であつた。年を取りチョチは頭に銀髪を飾るやうになつて以來、人は彼をイワン・ミハイロウイ・ビザンカと呼ぶやうになつた。余らは前通り彼のオロチン名によつてチョチと呼ぶことにしよう。

老人は七〇才近くであつたが、顔ではさうは見えなかつた。彼は丈は低く、頭は圓くて白髪が薄く縮毛であり、顔の輪廓は小さかつたが、深い皺はなく、皮膚は淺黒く、鼻下と顎には黒い小髭髯があり、手足は共に小さかつた。以上は、後に余が非常に交り厚くすることになる人間の若干の特徴である。彼は能辯家であるとは言へないが、しかし話し好きであつて、若い獵師たちの失敗に對してからかふこともあつた。それでも彼等は老人を愛し且尊敬した。余はコサツクに、オロチンたちにお茶を與へ、乾パンを馳走してやるやうに命じた。それは彼らにはこの上もない珍味であつたのだ。

夕方余はチョチを天幕へ招き入れ、そして彼から色々興味あることを聞き知つた。

翌朝余は手紙を書き、最近の便船でそれをウラヂウエストクに送るやう會社宛に依頼して置き、それからオロチンたちと共にハチ河へ出掛けた。例によつて例の如くに、河は河口附近では若干の支流に分れ、そしてそれを區切る、出来て間もない沖積土の島は、植物によつてまだ蔽はれてゐなかつた。

ダクツイ・ポッチニ村は、海から五軒離れた河の右岸の森林中に在る。當時こゝは六ヶの遊牧小舎があつた。余らは其處でマー、ウイ、ハチ及ツットーの諸河から集合して来たオロチンと會見した。樹皮で作つた小舎、枕の上の納屋、魚の干場を上に引繰り返した小舟、繫留した犬及様々の鳥獸類、總ては余には既にお馴染みのものであり、トムニン河の河口附近のダク村を想ひ出させるものであつた。

チョチは余を自分の小舎へ招待した。それは他の小舎に比して大きく且清潔であつた。こゝへは他の土民たちも集まつて来た。余らは爐の兩側に席を占めた。直ぐに小食卓の上には、乾魚、サクランボ、茶及焚火で焼かれた麥粉菓子が出た。運命に恵まれないこれらの人々の生活は豊かではない。彼等は余に助言による援助を乞うた。余は土民達に、余が何故にここを訪れ、何處へ行きまた探検の目的が那邊にあるかを説明し、同時に、アニイからフトまでの自分の旅行や舟の顛覆やまた一行が辛うじて飢餓から生還した模様を物語つて聞かした。

オロチンの中には若干の老人が居た。彼等は跣座して、樹皮の上に座り、非常に緊張して聞いた。そこで今度は、彼等がなほ幼年であつた頃の昔の生活情態に就て余の方から質問を始めた。老人たちは元氣づき、遠い過去の、殆んど忘れかけてゐる、在りし昔の……青年時代を懐古し始めた。それは次のやうであつた。

オロチンは昔は非常に澤山ゐた。オイ岬（デカストリ灣の南）から、アク（現ウスベニヤ岬）に至る沿海地方全體に亘つて、彼等の小舎は到る所に在つた。トムニン以北の韃靼海峡の沿岸に居住した者は、ビヤカ（フヤカ）と呼ばれた。一九〇三年にこのビヤカの中で残つたものは僅かに三人切りであつた。即ち、オゴムンカ族出のビンガウ及ツァチュとそしてポチンカ族出のトンチのみである。前者二人は同年に死亡し、ビヤカの最後の代表者はなほ生存し、フンガリ河畔に住居した。インベラトルスカヤ（ソヴエト）灣のオロチンは、アク岬以南（ポッチ及サマルギ河畔）に住んだ土民たちをキヤカと呼んだ。昔數

名のオロチョンが海豹狩りに出掛けたが、狩場の氷塊が岸から離れ、彼等は海へ流された。家族の者は彼らを死んだものと思つたが、運命は他の方法で彼らに生きること命じたのである。氷塊は樺太島に漂着した。オロチョンは上陸してクイニ河畔に居住した。一説によれば、これらの人々は舟にのたが、濃霧の際に海に道を失ひ、樺太島に漂着し、そこで永住したものである。一方この樺太からは、舟に乗つて七人の或る人たちが婦人と共に暴風雨で漂着した。これらの餘儀ない移住者たちはピサ入江（マヤチヌイ岬の若干南に隣接し、現在はフリシヴァヤと呼ばれる）に上陸し、其處で永住した。その後彼等の一部分はセオチオ島に移住した。斯うして發生したのが、セオチンカ族とピザンカ族とであり、それは後に更に二種族にアセンカ及ニヤンニクを派生した。同様に、オロチョンの意見によれば、ボ・エンズリ（神的至尊人）は人々を交換した。彼はオロチョンを樺太に送り、一方樺太からは他の人々を移住せしめた。オロチョンの話によれば、總てのピカは鬚を生やした。トゥムニンのオロチョンの中に、余は同様に澤山の鬚鬚を貯へた若干の人を見たのである。こゝではアイヌとの混血が行はれたことは疑ひない。

昔オロチョンたちは、海越え山越えた遙か彼方には他の土地が在り、他の人が住むと云ふ話を聞いた。明らかに、それは日本人、樺太島のアイヌ人及アムールの滿洲人を指すものであつた。彼等にはこれらの他國は、普通の人間では到底行き得べくもない程、遠いものと思はれた。オロチョンたちは漁撈に従ひ、矢で狩獵し、冬はスキーで獸を追ひ、槍で突き刺した。彼らは獸皮を纏ひ、魚の皮で着物を造つた。最も舊い部落はハチ河とトゥムン河とに在つた（フト・ダタ及ダタ）。當時イムベラトルスカヤ灣（ハチ灣とも呼ばれた）を支配するものは眞の靜寂であり、僅かに時たま黒鴨の物悲しい鳴聲がそれを破る位のものであつた。そして製材工場の響きも、汽船の氣笛も、樵夫の斧音も全く聞えなかつたのである。時折獵師の小舟がポツチリ岸邊に姿を見せ、また岬の後へ消えて行く位のものであつた。オロチョンたちはギリヤク人の存在を知り、またオリチイ人にも會つた。そして後者とは偶には往來し、眼玉の飛び出る程高い鐵鍋を彼等から入手した。これらの異種

人と交際する以前は、オロチョンの生活は斯う云ふ風であつた。先づ最初に滿洲人が現れた。彼等はハンシン（玉蜀黍から醸造した酒）を持ち込んで來たが、商ひをせず、單にオロチョンに御馳走しただけであつた。滿洲人の渡來は非常な騒ぎを捲き起した。彼らに對する噂は、沿海地方全體に擴がつたのである。それまで見たことのない新來者を見んものと、オロチョンたちは押し寄せた。彼らが火繩銃を持つやうになつたのはそれ以來である。滿洲人は黒貂をガツガツして集めた。オロチョンたちはその皮を貴重なものと思はず、寧ろ穴熊の皮をより貴重なものとした。數年経つた。彼等は滿洲人に慣れ、毎冬彼らを持つことが習慣となり、また彼らから火藥、彈丸、鍋、斧、硝子の飾玉、卸、針及その他の貸付けを受ける様になつた。然るに或る日のこと、顔色を變へて人が驅け込み、海に異變があると云ふことを注進した。それは早朝の出來ごとであつた。オロチョンは海岸の砂洲へ出て、魚でもない、鳥でもない、海獸でもない何か大きな變なものを發見した。それは側を通過して、グイチ岬の彼方へ姿を隠した。一夜中彼らはシャーマン教の祈禱を行ひ、惡魔を追拂つた。翌日再び同じものが現はれ、三日目にはオロチョンたちは、翼を持つ怪物が眞直ぐに岸に向つてやつて來るのを、おのゝき乍ら見た。それは船ロシヤ最初の船員であつた。オロチョンたちは、船からボートが卸され、その中には六人の人間が乗つてゐるのを認め、オロチョンは驚いて森林へ逃げ込んだが、これはあの世からの渡來者ではなく、彼らと同様な人間であり、單に他國から來て不明の言葉を使ふだけの人間であると云ふことが判つて、始めて家へ歸つた。新來者たちは土民らに、魚を購め度いと云ふことを説明した。オロチョンらは若干の鮭を與へたが、ロシヤ人はそれに對して彼等に貨幣を與れた。土民たちは、貨幣とは何であるかの知識がなく、暫く手の中で廻して小供らの玩具に呉れてしまつた。それでロシヤ人は彼等に色のついた若干の石鹼を與へた。オロチョンはそれを食つてみたが、美味いものでないことを見て犬に呉れた。犬は嗅いで見て、同様に相手にしなかつたのである。然るに一方海が荒れて來た。帆船はインベラトルスカヤ灣へ去り、上陸したロシヤ人らは夜營するため残つた。オロチョンたちは夜通し寢ずに、怖ろしい「ロツツ」（彼等はさう云ふ風にロシヤ人を呼んだ）の見張りをした

朝になつて暴風は静まり出した。船は引返して来た。船員たちはオロチンたちから更に魚を購めて全部海へ去つた。間もなくインペラトルスカヤ灣には一度に三隻の船が訪れた。一隻は大きく(三橋戦艦「バルラダ」)そして二隻は稍小さく、それらはアグ(コンスタンチノヴスキイ)灣に久しく滞泊した。程なく何ごとかが起り、ロシア人たちは動揺した。彼らは長い溝(塹壕)を掘り、保壘(砲臺)を築き始めた。二隻の船は去つたが、大きいのは残つた。それからオロチンたちは、ロシア人が船を焼拂つた様子に就て物語りを始めた。これらの物語は興味ある内容を持つてゐる。それは冬のことであつた。最初は氷が船の廻りをブチ毀したのである。彼らが「サグド・イ・チクタ・ミ・オツァニ」(銅製大砲)と呼んだ加農砲として價值あるものゝ總ては、ロシア人によつて地下(誰にも知られない)へ埋藏された。次で船には火事が起り、火焰に包まれた船は沈没してしまつた。オロチンは、戦争を全然知らない民族であつて、ロシア人が何故にそれを毀ち、焼き拂ひ且自沈せしめたかを、全然理解することが出来なかつた。海員たちは立去つたが、船が以前に雄姿を誇つた場所には、僅かに大きな洞窟がかすかに見えるのみで、その上には氷塊や燃え残りの薪が流れた。春になつて一度に十一隻の船が這入つて来たそれはまた別の人間であり、異なる服装をし、全く他の言葉で話した(英佛聯合艦隊)。彼らはコンスタンチノヴスキイ灣のロシア人の建物を焼き拂ひ、大火事を出し、そしてそれが爲に多くの森林が焼けた。數年後にインペラトルスカヤ灣には再びロシア人が現れた。破壊された哨所には二ヶの兵舎と二棟の倉庫とが建設された。冬期にロシア人たちは食糧難に陥りそして彼らの多くは死んだ。その頃から「ロツ」はコンスタンチノヴスキイ灣を永久に立去つた。

氣付かぬ間に時は刻々と過ぎたが、老人たち一同は在りし昔を偲び、恰も青年時代に再び立返つたかのやうであつた。その聲は活氣付きそして顔は輝いてゐた。

この時若いオロチンが小舎へ入り來り、ロシア労働者に乗せて舟が近づいて來たことを傳へた。それらは鋸と斧を携へて森林を伐採し浮送りにするためにハチ河を遡るのであつた。老人たちは元氣を取戻し、席を起つて靜かに各自の家路に就いた。

余は上衣を着て戸外に出た。暗い霧深い夜は地上に垂れ籠つてゐた。小舎の屋根の小孔からは、光に照らされた煙と共に火花が飛んだ。河ではロシア人の話し聲と罵言とが聞えた。風は海から尾を曳いた低い響を傳へた。それは汽船の鈍い唸り聲であつた。

余が小舎に歸ると、既に皆は寝てゐた。余には熊の皮が當てがはれた。余は靴を脱ぎ、上衣を枕にし、毛布にくるまつて寝た。

第六章 海岸を縫つて

余らは九月十日から旅行の準備にかゝつた。余は採集したコレクションを整理し、冬期保存のために箱に詰め、秋の航海にとつて必要なものを選択し、また従者たちは天幕を縫ひ、靴を調へ、通譯はオロチンの所へ雇舟の交渉に行つた。出發の日取は、天候の如何に拘らず十七日と決定した。

出發の二日前に一人のオロチンが余らの露營を訪れた。彼は靜かに天幕に入り來り、掛けさせて下さいと言つた。年の頃は四〇才であつた。そして脊は低く、すんぐりして體格は頑丈であつた。平べつたい頭頂と太い頸を持つ圓い頭、高い額、幾分出張つた頬、顔の薄い毛、それが余の先づ最初の眼にとまつたものだ。彼は髪飾を持つてゐなかつた。太い辮髪に結つたコールタールの様に黒い濃い毛髪は、帽子代りにもなれば、頭の雨避け日避けにもなつたのである。彼は絶えず片目を瞬いた。これは彼が幼時から持つた習慣であつた。彼の服装は他の凡てのオロチンと同様であるから、こゝでは説明するに及ぶまい。

來訪者は問ひかけられる質問に對して、狽てずに落着いて答辯し、屢々簡單に「ハイ」と「イ、エ」とで済ましたのである。彼の言葉から餘が知つた所では、彼はコビ河に居住し、餘らの到着を耳にし且ハチ河でチョチ・ビザンガが全部の會合を開くことを知つて、インベラトルスカヤ灣へ態々出向いて來たのだ。ところが會合は済んだ後だつたのである。今彼はコビへ歸らうとし、案内役を引受け度いと申出た。問題は余が僅かに一隻の小舟を持つのみで、第二船を何處か途中で求めなければならぬことであつた。余の話相手は荷物は舟に積んで海路で送り、余らは徒歩で山を越えてコビ河へ行くやうに勧めた。そして彼の宅には提供してもよい餘分の小舟が一隻あることを語つたのである。

「お前は何と呼ぶんだね？」と余は彼に訊ねた。

「カルブシカ」と彼は答へて、一層強く眼を瞬いた。

この人なのだ！ この人が優秀な船乗、優秀なスキー飛脚として知られたカルブシカなのだ。サマルギ河までの海岸を彼以上に詳しく知る者はない。ボロ小舟に帆を揚げて彼以上に巧みに航海し得る者はない。舟が着き得る場所、危険な岩の在る場所、夜營にとつて好都合な入江の所在、魚掬で魚を突き得る場所を彼は知つてゐる。カルブシカは獨自の氣象學、即ち自分の諸標識を持つてゐる。明日の天氣は如何であり、波は如何であり、風向はどう云ふ風であり、そして海に出れるか如何かを彼は心得てゐる。カルブシカは最も老練な馭者としても知られてゐる。他の者が扱へば横犬は最初は甘く驅けるが半途でヘトヘトになつてしまふ。彼が扱へばそれらは全行程を同じ調子で驅けるのである。奇妙に犬は彼の手にかゝれば、一度に慣れて互に咬合はず、馭者カルブシカの命令することを正確に理解するのである。

九月二十七日余らはインベラトルスカヤ灣を發つた。日はどんよりと灰色であり、雨になりさうであつた。既に夕方から、それまでは動かずに岬の上に懸つた霧が急に上昇して密雲になつた。それらは地上に低く下り小山を半分以上も隠した。晴雨計は下つた。

「悪くなるやうですよ」とカルブシカは言つた。

「止まつて天氣が恢復するのを待つべきぢやないか？」と余は訊ねた。

「いや」と彼は答へた。「舟をマフツァ入江へ送らねばなりません。向うでわしらを待たせて置ませう」

余は彼の言ふ意味が判つた。彼は靜かな場所を利用して、荷物と一諸に舟で南へ出來るだけ進みたかつたのである。序でに言へば、シホタ・アリン以東の沿海地方は秋の季節は常に長いのである。ウスーリの右側諸支流域が降雪して凍結し始まる頃でも、沿海地方は水がまだ凍らない。日中は暖かいからルバシカ一枚で行くことが出来るが、太陽が地平線に没

すると忽ち露が他のものに變りまた水溜は薄氷で蔽はれる。夏のモンsoonは秋分が過ぎると直ぐに北西の風に變り出す。それは大陸から吹きつけるから、海は海岸の斷崖の蔭では比較的靜穩であるが、その代り河口の附近や、河谷が風向と一致する所では、時には二三日間引き続き、風になるのを待たねばならぬ程突風は烈しいのである。かう云ふ場合に舟で行くことは非常に危険である。

余はカルプシカの忠告を参考にし、充分警戒して進むことにした。

小路が余らの進路であつた。それを行くことは難澁であつた。角石、泥濘及水溜は、歩行を困難ならしめた。余らは向うから来る三頭の瘦馬を連れた山番に出遭つた。彼らの馬は絶え間なく躓づき、前脚を折り、苦しく喘ぎ、樹根で出来た網目の中を難儀さうに足を拔差し乍ら過ぎて行つた。

ニコライ岬に登り、ト・ムニン河の方面を眺め、次で眼を南方に轉ずる場合眼につくものは岸の構造に於ける相異である。灣より以北はそれは玄武岩より成る。相並んで岬は長い舌状に海へ突出してゐる。それらはこゝでは低いテーブル状に見える。其處では海岸線は良く發達し、岬と岬との間には非常に好都合な入江及灣入が出来てゐた。南方は趣きを異にしてゐる。花崗岩の大山脈ドコが海岸に平行して走り、そしてその走向の軸に沿つて所々洗はれてゐる。玄武岩殻と花崗岩脈と接觸する境界はト・ルジュニク入江である。水が澄んでゐるから上から見れば、廣い海中段丘が同様に花崗岩から成ることが判る。

結晶地狀岩脈の白味がかつた色は、陸表に於ても海中に於ても、見誤る惧れがない程特徴的である。

ドコ山脈の斜面の植物の成長する地層は貧弱である。稀薄な瘦せた植物はその養分を地に辛じて求めてゐるに過ぎない。樹根は表面に擴がり、露出しそして干上つてゐる。風が樹を搖振るので、枯木は早く枯死し、そして立枯の姿で残り、沿岸の邊緣を廣い枯木地帯で飾つてゐる。マヤチヌイ岬を過ぐれば直ぐに屈曲の乏しい海岸線が在り、バザルナヤと呼ばれた入江らしいものを形成してゐる。

こゝでは斷崖の構造は花崗岩の上に大礫岩層が在り、その上に氣泡を含まない玄武岩の緻密な薄層がある。

路は針葉樹林の中に通つた。余は樞の枝が水平に成長せずに、樹幹に對して銳角をなしてゐるのに目をこめ、カルプシカに、どうして斯う言ふ風に垂れ下がるのかと訊ねた。

「スアラ（北東の風）が吹けば、水分の多い雪が澤山降り、次でそれが凍つて枝を下へ押し付け、絶えず、年毎にさう云ふ風にされるからでさ」とオロチンは答へた。

説明はまことに直明であつた。

夕方の五時に餘らは獵師の土小舎に着いた。それは不潔な濕々した古い荒屋であつた。路はこゝから西へ轉じたが、余らは海岸を傳つて南へ進む筈であつた。薄暮の訪れと共に雨になつた。天井の造りの粗相な土小舎の屋根は、到る所雨漏りであつた。余は一晚中寝ずに、あちらこちら轉々として乾いた場所を探し廻つたが、何處でも一様に濕つてゐた。斯うして余らは朝まで苦しみ通し、再び出發することが可能となつたときにはホッとされた。天氣は悪く霧が深かつた。カルプシカは先頭に立ち、一本の倒木から他の倒木へと野人の身軽さで跳び渡つた。彼の黒い頭髪を傳つて水玉が脊及肩へ流れたが、彼は火して氣にかけなかつた。

余らが上に登るに従つて、風は一層烈しくなつた。峠を越すと急な勾配の坂となつた。左側からは霧を透して岸を洗ふ海波の響が傳はり始めた。そして一步一步毎に益々響は大きくなり明瞭になつて來た。灌木や樹幹を手で掴み、余らは困難を冒して或る泉に下り、それを傳つてマファツァ（尊敬すべき老人の意）河の河口へ出た、荒れ狂ふ大洋は怖ろしい姿であつた。巨浪は咆吼しながら貝殻や昆布類の斷片の散在する岸邊に殺到した。水は汀の岸縁の最頂上まで飛沫を上げた。第二の波は、第一の戻り浪と衝突し、熱湯のやうに泡立ち、更に大きな憤怒をもつて岸へ殺到した。海水が下へ引いて行くと一瞬靜寂となつたが、岩は大きな不平によつて再び抗議を表明した。斯くして年から年に亘り、幾世紀に亘つて……。

オロチオンたちは舟を成る可く遠くへ引摺り上げた。そして棧や竿で二斜面の天幕の骨を造り、それに帆布を張った。濡れた流木は燃えが悪く、非常に煙った。犬たちは舟の下に這入り、圓くなり、息吹で保温することに勉めた。斯う云ふ天気は夜は一層暗く、雨は一層烈しく、岸打つ波の響は一層物凄いやうに思はれる。

夜半過ぎに風は幾分静かになつたが、雨は倍加して烈しくなつた。余は夢うつゝに、それが堅く張つた天幕の亞麻布を叩くのを聞いた。オロチオンは寝ずに、交代で始終焚火に薪を入れた。翌日は雨は止んだが、再び冷たい風が出て来た。海には再び白波が荒れ狂ひ始めた。

不幸にも余らは、租借地に旅行用薬品類とそして動物採取にとつてそれ程必要なホルマリンとを忘れて来た。如何にすべきか？ 余らを援けにかゝつたのはカルプシカであつた。彼は悪天候を冒して海路を舟で灣へ赴かうと決心したのである。彼が連れて来た二人のオロチオンは、直ちに出發の仕度に取りかゝつた。彼等と一語にウィフロフも同道した。

余を不安ならしめたのは、こんなに烈しい碎け波時に彼らは如何して岸を離れるかと云ふ問題であつた。カルプシカは先づ最初にオロチオンたちに命じて、大きな石、但し圓石ではなくて角石を十ヶ程持つて來させたが、自分は流木を拾ひ集めて斧でその枝を拂ひ始めた。用意が整つた時、彼は舟の中へ石を出來るだけビツたり喰付けて積み始めた。それから彼は流木を岸邊に並べ、その場で漕手を舟に乗り込ませ、そして自分は岸に居残つた。機會を待ち、轟音を伴つて最大の波が汀に崩れ来て、それに次で暫時の休止が來た時、彼は錨網を一時に弛めた。舟は自身の重さによつて小艇の上を急スピードで海中へ滑り込んだ。それが岸からスッカリ離れ去る頃合ひに、彼は棒を砂上に立て、舟の體へ跳ね飛んだ。けれ共この時第二の巨浪が押し寄せた。舟は錨先を上に乗せ、四五度以上に傾いた。大丈夫！ 舵はその道の達人の手中にあつた。非常な衝動にも拘はらずカルプシカは踏み止まつた。風は彼の長い髪を吹飛ばし、飛沫と泡沫は彼の眼にかぶさつたが、彼はそれらを意に介さないものゝやうであつた。錨先は再び上へ揚り、次で體が揚つた。カルプシカの姿は浪頭の上に現はれたり、全く水

に隠れ去つたりした。彼は余らに手を打ち振り、そして漕手たちに何ごとか叫んだ。オロチオンの一人は舟から石を取り棄て始め、また他の者は帆を揚げにかゝつた。舟は見る見る間に遠ざかり出した。余らは暫くそれを眼で追つた。五分後にはそれはかすかな一點になり、次で全く浪間に姿を没した。

ボツボツ降り出した雨は、余らを天幕へ引き返すことを餘儀なくした。夕方には再び嵐になつた。またもや豪雨が襲來した。カルプシカは無事にマヤチヌイ岬を廻ることが出來たらうか？ 海は一晩中荒れ狂つた……。

二日後オロチオンたちは無事に戻り、藥品、新しいパン及野菜の丸一箱を持ち歸つた。九月二十日余らは、マフツァ河と別れを告げ、順風に乗つて、コビ河の注ぎ入るアンドレヤ入江に向つた。

海岸はマフツァ河の河口附近から南東に曲り、ベスチャンヌイ岬まではこの方向を保つてゐる。この全長では凝灰岩が結晶塊状岩脈にとつて代つてゐる。その層は大部分水平に横たはり、僅かに所々であれやこれやの側へ若干の傾斜を見せてゐる。それらは濃い着色を持ち、就中岸から若干遠ざかる場合、美しい眺めである。

途中インベラトルスカヤ（現ソヴエト）灣とグイチウ湖との間には、同様花崗岩から成るオフロバヤ山が聳えてゐる。

この海岸を構成する岩脈は、堅牢なるにも拘らず、矢張り崩壊してゐる。出來て間のない海岸の洞門はそのことを立證してゐる。それは三ヶ在り、二ヶはマフツァ河の附近にそして一ヶはオフロバヤ山の最寄りに。

グインチウ河附近には澤山の鳥がゐた。魚が居た。太きな海鷗とそして太平洋クルーシヤ（鷗の一種）とは群をなしてそれを追つた。彼等は鳴きながら全部一度に飛び上り、暫くの間空を廻つて後再び水に下り、絶えず交互に飛び交はした。それらは海上が雪で覆はれたやうに見える程澤山ゐた。鷗は驚く程均齊のとれた鳥である。それらは驚くべき輕快さをもつてゐて水に浮びそしてまた輕々と空へ揚る。彼等は非常に高く飛翔し、猛禽類と同様に、翼を動かさずして高く舞ひ上ることが出来る。彼等がコケティツシュに水を泳ぎ、海面に腹部が着くか着かないか位に軽く水に浮び、またそれが、恰好の良い脚で

岩の上に立ち、側を過ぎ行く舟を平靜に眺めるところは、正に優美である。

或る大鷹が一羽の鷗を追駈け始めた。それが水に降りると、大鷹はそれを追はずに空高く舞上り始めたが、鷗が空に飛立つや、再びその後を追駈けた。それで鷗はまたもや水に下り、一方大鷹は再び圓を描き始めた。鷗が水に降りたとき、大鷹は何故にそれを捉へず、また最後に何故にその他の鷗は驚愕を示さなかつたのであらうか？ 大鷹は水を怖れたことは判るが、然らば何故にそれは單に鷗の一羽のみを追ひ廻し、また他の鷗たちは空を自由に飛翔して鷹には注意を拂はなかつたのであらうか？

マルツイン（鷗屬）は幾分離れた所に居た。それらはゆつたり構へ、魚には大して興味がなさうであつた。マルツインは中位大の鳥であり、撃ち取るか掴へて見れば、その大きなことに驚くのである。

余は鷗の中に海燕屬をも見付けた。それらは驚くべき軽快さで空中を翔け、飛びながらその美しい頭を絶えずあつちこつちへ振り向けた。その長翼のために、向ひ風は障害にならない様であつた。何か、海燕屬を南方へ誘つた。それらは一日中單にこの方向にのみ飛翔し、反對の方向を取るものは一つもなかつた。

午後には風向が變り、向ひ風になつた。そして烈しくなり、大浪を捲き立て始めた。それで余らは岸へ漕ぎ寄り、グイチウ河の附近に上陸した。

悪天候は更に一日余らを足止めせしめた。日没の頃にカルブシカは沿岸の懸崖に登り暫くの間地平線と空とを觀測した。全く暮れた頃、彼は歸つて来て、明日は未明に出發することが出来るやうに、早く就眠しなければならぬことを告げた。夕飯後余は余の寢床となつた山羊皮の上に臥して毛布をかぶつた。外部からは岸打波がリズムカルな響を絶えず傳へ、そして薪の焚火の燃えるのが聞へた。カルブシカは地震の話をした。それは三年前に起つたのである。それはト・ムン河でも、インベラトレスカヤ灣でも、コビ河でも感じた。最初に地下の鳴動が聞え、續いて湯沸の湯が零れる位に土地が揺れた。海

岸のあちらこちらには地崩れが出来たのである。彼はそれから更に何か興味ある話をしたが、余はたまらなく眠かつた。眼は獨りでに塞がつた。余の隣人の鼾は他の人達にも眠氣を催さしめた。數分後には露營地はスッカリ靜かになり、犬も亦寢入り焚火はスッカリ消えてゐた。

翌日カルブシカは、實際に、非常に早く余らを起した。

未だ夜は明けなかつたが、既に星によつて、太陽が程なく昇ることが察せられた。夜の間には海は著しく穩かになつた。波は優しく岩の上に跳ね上り、殆ど音を立てずに退いた。

お茶の後余の従者たちは素早く舟の仕度にかゝり、勇んで櫂をとつた。余は毛布でびつたり身體を包み、明け行く海を觀察し始めた。

船の右方は、總て有色凝灰岩及熔岩から成る岩ばかりの高い斷崖であり、左方は眠れる大洋であつた。それは逞しい胸で呼吸し、大うねりの上で舟を上げたり下げたり弄んだ。

グイチウ河の附近は凝灰岩の層は下垂状を示した。若干遠方から向斜を看取することが出来、背斜の空の鞍状を鮮やかに認めることが出来る。チ・マキ岬を廻つて、余らの舟は岸に接近した。現在は詳細に觀察することが出来た。大氣現象の作用によつて砂岩には多數の深い洞穴が出来、薄い分壁によつて仕切られてゐた。その中には海鳥、就中アビ及ウミガラスが巢を造つた。一層下部では他の一聯の浸蝕が行はれた。波浪は洞窟や巨大な釜様のものを鑿脈に穿つた。水は岩の鋭面を滑かにし、それらを奇妙な様な輪廓に造り上げ、土民たちの空想に豊富な材料を與へた。

チ・マキ岬を廻れば沿岸の小山は、石英斑岩から成る傾斜せる廣い崖の特質を示してゐる。

余は海岸を撮影せんとて、櫂を水から揚げるやうに命じた。そして寫眞機の調子を良くするのに、十分間忙殺された。余らが漕がなかつたにも拘らず、舟は岸に沿つて依然前進した。余らは流れに委した。それは日本海の一級海流の分脈であつ

たのか、それとも海水を入江（海水が海岸に沿つて南へ流れる）へ驅り立てたモンスーン（季節風）の結果であつたのかは余には判らなかつた。

余らは午後インノケンチャ入江に着き、其處で大休憩を行つた。ヴィフロフ海岸に上陸の際に原始軟體動物を發見した。それは子供の掌位の大きさの長卵形の核を二分したものの様な形であつた。カルブシカはそれを「ボモ」と呼び、生食するこゝとが出来ると言つた。次で彼は小刀で、薄バラ色の長胚種の形を持つヒトンの腹の足を切り裂いて、うまさうに喰ひ出した動物の脊部は、並列する若干の小扁平骨とそして表面を覆ふザラザラの皮とから成る。余らの案内人の言葉によれば、この小骨は非常に鋭く、極めて容易に手を傷つける。余はすぐその場で、そのことを體驗したのである。余らは休憩を切り上げねばならなかつた。海の北東部が暗くなり出し、「ブネラ」風が出て來たのである。それは毎年この頃は非常に厳しくなる。

カルブシカの忠告によつて、余らは湯沸しの湯が沸くのを待たずに、それを地上に明けて舟に向つた。

インノケンチャ入灣からコビまでは、高々七軒である。余らは帆を揚げてこの距離を非常に速く突破した。

コビ河々は遠方からは見えない。それは森林でうまく覆はれ、僅かに砂洲に於ける岸波が、淡水の海へ注ぎ入る場所を示してゐるだけである。

コビはアンドレフ入江の方面では（海岸線の乏しい屈曲を入江と稱するとは云へ）荒涼たるものであつた。

海の附近でオロチンが住むのは單に夏の魚獲期のみであり、秋寒冷の訪れに連れて河の上流へ去る。其處には冬小舎があり、彼等は其處で狩獵と黒貂狩に従ふのである。

【註】コビ河には現在ロシア人の大部落がある。

黄昏には風によつて霧が起り、再び小雨になつた。悪天候は余らを二日間逗留を餘儀なからしめた。この間に余は二つの

少見學を行つた。一年のこの時間は天氣が變り易く、海へ遠出することは避け小舟で速く行くのは全く平穩な時に限るのである。余は第一日はカルブシカとチャン・バオと共に海岸へ出掛けた。コビ河の河口附近の岸壁は細かい飛砂から成り、それは僅かの風によつてさへも運動を起すのである。波の飛沫がとゞかない所には、粗雑なスゲ屬とそして野薔薇の灌木が成長し、更に高い所には丈の低い落葉松が成長した。その蔭には漢字をしるした二本の墓標が在る。これは異郷で死んだ日本漁夫の墓である。畸形に育つた樹木、落葉、枯れた草、今にも降り出しさうな陰氣な空は憂愁をそゝつた。

余らはこゝでは長居せずに眞直ぐに海岸の汀へ出た。

最初に余の眼にとまつたのは、夥しい貝殻類である。小甲殻類はそれらを軟體動物から奪ひ、また風、太陽及雨は漂白することに努めた。内部は、眞珠母層を美しくとゞめたが、外部は角質が剥げかゝつてゐた。これらの貝殻に混つて、小皿位の大きさの大きな扇形の殻が在つた。それらの間には、少し小さいが麗しいローズ色をした他の扇形の殻が目を惹いた。或る場所でチャン・バオは、俗間にはナマコの名によつて知られる貝殻を二ヶ發見した。それらは青灰白色を持ち、外部は小水生隠花植物で蔽れたのである。丁度其處の砂洲には、河から海へ運ばれ、波浪によつて岸邊へ投げ返へされた流木が打ち揚げられてゐた。若干の木質断片は砂上に横たはり、他は海草に混つて砂に埋まつてゐた。

一本の断片が余ら全體の注目を惹いた。其れには木質纖維よりも大きな孔があつた。余は船食蟲の穿孔細工であることを知つた。それは博物館へ飾つておく價値のある美しい珍品であつた。

流木の中には鯨の骨もあつた。大きな顎、肋骨及各個一五―六疋の重量ある椎骨塊。チャン・バオは断片の一ヶを手にとつた。カルブシカは狼狽に彼に近づき、砂上の骨を動かさないやうに頼んだ。何のことか譯が解らず、支那人は肋骨を脇へ投棄した。オロチンは急いでそれを拾上げて注意深く以前の場所へ置き、前にあつた地位に正確に置き直した。

「何故に鯨骨を動かしてはならないのか？」と余は訊ねた。

「それをおもちやにしてはいけません」とカルプシカは答へた。「動かしてもなりませんよ、海が祟りますからね。いつまでも海が荒れて、そして今でなくとも、その内には必ず酬いがありますよ」と。

チャン・バオは脇へ立去つて岩の土に腰を卸した。彼の顔色から推して余は、彼が不興であることを知つたが、彼をなだめてカルプシカに對して立腹しないやうにするには可なり骨が折れた。

歸途余らは海上の怖るべき暴風に就て話し合つた。北部の支那人はそれを「グ・フィン」と、また南部の支那人は「タイフウ」と呼ぶのである。それらは普通南支那海に發生し、日本の南の島を通過しカーヴして、時には朝鮮及ウラヂウ・ストックを捲席し、稀には樺太島やオコトツク海に及ぶこともある。この颱風は怖るべきものである。それは都會を破壊し、船舶を沈没せしめまた人命的犠牲を伴ふのが常である。

この暴風の原因は、支那人の意見によれば、少しも鯨ではなくて、龜である。龜には小龜と大龜とがある。前者は二―三百年の齡を保ち、單に雨天を呼ぶに過ぎないが、後者は一千年の齡を保ち暴風雨の原因となる。何處か南海には、その齡一〇萬年以上を經る大龜が棲んでゐる。それが颱風を呼ぶのである。龜を玩弄したり、それを裏向けに引繰り返してならないのは、その故である。人々は、誰か、龜に親しい態度で接すると、その度毎に暴風雨が襲來し、またあれやこれやの祟が來ると云ふことを認めた。

夕方には風は暴風雨になつた。空は再び黒雲で掩はれ、雨が降つて來た。カルプシカの小屋は可なりガツチリ建てられ、何處も雨漏りはなかつた。

外では嵐が唸り、雨は矢の様に降りそそぎ、土民の素朴な住居の壁に吹きつけた。余はカルプシカに海岸に沿ふ道を更に訊き度かつたが、彼は早く寝込み、また余の従者たちも彼に習つて仕舞つた。

未明に余は眼覺めた。月は沈まんとしてゐた。小さい星群は旭光に邪魔されることを避けて、急いで消えた。地上には冷

たい露があり、裏枯れた草、落葉、岩及海岸に打揚げられた流木を雨の様に濡らした。

余の従者たちは、とり分け深く寝入るのが常であり且起きたくもない未明の甘い眠りから覺めるとも見えなかつた。焚火はとつきの昔既に消えてゐた。睡眠者たちは互に抱き合つて毛布をビツたり掛けてゐた。東の水の果に紫紅色の光の矢が現はれた。それは段々擴大し、恰かも遠くの火事の天映の様に雲を染めた。

余が認めた最初の生物は海鴨屬であつた。彼らは岸邊の水を泳ぎ廻り、絶えず水中に潜り、河底から何かを漁つた。早瀬では魚が跳ねた。遠くの枯落葉松から尾白鷺が飛び去つた。強力な翼をばいに張り、それは獲物を求め乍ら河上をゆるやかに飛んだ。黒いセキレイ屬が何處からか急に現はれた。そして石から石を飛び廻り、始終長い尾を振つた。

小屋で最初に眼覺めたのはカルプシカであつた。飛んで來た寢間着に附いた焚火の灰を拂ひのけ、彼は急いで靴を履き、寒さに縮み上つて大馬力で火を起こしにかゝり、焚火に薪を燻べ初めた。直に煙が揚がり、續いて火が燃え上つた。オロチンは火の上に湯沸しを懸け、余の従者を起こしにかゝつた。騒ぎを聞きつけ、人々を見て鴨は水潜りを止めた。後ろを凝つと眺め、彼らは急いで河の向う側へ渡り、再び潜り始めたが、既に以前の様には吞氣ではなかつた。水から出ると、その度毎に身震るひして不安氣にあたりを見廻したのである。

他の小屋も同様に眠りから醒めた。屋根の煙出の孔からは煙が立昇つた。隣家の最寄ではオロチン婦人が、蹲まり、擔の上で魚を洗つてゐた。二匹の小犬がその向う側に坐り込み、耳の尖つた頭を横に傾け、彼女の手つきを一心に見つめ、そして投げ與へられる贈物を敏捷く口で受けとめた。

朝飯の後余らは舟の仕度にとりかゝつた。

カルプシカは最早余らと同行せず、自分の代りにオロチンのサヴシカを送つてよこした。それは無口な温順な三五歳の男であつた。

太陽が昇る頃には、余らはコピ河から既に遠く離れてゐた。岸に舟を着けしないで、サヴ・シカは人々に小休憩を與へた。幅廣の大うねりは大洋の静かな水面をかすかに揺り、同様穏やかに舟を一つ場所で持上げたり下げたりした。

射手とコサツクたちは、煙草を喫み、座席を移り、より便宜に荷物を積み直した機を取り替へた。

正に昇らんとする旭光に照し出された沿岸は、美しい限りであつた。コピ河とサンドマ岬との間は、粘板岩で出来た高い岩石海岸で在る。それを経て一・五軒行けば他の型の海岸、即ち二つの淡水湖（北湖は南湖より大きい）を有する平坦な海岸が海に臨んでゐる。それはベスチャンヌイ岬で終り、續いて方向を南西に轉じてゐる。更に一言添へるならば、岬を廻つて直ぐチャルギエンサ河の河口の左側には、可燃性硫黄の薄層が露天に露出してゐる。

海岸附近のあちらこちらに尙停滞した霧は、解消して山間の狭谷に隠れ去つた。

サヴ・シカは自然界の美に對しては大して關心を拂はなかつた。彼は既に昔にそれらに慣れてしまつてゐた。他の現象、即ち水平線の黒い一線が彼の注意を奪つた。それは風であり波濤であつたのだ。

正午近くに余らはアワ岬を通過した。次のウスベニヤ岬——余らの今日の航行の最終點——までは大した距離ではないが、でも急がねばならなかつた。黒い線が次第次第に大きく擴がり始めたのである。

漕手は力一パイ漕ぎ、舟は快速に滑つた。三〇分後には風は微かに吹き初め、舟先はビタビタと音を立て始めた。そして直ぐに波が高まり出した。逆風は強くなり、漕ぎ手は一層困難となつた。間もなく白い浪頭が立ち始め、舟は飛沫を浴び出した。ウスベニヤ岬はつい其處だ。モウ二百歩で安全地帯である人々は全力を盡して、この眼と鼻の距離を大急ぎで乗り越えんとした。岸から打返へす浪は沖から寄せる浪と衝突して玉と散つた。

余はサヴ・シカを一瞥したが、彼の面には不安の色も狼狽の色も見えない。遂に余らは岬と肩を接した。と不意に余らの眼には思ひがけない光景が映つた。難破した大きい汽船が海岸の最寄にあつたのだ。更に數分、更に數漕ぎ、舟は難破船へ

ドヴァング」に近づき、それを楯に風下に入った。

汽船は船首を北東に向け、幾分海岸の方に傾いてゐた。それに護られて余らは靜かに岸へ漕ぎ寄つた。

「ヘドヴァング」は一五年前に坐礁した。これはノルウェーの汽船であり、處女航海に就いたものであり且極東領海へ訪問したばかりであつた。それは、貿易商チェーリン・エンド・コンパニーに備船され、諸種の貨物を積載してウラチウストックからニコラエフスタ市へ赴いた。そして濃霧時に風によつて航路を失ひ、ウスベニヤ岬附近で岸邊に乗り揚げたのである。離礁工作は効を奏さなかつた。それ以來船は罹災現場に遺棄されたのである。

余らが「ヘドヴァング」を見物してゐる間に、射手の或る者は晝食を造り上げた。それはお誂向きであつた。余らは空腹だつたので、非常に美味しく粥を食ひ、そしてお茶を沸しにかゝつた。珍らしく暖かい日であつた。土地は太陽で焼けて烈しく熱を放散し、直接身の廻りでさへも、岩の上に熱氣の飛ぶのが見られた。余の従者たちはそここの物影に避暑することに勉めた。或る者は野薔薇の茂みに這ひより、或る者は岩蔭に隠れ、またヴィフロフは汽船の煙突の影へ落着いたのである。獨りマル・ニチだけは暫く場所を探しあぐねた。彼は海岸をマゴゴして、こゝに坐つたり彼處に生つたりし、遂に煙突の中へ這入り込むことにした。其の中で彼は横臥し、手にコップを持つてお茶を飲みにかゝつた。だがこの時椿事が突發し、それは射手たちを一日中大笑ひをさせたのである。ヴィフロフが煙突を蹴つたためか、それともマル・ニチ自身が何気なく揺すつたためか、突然煙突は向を變へ汀に向つて轉がり出し、最初は靜かに、そして段々スピードを加へた。それは響を立て乍ら石を跳ねとび、そしてそのの両端からは鐵錆色の土埃が現はれたのである。煙突は海に達するや、岸波に出喰して飛沫と砂とをブッ飛ばした。

この瞬間にそれの中からマル・ニチが這ひ出した。轟々たる爆笑が彼を迎へた。彼の濡れ鼠の服装とそして錆埃で汚れた驚愕した相貌とは見ものであつた。彼の當惑した顔つきからすれば、どうしてこんなことになつたか彼自身判り兼ねるらし

い。マルニチはブリブリして汽船の煙突を見守り、それを足で蹴飛ばしたが、この時一層大きな波が煙突を汀へ押し戻した。マルニチは驚いて脇へ逃げた。彼は自分の顔が黄褐色に汚れてゐることを知らず、不興氣に沈黙した。それから彼は裸になり、淡水で着物を洗濯し、そして乾かす爲にそれを砂利洲の上に擴げた。夕方余らはこの椿事のあれこれを取り上げて、マルニチを冷かした。

ウスベニヤ岬の附近には、じめじめした泥濘の岸をもつ小湖がある。これをオロチンたちはアクと呼ぶ。それは、海と狭い砂洲によつて距てられ、周圍的一杆である。二つの小川がその向うの一隅に落ちてゐる。

湖水にはカムチャツカ鮭及クーンチャ（鮭屬の一）が棲息する。夥しい海鳥、海獸狩、黒貂狩及鷹獵は、土民たちをハチ河からこゝへ古くから惹き寄せたのである。

余らはアクでオロチンの一家庭を發見した。彼等は同様にコビから到來して天幕で生活した。今日はこれ以上に進む時間がないことが判るや、余はサヴシカを呼んで、一諸にオロチンの住居を訪ねた。鎖に繋がれた犬たちは眼を瞋らして余らに吠えかゝつた。天幕の中から急いで人が飛び出した。それは幅廣の頸髻を蓄へた稍老けた男であつた。サヴシカを認め、彼は犬をたしなめ、天幕の裾をまくり揚げて余らに遣入るやうに奨めた。余は腰を屈がめて入つた。

天幕の真中には火が燃えた。煙は屋根の隙孔からうまく抜け出ないで眼に込み、地に横臥することを餘儀ならしめた。節張つた障に吊り下げた鍋の中では、魚が煮えた。オロチンのイグナチャ（余らの新知己はさう呼ばれた）の全家族は、彼自身、息子及二婦人（その一人は彼の妻であり他は息子の嫁）であつた。若嫁の手には日本種の變つた頭の犬ころがゐた。それは自分で飛出し、吠え立て、鼻を鳴らして齒で余の着物の端を銜へようとした。余がサヴシカから識つた所では、ウスベニヤ岬は海岸に於てオロチン分布の南境界であり、これより以南にはキヤカ族が住み、それは自身では「ウデヘ」と呼稱してゐると。

この時射手たちが訪ね來り、狩獵を許して呉れとねだつた。イグナチャは河へは行かないやうにと忠告した。と云ふのは彼は其處では、毎度湖水へ「スネンコイ」（死魚）を漁りに來る態を狙つて弩を仕掛けてゐたからである。それで射手たちは鳥獵をやることにした。湖には二群の鴨が棲んだ。それらはあちらこちらと始終飛び廻つた。そして全然立戻らないと思はれる程遠くへ去り、不意に亦忽然と身近かに姿を現はし、騒ぎを立て、一齊に水に下りたのである。これは射手たちの獵心を煽り立てた。彼等はオロチンから舟を借り受け、獵に乗り出したが、鴨は間近へ近づけなかつた。舟は射程距離へ近づくと、それらは一齊に飛立つて、脇へ飛去り對岸の水邊に降りたのである。射手たちは空に向つて撃ち放つたが、彼等が苛立てば苛立つ程、刺止めるチャンスは益々遠ざかつた。

が、兎にも角にも一羽の鴨を手負にした。それは飛揚つて海へ逃げやうとしたが、直にまた水に下りざるを得なかつたのである。その他の群を打棄て、射手たちはその後を舟で追ひ廻した。それで鴨は水に潜り始めた。もしイグナチャが手助けに飛出さなかつたなら、この手負の追撃戦はいつまで續いたことやら判らない。鴨が水に潜る所を認めて、彼は魚掬を手に取り、茂みを横切つて水路の方へ馳けた。鴨が水に潜ると、彼は前進し、それが水面に浮上ると、彼は身を伏せて待ち動かなくなつた。手負へる鳥は水路に向ひ、海へ逃れるつもりであつた。イグナチャが待ち受けたのも丁度其處である。敵を認めて、鴨は最後の潜水を試み、急いで流れを進んだ。切立てた様な岸の上から、清澄な水を透して、それが頸を伸し翼を身體に付けて危険區域を急いで潜り抜けて行く様が、手にとる様に見えた。それは水中に居れば人間の眼から隠れることが出来ると思へたのだ。この時オロチンは魚掬を取り上げ、カ一バイ水中へ投げつけた。小さい水泡が水面に泡立つた。程なく魚掬が浮び上り、鳥はその尖に儂なく打貫かれてゐた。餘の従者たちは魚に満足しなればならなかつた。幸ひそれは不足しなかつたのである。

翌日余らは早朝に出發しようと思つた。然るにイグナチャは日の出を待つやうにと奨めた。空模様はハッキリしなかつた。

或る雲は東に走り、或る雲はその反対に走り、或る雲は動かなくつたのである。そして海では所々に旋風が捲いた。出發の準備をし、天幕を解體し、荷物を纏めそして突然に何かを待たねばならぬとすれば、これ以上悪いことはない。時間の経つのは恐ろしく長い。余の従者たちは色々と臆測を逞しくし、オロチョンに滞留の理由を十回も訊ねた。従つて、彼らは夕方には海が風ぎるだらうと云ふ發表をどれ程の喜びをもつて聞いたかは、想像に難くないが、明日の天氣がどうなるか判らないので、夜間に航行しなければならなかつた。

午後五時頃に余らはアクを去つた。海は比較的穏やかであり、僅かに短かい突風が不意に前方から、或る時は後方から吹き付けて、漕ぎ手の妨げをしたに過ぎない。余らはこゝで初めて海豹に出遭つた。海面にその濡れた優美な頭を突出し、それらは物珍らし氣に舟を見つめ、後ろから追つて來、水に潜りそして時としては非常に近い所に再び現はれたのである。

海豹の一匹が舟の附近へ來たときは、漕ぎ手の棹がその頭に危ふくブツかる程であつた。それは非常に驚ろいて、急いで水に沈んだ。グレゴラは銃を取り、動物の頭が現はれるや否や、直に發砲した。弾は水音を立て、水を泡立てた。數分を経て二―三頭の海豹が新たに現はれたが、しかし舟からは既に遠い。それは疑ひの眼で余らの舟を凝視し、何が何だか解し兼ねるやうであつた。再び發砲され、再び失敗であつた。今度は海豹はすつかり姿を消して仕舞つた。それは迫りつゝある危険を覺つたのである。

序でにこの動物に就てこゝで一言して置かう。海岸で出遭ふ海獺屬(オロチョン語では「ホッタ」)は、謂ゆる大耳海豹に屬するものである。

讀者は、海豹が大きな耳を持つと云ふ風に解してはならない。寧ろそれは小さく、辛うじて二ケの皮の添物の形で凸起するに過ぎないものである。成年の動物は五〇斤から八〇斤の重量を持ち、身長は一・五―二米に及ぶ。若い海豹の身體は銀灰色の軟かい濃い毛で蔽はれてゐる。仔獸は生れて後半歳を経れば皮下に脂肪が現はれ、寒冷から身體を護るのである。その時白い柔毛は脱落し、それに代つて薄い荒い粗毛が生へる。

海豹は普通河口附近に棲息する。彼らは魚を追つて大河へ乗込み、それを傳つて非常に上に遡る。

動物の身體は海の生活に適してゐる。その體重は排水量より若干重いが故に、海中にあつては身體は恰かもその比重に一致した情態に在る。海豹が海水中で殺される場合、その肺臓中に若干量の空氣があるなれば、それは水面に浮き揚る。淡水中では比重が重くなるが故に、それは河では、底に沈まないが爲には常に若干の努力を必要とする。淡水で殺された海豹が常に沈むのはこの故である。オロチョンはこのことを知るが故に、河口附近で海豹を獵する場合には、勉めてそれを淺い場所へ追ひ込む。殺した動物は刺殺で底から引き揚げるのである。

海豹の脂肪は食糧になる。オロチョンは單に他に肉がない場合にのみその肉を食ふ。また皮は靴用、シャーマン僧のスカ―ト、銃の袋その他に供する。

太陽が沈む頃には余らはウスベニヤ岬を遠くに引き離れた。黄昏が迫つた。天氣は定まつた。海は假睡に入つた。淡藍の霧で蔽はれた遠くの岬は、丸で空に懸つてゐるかのやうであつた。空はそれと水面との間へ狭い線で割込んでゐるかのやうに見えた。こゝではこの濃氣差現象は一年の乾燥期では極めて普通のことである。

傾斜した海岸はアク岬より南西は、小高い丘陵から成り、なだらかな廣い傾斜によつて海へ臨み、また所々では平野にさへなつてゐる。この全長に於て小河ナガチ、イチチチ、イチチ、ウオ及スバセニヤ河の諸河が海へ注ぐ。イチチ以南には輝石安山岩から成る同名の小岬が、またウオとスバセニヤ河の間にはベンチルヌイ岬(洞窟岬)(その名稱は海波によつて穿たれた夥しい洞窟や巨大な窟穴を持つ所から生れた)が、海へ突出してゐる。

暗くなり出した。沿岸の斷崖は水に沿つて長い陰影を曳いた。空氣の溫度は急激に低下し始めた。

海鳥は森の鳥類同様に早く眠りに就く。第一番に眠りに就いたはアビと海鴨とである。不意にそれらの姿は見えなくなつ

た。彼らは岩の裂目に忍び入り、そして明日は曉に第一番に眼を覚ますのである。次に姿を消したのは鶴である。それらは休息と安眠の場所に、水面から突出した孤巖や、また臭猫に襲はれる惧れない崖縁を選んだ。これらの鳥類の姿は遠方から細頸の水差のやうに見える。それらは夥しくゐて、丁度誰か故意にそれらを沿岸の岩上に陳列したかの様に見えた。丁度その時、鶴の中に鶴を見つけた。それらはその白色の故に黒い鶴群の中では殊更眼立つた。鶴は彼らに干渉せず、無關係な鳥の存在を恰かも全然無視するかのやうであつた。僅かに一羽の海燕が鳴きながら海岸附近を飛び、太陽が沈むに反比例して益々高く空へ翔け去つた。

妙なる秋の夕べの一日であつた。かう云ふ日は沿海地方では數日續くのが普通である。

夜の八時に余らは第二次休憩を行つた。數分後には楽しい焰が燃え上り、人々、犬及岸へ揚げた舟の軸を一度に照し出した。

喫茶が終ると、直ぐに銘々再び仕度にかゝつた。人々は、明るみから暗がりへ急に轉じたため眼が眩み、岩に蹠づいたり水に踏込んだりしないやうに、手探り足さぐりで歩んだ。

間もなく舟は岸を離れ去つた。暫くの間は話合ふ聲、櫂、水を掻く音が聞えたが、程なく總ては沈靜に歸した。焚火の場所には單に眞赤な炭火だけが残つた。微風は一瞬焰を煽り立て、火の粉を海へ飛ばした。舟は焰を廻り、火は見えなくなつた。サウシカは、巖にブツからないやうに舟を岸に近づけることを避けたが、同時に道を失はないために遠く沖へ出ることも警戒した。

夜の海岸！ 巖の暗いシルエツトが星空をバックにぼんやりと浮んでゐる。沿岸の懸崖、その上の樹木、海の最寄の岩、凡ては朦朧と暗色一色に塗られてゐた。漆黒の水は底なしの深淵である。水平線は姿を消し、海は舟の數歩前では空に接してゐる。星は水に一時に映り、揺らめき、深みへ去り、そして又再び水面に浮び揚るかのやうである。空ではかすかな稻妻が

閃めいた。この様な情景の中に於て一切のものは幽玄に思はれた。

サウシカの顔は見えない。大理石像の様に、彼は舟の艫に突立ち「夜の闇を凝視し」、そして自分の周圍に何か起つてゐるかを全然注意しないかの如くであつた。手に櫂を握るオロチンたちの姿、闇の中に人を乗せた舟は、死體を舟に乗せて地下のステクス河を運び行くハロンを描いた希臘神話中のドルエの光景を、余に彷彿せしめた。

この様な靜かな夜は海の發光生物を観ることが出来る。恰かも蒸氣の渦卷の様に、水は櫂先をくぐつた。舟の後にも同様銀の長い筋が尾を曳いた。水が攪拌運動を受けた場所は、燐光が一層強かつた。キラキラする昆蟲のやうに、碧色の鮮やかな閃光が不可解な速さで渦を捲き、消え去りそして不意に脇の方で再び現れ、更に一層強烈に燃えた。

總ての者はこの光景に見惚れ、各人それぞれ考へ込んだ。

スパセニヤ河から南へ一二軒の間は海岸は再び高原となり、主として角閃石質安山岩とそして微粒玄武岩とから成る。各支脈間の小狭谷を傳つて若干の溪流が海に注ぐ。その中最大のものタハラと呼ばれる。

ポトチ河は程近かつた。それが海に注ぎ入る所は、海岸線が若干陸に灣入し、そしてクレストヴズド。ヴィゼンスキイ岬がなければ、こゝは入江が全然ないも同様である。この小灣入はグロッセヴィチ入江と呼ばれる。

こゝが若き地形測量家グロッセヴィチの悲劇的運命に縁故ある土地なのだ！

この事件と云ふのは斯うである。

一八七〇年にベテログラードからイルクーツク市（東部シベリヤの行政の中心地）へ、學校を巢立つたばかりの二人の地形測量家が到着した。その内の一人がグロッセヴィチであつた。彼は郷里からかゝる遠隔地へ生れて始めて來た一九才の青年であることに留意すべきである。イルクーツクに到着してグロッセヴィチが識つたことは、彼は春アムールへ赴き、次でウスイリ河を遡つて興凱湖へ行き、そして其處からウラチウスタックに出て、スクター「ウスタック」號（當時船長バブキンの

指揮せる)に乗ることであつた。そして亦、日本海の海岸傳ひにツマンヌイ岬とウスベニヤ岬との間で測量を行はねばならぬことをも識つたのである。この海岸が最初の試練であつた。

太陽が地を焼き樹は緑に萌える頃、若きグロッセヴィチは、總ての旅装を調べ、出張の途に就いた。ウラヂウエストック哨所までの旅行は無難に遂行された。ウラヂウエストックでは同地司令官は同地部隊の二兵卒を彼の従者に附けた。其處でグロッセヴィチが識つたことは、彼は海岸に沿つて徒歩で行くべきこと、また彼の荷物全部と食糧とは舟で運ぶことであつた。そしてその舟は彼自身が調達せねばならなかつたのである。

幸ひにも、彼は龍骨付の古舟を或る住民の所で發見し、それを可なり高い代價で買ひ取つた。舟の賣り手は、スクターナーの出帆までにそれに手入れしまた櫂や旅行にとつて必要なものを調へることを約束した。六月の初めにスクターナー「ウエストグ」は拔錨し、海岸に沿つて進んだ。バプキンは、地形測量家の一人と、同じく従卒二人とをルイנדグ灣に上陸せしめ、次で第二の測量家グロッセヴィチを、サマルギ河以北のツマンヌイ岬附近に運んだ。船員たちは小舟を水に卸ろした。グロッセヴィチは、その中へ總ての荷物を積み卸して自身も乗込んだ。バプキンは十月に再び沿岸に到來して、二人の測量家を乗せ、ウラヂウエストックに連れ歸る筈であつた。

仕事は最初の程はグロッセヴィチにとつて順調であつた。彼は可なり速く前進した。その測量は場所によつては僅かに一本の線によかつた。それは斷崖及岩石海岸のある場所であるが、一方河谷が擴がつてゐる場所では、彼は若干軒の奥に入り込みそしてまた海へ引返すのであつた。

ところが或る日のこと暴風雨が突發した。海は怒り狂つた。彼はこの悪天候に舟の上で遭つた。暫くの間小入江もしくは河に類する何らかの掩護物を探さねばならなかつたが、どれもこれも何一つ無かつた。前方は數軒に亘つて高い岩石海岸であつた。それでグロッセヴィチ海岸の汀に漕着かうと決心した。何故ならば最早より以上海面にとゞまることは不可能であつたからである。所が相憎、龍骨附の彼の舟の構造ではうまく行かなかつた。彼らが淺瀬に達するや否や、舟は海底の岩石に龍骨を打ちつけ、押寄せた波は瞬く間にそれを覆へし、そして岸邊へ打ち揚げた。幸ひにも、總ては無難に終り、乗組員は何一つ尖はなかつたが、總てのものが、マッチまで加へて、スツカリすぶ濡れになつたのである。彼らが如何に火を焚かうと努力しても、それは徒勞であつた。一晩中彼らは海岸に坐り詰め、寒さのため非常に苦しんだ。

朝、霧は散つて空は晴れた。彼らが黎明を迎へて喜んだ様は、恰かも火を失つた原始人のその様であつた。昇つた太陽が地を暖め出すと、グロッセヴィチは自分の着物を脱ぎ、乾かすために岩の上に擴げ、自分はルバシカ一枚とズボン下一つになつた。彼は約三百ルーブルの紙幣を所持してゐた。彼は同様にそれをも砂利洲の上に擴げ、風で散らない様に一枚一枚に小石を戴せたのである。それから彼は岩の上に横臥し、直ぐに寝込んで仕舞つた。グロッセヴィチは長い間寝込んだものらしい。顔に雨がかゝつて、それで彼は眼が覺めた。彼は起き上つて従卒を呼んだが、誰も彼の聲に應じる者がなかつたその瞬間に彼はハッと氣付いた。舟、天幕及食糧が消え去つてゐたのである。周圍は空漠たるものであつた。金も亦消えてゐた。グロッセヴィチは海岸に驅け出してわめき叫んだが、答へるものは單に沿岸の懸崖から返へる山彦、汀に寄せては返へず波の音のみであつた。グロッセヴィチは後に戻り、着物を着ようとしたが、慄然とした。兵卒は彼の總ての衣類から靴までも皆持去つてしまつたのである。彼は死を悟り、殆んど無意識に海岸にブツ倒れた。然るに一方黄昏が迫り、夜は雨になりさうであつた。不幸者は巖の中へ潜入することにしたが、間もなく彼はこゝで寒さに凍えて繁つた草の中へ這込んだ。そして怖しい一夜を雨に叩かれて過し、曉まで一睡もしなかつたのである。夜が明け放れると彼は海岸に沿つて進むことに決めた。何處へ？ 前へかそれとも後方へか？ これと云ふ理由もなく無意識に、彼は北東に向つて仕事をした方向へ歩を運んだ。海岸の汀に行くことは、立派に旅装した者でも困難である。海岸の斷崖の根元には先の尖つた石塊が轉がつてゐた。倒木、繁つたスゲ、刺のある野薔薇の灌木が到る所に在り、岩の間には足に突き立ち易い貝殻の断片が澤山散らばつてゐるのであ

る。グロッセヴィチがその一步一步毎にどんな情態であつたかは、想像するに難くない。第一目にルバーシカ及ズボン下は裂け破れた。彼は澤山の刺傷を造り、足の裏を酷く傷めた。朝には彼の手は腫れ上つてゐた。それに打勝ち、彼は海岸傳ひになほ歩み続け、手當り次第のものを食つた。昆布類、小蟹、汀の小軟體動物等を。第三日目には彼は殆んど丸裸であり、辛じて足を引摺り、力なく打倒れ、起き上り、數歩行つてはまた打倒れ、そして永い間動かすにブツ倒れたのである。遂に彼は意識を失ひ始めるに至つた。彼はそれが夢であるのかそれとも現實であるのかの見界を失ひ、思考力を失ひ、また時々場所に對して凡ゆる觀念をも失つた。時折彼は身慄ひした。そして跳び上り、叫び乍ら前に突走り、力盡きて再び岩の上にブツ倒れるまで驅けたのである。グロッセヴィチは自分が病氣であると云ふやうに考へた。と云ふのは彼は晝も夜も悪夢に悩まされたからである。この海岸が自分の墓場になると云ふ考へは、大して彼を悲しませなかつた。只もう出来るだけ速く「そこへ」行き度くそして精神的肉體的苦痛を斷ち切り度かつた。彼は母を、親友を想ひ浮べ、涙は眼にあふれた。そして土地に臥していつまでもいつまでも、人事不省に陥るまで泣き続けた。

何者か自分の頭をもち上げて口へ水を注ぐのを彼は感じた。グロッセヴィチは眼を開き、そして非常に目焼けた變つた服装の或る人々を自分の周囲に見た。「蠻人」と彼は直感しそして戦慄した。これはウデへ人であつた。彼らは舟で附近を通りかゝり、フト、岩の上に横たはる人間を發見したのである。最初彼らは、それを、浪で岸へ打揚げられた溺死人と思ひ、その儘行き過ぎようとしたが、その時グロッセヴィチが手を動かし叫びたのである。土人達は直ちに舟を岸に漕着けて彼の蘇生に取りかゝつた。次で彼らは彼に何かと着物を與へ、手を貸して舟へ運び込んだ。夕暮の少し前に彼らは或る河口の附近に着き、彼を自分らの小舎へ昇き入れた。

グロッセヴィチは自分を俘虜になつたものと考へ、またそのことは自分の立場を悪くするものか良くするものか知らなかつた。翌日彼は、二人の婦人が自分の足の刺抜きを始めたのに驚ろいた。彼女らは續いて、野薔薇の細かい削屑を當て、傷に纏帯した。彼に對して彼等は懇切に取扱ひ自分らの食ふ食物を給與してゐることを彼は知つた。遂に彼は試みて見ようと思ひ、救助者たちに無斷で海岸の方へ漫步に出た。誰一人彼を引留める者はなく、彼が小舎に歸つた時も同様の態度であつた。自分が俘虜の立場にないことを確信し、グロッセヴィチは元氣付き且朗らかになつた。彼の足は段々治つて來た。漁獲期が到來した。ウデへ人たちは河に出掛け、グロッセヴィチもそれに從つた。彼は鮭の漁撈を助けて、舟から魚を運び揚げ、その臍を抜きを手傳ひして干木に掛けた。婦人たちは彼の慣れない手付きを面白がり、また彼が扱ひ兼ねてゐるやうな場合には彼を援けて呉れた。グロッセヴィチは薪を割り、果物を摘み、凡ゆる援助を以て自分の恩人に酬いた。漸く秋に入り初雪が降つた。土民らは黒貂狩に出掛け、彼も亦同行した。

話は變つて一方二人の兵卒は、グロッセヴィチを放置して、海岸に沿つて引返へした。彼らはグロッセヴィチは斃死し、遺骸は獸らが仕末をつけるものと確信してゐた。四日後に彼らは別隊の測量家に出會つた。後者から上官の所在を訊かれて、彼らは、彼が溺死したことを述べ、その證據に彼の着物、書類及所持金の小部分さへも呈示した。測量家は彼らを自分の隊に加へ、仕事の完了と共にスクーターでウラヂウ・ストックに歸還し、次でイルクーツクへ、そして聞き知つた一切の事情を具申したのである。

年末、軍の満期除隊の少し前に、二人の兵卒は金錢上のごとで喧嘩し、お互に密告し合つた。調査が始まつた。兵卒らはグロッセヴィチを遺棄したことを白状したが、それが何處であるかを説明することが出来なかつた。幸ひ、海岸線の測圖が残つてをり、それによつて難破して場所が判つた。翌年の春二人の囚人は護衛兵の下にウラヂウ・ストックに護送された。そして同じスクーターに乗り海岸傳ひに運ばれ、彼らがその上官を遺棄した地點を指示することを命ぜられた。恐らく、兵卒たちは正確に指示したことであらうが、その以北にも以南にもグロッセヴィチの跡は見當らず、搜索隊は何らの手掛りなくウラヂウ・ストックに引返した。兵卒らは苦役に就き、一方グロッセヴィチは行方不明者として地形測量家名簿から削除された。

上官も、親戚や知己も、誰もかも彼の死に就ては疑はなかつた。

一ケ年は過ぎた。グロッセヴィチはウデヘ人らとすつかり馴染み、言葉を感じ、彼らの仕事を援け、居候とは感じなかつた。彼は、これらの人々が和やかに平和に暮し且咄み合はないことに氣付いた。その家長民族制度は彼を深く感動せしめた。其處では皆のものは寡婦やその子供たちを自身の同族として面倒見た。彼は一度ならず老人たちの集會を見た。そこでは彼らは穏やかに辛抱強く若い者たちの言分を最後まで傾聴したのである。彼はまた青年たちが同様に老人の忠告を聞き入れるのを見た。彼の同族は彼を死に突落し、彼を遺棄し去つたが、これらの土民は彼を救助し、看病しまた衣服を恵んだ。彼は断じて同族の下へ歸らずに、ウデヘ人の許に永住することを決意した。

然るに支那人、毛皮ブローカーたちの口から、ポトチ河のウデヘ人の許に一露人が住むと云ふ噂が擴がり始めた。この噂はウラチウ・ストックに、次でイルク・ストックにも達し、それはグロッセヴィチに外ならないと云ふこと、彼はウデヘ人の手に囚はれの身にあると云ふことが決定された。

春、雪が溶け河の氷が解ける頃、再度の搜索隊が同じスクーナー「ヴ・ストック」號で派遣された。然るにそれがクレスト・ヴ・ズド・ヴィゼンスキイ岬へ近づいたとき、ウデヘ人の一人がそれを発見した。彼はポトチ河へ驅け戻つて、「露人の襲來」を注進した。土民たちは小舎を棄て、山へ逃げた。彼らと一緒にグロッセヴィチも逃亡した。上陸部隊長はガラ空の小舎を発見した。彼はウデヘ人がグロッセヴィチを攫つて行つたものと断じ、こゝに一策を案じた。スクーナーを全然退去したかのやうに見せ、その實は一の岬の蔭に隠し、そして暗くなつてから、武装部隊を上陸せしめたのである。船員たちは數軒前進し、夜明け前にウデヘ小舎を襲つた。グロッセヴィチは、船員たちが土民を検束するのを見て、彼らを擁護するために飛出して抵抗を試みた。そして彼も檢束された。

搜索隊はグロッセヴィチと二人の捕虜を伴ひ船に引揚げた。彼らはウラチウ・ストックに送られ、そして土人たちは審査

の行はれるまで留置された。間もなく彼らの一人は急性肺炎に罹り獄死を遂げ、他の一人は釋放されたが、久しくウラチウ・ストックから歸還することが出来なかつた。彼も又病氣に罹り、そして死の直前にポトチ河へ歸つた。グロッセヴィチは告發され、イリク・ストックへ送られ、その智能テストのためにニコラエフスクの陸軍病院へ護送された。其處で彼は一年近く拘禁され、神経衰弱と決定され、裁判を免除された。その後彼は健康を恢復し、再び東部シベリヤへ任命を得よう運動した。任命が下つた。彼はウラチウ・ストックへ到来すると、直ぐにポトチ河へ出張するチャンスを求め、土民の親友を訪ねようとした。職務上から其處へ赴くことが不可能だったので、彼は休暇を取り、ゲク船長指揮のスクーナー「ストローチ」號で出發した。現場に着くや、彼は海岸へ急いだ。こゝは小路が在り、あそこには會て魚を捕つた河があつた。彼は藪を通つて小道を馳けた。悲惨なる光景が眼に映つた。小舎は廢墟に過ぎなかつた。大人小供總ての人々は、都會から持込まれた或る傳染病によつて滅亡した。一人も助からなかつた。其處此處には、人間の骨や色々の家庭用品が轉がり、既に雜草が生ひ茂つてゐた。悲歎に暮れて彼はウラチウ・ストックに立歸へり、再び病氣になつた。

ポトチ河の土民は死滅したがコビ及サマルルの彼らの隣人間では、「オモ・ロツ」(一人の露人)がウデヘ人の厄介になり、そしてそれがもとで部落が全滅したと云ふ物語がなほ長く傳へられたのである。

五〇有餘年は過ぎ、グロッセヴィチは一九一七年にハバロフスクで逝去したが、ポトチ河の注ぎ入る入江は今日まで彼の名をとゞめたのである。

【註】、この物語は一九一七年グロッセヴィチが死の數日前に自から傳へたものである。

余は追想に耽つた。余の寸前には口髭のない、頸髯のない短かい白髪を持つ腰の曲つた老人グロッセヴィチの姿が浮んだ。余は海岸に就て訊く爲に彼を訪れた。自分の旅行時にそこを訪ねなかつたからである。

彼は地圖を持ち出し、それに基づいて各岬や各入江を詳しく説明し始めた。説明がポトチ河に來たときに、彼は突然手を

上に揚げ、それから眼を閉じてテールの上に顔を俯せた。

余は嘖り上げる鳴咽を聞き、彼を落着かせて話を他へ逸らすことに勉めた。

余はこれらの追憶に想ひを馳せ、時の経るのも忘れた。

余らの舟は停まつた。漕手は水から橈を揚げて休憩した。間もなく第二舟が余らに近づいた。

射手たちは煙草を喫み、あたりを見渡し始めた。

『ありや何だらう?』

余は指差された方向を眺め、海上に或る黒いものを発見した。それは若干移動し、旋廻し、再び最初の位置に返つた。

『一體何だらう?』と余はサヴ・シカに訊ねた。

『ニサア・ウダダ(小舟でさあ)』と彼は穩かに答へた。

全く、二〇分後にはオモロチクを、またその中に人を明らかに見ることが出来た。程なく余らはそれに接近した。それは黒髯を蓄へたオロチンであつた。彼はあくらをかいて、舟に座し、長柄の刺掬で海底を探つてゐた。サヴ・シカは彼に呼び掛けた。彼は簡單に答へたが、余にはその意が判らなかつた。

『あれは何をしてゐるのだ?』と余はサヴ・シカに訊ねた。

『海豹を探してゐるんですよ』と、海面上の血の大きな斑點を指差し乍ら、彼は答へた。

『ビ!ビ!ビ!』と余らの新知己は叫び、屍骸を探り出した刺掬の周りに一心に舟を踏み止どめた。

サヴ・シカは援助に乗り出した。數分を経て海豹は水から引揚げられた。その頭は鉄丸が貫通してゐるやうであつた。

余は獵師に余らと一諸に行くやうに誘ひかけた。彼は即座に同意した。彼は二橈身と一艇の櫂を持つた。オロチンは巧みに小舟を捌いた。そして余らと談話を交へたが、極めて注意深く波を視守り、風上側からの煽り波を喰はないやうに勉め

た。彼の名はワンダガと云つた。

遂に余らは河に近づいた。白い泡沫は砂洲の所在を示し、ここでは淡水が海水と混合した。

小舟のオロチンは、河口の少し手前で方向を海岸に向けた。そして潮時を計つて、急いで前方に漕ぎ、瞬く間に飛沫を揚げて岸邊の砂上へ乗り揚がつた。退き潮が舟を後へ持ち去らんとした瞬間に、彼は飛び下りて、小舟の軸先を掴んで水から成る可く遠くへ引摺り上げた。凡てそのことは驚く可く敏速に行はれたのである。不慣れた人間なら舟を毀したり、鉄を沈めたり、強たかに潮を浴びねばならなかつたかも知れない。

今度は余らの番だ。余らはやつと碎波を突つ切り、水は片側から流れ込んだものゝ、河へ乗り入つた。

ポトチは余らの第一の食糧基地であり、其處にはテ・ア・ニコラエフが汽船で持つて来た食糧が置いてあつた。約束によつて、余はこゝでサヴ・シカに暇を與へ、そして他の案内者の雇入れを取極めた。それ故に一日の休止を行つた。

餘は最寄の小山へ、上から近隣を眺望するために出掛けた。

ポトチ河(オロチン語「イッキ」)は、延長約七〇軒。北緯四七・五八度東經一三九・三二度(グリニッチ標準)に於て海へ注ぐ。ドロッセヴィチ入江の北西邊は、小高い小山(ポトチア)に於て(余はそこから觀測する)から成り、またその南東邊はクレストヴァズド。ヴィゼンスキ岬によつて區切られてゐる。

ポトチは下流では右側より二支流—マサエツ河及イヘ河を容れる。それはこゝでは二支流を分ち、長さ四軒の細い島を造つてゐる。

土民舟は河を遡つて六日間の行程を行くことが出来、それ以上分水界まで行くにはなほ一日間の徒歩行程が必要である。河口から三日間の行程の河の中部には、攝氏二八度の測度を持つ温泉が在る。

ポトチ河の冬期交通路は二つある。即ち、コピ河へ向ふものとサマルギ河へ向ふものとである。前者はムクバ河を傳ひ峠

を経てテブツイ河（コビの支流）へ通じる。海岸を行く者は一人もない。何故ならばこゝは荒地であり且酷い断絶地であるからである。幾度も山を登つたり下りたりする必要があり、非常に疲れさせる。ポトチ河の第二の道は、その上流の右側支流ドリンギヤを傳つてイシミ（サマルギの上流の左側支流）へ通じる。何れの道も三―四日間の行程であり、犬の數と道の状態との如何に依存する。

一九〇八年當時ポトチには住民四六名（男子一五、婦人一一、女兒一二、男兒八）を有する六ヶの遊牧小舎が在つた。二年後に其處に舊教徒ドルガノフが移住し、そして彼に習つて他の舊教徒も移住したのである。かくして出来上つたのがグロセヴィチの名稱を持つ村落である。一九二七年には人々は一五〇人になつた。その他の外來の移住民は、支那人と朝鮮人とである。

ポトチ河の底地の低地帯を圍繞する山脈は繁茂せる針葉樹林で蔽はれてゐる。これらの地帯は、見た所、蒙古樅の分布の北部境界であつて、西洋杉と同様、それはこゝでは極めて疎らである。

余らの新しい知己オロチン、ワンドガは、ポトチ河の河口に程近い最初の水路に住んでゐた。探險用の要具入りの箱は彼の前に保管されてあつた。凡ての土民らは黒貂狩に向つたのである。残つたのは獨りワンドガのみである。彼は余らが秋に到來することを知り、余らを待ち設けてゐたのだ。彼は中脊で四〇才、黒い濃い鬚鬚を蓄へてゐた。そのことは彼が樺太土民の血を引いてゐることを示してゐる。彼の服装は一般オロチンと同様であつたが、調髪はウデへ風であつた。

ワンドガの天幕にはあれやこれやの日本の物品があつた。彼の祖父は實際樺太生れであつたことが、質問によつて判明した。父は一時デカストリ灣に、その後はチアンカ入江に住居したが、彼はなほ若い頃にポトチ河へ移住したのである。

翌朝土民は、余らの舟の一つが底を損ねてゐることを余に告げた。それを良く修理し、隙を塞ぐ必要があつた。午後二時に全部は整つた。これから先は、サヴシカの代りにワンドガその弟と共に余らに従つた。

今日の出發出来ないのであるかとの間に對して、彼らは首を振つて否定した。余は既に第二日目の宿泊を覺悟してゐた所が、二人の土民は俄かにバタバタして舟を走つた。そして射手たちにそれを水へ引き卸すことを命じ、手早く乗込むやう急ぎ立てた。思案から行動への斯う云ふ風な轉移は、オロチンたちには極めて通行である。彼らは仕事を無制限にズルに延ばしたり、理由もなく急ぎ立てたりするのである。

誰もワンドガに文句を云はなかつた。二五分後には余らは既に海にあつた。クレストヴ、ズド、ヴ、センスキイ岬を廻り、舟は再び方向を南南西にとつた。こゝは海岸線に乏しい。岬は多いが、何れも海への突出は浅い。汀地帯は上方から轉落した岩石塊で塞がつてゐる。それらの大きなものは、岩間の裂目へ大きな獸が自由に隠れ得る程である。海岸の斯様な崩壊は淡水の作用によつて起る。六〇―八〇米の高所から小瀧の様に流れ落ちる溪流は、斷崖の麓に達するまでに、風に吹き飛ばされて雨になる。最初の岬ポハムオニは、特徴的な柱状節理を示す玄武岩から成る。若干の石柱は直立し、或るものは曲り、また或るものは完全な懸垂状を示した。三〇分後に余らは溪流アフア及バクラニイ岬（オロチン語「海のタイメン」の意）に着いた。

バクラニイ岬は全くその名に價するものである。こゝにはこれらの鳥類が澤山ゐた。總ての岩石は彼らの糞で白くなり、丸で石灰を撒いた様であつた。黒灰色の肥つた黒鴨とそして金屬的な玉蟲色の長頭を持つ海の鵞とは、崖縁の上にギッシリ詰つてとまつてゐた。彼らは注意深く、そして前方に身體を乗出し、少しでも危険が見えれば飛出す身構であつた。余らが岩石と並行したとき、鵜は動かなかつたが、舟が側を通り過ぎたときには、彼らは一度にバット下方へ飛立ち海上を飛翔した。

十月一日余らは、源を高原に發する小溪流コリマに着いた。この高原は、石灰性砂岩とそして強く變質せる古代の或る沖積礫脈とから成つた。バクラニイ岬の南には先端の尖つたシド、オニ岬が突出し、それを廻れば岩礫で蔽はれた四つの圓錐

狀小山が一例に並ぶ。ヤシ、河とコリマ河の間は海岸は高くない山脈の形をなし、走向の軸に沿つて洗はれてゐる。

コリマ川は同様に小河であり、河水の大部分は河岸の砂礫の下を流れる。

舟が海岸に着いたとき、或るソブカの頂きに大きな動物が現はれた。余はそれを罽と思つたが、ワンダガは首を横に振つて、それを「ボギド。」(北部鹿)と教へた。見た所、動物は余らを認めたらしく、逃げ出して嶺の向う側へ素早く隠れた。

オロチンの話によれば、ウスリー地方に棲む北部鹿には二種類ある。一は身體が小さく、大きな角、暗色の脊部、白色の腹部及暗色の脚を持つ。他の一種は大柄であり、毛色は灰褐色、白味がまつた横腹と枝の少ない小さい角とを待つ。それがボギドなのだ。ウデへ人はそれを「イグダカ」と呼んでゐる。前者はインベラトルスカヤ灣以北に、また後者は以南に棲息してボトチ河附近に降りて来る。この鹿は吹雪を恐れない。それは立派な道路を踏みかため、そして他の動物もそれを利用するのである。北部鹿がボトチに棲むのは僅かに晩秋と冬期のみであり、春、雪溶けが初まると、それは北部へ移住する。この鹿は高山動物である。それは食物を求めて高山へ登る。そして暑い日中は河の水源附近にひそむ。そこは常に濕氣に富み涼しいのである。それは地衣のみでなく、コケモモの葉をも食ふ。北部鹿は大抵の場合獨り住居をし、決して群をなさない。ウデへ人は彼らを熊々狩ることはないが、それが偶々出會したときに撃ち取る。ウデへ人がそれを撃ち取るのは皮を獲るためであつて、肉は普通打棄てる。と云ふのはそれは一種の悪臭を持つからである。序でに言へば、土民は食物に就て非常に擇り好みが多い。彼らの多くは家畜の肉を毛嫌ひし、その代り、大ミミズク及獺の肉を賞味する。

露營設置は今回は上出来ではなかつた。冷たい激しい風が陸の方から吹き、天幕は煙で燻ぶつた。餘は一睡もせず、夜の明くのを待ち焦れた。遂に夜の闇は白み始めた。餘は手速く着衣して天幕から出た。海面からは蒸氣が立ち昇り、丸でそれは下から沸かしてゐるかのやうであつた。空は紅に染まり出した。

余らは今日太陽の變形を観る機會に接した。最初は水から單に、その赤紫色の強く散開した邊緣だけが現はれた。水平

線上に昇り、それは角の圓い四角の形態を取つた。次でその下部は窄まり出し、そして橢圓體の形を取ることによつて茸に似たものとなつた。この茸の脚は、始めは短かく且太く、次で細くなり始めると同時に、その根元には金色に光る短い縞が現はれた。現在太陽はスタンプに似て來た。更に瞬時にしてスタンプの柄は離れて上方へ昇り始めた。脚も同様に短くなり、そして總ては水平線上に於て輝く縞に變り、續いてその鮮光の縞と共に、益々幅を擴大し、海面を傳つて余らの方へさして來た。それに續いて太陽の橢圓形態は圓い圓板に還り始めた。それと共に暖くなつた。

海岸の附近にはまだあちらこちらに切れぬの霧が残つた。それらは山間の小狭谷の蔭に隠れたが、旭光はそれを到る所で摘發し跡形なく掃蕩した。

遙か彼方にツマンヌイ岬がかすかに見えた。それは、海面から離れて海上に懸かるかのやうに見えた。この岬は余らの踏査の終了地點である。

天幕に戻り、余は従者たちを起しにかゝつた。それは骨が折れなかつた。何故なら彼等は寒さに凍へ、毛布にくるまり單に只夜の明けるのを待つてゐたからである。

朝食が済むや土人らは直ぐに舟の仕度にかゝつた。寒さは人々を鼓舞し、一層馬力をかけて力漕せしめた。太陽の昇るに従つて空氣は幾分暖かくなつた。

コリマ河を去つて海岸は南西の方向を南へ變へた。沿岸山脈は多くの支脈を海の方へ延ばした。それらの間の狭谷は水の落ちる道となつた。小河流—コリギ、ビギシ及ギヌグは、斯うして出來たのである。

コリマは延長約一〇軒である。こゝには多くの鱒が棲む。ボトチ河在の土民たちがこの地へ進んで出掛けて來るのはこの故である。彼らはこゝで一ヶ年の乾魚の貯へを調へ、それを納屋に貯藏し、また黒貂狩の時季まで密林に遺して置くのである。逐次的に余の調査せるボトチ以南の鱒脈は、次の如くである。最初は石灰石を含む安山岩質熔岩、次は輝綠岩質凝灰岩

と石英斑岩の凝灰岩、その次は再び石英安山岩質凝灰岩と多孔性風化熔岩、そして最後は玄武岩である。

休憩の間に余は小山の一つに登った。それは主として礫類からなる植物によつて掩はれた。こゝには太陽の炎熱の下に櫻ツングス(黒)白樺及稀に西洋杉が生長してゐる。谿谷地は落葉松及白樺によつて占められ、また、海岸附近の岩石地には野薔薇とそして脊の低いナ、カマド(水氣の多い無味の漿果を持つ)とが群生した。

ギヌグ河を去る七軒の海岸の最寄には、圓錐状の小山があり、外観は氷砂糖に酷似してゐる。その右側には美しい小瀧が在り、左には岩石地で埋まつた廣い汀地帯がある。岩石の若干が海に轉がり落ちて、小入江の様なものが出来上り、波除けになつてゐる。余らはこれを利用して海岸に揚つた。ワンダガは舟を水際から成る可く離れた砂利洲へ引摺り上げること命じた。余らはこゝで夜營の仕度にかゝつた。

移動測候所を設けて、余はバロメーターの急激な低下に眼をとめた。烈しい突風を覺悟しなければならぬ。その兆候は既に現はれてゐた。密雲は全く低く下がり、そして海面すれすれの所に追はれてゐるやうであつた。水平線は影を没し、海は黄褐色を帯び、波浪は泡立ち、そして飛沫をあげて荒々しく岸を嘯んだ。不意に密雲の帷が一時に破れた。寸時の間ボンヤリした太陽の視表面が現はれた。

二分を経て強風が襲來した。瞬間にそれは余らの天幕を吹飛ばした。人々はそれを追驅けた。この時、余は手で眼を掩つて風に脊を向けた程、飛砂は強たか余の顔を打つた。岩からもぎ飛ばされた海藻、樹の枝及枯葉、凡てそれらは狂暴な勢ひで何處かへ飛んだ。一羽の鷗が南方へ飛ばんとして徒らにも掻いた。それは最初は上へ揚げられ、次には脇へ吹飛ばされた。それは後へ戻らんとしたが、均衡を保つことが出来ず、茂みに落ちた。

この時人々の叫聲が起つた。
『舟！舟だ！舟を捉へろ！』

余は眼を開けて、風が舟の一つを引繰り返してそれを海へ吹き飛ばす懼れのあるのを認めた。ワンダガとチャン・バオとがその舷を取り押へた。

『繩だ！繩を速く持つて来い！石を載せろ！』

人々は駆け、倒れ、再び馳けそして繩を拾ふことに努めた。遂に舟を縛り、天幕をとツ掴まへた。この時只一つの大きな浪が海に起つた。それは轟音を立て、岩石の累積せる海岸へ殺到して來た。海水は岩の隙間を貫き、大噴水となつて上に揚つた。同時に上からは岩石が澤山降つて來た。それらは、生きものゝ様に、跳ね躍り、次々と落下し、砂礫に突當り、埃を立てた。その落下の場所には、爆發の場合のやうに、濛々たる土埃が立昇り、風で脇へ散つた。

暴風は黄昏にスッかり収まつた。大氣の自然的暴力は平靜に復歸した。余は曉の太陽の變形を想ひ起した。

氷砂糖形小山の附近で、天文學的觀測を行ひまたクロノメーターの速度を算定する必要があつた。舟を引止めないやうに余はそれを先に發たしめ、自分は數名の從者と共に仕事のために残つた。余らはネリマ河で皆一諸に落ち合ふ約束をしたのである。

余はクロノメーターの時差修正のために地平線に對して太陽の絶對高度をとり、午後一時に土地の緯度を算定した。

然る後余らは各自ルックサックを纏めて、海岸の汀に沿つて進んだ。

今まで海岸に沿つてゐた小路は、不意に脇へ急轉し、一つの小狭谷を傳つて山へ登り始めた。余らは逡巡して立停つた。何れへ進むべきか？汀を傳ふべきか、それとも小路を進むべきか？この時ワンダガが近づいて來て、小路に行くべきことを述べた。何故ならこゝは人が通るからである。余らは彼の意見を聞き、少しも感はず、急阪を攀ち上り始めた。路はジグザクでありしかもそれは非常に巧みにつけてあつたとは云へ、山登と云ふものは矢張り手間がとれまた疲れるものであつた。余らはウデへ人と一諸に最寄の山の脊の頂きに登つたが、一方同伴せる從者たちは若干後に遅

れた。

ウデへ人は靴を直すため地上に蹲つたが、余は觀望を始めた。余らが居る所は、落葉松及岩白樺を混へた樺とビータ（樺屬）とからなる針葉樹林であつた。樹木は細幹の古木であり、多くの枯枝を持ち、鬚狀の地衣の白い房を着けてゐた。

底冷えのする秋日和であつた。聳立する針葉樹の頂きの間を通じて上方には清朗な碧空が仰がれた。太陽は燦爛たる光を送り、恰かも地上の植物を蘇返させようとするかの様であつた。森の中は深い静寂であり、人間が持ち込む凡ゆる騒音が神聖冒瀆と思はれる程であつた。余は射手たちを大聲で呼んだが、山彦は即座に余の叫びを返した。

余はフト眼を余の旅連れの方に移し、そして彼が不動の姿勢で釘付けのやうになつてゐるのを認めた。ワンドガの様子は何か重大な氣にかゝるものを認めた人間の面持であつたのだ。

『どうしたんだ？』と余は訊ねて眼を放つたが、森は依然として静寂であつた。それで余は質問を繰り返した。

ウデへ人は余に黙る様にと合圖をし、次で靜かに手を揚げて隣の樺樹を指差した。けれども余には何も判らなかつたので彼は靜かに余の所に歩み寄り、木の小枝で地衣を指し示し、聲を落して囁いた。

『あり、生きものですよ！』と。

余がよく注意して見れば、若干の地衣は、その異常な軽さとそして一寸した凡ゆる空氣の動きに對する敏感さによつて、上へ揚つたり、また緩く下へ下つたりしてゐた。

『聽えるでせう！』と土民は余に囁いた。

余は聴き耳を立てた。事實、やつと聴き取れる位の、兎の聲を小さくしたやうな、微かに高くなり低くなる音調の響きが聞える様に思つた。それは何處から起るのであらうか？上方の樹木からか、或は下方の地からである。森中ではそれは、囁き、息抜きの呻き、胸の奥から出る溜息等々の極めて多様な混合音の中に常に聞くことが出来る。

『あり、忠告ですよ』と再び地衣を指差してウデへ人は云つた。

『人間だけが意味が判らないのです。それが良いことなのかそれとも悪いことなのか、わしや何とも言へません』。

余は、余らの踏査仕事の成功が余の答に懸つてゐることを覺つたので、余らは上天氣に恵まれてゐること、旅程の最大の難所は既に通り過ぎてしまつたこと、そして現在は唯底地へ降るだけのことであることを説明した。

余の言葉は彼を納得させたかのやうである。丁度この時射手たちが近づいた。ウデへ人は立ち上つて誰々前に歩き出した。余らの路は暫くの間山の背に通じた。それは始終曲りくねり、風害倒木をあつちこつちへ迂回した。余らはそれを踏み迷ふこともあつたが、間もなく草の勢くなつた場所へ再び出た。

余らは黙々と歩み、ワンドガが先頭に立ち、その後余が、そして余の後ろに射手のノズドリンとグレゴラとが従つた。突然、前に立つ老樺樹の一本が揺れて、地上へ傾き出し、始めはゆるやかに、次いで速くなり、そして大きな響を立て、倒れて路を横切つた。

余らの案内人は、釘付けされた様に立寄り、それから徐ろに余を振り返り、斷然たる語調で言つた。

『先へは進めません。道が塞がつてしまつた！』と。

余らは彼に徒らに協力を求めた。彼は聴き容れないで、次の様な理由を陳べた。最初の警告は、余らの誰もが理解出来なかつたあの地衣であつた。今度は樺が倒れ、それは伐り除くことも迂回することもこの場合どうにもならないものである。これ以上前進することは、取りもなほさず大變な危険に遭遇することである。ノズドリンは彼を擁護しにかゝつた。するとワンドガは腹を立て、言つた。

『お前さん方勝手に道を探さない。わし、歸らして貰ひますよ！』

そして彼は踵を返し、急いで路を歸つて行つた。彼を引止めることは無駄であつた。暫くの間彼の姿は樹々の間にチラホラ

し、次で路は山の背に沿つて低くなつた。間もなく彼は森の茂みに隠れ去つた。

已むなく余らは案内人なしで余らの途を續けることにしたが、残念至極にも余らは全く路を失つてしまひ、再びそれを見出すことは出来なかつた。それで、道に迷はないやうに、余らは海の方に向つたが、其處では非常に険しい傾斜を持つ深い峡谷に落ち込んだ。グレゴラは一度危ふく転落するところであつた。幸ひにも、彼はその時老樞の根に縋り付いたのである。つまり、峡谷をその上部で横切れるやうな距離で海岸に沿ふ必要があつたが、それらは色々の大きさであつたから、それを迂回するには大變時間をとられた。不幸の絶頂として余らは倒壊林に出喰はし、それを辛うじて脱して、後ろへ大變な廻り路をした。あれこれを考慮して、余らは眞直に海岸に出、汀を傳つて途を續けることに極めた。

余らが海岸に出たときには、太陽は既に全く地平線上に低く傾き去つてゐた。温度は急激に低下した。何故か余らにはネリマ河は岬の向う側に在る様に思はれた。その岬の姿は、人間の頭の横顔に似、その口元まで水に沈んでゐた。

余らは暫らく休憩し、それからリュックサックを背負つて、右側高さ三〇〇—四〇〇米の岩石斷崖をまた左には海を持つ海岸を傳つて進んだ。汀の沖積地帯は等身大の岩石塊で塞がつてゐた。これらの累積せる岩石は僅かの場所であり、それを過ぎれば再び砂利地に出られるであらうと余は考へた。

一時間を経て余らはオモド、オニ岬に着いた。それを越えれば余らの夜營地が見えると云ふ期待は元氣を倍加せしめた。更に行くこと二百歩、余らは巖に攀ぢ登つた。前方にあるものは矢張り荒涼たる海岸であり、岩石であり、その向うには更に或る高い岬があつた。

一方暗くなつて来た。夜營しなければならなかつた。だが何處で？ 夜營の爲には薪及淡水が必要であるが、こゝには岩石の中では、どれもこれも全然無かつた。夏の暖かい候なら、何とかして火なしでも夜を短くすることが出来るであらうが現在、朝水が氷に閉される、晩秋に、暖かい服装なしにまた濡れた足ではそのことは危険であつた。普通海岸では河の附近

に乾いた流木を見るものであるが、こゝでは、残念にも、薪は全くなく、在るものは裸岩のみであつた。

余の伴侶たちは疲労し始め、余自身も大變疲れてゐるのを覺えた。余らは一服しようとしたが、寒氣と濕氣とは前進することを餘儀なからしめた。

一時間後余らは第二の巖蔭に辿り着いた。それを廻れば、失張り岩石、同じ様な屈曲に乏しい海岸及岩石で埋まつた同じ様な殺風景な海濱であつた。

海岸に程近い大きな平面岩の上には數羽の黒鴨が居た。鳥は夜營をしようとしてゐたが、人聲を聞き、余らの方へ頭を振り向けた。彼等は今不安を感じたので、一層注意深くなつた。遂に一羽の黒鴨は我慢し通せなかつた。重い羽搏を立て、それは空へ揚つた。それに次で直ぐ他の鳥全部が飛立ち、海上を低く余らの後ろの岬の方へ飛び去つた。

闇の色が濃くなるに連れて、行進は愈々苦しくなつた。岩の裂目の角縁を見分けることは闇の中では不可能であつた。余らは非常に屢々躓き、そして轉んだ。荒涼たる海岸斷崖は急激に熱を失なつた。池の溜水は薄氷が張り、濡れた海草類は凍りつき、そして足の下で音を立て始めた。夜の海は全く靜穩であつた。さゞ波一つなく、岸では、最小の寄せ浪一つなかつた。闇と共に死の如き靜寂は無音の波で大地を包んだ。夜は次第に更けた。地と海は深い闇に呑まれ、その故に竝んで進む人間を數歩距て、見ることは出来なかつた。鮮やかな星はスペクトルの全色を放つて空に閃めいたが、余らは相變らず岩石を攀ち越え、それを手で撫で廻し、何處かへ登り、轉げ落ち、お互を見失ひそして信じられない努力の後に遂に高い岬の上へ攀ち上つた。

けれどもこゝでは障壁が余らの行手を完全に遮ぎつたのである。一方は海で阻まれ、前方と他方とは垂直の高い懸崖で遮ぎられた險路を、讀者は想像するがよい。

如何にすべきか？ 余らは鳩議した。余らの解決すべき問題は斯うであつた。即ち、引返してサハルナヤ・ゴロヴ、(氷砂糖

狀小山)へ戻るべきか、それとも浅瀬を渡つて障壁を迂回して再び途を續くべきか?

余ら一同は脚は痛み、手は擦過傷で掩はれ、膝はガタガタであつた。余らが脚のあちら側でもまた薪を發見しないとすれば、夜營地が更に遠い所であつたとすれば、余らは一夜中岩石を攀ぢ越えねばならないとすれば、一體如何であらうか? 然り余らは堪へ忍べまい! 疲労が加はり、同時に烈しく凍えることになるなら病氣に罹かる恐れがある。障壁のあちら側には何があるか不明であると、そして僥倖に對する期待とは、余らをして後者の道を採らしめた。余らは危険を冒す決心に出で裸になり始めた。着物を濡さない様に、余らはそれを首の後ろに縛りつけた。

汀の岩には薄氷が張つてゐた。闇は何も見えない程深かつた。用心しながら余は膝まで水に入つた。冷たさは骨にしみた。巖の鼻を手で掴み、注意深くゆるゆると余は先頭に立つて進み、余に次いでノズドリリング、そしてその後グレゴラが續いた。

障壁の根元の底には、海岸に於けると同様な、大岩石、鋭い稜角、裂目及凹所があつた。インキの様な暗い水は無氣味であつた。或る場所には深い凹みがあつた。余らは長い間足さぐりの後にそれを迂回することが出来た。余らが前に進むに従つて、一層深くなつた。水は既に腰以上になつた。もう十歩で障壁は迂回し終る。前方の闇の中には、恰かも向ひ合つた様な二つの大岩が、その向うには尖つた石柱が、その背後には平な岩ががすかに見えた。

不意に岩の一つの上方部が動き、大きな音を立て、海中に崩れ落ちた。

それによつて大きな浪が立ち、余はそれを頭から浴びて着物をビショ濡れにした。これは大きな海驢であつたのである。それは岩上で寝てゐたが、近づく人聲によつて眼を醒まし水中へ飛込んだのである。この時余は平坦な海底を足の裏に感じ急いで岸に駆け上つた。身體は暖かかつたが、濡れた着物は凍りついてバンバンになつた。余は悪感を覺えた様に震へ、そして射手たちが齒をガタガタ震はすのを聞いた。この時ノズドリリングは置いて倒れた。彼は手で地上に小さい乾いた流木を探

し出した『薪が在る』と彼は嬉しうな聲で『早くマッチを貸して下さい!』と叫んだ。

讀者は、余がエナメル塗の鎌にマッチを肌身離さず持つことを覺えてゐるだらう。

間もなく余らは大焚火の傍に立ち、着物を乾かした。

この時グレゴラはどう云ふわけか脇へ去つた。

『火だ! 向うにわたしの夜營がある』と彼は闇の中から叫んだ。

成る程、南方さまで遠くない所に、閃めく星の様に、焚がチラホラした。余らの認めた火の距離によつて計れば、ニムミ河までは未だ約五軒はあつた。それ故に余は薪の見付かつた場所に止まることに決めた。海がこゝに打ち揚げた流木は澤山だつたから、余らはそれを朝まで強勢に焚く事が出来た。

射手たちは一つの焚火から三つの焚火を作り、自身らはそれらの間の真中に陣取つた。彼等は間斷なく焚火に大東の枯木を投げ入れた。煙は乾いた枯木を包み愉快に燃え、人々の疲労した顔、乾かす爲に擡げて吊した着物、亂雑に岩の上に積まれた海草の堆を照らした。

余の従者たちは焚火の側に坐り、顔を脇へ背けて、手で下着を乾かしそして過ぎしを振返つて思ひ出話に花を咲かせた。

余らは苦難時に余らを見棄てたワンダガを罵倒し、余らの着物をズブ濡れにした海驢をも非難した。寝る場所はなかつた。一晚中余らは岩の上に掛け通し、夜明間近くまで居眠りした。

日の出るのを待たないで、余らは然る可く所要の用意をして出發した。

天映が霧を染めた。夜間に酷い降霜があつた。地面は全體が眞白であつた。岩間の裂目に溜つた水は、底まで凍結した。岩石で埋まつた海岸はなほ酷く殺風景に見えた。

余は昨日よりもなほ酷く痛みと疲労とを感じた。眩暈がし、脚が痛み、背中も痛んだ。けれども朝の寒冷は余らを元氣づ

け、足を速めることを餘儀なからしめたのである。

余らはニムミに程近い所で一匹の麝香猫を見た。怖ろしく峻しい谷間を傳つてそれは海岸に向つて下りて来た。土はそれの足で崩れて雨のやうに下へこぼれ落ちた。それを視て、余はフト、これらの動物が一體どの程度に場慣れてゐるものか、また均衡を失はないかを、考へた。だが動作は輕快に、意の儘に、凡ゆる恐怖の色なく恰かも山の礫砂や斷崖はその生來の環境であるかの如くである。外部の物音を聞き付け、麝香猫は釘付けされた様に立停つたが、忽ち踵を返へして強い跳躍で山の方へ戻り始めた。頂きに達し、それは再び立寄り、もう一度下を見下し、二回金切聲を揚げて森に姿を消した。ノズドリンは撃ち取らうとしたが、余は押し止めた。余らには肉が無かつたとは云へ、猫を殺せば自ら携行しなければならぬだ。然るに余らは自身歩くことさへやつとなのだ。

午前八時に余らは最後の岬に辿り着き、ネリマ河に近づいた。その對岸には遊牧小舎があつた。屋根の隙穴からは煙が上つてゐた。小舎と竝んで砂洲上には底を上に引繰り返した小舟があり、また海岸の最寄には焚火が燃え盡し、見た所それは余らの爲に特別に焚いたものらしかつた。余らが夜間見たものもそれなのだ。小舎から人が出て河に向つた。彼は左手に大きな魚を、また右手には双物を握つてゐた。

余は彼を大きな聲で呼んだ。その人は足を停め、余らの方を見守り、次で魚を打棄て、小舎に駆け込んだ。間もなく其處から二人の土人が出て余らに舟を差出した。

小舎の中は暖かつた。

余は心地よく着物を着替へ、身體を洗ひ、お茶を飲んで臥床した。夜間行路の不幸の總て、寒冷、海水浴、余らを驚かした海驢、凡てそれらは今では單に思ひ出となつたのである。

夜半に空は密雲で掩はれ、豪雨になり、朝方には嚴しい寒さが襲來した。地上に降つた雨水は直ちに凍つた。海岸の流木

や岩石、草原の草及森林の枯葉、總ては氷の薄層で覆はれた。人々は小舎に集つて火の傍で暖を取つた。風は亂調子で突風であつた。それは屋根の樹皮を吹き飛ばし、部屋内へ煙を吹き込んだ。余及余の従者たちは眼を痛くした。

朝方雨は止んだ。密雲の鈍重な帷は破れた。爽快な陽光は氷で閉された土地を照らした。人々は煙る小舎内で坐ることは飽き飽きし、凡ては外に出て賑やかに浮々と手足を伸ばし始めた。

「ア・タ・テー」と、西の方を指差して、一人の土民が叫んだ。「ニ・ビ・ズ・ドンニ・ソグドイ・ヨ・イマナ・アグデ・ビ」(即ち、この河の上流の大きい山には澤山雪が降つた)と。

面白い現象である。周囲の空が紺碧色である時に、西方ではそれは淡綠色であり輝いてゐる様であつた。余は理解した。向うの山は雪が降つたのである。そしてそこから反射した陽光が空を照らしたのである。

この雪はシホタ・アリンでは最早春までは消えない。それは温度を低下せしめ又益々廣潤な地域を包括するのである。

ネリマ河では余らは再び一日の休止を必要とした。今回は原因は舟にあつた。老い朽ちたそれは再三の岩への衝突によつて接目を破壊し、各所に水漏りを作つた。土民たちは朝からその修繕にかゝつたが、余はチャン・バオと一諸に河を遡つて見學に出掛けた。

ネリマは延長約四軒、右側より三支流を、左側より一支流を容れる。海に最も近いのがウリゴドニ河である。ネリマの水源は一方はサマルギの諸支流に、また他方はポトチの諸支流に圍まれてゐる。その右側支流を行けば一日にしてチャフ、チャル及アグザ(海を去る一〇―二五軒のサマルギへ注ぐ)諸河の峠へ達することが出来る。河の左側支流メウは海を去る三〇軒のポトチへ通じてゐる。ネリマは土民舟で行けば八軒まで遡ることが出来る。河は河口附近で若干の水路に分れ、多くの溜池や不明瞭な支流を作つてゐる。砂洲はなく、河の入口は完全に通じてゐる。流れは緩く穏かである。各水路間の島は白樺、赤楊屬及落葉松が成長してゐた。島の一には或るシャーマン僧によつて形像を施された木(ツン)が建立されてゐ

る。その幹も枝も彫刻で飾られてゐる。土民は其處へは決して寄り付かうとはしなかつた。彼らは長い説得の後に余ら兩名を島へ渡し、自分らは、必要に応じて舟を差出しすと言つて河の對岸へ去つた。

チャン・バオは茂みを掻き分けて進み、梟を追ひ出した。それは彼のホンの足許から飛立ち、形像木の上にとまり、鋭い聲で鳴いた。チャン・バオは立寄りをして、縁起でもない！とでも言ひたげな目差して余を見た。

『何だね？』余は訊ねた。

『エ・マオ・ツァ』（夜猫）ですよ』と彼は忌々し氣に答へた。

この時梟は、余らの話聲を聞き、驚いて飛去つた。

『ブーホウ、ブーホウ』（悪い、悪い）とチャン・バオは、苛々した様な手つきをした。

それから彼は河の方へ踵を返し、今日は碌なことはいから長居することは無用であると言つた。余は讓歩した。

余は歸り途で、彼が梟を變な名前だ理由を訊ねた。これに對してチャン・バオが答へるには、鳥類は、四足動物と同様に、野生と飼養、陸上と水上、日中と夜中、食肉と非食肉の各鳥に分類され、且各四足動物に鳥を當て絞めることが出来る云ふのである。例へば、犬と鴉、猫と梟と云ふ風に。梟は猫と同様の頭を持ち、同様に夜間に眼が利き、猫が音を立てずに歩くと同様に音を立てずに飛び、鼠を捉へまた小猫と同様な鳴聲で鳴くのである。梟は悪い鳥である。それに出遭へば兎角喧嘩や反目を煮き起し勝ちである。

余らはこんな風に論議し乍ら、次第に河に近づいた。岸の向う側には舟にウデへ入らが居た。チャン・バオは大きな聲で呼んだ。彼らは直ぐに舟を持つて來た。十分後には余らは露營にあつた。

翌日余らはネリマ河を出發した。冷たい西風は一夜中大陸から海の方へ吹き、止まなかつた。それは突風であり、波頭を吹き飛ばしてそれを雨の様に溶せかけた。余らの舟が風で公海へ押流されることを恐れ、ウデへ入らは勉めて海岸の斷崖の

蔭に沿つて進んだ。山河の河口附近の岩石海岸の中斷する所は、風は殊の外強く吹き、河谷のこちら側から向う側へ通過するのに余らは大骨を折つた。

河の小さかつた處では、余らは可なり樂に漕ぎ進んだが、ソニエ河に着いた時には、安全でなくなつた。余は二度その河口を横斷せんと試みたが、二回共、安山岩から成る岩石海岸の蔭に退却することを餘儀なくされた。

ソニエ河の左の邊縁は峻しく、右はなだらかである。裏枯れた雜草の黄一色の毛氈とそして疎らな瘦せた落葉松とは、土地の沼澤質を證據立ててゐる。

こゝで余らは、河の口の邊りで、正午まで風を待つた。漸く風が幾分収まつた様に思はれた。余らは終ひには苛々して來た。ソニエ河で滯泊する氣には誰もなれず、余らは第三回目の運試しをすることに一決した。

余らの舟が避難所から出るや否や、烈風はそれを一方の舷へ傾けた。漕ぐ際に橈によつて持ち揚げられる水は宛らシャヤワの様に人々の頭から足先まで降り注いだ。余が間もなく氣付いたことは、余らは海岸傳ひに進んでゐると云ふよりは寧ろそこから離れ去つてゐると云ふことである。余の從者たちは、もし風を乗切ることが出来ない時には余らの破滅であると云ふことを覺つた。誰一人手を束ねて坐つてはゐず、一同はシャベル、舟板、毀れた櫂、何でも手當り次第のものを掴んで漕いだ。斯う云ふ風に余らは二時間頑張り通した。遂に人々は疲れかゝつて來た。一番平氣でゐるのは余らの案内人のウデへ人であつた。

『オド。イ・ビ・ナムー・ト・アヤ！』（風はあるが、海は風だ）と彼は言つた。

彼の落着は余らを安堵せしめた。土民は最初は東の方を、次いでツマンヌイ岬の方を指差した。全く、舟は海岸から遠ざかることを停止し、非常に遠ざかつてはゐるものゝ、今では海岸に沿つて進んだのである。

この現象の原因は直ぐに明らかになつた。風は、兩側を山脈で圍まれたソニエ河の河谷を吹き通し、極めて烈しく吹きま

くつた。この流れに余らの舟がブツ突つたのである。けれ共余らが海岸から沖合ひへ離れ去ると、其處は廣潤となり、風はより穩かに且平調になつたのである。ウヂへ人はこのことに氣付いたが、コザックや射手たちには故意に何も話さなかつた。と云ふのは、彼らを一層馬力をかけて力漕せしめ、又余らは沖合遠く流され度くなかつたからである。

舟は次第に海岸に近づき始め、三〇分後には岬に着いた。それは玄武岩の柱狀節理の美しい型を示してゐた。

ウスターリ地方では鑛脈の最大の露出は、海岸に於て見ることが出来る。こゝでは沿海山脈は屢々軸の縦を、また支脈は走向を横切つて洗はれ、観察者の前にその構造の秘密を暴露してゐる。玄武岩の無名の岬には三ヶの海岸門が在る。その中最大のもは南門である。それらの立つ所は水中ではなく汀の沖積地帯である。以前はそれは、噴出せる最も緻密な岩で出来た鑛脈を縦に切斷した岬であつた。時代と共に凝灰岩は鑛脈の兩側より崩壊し、脈そのものが残つた。然る後波によつてその最も脆弱な場所に割れ目が穿たれ、内部的崩壊が起つて門が出来上つた。その後海はその根元に砂礫を打ち寄せ、門は知らぬ間に水から揚つたのである。

更に遠く猶玄武岩は續いてゐる。それらはニメ河附近では二つの地層に見える。柱狀分離は、砂岩から成る中間層にも及んでゐる。

余は夕方一ぱいまで進み度いと思つたが、余らの案内者は、どんなことがあらうとこゝで夜營しなければならぬことを述べた。そのわけは、これより先には二つの大岬が遠く海に突出し、三〇軒の間に停泊する場所がなく、余らがアヂミ河に安着する前に夜になつてしまふからである。

理由は尤も至極のものであつた。余は返す言葉もなく、舟をニメ河の河口に向けるやう命じた。

河に入り、余らは右岸に漕ぎ寄せ、直ちに森林の中で夜營を張る仕度を始めた。森林は樺、ビヒト(樺の一種)、白樺及落葉松から成つてゐた。時は晩秋であつた。溜池の水は氷が張り、雨で濡れた草や落葉は凍て、苔は足下で音を打てた。澤山

の薪を割り、大きな焚火を燃し付けた。

余らの土民たちは暫くの間河岸を傳つて往來し、時々地にかゞんだ。そして程程で露營に立ち歸り、ニメにはウヂへ人が住み、その中には一人の婦人がゐることを傳へた。晩いにも拘らず、彼らは自分らの同族を探し出すことにした。余はそれを引留めようとはせず、唯明日は成るべく早く歸つて來て呉れるよう頼んだ。

土人らは出て行き、余らは夜の仕度に取りかゝつた。一斜面の天幕は良い鹽梅に設置され、焚火の煙は風で脇へ吹き去られ、枯れ草の軟かい寢床、冷たい肉の一片、黒砂糖及熱いお茶の入つた湯飲は、余らにとつては最も愉快なホテルでありまた最もよい都會のレストランでもあつた。

喫茶後余は服裝を成るべく暖かくして海岸に出た。

黄昏は迫り、西の空には夕焼が赤々と燃えた。ニメ河の南方には、高いツマンヌイ岬の巨大な姿が海上に浮び揚つてゐた。全自然界は沈黙してゐた。波紋狀の海面は、光澤のない滑かな縞によつて彩られ、全く安靜状態に在り、唯穩やかな岸打つ奇波のみが、それが呼吸すると云ふことを示してゐた。

この時余はチャン・バオを認めた。彼は森のはづれを過ぎて露營地の方へ向ふ様子であつた。余は彼を呼びとめ、海岸で障壁を成してゐる高臺の一つに余と一諸に登るやうに誘ひかけた。數分後には余は彼と共に最寄の小山に攀ぢ登つた。その一方にはニメ河があつた。其處には天幕が見え、人々が動き、火が燃えてゐた。他の側には干上つた小入江があつた。其處では汀の沖積地帯は眞直ぐに通じ、また海岸斷崖は半圓を描いてゐた。余は水際に何か黒いものを認めた。それは最初は焼けた木株と取違へられたのである。

黒いものが動くや、余は直ぐにそれが熊であることを知つた。それは後脚で立ち、前脚を何か變な恰好に動かしそして頭を振つた。それから岩の上に坐り、海の方を睨め出した。獸の動作には多くの人間的なものがあつたから、余は思はずチ、

ン・バオに撃たないで呉れと頼んだ。熊は余の聲を聞きつけたらしく、藪地に逃亡した。それは二回立寄り、じろじろ見廻して更に驅けた。そして間もなく巖間の隙へ隠れた。熊を瞥め、余はシベリヤの土着民が何故にそれを人間化し、また何故にそれは諸物語の中で彼らに扮してゐるかを理解した。余はこれらの考へを自分の伴侶に物語つた。これに對してチャン・バオが答へるには、單り態のみでなく、凡ゆる動物が人間になることを望んでゐると。このことは若干のものが成功してゐる。例へば、人々の中に、猿を聯想するやうな人、また狐、龜、或る種の鳥もしくは蜘蛛を聯想するやうな人がゐる。斯う云ふ人には希望次第で自分の本來的姿に變り、また後に再び人間に還へることが出来る。彼らは非常に屢々夢の中で獸の姿になる。若干の動物が人を真似ることは顯著である。それらは棲居、寝るための軟かい臥床を造りまた冬の食糧貯蔵を行ふのである。

余らが露營に歸つた時には、日は既に全く暮れてゐた。余らのオロチンらは未だ歸つてゐなかつた。多分、彼らは自分の同族を見付け出し、其處で泊るために止まつたのだらう。夕飯後、寝る仕度にかゝつたとき、不意にひよつこりと人の姿が一つ、次で二つ三つ四つ……と立ち現はれた。それは土民であり、余らは全然面識がなかつた。

來訪者たちは黙つて焚火に近寄り、しゃがんで、そして煙管を取出して煙草を喫みにかゝつた。

余は客人たちにお茶と砂糖を再度焚めた。十分程経て、一婦人を同道して、余らの案内人は歸つて來た。

『ソローデーソローデー』と、彼らはお互に挨拶を交した。

ウデへ人たちは相互行違ひになつたことが判明したのである。斧の響きを聞き、海岸の火影を認め、土地の土民たちは偵察に來た。そして、余らの殆んど間近に近づき觀察を始めた。余らが胡散な者でないことを確かめ、ウデへ人らは引揚げた。次で余らの案内者たちもやつて來た。彼らは遊牧小舎とそしてその中に一人の婦人を見付けた。そして、男たちが偵察に赴いたことを知り、彼女と同道して眞直ぐに露營に立歸つて來たのである。

クルイロフは立ち上つて火に薪を投げ入れた。今余は余らの新しい知己を充分觀察することが出来た。

全四人はカザ族出の同一家族の兄弟であつた。即ち、ランドイカ、ヤングイ、ヴンザ及ネオドガ、婦人はキモノと呼ばれた。彼女は彼らの最年長者ランドイカの妻であつた。

ウデへ人らが余に語る所によれば、彼らはツマンヌイ岬の向う側、サマルギ河に住居し、こゝへ來たのは單に狩獵せんが爲である。

客人にお茶の用意をしてゐる間に、余らの案内者たちは、余らの身分や目的先や土民の援助を請ふてゐることなどを、土民たちにスツカリ説明し終へた。

余らと同行するのはヤングイ一人だけと云ふことに極り、後の三人の兄弟は黒貂狩の準備をする爲にニメ河に残ることになつた。

大きな焚火が夜間中焚かれた。熱した空氣は烈しく上に立ち昇り、樹木の枯れた葉を焦がした。それは急に燃え上り、微風に送られて脇の地上へ落ちた。

『わしらはこんなことはしない』とウデへ人たちは言つた。『わしらの焚火は小さい。夜は寝るから火は要らない』と。

事實、土民は決して大きな焚火は焚かない。どうにかして凍死もせず、夜間には起上りもせず、また火を掻き立てたり薪を加へることもしない。多くのものは斯うして冬でも寝るのである。

ウデへ人らは夜は余らから離れて宿をとつた。彼らは苔を足で踏み固め、敷物なしに、心地よげに、僅かに上張りを引掛けて横になつた。

土民らが充分眠つた余の從者たちを起しにかゝつたのは、未だ未明であつた。

濃霧は動かずに地上に垂れ籠めた。空氣は微動だもしない。焚火の煙はゆるやかに立昇つた。海は池の様に靜かであつた。

人々が夜營具を片付けてゐる間に、チャン・バオは湯沸で湯を沸し終りそれを舟に持ち込んだ。ニメ河を經れば海岸は、高い三つの岬—ツマンヌイ、スフレン及ゾロトイによつて、著しく前方に突出してゐる。海岸のこの部分全體は火事のために森林が裸である。枝のない灰色の樹幹、風で倒れた枯木及焼け残つた木株は、土地の景色を極めて陰鬱なものにしてゐる。

余らは海岸傳ひに舟を進め、時には、棧を水に入れたまゝで休憩し、山の面白いパノラマを飽かず眺めた。其處には、毛がモヤモヤした帽子を冠つた巨人の頭に似た岩石小山、その向うにまるで後を睨んでゐるかの様な古代石像があり、またその後には、大きな耳を持つ或る動物の頭の一部が水中から突出してゐた。余らがそれらに間近く接近したとき、幻影は破れた。巨人、獸及古代石像は、たゞの海岸巖に變り、遠方から見えたものとは全く似つてゐなかつた。

海岸の斷壁は多くの場所が上から流れる淡水の作用で崩壊してゐた。他の要因、例へば、風、晝夜夏の温度差、海の飛沫等も、第二義的役割を演じてゐる。一年の雨期にはこゝでは、海岸の相貌がまるで判らない程に變る大崩壊が行はれる。余らに同行せる土民たちは多くの場所を知らなかつた。以前に孤立の巖が在つた場所には瓦礫の堆積が在り、高い斷崖海岸のあつた場所には龜裂が出来てゐた。水はその中を洗つて大きな穴を作り、汀の沖積地帯へ大量の砂礫を打ち揚げた。そして總てこのことは凡そ一〇—一二年の歳月に行はれたのである。

ウデへ人らはそれを自分勝手に解釋した。こゝにはカタザムが居た。そして石人間(クダ・ニ)を粉碎しまた海岸を破壊した。

天氣は一日中陰氣であつた。重い卓布に似た濃霧は海上を閉し、山の頂きを覆つた。蒸氣の極めて強い凝縮はツマンヌイ(濃霧)岬附近に於て行はれるところから、その名稱が生れたのである。ゾロトイ(黄金)岬はそれより遙か下に在り、塵石化された珩石から成る。それは大氣現象の作用下に於て黄色を呈するのである。秋は岬の嶺は華美な黄金色の草で掩

はれる。多分、この二つの事情がそれを斯様な詩的名稱によつて呼びしめるに至つたのであらう。

スフレン岬は海側では、美しい或る鑛脈によつて斜に切斷された圓錐狀の塔の形態を持つてゐる。海は其れに海岸門を打ちぬいた、夥しい海底岩石の爲に舟で其處へ接近することは困難である。

この岬を廻れば海岸は西に向つて急カーヴを爲してゐる。こゝから縦の低地海岸が繰り擴げられ、三〇軒に互つて南南西に走り、遠くギリヤク岬で終つてゐる。

スフレン岬の岩石斷崖が低地海岸と接する一隅には、小河アヂミが注ぐ。アヂミ河から更に二軒進み、長いサマルギ入江と海とを距つ廣い突出砂洲上に、余らは露營を造つた。

黄昏までに尙二時間あつた。余はこの時間を利用し、従者たちが夜營の仕度をしてゐる間に、最寄の高臺に登つた。海岸全體は著しい距離に互つて余には美しく眺望された。海とサルカツ山脈との間には、廣潤な低土壤地帯が在る。こゝでは陸が海を蠶食した。山脈の侵蝕物は、サマルギ及エヂノイ河によつて、また他の諸小河によつても搬出され、カムラン山脈の先端をなすスフレン岬とギリヤク岬との間に沈澱した。海も亦この土壤地帯の形成に關與した。それは數世紀間休みなく土壘を打ち揚げて海岸を地均したのである。森林が最初の土壘に繁生したのは既に古いことであるが、海岸に近づく程、植物は若木であつた。最近の土壘はまだ雜草の生へる間を持たなかつた。その一方は海であり、他方は長い湖、淡水の不明瞭な支流の形の入江であつた。

岸邊の植物は海の有害な影響を蒙つた。不恰好な歪んだ樹木、就中落葉松は、枝が一方へのみ曲つてゐた。それは風の最も強い方向を指示する風信旗のやうなものであつた。太陽に向いた斜面には樅—灌木と樹木との間の中間物—が成長した。その着物は、葉巻蛾に蝕ばまれ、黄色くなり、干からびてゐたが、枝にはまだしつかり着いてゐた。樅は嘗て常緑樹であつた故に、その葉は寒さによつては落ちず、春、新しい葉に場所を譲らねばならない時に落ちるのである。

余は森の下生への中で姫シタナゲを発見した。その生育は貧弱であり、葉は小さく、そして香は、他の場所に於ても同様、海から遠くへ匂った。海岸傳ひに野薔薇の茂みがチラホラ見えだが、既に葉はなかつた。ナ、カマドは稍々興味がある。それは灌木ですらなく、精々高さ一米位の條枝に過ぎず、二二三の小枝とそして大きいとは云へ水っぽい無味の漿果とを持つてゐる。

日中に余は三羽の鳥を撃止めた。即ち、黄色の嘴と淡灰色の脚を持つ秋装束の小さい支那アジサシ属、次で背に暗藍色のマントを持つ白色のシベリヤ鵞(オレンジ色の脚、赤い嘴及暗綠色の眼)、そして最後に冬鴨。それは頭と頸との外は、既に灰色の冬装束で掩はれ、雪白の羽毛で飾られてゐる。渡り鳥は尠なかつた。それらの大群はウスイリ河の河谷を傳つて飛ぶ。こゝでは、海岸に沿ひ、僅かに雁属と小群の小鴨のみが稀に通過する。後者は降霜後晩くまで河沿ひに棲むのである。海濱の汀傳ひに露營への歸途、余は砂礫の中に轉がつた有機的遺物に注意を向けた。それはヒトデ、食用貝類の貝殻及硬鱗魚類の骨であつた。

翌十月二十八日、余らはサマルギ河の河口に着いた。天氣は相變らず曇天であつた。大粒のバラバラ雨が二度降り始めた。今まで穩かだつた海は波立ち始めた。サマルギの河口の岸波は舟を河へ乗入れさせないことを配慮し、余らは舟を突出砂洲の上を引摺り渡し、そしてサマルギ河の入江に沿つて航行を續けた。こゝ數日間の沿海航行で一同は非常に疲勞してゐたので、余らはサマルギの水路の河岸に土民の遊牧小舎を発見するや、全部一致して其處で夜營することを決定した。余はこゝで、海から五軒河を廻れば木造家屋があると云ふことを知つた。それはキウタ小屋ウツンデと呼ばれた。ウデへ人ドンデイブがそれを建てたのであるが、どう云ふものか其處へ住まうとはせず、悪天候の日でさへ避けて通るのである。余は直ちにそれを余らの本據とすることにした。

夕方南方から暴風雨が襲來し、海は荒れ狂ひ始めた。余は探險隊の荷物が氣になつた。汽船(テ・アー・ニコラエフ)は荷

物をそれで運んだ)は、悪天氣の爲にそれをサマルギへ陸揚することが出来ず、クズネツツ河の附近の某所へ置き去つた。其處には、余らの冬の天幕、防寒被服、靴及食糧が在つたのだ。それらをこゝへ持つて來ることをヤングイとコシヤコフとが引受けた。彼らはグズグズ引延すことなく、天候と海波が許す限り明日決行することに極め、また余は從者たちと共に徒歩でギウタ小屋へ赴くことにした。

翌日は晴明な寒い朝であつた。總ては凍結し、池の水は氷が張りつめ、そして蒼室を切れぬ雲が走つた。西風は寒氣を運んだ。余らをキウタ小屋へ案内することはウデへ人ウツンデイブが引受けた。

サマルギ突出砂洲は二つあり、また海波によつて打揚げられた圓礫及砂土から成る三つの土壘が所々に在る。その上部には、葦及海豌豆を混へた粗雑なスゲ属が繁茂した。ヤツと見える程度の小路が、砂洲に沿つて通じてゐた。余らは躊躇なくそれを利用した。

非常に爽快な後ウスイリ地方の秋に特有な一日であつた。輝くが暖かくはない太陽、淡色の明るい空、山々の淡藍色の半透明の霧、黄褐色の草の上に立つ陽炎、總ては、夏は既に去つてしまひ、河の水が凍結し、樹木が凍りつく寒い氣候が到來せることを物語つてゐた。

海は昨日の嵐の後もなほ風ぎなかつた。巨浪は不撓の頑固さを以つて、宛がら進撃するかのやうに、整然とそして無音で相次いで岸へ押し寄せたが、淺瀬に達するや忽ち激怒を發し、奮然として立ち上り、汀の沖積地帯へ咆哮し乍らブツ突かり、白泡をブツ撒けた。水は直ぐに後退した。けれ共新しい波濤はそれを迎へて海岸へ押し戻した。それはザーザーと音を上げて、初回よりは一層遠くへ騒げ上り、また緑褐色の海草や木質の細断片の薄層、汀に新しく打揚げた貝殻に近付き、丸で競走するかのやうに、砂を通して滲出し、またその場所へは泡立つ新しい舌が殺到したのである。

空氣は焦臭さかつた。植物の育成期は過ぎた。そして潤葉樹が鮮やかな秋色の中で色を増すに従つて、樅及ビヒタ(樅の

一種)はそれらを背景にその暗緑色の針葉を益々鮮やかにした。森は透き始め、落葉は益々多くなつた。余らは一列にならんで歩いた。

右も左も水であり、余が歩む中央は、荒々しいスゲ属の生ひ繁る幅三〇—四〇米の狭い砂洲であつた。

河の入江が狭い地峡によつて二度中斷する場所に余らが来たとき、チャン・バオは犬を連れて余らから分れ、水路の向う側へ渡つた。彼は鴨を撃ち取らうと思つた。それは森の最寄に居たのである。最後の小湖の附近、アチミ河の少し手前で砂洲は盡きて、土地は高台となり、色々な灌木類やヨモギ属でこんもり蔽はれてゐた。丁度こゝには野火事があつた。枯れた植物の広い地帯が火で包まれてゐた。黄味がかつた白煙は上方へ渦を巻いて立ち昇り、風のために南東方の海の方へ流された。野火事は余らの方に向ひ、急速に砂洲に迫つて来た。そのことは余らには大して不安ではなかつた。右には植物の無い汀の沖積地帯が在り、それは先方では約三—四米に狭くなつてゐるので、波が海岸へ押寄せる毎に水を浴びる難があつたとは云へ、火はこゝでは直接迫つて来なかつたのである。火の手が砂洲へ擴がるのは余らがそこを通過し去るより早いと云ふことが間もなく明かになつた。火が一つの場所から他へ移る所や、また燃えた枯草が煙の渦に乗つて空を飛行する様は、既に明かになつた。多分、燃える枝のハゼる音も、特に、火が纏繞植物の絡みついた枯れた灌木に燃えついた場合は聞くことが出来た筈だが、海の岸打つ波の騒音は他の一切の響を消し去つたのである。

この時スナムカは前方に狐を發見した。それは小路を傳つて逃げ出し、そして火が砂洲へまだ燃え擴がらない間に、陸地へ逃げ延びようと急いでゐるらしかつた。けれども目算は外れた。其處には取り分け繁茂した大叢があつた。火事がそれに燃えつくや否や、忽ち長い火焰が天に沖した。燃えてゐる木葉は熱氣と一諸に上空に上昇し、余らの方に降りかかり、そして直ちに砂洲のあちらこちらで草に一度に燃えついた。狐は路を斷られた。それで狐は火事が汀の沖積地帯には廻らないことを期待して海の方へ逃げたが、こゝには既にウデへの人のデリユンガが立つてゐた。期せずして、余ら三人は砂洲の幅一は

いに一列に散開した。余らの策略を認めて、狐は左へ逃げ小湖を向う岸へ泳ぎ渡らうとしたが、この時チャン・バオが犬を伴つて岸の方へ近づいて来た。犬は狐を認めて、水に飛び込み、その方へ泳いだ。斯くて狐は四面全體を包圍された。そこでそれは再び砂洲へ這ひ上つた。そして今度は板挟みになつた。即ち火を冒して逃げて自分の綿毛の皮を焼く可きであるかそれとも獵師の方へ飛び込み、萬一の僥倖を期して三つの銃口の下をかい潜る可きか？狐は躊躇らひ始めたが、直ぐ決心した。それは急いで水に飛び込み、そして僅かに鼻、眼及耳だけを水面に出した。犬は既に數歩の所まで迫つてゐた。それで少しの猶豫もなく、狐は再び砂洲に這ひ上り、身震せず、幾分火勢の弱い場所を目差して駆け込んだ。そして機を見て火焔を跳ね越えた。余はそれを残りなく觀望した。と云ふのは、あちら側は植物の無い上り勾配になつてゐたからである。火から二〇歩程逃れて、狐は身震ひし、余らの方を一瞥し、また、犬が水から岸を這上る所を眺め、逃げ去つた。そして程なく森の茂みに隠れ去つた。

第七章 サマルギ河

サマルギ河は河口附近で若干の水路に分れる。それらの間に介在する島には赤楊及サルヤナギが繁茂した。河の右側には、農業にとつて最も都合な肥沃土壤を持つ廣潤な地域が擴がつてゐる。先づ初めは美事な草原が続き、山脈の最寄は、樺、楓、菩提樹、白樺及白楊の茂みである。河は谷の左側を流れる。それが谷の左端に接近する所、溪流クインガトの注ぎ入る附近の、高臺の上にキヴタ小屋が在つた。これは木造家屋であり、天井及床、路の方に開く一板の扉、二ヶの窓（一ヶは河に面し、他は森に面した）を持つてゐた。扉の反対側は廣い板敷床をつけた窓なしの壁であつた。建物は扉の側の左の隅に設けられた鐵の爐で暖められた。余がキヴタ小屋を殊更詳しく説明するわけは、余らは荷物を待つために可なり長い間こゝで過さねばならなかつたからである。余らはそれがなければ出發することが出来ないのである。

余は第一日は近傍の視察に費した。何よりも先づ余の興味を惹いたのは、「サマルギ」と云ふ面白い名稱が何處から生れたかの疑問である。支那人は河を「ウミ・グ・ゴウ」（即ちウミ大谷）と呼び、またウデへ人は「グタ」と呼び、それはロシア語に譯せば「河口」を意味するが故に、單に河の下流のみに關聯するのである。ア・ア・エメリヤノフ(註一)によれば、河はニウイグイと命名されてゐる。遺憾乍ら、彼はこの言葉の説明を行つてゐない。それはネングイ、即ち「尾の房々した狼」(註二)（この地方には全然棲息しない）を意味する言葉に大變似通つてゐる。ロシア文獻ではこの河に關して第一にボシニク(註三)、次いでマキシモフが説明してゐる。前者はそれを「サマリギ」、後者は「サマリガ」と呼んでゐる。

【註一】ア・ア・エメリヤノフ『日本の北沿岸』

【註二】エヌ・ボシニク、二〇九頁參照

【註三】エヌ・ウ・マキシモフ『西方』一九〇九年、第二卷第二部三頁

緯兒河（滿洲の大興安附近）にはオロチン族「モルギン」が居る。「サ」と云ふ呼稱は、種族の固有名稱である。緯兒河のオロチンは自身を「サ・モルギン」と稱してゐる。余らはソロン(註一)の一族がシホダ・アリンを越えてタホベ河へ達したと云ふ事實を知つてゐる。余は其處で一九〇七年に彼らに會ひましたのである。同様にオロチンが滿洲からこゝへ移住し且自身の種類名稱を持ち來ることも可能であつた。けれどもこのことは單に推定に過ぎない。何れにしても、サマルギの名稱の由来は謎である。

余はサマルギで二名の老人に出會つた。彼らはロシア人が現はれたときのことをまだ憶えてゐた。「ロツァ」に關する最初の情報はアムールのゴリドによつて齎らされた。數年を経て彼らは海で船を發見した。それは煙はなく帆を揚げて遠くの沖合緩やかに航行したのである。土民たちはその後をソツと見送り、火を焚かなかつた。その後三人のロツァが南方から到來した。二人は小舟で來たが、第三人目は徒歩であつた。そして何かを視察して紙に書き入れたのである。それは地形測量家グロッセウチではなかつたらうか？

カメチガ族出のインギスはサマルギのウデへ人の中から身を起した。彼は、ボトチからアマグ河の沿岸全體を支配する終身「チンゲ」（即ち、裁判官兼村長）になつた。彼は權威ある聰明な人間であつたらしい。そのことに就ては土民たちの中には多くの逸話が残つてゐる。彼は四〇年以前に死し、河の左岸の高臺、キヴタ小屋の少し下方に埋葬されたのである。(註)

【註】インギスの墓舎は、棺、死體（自然的木乃伊）及總ての埋葬附屬品共に、一九二二年余によつて、學士院人類種誌學博物館へ送られた。

ロシア人の毛皮商人が最初にサマルギ河に現はれたのは一九〇〇年である。それは三人連れであつた。彼らはハバロフスクからシホダ・アリンを越えて到來した。その中の一人は途中で足に凍傷を受けた。二人は歸還したが、病人はウデへ人のバガの小舎に残つた。このロシア人は約二ヶ月間患つて死亡した。土民たちは、それを如何に埋葬し、また彼の靈を如何なる

淨土へ送るべきかに就てホトホト困却し、それが迷つて出ないやうに腐心した。これは成功したやうであつた。何故なら死んだロアの靈は全然現はれなかつたからである。

余は天文学上の或る地點を求める必要があつた。スフレン岬上の地點がサマルギ河に最近接のものであつた。余は快晴を利用し、同日晝食後其處へ出發することにした。と云ふのは仕事の場所で夜を過して翌朝日の出にクロノメーターの修正を行ひ度かつたからである。余は助手に支那人チャン・バオとそしてカザ族のヴンジとヤングヤとを伴つた。余は時間を誤算し、サマルギの河口に着いたときは遅かつた。

いつか夏が過ぎ去つたときには、秋は我がもの顔に振舞つた。總ての植物は裏枯れ、そして土は樹から落ちた葉で掩はれた。秋は夏に打勝つたとは云へ、今では澁々その場所を冬に譲つた。

太陽が正に地平線の彼方に没せんとする頃、余らはアヂミ河に近づいた。森林の多い山脈、恰かも舞臺の側面の様に相次いで位置する岬、及重々しく落付く大洋は、空から反射されたバラ色の光によつて照らされた。凡ては次第に變化した。それは丁度他の世界、ボンヤリと光のない沈黙と静寂の世界になつた。

余らの行く路は、スフレン岬に着く若干手前で左に折れて森に入つた。余らはそれを棄て、眞直ぐアヂミ河に方向をとつた。

この時ウデへのヴンジとヤングイとは俄かにソワソワし出した。そして歩き澁つてお互に寄添ひ始めた。

『どうしたんだ？』と余はヤングイを振返つた。

『ト、ン（形像木）ですよ』と彼は言つて、離れて立つ一本の枯木を指差した。

『あれは悪魔と同じものだ！』と、ヴンジが戦慄しながら小聲でつけ足した。

余は怪木の最寄へ近づきたかつたが、彼らは、この場所は災があり其處へ行つてはならないと云ふことを主張し出した。

余はチャン・バオに眼をやつた。彼の唇には嘲笑的な微笑があつた。彼が土民たちを眺める眼は、愚かな迷信に捉はれた人に對するときのそれであつた。

余は強ひて行つて見ようとした。ところがヴンジとヤングイとは地上に自分のルックサックを卸して、後へ逃げると言ひ出した。讓歩せざるを得なかつた。余らは再び路へ戻り、森を進んだ。こゝには大木が河を横切つて倒れてゐた。伐り折られた枝及他の諸標識は、誰か余らより以前にこれを橋として既にご利用したことを示してゐた。路は始め籐の中へ若干深く分け入つたが、程なく方向を右へ取り、スフレン岬へ登り始めた。余らは、それが余らにとつて望ましい方向をとる限りそれを利用し、次で路を棄て、處女地によつて眞直ぐに海岸斷崖へ近づいた。其處には、木質及灌木性植物の生へてゐない小さい場所が在つた。

黄昏が近づいた。地平線上の天映は河を、火の様に燃え立たした。西の方は、恰かも火山の怖ろしい噴火が始まりそして大地は燃えてゐるかのやうであつた。遠くの間山々は紫色に染まり出した。大洋は假睡情態に入つた。

一同が露營の仕度に取りかゝるや、余は附近を散策するために出掛けた。余は同伴しようとしてチャン・バオを呼んだ。余らは初めは元來た道を辿つたが、次で、アヂミ河を渡つてから、ウデへ人らをあのやうに脅かした樹の方へ方向をとつた。そのすんぐりした太い幹は胸の高さ程の所で四つの部分に分れてゐた。恰かも巨大な仙人掌のやうに、それらは眞直ぐに上空に聳えた。細かい小枝は全然なかつた。一本の枝の頂きには木製の鳥の彫像が、第二の枝の頂きには人間の粗相な似像が、第三には肥えた鱒に似た或る獸が、また第四には蟾蜍に似た何か、それぞれ縛り付けてあつた。樹の全體は樹皮を剥がれ、しかも各幹には、最頂上まで相互均等の間隔を保つて、深さ二種の環狀の溝が刻み取られ、また根の方の、親株が四本の枝に分れてゐるところには、人間の四つの顔が刻んであつた。少し脇には何かの骨が散亂してゐた。大ききから見て、鷹であるが、或は熊であるかも知れない。

この時空に大きな何かの影がチラチラした。余は頭を揚げて大きな夜鳥を発見した。それは音を立てず急轉回を行ひ、地上に下りて忽ち見えなくなった。

チャン・バオは、それが今見えたばかりの所へ駆けつけた。

「ユー！」（居た）と彼は言った。

余はそれへ駆け寄つた。チャン・バオは他の枯木の側に立つてゐた。その木は二つの瘤を持つ太い木株であつた。その木の上方部は地上に横はつてゐた。余は直ぐにそれがエルマン白樺であることを見識つた。

「何處に？」と余は、チャン・バオが鳥を捉へたことと考へて訊ねた。

「此處に！」と彼は手で木株を示して答へた。

余はすんぐりした幹は空洞でありまた鳥はその内部に居るものと考へたが、其處に如何なる孔も発見しなかつたので再び訊ねた。

「何處に？」

「此處に！」と支那人は再び答へ、そして木株の横の腐つた瘤を指した。

「少しも解らないね」と、余は自分の友に言った。

彼はじれつたい様な身振りをして、鳥は木に呑込まれたと云ふことを説明した。彼は現に、それが木の間に飛び寄るや君や、忽ち消え去つたところを見たのである。

遂に余は彼の話の眞に受けることをやめて噤つた。けれ共チャン・バオは自説にこだはつた。そして、瘤を持つ若干の木は獸や鳥がその上に止まるか若しくはどうかした機勢に腹、足又は翼を單に觸れるだけで、それらを呑込む能力を持つと云ふことを物語つた。消へ去つた鳥や獸は常に木質の内部に発見することが出来る。余はこのことが尙更滑稽に思はれたので

ある。と云ふのは、たつた今、斯う云ふ風な疑惑をもつてウデヘ人の偏見を面白いとした彼が、今俄かに同一の場所で枯れた白樺の老木に夜鳥が呑まれると云ふ可能を信じたからである。余の嘲笑に答へて、チャン・バオは意味深長に言った。

「ツニヤ・ミン・テ・ニ・カンカ」（宜しい、明日御自分で御覽なさい）と。

余らは二〇分の後再びシムルクム岬へ登つた。途中余はチャン・バオに奇蹟的な木に就て話しを始めた。彼は暫らく黙つてゐたが、程なく、支那人はロシア人には知られてゐない事柄を澤山知つてゐると云ふことを話し出した。彼はこの言葉の裏に、不運にもこれらの知識に恵まれない道連れに對して自分の先輩振りを匂はせたのである。

余は彼の教訓を傾聴するものであることを彼に判らせるやう勉めた。心理に對する操作は奏功した。

チャン・バオが余に傳へたところでは、斯やうな木を地上に見るのは極めて珍らしいことである。それは生木であらうと枯木であらうと構はない。それは凡ての獸や鳥を呑み込む危険な樹である。時にはそれらは鳥を再び自由に解放することもあるが、大抵の場合は一生閉ぢ込めておくのである。また、誰でも自分に近寄る者を寫眞機の様子に、樹皮の下に撮影し去るやうな樹もある。人間は呑み込まれるやうな惧れは決してないが、その姿を木質中に寫し取られることはある。支那人の見解によれば、余らが今日接した木は危険な木の部類に屬した。それは「シユ・チオ・リヤ」と命名されるのである。

それで余は彼に、シューマンの木に對しては如何思ふかと訊ねた。

チャン・バオは一種特別に辛辣に輕蔑した。

「タイズは全く馬鹿者ですよ」と彼は言った。その聲には輕蔑し切つた皮肉があつた。

遅くなつた。闇は既に地上を押包んだ。余らは余を速めた。森は薄くなり、路は良くなつた。遂に前方に光が見えた。それは余らの露營であつた。

余らは夕飯後夜鳥を呑み込む樹に就て再び語り合つた。ウジンジとヤングイとは、總ての原因はシューマンの木にあり、ま

た總ての事柄は「悪魔」の悪戯に外ならないと云ふ自分の見解をなほ更強めた。余は二人に、余らがどんな災ひにも遭はなかつた事實を指摘した。これに對してヤングイは自己流に確信ある反駁を再び開陳した。ロシヤ人は都會や村に住居し、密林には住まない。従つて彼らには、ウデへ人を眼の敵にする悪魔との交渉が生じないのである。再び皮肉たつぷりな嘲笑がチャン・バオの唇に漂よつた。

皆の者は食後就寢の仕度に取りかゝつたが、余は日記帳を取り出し、座つて一日の自分の印象を記入し始めた。仕事を終へ、余は立ち上り、路を傳つて岬の頂上に登つた。偉大な光景が余の眼前に繰り擴げられた。大洋の表面は絶對的靜寂であつた。鏡の如き水面は、幾百萬の星を撒いた空を映した。恰かも余は天地創造の中心に在り、恰かも太陽は無限の彼方に追ひやられて無数の星群の中に隠れ去つたかの如き感があつた。地上の總ての愉悅と苦難とは余には、アヂミ河畔の奇怪な形像木に對する余の従者たちの偏見の様に、憐れむべき且取るに足らぬものに思はれた。余が我に返つたときは既に夜は更けてゐた。何故なら星は空で著しく位置を變へてゐたからである。

枯木の在る方面で「おゝみゝづく」が淋しく鳴いた。

露營に歸へり、余はもう一度焚火に薪を投げ入れ、そして毛布を纏つて火の側に横になり、直ぐに熟睡に入つた。

東天が白みかけるや否や、余は熟眠せる従者たちを起した。土民たちが茶の仕度をする間に、余はチャン・バオと共に觀測に必要な總ての準備した。

東の空に集積せる濃霧は恰かも太陽を押し包まんとするかの如くであつたが、敵す可くもない争ひの無益を悟り、急に消散し始めた。余は光り輝く旭光が水平線上に幾分昇る頃を見はからひ、器械によつて地平線に對してその絶對高度を測定し始めた。

この仕事は一時間足らずで終り、余らは道具を纏めて歸り道に就いた。余らがシャーマンの木の邊りに來たとき、チャン・

バオはルックサックを取り下し、中から斧を取り出した。そして余に暫くの間待つて呉れと頼み、余らが昨晩夜鳥を見た場所へ赴いた。二人のウデへ人は陽光の下では「悪魔」を左程怖れなかつたが、それでも木の側へは寄りつかずに離れてゐた。彼らは地上に座り、煙草を喫みにかゝつたが、余は支那人が何をするのか見に行つた。チャン・バオは白樺の株を調べ上げ、その瘤の一つを伐り割り始めた。仕事は、指物師のやうにうまいものであつた。斧は彼の手にかゝれば飽のやうであつた。彼は瘤の突出部を伐り取ると、それを綺麗に削り始めた。時折、木株を覗き込み、注意深く切斷箇所を調べ、屢々「アイ・ヤハ……」と同じ感歎詞を繰り返へした。

それから彼は余をかへり見て言葉かけた。「ニ・カンカ・テ・イオウ・ツイ」（御覽なさい、そら夜鳥を）。余は木株を覗き込み、木目の切斷面に、若干幻想的であるが、實際、オホミ、ズクかそれとも鼻を想はすやうな模様を認めることが出來た。それらと並んで、少しばかり鳥に似たものや、それから甲蟲や蛙にさへ似た他の模様もあつたのである。支那人の言葉によれば、それら凡ては、生きた姿で最早決して地上に現はれない様に、木に呑み込まれた生き物であつた。余は殘念にも寫眞機を携帯してゐなかつた。木目の奇妙な姿を寫し取つておきたかつたが、どうにも仕様なかつた。

チャン・バオは、余が納得したものと考へ、顔に得意の色を浮べて木から離れた。

余らは殘りの道を黙つて歩き、正午過ぎ間もなくキヅク小屋に歸着した。

クズネツウ河から荷物の來るのは大變手間取つた。時間潰しに、余は余らの本據地近傍の見學を行つた。これらの散策の折に余は河の凍結する有様を視察する機會を持つた。十月二十日に初氷が張つた。シベリヤ人たちはそれを「サロム」と呼んでゐる。それは水に浮游する薄い細かい氷片である。それらは量に於ても大きさに於ても増大した。二十八日には初氷は密になつた。十一月四日から十日まで風の強い寒い天候が続いた。この時に淺瀬には底氷が結成し始めた。その出現はどう云ふ風に説明するか？多分、その形成には、泡立つ水に包含する冷たい空氣が關與するらしい。恐

らく、それは石の間に沈んだ初氷でもあつた。最初に凍結した氷の結晶は脆弱であり、杖によつて底から易々と分離したがその後それらは一層堅くなつた。一週間の間にそれらは浅瀬で増大して、龍を持つ眞の氷の浅瀬を造つた。漸次底氷は浅瀬から流れを下り最も深い場所へ擴がり出した。譯山累積したときには、それは浮き上りそして底から様々の大きさの石を持ち上げた。

十一月中旬頃にサマルギは結氷し始めた。一團をなす浮氷塊は河の曲り角に集まり、氷塊の閉塞物を造つた。氷は割れて河岸に累積した。そして氷は乾いた水路へ擴がり、低い所の島全體を沈めた。斯やうな水路は冬期旅行を著しく容易ならしめ、行程を短縮せしめる。十一月二十日にサマルギは河口から二五軒に亘つて凍結したが、それより上流は、それは岸氷(狭くなつたり廣くなつたりして蛇腹状に河の兩側を取り圍む)を除外すれば、まだ氷に閉されなかつた。

河の結氷期には氷は當分の間は氷の上を流れ、そして後氷の層で掩はれた。その後その水準は低下し始めた。そこで氷は河の中央へ沈下し、一方岸氷はめ入り込み、あちらこちらに龜裂を生じ、大きな空隙を造つた。

余はチャン・バオと二人で或る日河の岸沿ひに進み、何か雑談を交してゐた。不意に彼は立停つてそして言つた。

『ヤザ!』(鴨だ)。

『何處に?』と、余は訝しんで彼に訊ねた。

『一寸停まつて、お聞きなさいよ』と彼は言つた。

約二分、實際、余は、水中で餌を漁るときの鴨が造る騒音を耳にした。

『こりや不思議だ!』と余は思はず叫んだ。『總ての池が底まで凍り付く十二月に鴨が居る。さて何處にゐるんだらう?』

『こゝだ』とチャン・バオは答へて、氷上を指差した。余らは鳥を探しにかゝつた。チャン・バオは氷上に臥して騒音によつて彼らの所在を突止めようと努めた。

或る箇所に氷に大きな割目があつた。その下端と河の水面との間には約一米程の間隔があつた。余は破れ目に近づき、二羽の小鴨が余の側を靜かに泳ぎ抜けるのを目撃した。一羽は絶えず水中で何かを漁り、他の一羽はそれと並んで泳ぎ、尾を振り、ピーピー鳴き(鴨の)にも似てなければガァガァ鳴きにも似てない鳴き聲を發した。

これは珍しい現象であつた。要するに、秋に飛去るのは全部の鴨ではなかつたのだ。それらの一部は越冬するために残るのである。それらは氷の下の空隙で避寒し、そして、餌も充分にありさうである。

ギヅタ小屋の附近には余らの遠行氣象觀測所が設置され、諸器械が備へられ、また長い吹流しを附けた可なり高いマスケットが建てられた。それは風の方向を測り、またそれによつて雲の動きをも測定することが出来るのである。見張人にはヴィロフがあつた。十二月四日早朝、彼は雜記帳を手にして小屋を出たが、直ぐに戻つて来て、空には何か鮮やかな色が現はれたと云ふことを報告した。余は着物を着て同じく急いで外に出た。素晴らしい風であつた。寒暖計は攝氏二六度、氣壓七五〇兆を示した。空には二つの積雲があつた。下層の雲は疎らな大きな塊であり、上層のものは薄い綿雲であつた。太陽が地平線上一〇度の高さに現はれたとき、上層雲は驚く程美しく彩色された。その邊緣は、太陽に照され、宛ら溶解した金屬の湯のやうであつた。その後は、黒紫色、黄金色、紫紅色及董色を配してゐた。同時に下層雲はオレンジ色に染り、火事の天映に照らされた煙に似たものになつた。この現象は長くは續かなかつた。それは急速に消え去り、それに次でバロメータは低下し出した。空には雨雲が現はれ、そして夕方には雪になつた。

余は二日間書類の整理のために外出しなかつた。三日目に仕事を終へ、余はノートを閉ぢ、河傳ひに浅瀬を若干散策するために屋外に出た。

測候小舎の傍で余は射手グレゴラを發見した。彼は屈み込み、余らの犬の中の最も大きいファイチャに頸輪を付けてゐた。彼は背に小銃を負つてゐた。

「何處へ行くんだね？」と余は訊ねた。

「獵に行かうと思ふのです」と彼は答へて、革條を強く緊め上げた。

「一諸に行かう」と余は言つて河原へ下り始めた。

グレゴラは、云はば、獵運には恵まれない人間の一人であつた。一日中森を駆けずり廻り、歸つて來るときはいつも空手であつた。同僚たちは彼を冷かして、冗談に「不運獵師」と呼んだ。

「ヨウ、如何だい、大ものに出遭つたかい？」と、彼が獲物を持たず空腹と疲れで歸つて來るときには、いつも斯う質問を浴せかけたのである。

「駄目だ！」とグレゴラは答へた。「何にも出遭はなかつたよ」。

「君には兎は獲れつこないよ、せめて虎でも狙へば、甘く行つたらうに」と射手たちは皮肉つた。

けれどもグレゴラは温順しい我慢強い男であつて、同僚の揶揄に對して腹を立てなかつた。

「明日また行くよ」と、彼はそれに答へ、大きな期待をかけた自分の銃に油を差すのである。

それはさておき、余は前に進んだが、間もなくグレゴラも余に追いついた。彼は犬を革紐で繋いでゐた。

河は急激に凍結した。夜間に岸氷は所々で聯結して、自然の橋を造つた。落込まないやうに、余らは手に重い杖を持ち、それで一步一步前の氷を試して易々と無事にサマルギの向ふ岸へ渡つた。

寒い天氣であつた。土面はすつかり凍りついてはゐたが、雪はまだ降らなかつた。曇天、遠くの青味がかつた灰色の山々

落葉した樹木及黄色く裏枯れた雜草、總ては一體となつて陰鬱な景色を造り、哀愁をそゝつた。

キヅタ小屋の眞向ひの左岸は平地である。山はこゝでは、尠く共二〇軒程退いてゐる。ウデへ人の話によれば、そのあちら側に小河アチミの流域がある。

こゝで問題にする低地曠野は、貧弱な性質の混合疎林で掩はれてゐる。森林帯は、鳥瞰すれば、絲枝模様のレース状に沼澤低地を圍繞してゐた。稀に此處彼處に、樹齡一五〇年から二〇〇年に及ぶ白楊、菩提樹、黒白樺等の老大木が見られた。

余らは河岸から離れるや、一度に足の入れ場のない藪へ踏み込んだ。凸凹の土地、乾いた水路、砂礫地帯、倒木や現在は既に立枯れになつた猛々しい雜草とで埋まつた溝及溜池、灌木狀赤楊、地上に垂れ下がる小枝を持つゴチ、ゴチに亂れたマハレブ櫻林、頂きの枯死した樹木、水で運ばれた瓦礫——余がグレゴラと共に狩獵に向つたサマルギ河の底地の湿地帯森林は、斯くの如きものであつた。

それより先は倒壞木は減少してゐるやうであつたが、灌木林とそして貧弱な瘦せた尙僕病患者のやうに屈曲した若樹とは怖ろしく亂雑に繁茂し且相互に交錯し合つてゐた。

余はグレゴラと肩を並べ、話し乍ら進んだ。彼は犬を革紐で縛つてゐた、それは後方からノロノロ歩きた余らの歩行を妨害もした。紐は絶え間なく小枝に引かゝつた。フィチは時折樹の右手を行き、同時にグレゴラはそれの左手を行つた。

そのことは彼を屢々立停らしめ、また犬を自分の側へ引戻すか或は彼の方から犬の方へ迂回するかを餘儀なからしめたのである。

「放してやり給へ」と余は従者に言つた。「こんな森には猛獸も居まい」と。

「全くです」とグレゴラは答へて、フィチの革紐を外してやつた。それから彼はそれを腰に挿んで余と並んで進んだ。犬は自由を感じ、愉快に跳ね上り、そして倒木を飛越え、藪に隠れた。

茂みを掻き分けて、余らは大きな谷間の邊緣に出た。それは下部は灌木林が生茂り、また斜面は樺及白樺からなる若木の疎林が生茂つた。

そこで余らは休憩して相談した。谷間の縁を若干進んだ後、向うに見える小山(その麓にキヅタ小屋が在る)を目標にし

て歸宅すると云ふことに極めたのである。

余らが數百歩も行き過ぎない間に、突然谷間から野生山羊が跳び出した。それは谷間を駆け上らんとしたが、この時それに向つて犬が飛びかゝつて來た。驚ろいた山羊は急いで後に返すと共に大跳躍をやつた。灌木を跳越え、それは瞬く間に谷間の向ふ縁へ姿を現し、そしてこゝで釘付けられた様に立ち停つた。

グレゴラは急いで狙ひをつけて引金を引いたが、發火しなかつた。狙つて、彼は再び撃鐵を上に掲げ、正しく狙ひを定めて引金を引いたが、矢張り何のことも起らなかつた。

近づく犬を認め、山羊は尻を向けて弱く跳ね上り林の茂みに驅け去つた。

『不發だ』とグレゴラは言つて、駄目になつた弾を引き出すために遊底を開いたが、何と銃には装弾がしてなかつた。

彼の遺憾や思ふべしである。立停つてゐる獸を撃つてと云ふやうな機會を持つこと、またこんな好機を逸すると云ふやうなことは、ザラにあるものではない。一體どうしたわけなのか？、單に忘れたと云ふことがその原因である。彼は獵に出る前に自分の銃に装弾することを曾つて忘れたことはなかつたが、不幸にもこの時はウツカリしてゐたのである。グレゴラは泣き出しさうであつた。

『大したことではない』と余は彼に言つた。『我慢し給へ、君！君の方へも運が廻つて行くだらうよ。何ごとも一べんに成功するもんぢやない。何ごとも慣れることゝ注意することゝが必要だ』。

余の言葉は、彼を落着かせたらしい。彼は銃に弾籠めをし、そして余らは出發した。

谷間の蔭の高い雜草の中には山羊の臥床が可なり屢々見受けられた。

『ソラ君は今、獸を何處で探す必要があるかを知つたらう』と余はグレゴラを頼りみた。『それに近づくときは、いつも風下から行くんだよ』。

同時に余は彼に、凡ゆる獸は人間の姿を怖れると云ふよりは、寧ろ人間の發する匂を怖れるものであると云ふことを説明した。

こんな風に余らは話をしながら進んだ。漸く余は疲れを覺えて、谷間の邊に腰を以下して憩ふた。

突然余らから程近い茂みの中で犬の悲鳴が聞えた。余らは其處へ驅けつけ、そして其處の老菩提樹の下に次のやうな光景を見た。

フィチは仰向けに倒れ、その上には大きな山猫がゐた。その右足は恰かも打撃を加へるためのやうに振り上げられ、また左足は犬の頭を地上に壓しつけてゐた。後ろへ反り立つた耳、黄綠色の兇猛な眼、剥き出した大きな齒及荒々しい唸り聲は、それを非常に怖いものにした。グレゴラは素速く狙ひをつけて撃ち放つた。山猫はフーフ聲（猫の）に似た何か奇妙な鳴き聲を發し、跳び上つて横に倒れた。暫時それは、欠伸をし、脚を痙攣的に伸し、そして遂に絶命した。

犬は自由になるや、尾を垂れ、逃げようとして驅けたが、直ぐに思ひ返して足で自分の鼻面を擦りまた頭を振り始めた。この時余は自分の頭上に葉ずれの音を聞いた。樹上を見上げ、余はそこに、最初のものゝ半分犬の他の山猫を發見した。それは山猫の仔猫であつた。それは犬に驚ろいて、樹に攀ち上つたのであり、そして母猫はそれを護つて勇敢にフィチに跳びかゝつたのである。

余ら二人は不意打ちを喰つて狼狽へた。さうかうする内に仔猫は素速く樹の枝を傳つて逃げ、地上に跳び下りて茂みに姿を隠した。

犬は、新しい獸の出現に喫驚し、その場から驚ろきに逃げ去つた。グレゴラは仔猫の後を追驅けたが、全然見失つて間もなく引き返して來た。

『ソレ御覽』と余は彼に言つた。『君は今立派なトロフィーを持つてキヴタ小屋へ歸へるんだ。山猫を持ち給へ。サア歸へ』

らう』。

グレゴラは山猫を肩に背負ひ、そして余らは一諸に眞直ぐに河の方へ向つた。余らが疎らな樺林を通るとき、何ものか、余らの側から素速く茂みへ逃げるのを、余は二回感じた。

動物の屍體は可なり重かつたので、グレゴラは度々足を停めて息を入れた。余は二人で一諸に棒で山猫を擔ふやうに勧めたが、彼は拒はり、唯銃だけを持つて呉れるやうにと頼んだ。

斯う云ふ風にして更に約二軒を過ぎ、余らは休息するため腰を卸した。グレゴラは巻煙草を喫ひ始めたが、余は撃ち取つた獸をよく調べて見て手でその毛を撫で始めた。このとき余の視野の中に何か變つたものが入つた。余は伏目になつて仔猫を見た。それは草蔭から出て、注意深く余を見守り、そして、どう云ふわけで自分の母親が動くことが出来ずまた手を觸れさせてもゐるのかを、訝かしんでゐるかのやうであつた。

余は撃たなかつたが、グレゴラは我慢が出来ずに銃に手を伸ばした。バタバタした行動は仔猫を驚かし、そしてそれは茂の中にも再び隠れ去つた。

次の休憩地に於て余らは再びそれを發見した。仔猫は樹上に在り、そして余らはそれに間近く近づいて辛うじてそれを發見したのである。仔猫は斯う云ふ風にして河の最寄りまで余らにつき纏ひ、前に驅け抜けたり、すぐ後からつけて來たりした。余は仔猫を生捕りにした事とさへ出来ると考へた。

遂に森は終つた。余らは河の砂利洲に出た。仔猫は見えなかつたが、それが隣接の叢の中で鳴くのが聞えた。

突然藪から一度に三匹の犬が跳び出して來た。その中には、多分案内者らしく思はれるファイチャもゐた。彼らの驅ける様子や、緊張した耳及輝いた眼の色によつて、彼らが獸を既に嗅ぎつけてしまつたことが判つた。

余は犬を呼びとめかけ、後から追驅けたが、追ひつくことが出来ず、茂みの中で足をとられて倒れた。余が起き上り、犬

共が荒れ狂ふ場所に驅けつたときには、仔猫は既に死んでゐた。

余は死んだ動物が哀れになつた。母猫は愛兒を庇護し、また愛兒は死によつて慈母の跡を追つたのである。

余は自分の感想をグレゴラに分ちたかつたが、彼が有頂天になつてゐるので、思ひ止まつた。

『こいつも捉へた！』と彼は愉快氣に叫んだ。『フン、有難いことだ。ファルトだ！^(註)わしは明日も亦獵に行き、三匹の犬全部を連れて行かう』。

【註】シベリヤ人の使ふ成功を意味する表現。

十分程余らは岸邊で憩ふた。各自思ひ思ひの考へに耽つた。

『ヤア、行かう』と、余は自分の連に言つた。

余らは腰を上げた。

空には重々しい黒雲が驅けた。山には雪が降つてゐた。キヴタ小屋からは白味を帯びた煙の流れが立ち昇つてゐる。其處では誰か、薪を割り、そして斧の響は河の此方側まで響き渡つた。余らが歸宅するや、射手たちはグレゴラを取り巻いた彼は事件の一部始終を物語り始めたが、余は眞直ぐに自室に入り外套を脱いで仕事に取りかゝつた。

第八章 騷動

翌日、射手のマルニチは、自分は狩獵に行くつもりであると言ひ出した。此の申し出では、みんなに親しみある微笑を以て迎へられた。一體、彼は經濟のことを擔當してゐた。そして此の任務を、我々が舟で海岸傳ひに航行する間も、又サマルギ河畔のキヴタの小屋に宿泊してゐる間も、終始彼は遂行して來たのである。一日中彼は經濟方面のことに奔走した。例へば、朝は彼は炊事にとりかゝり、晝には晝食を煮てつくり、晩は夕食の準備をし、そして後に又お茶を沸した。他の連中が狩りに行ける時でも、マルニチは炊事場に就きつきりであつた。

ところが今日は彼は、肉無しにやつて行くのは嫌やになつたと言ひ出した。で、彼は犬を全部引き連れて狩りに出かける譯けである。余等は、最初は之れを冗談だらうと考へた。然し後で、彼は本當に丸一日がかりで行くことを決心したと云ふことを承知した。

マルニチは、グレゴラに、自分の代りに留守番するやう説き伏せて、そして自分では出發に取りかゝつた。即ち先づ半シユーバを着て、靴製長靴を履き、大きな毛帽子をかぶり、無指手袋をはめた。それから彼は全部の同伴犬を一筋の長い革條に繋ぎ、そして銃を手持つて森に出かけたのである。犬共はバラ／＼に走り、樹木の間にからみついて、それが爲めに歩行を妨害された。洒落や皮肉の忠言を浴びて、彼は間もなく林の中に見えなくなつた。

夜になつて小雪が降り、そして薄い層で地上は覆はれた。朝方になつて空はいくらか晴れて來て、そして何處にか晴れ間も見えて來た。雲の切れ間から、時々射す日光は、雪で眞白くなつた遠くの山々の軟かな輪廓や又はキヴタの小屋の附近の森林を照した。

家に歸つて、余は仕事に取りかつた。即ち旅行日誌の記述を、先きに立てた行軍計畫と照し合はせ、又は氣壓計による測

量をしなければならなかつた。誰か射手が外から這入つて來た。それから半時間立つた。

突然ロジコフが狂氣のやうに小屋の中に驅け込んで來た。壁に吊されてゐた銃を掴み、彼は藪地に戸外にまた驅け出した。彼の後からまた次ぎの射手が、更に第三人目の射手が驅け込んで來て、そしてまたみんな銃を取り、ドアに突き當つたり、互ひに邪魔し合つたが、何處へか驅け去つた。一體何事が起つたのかと余が質ねたのに、彼等は返事もしなかつた。然し彼等の顔色から判斷すると、みんなが何かに興奮し、そして斯かる椿事を一刻も看過出來ないと云ふ様に周章てゐたことが分る。

射手達の後から余も亦た周章て、小屋をとび出した。そして、誠に面白い光景を見たのである。

マルニチが狩りに行つた方面から、驚いた鹿が目先が見えないで跳び出して來た。鹿は小屋の附近の射手達の直ぐ近くまで驅けて來た。更に又喫驚して、鹿は川の他岸に渡るつもりで、川の中に跳び込んだ。然し悲しい哉、滑かな氷上に滑つて轉んだ。鹿は一生懸命になつて立ち上がらんとしたが、その蹄は滑り、足どりはしどろもどろになり、或は片側に傾むくかと思へば又他の方によろめいた。

射手達はみんな銃を手持つて、鹿の所に驅け寄り、二百歩ばかりの所に縦列になつて展開した。最初に驅け寄つたのはロジコフであつた。こんな場合にはよくあるが如く、彼は狙ひも良く定めずに、いゝ加減に鹿の方に向けて發射し、そして的を外づれた。それから次の者が撃ち、次ぎには三番目の者が撃つて、そしてみんなが一巡した。遂に鹿はやつと起き上つて、そして雪の振り撒かれた鏡のやうにすべ／＼した氷上をよろけながら、川の他岸の方に向つて行つた。射手達は鹿に向つて亂射したが、みんなが慌てゝゐたので、一つも命中しなかつた。鹿は運よく對岸に達し、跳躍して藪の中に姿を消した。誰か一人鹿の跡を追ひかけて行つたが、残りの者は小屋に歸つて來た。身振りや聲の調子から察して射手達は相互に、射損じたことを非難し合ひ、而も第一發を放つたロジコフ君を最も叱責してゐたことが解つた。

此の時、林の中に犬が見えた。彼等は二匹三匹づゝか、又は一匹づゝ繋がれて、バラ／＼に驅けて来た。警戒してゐるやうな耳、光つた眼、發作的な息づかひ等から見て、犬は鹿の跡を追ひかけてゐることが察せられた。我々は犬等を抑へることが出来ない程、そんなに速く余等の驅きを驅け去つた。

それから十分位もして、マルニチも亦左手に鐵砲を握り、右手は落膽したやうな手振りして、驅けて来た。彼の様子は全く途方に暮れてゐるやうで、毛帽子は眼深かに被り、顔面は搔傷だらけになり、衣服は引き裂かれてゐた。

『何處だ？何處だ？』と彼は叫んだ。

『何んだ？』と驚いた射手達は質ねた。

『鹿だよ！』と彼はもどかしげに答へた——鹿が君等の方に逃げて行つたんだ。そして河畔に犬の居るのを見るや、その方に驅け出した。』

『おい一寸待てや——とロジコフは大聲で彼に囁鳴つた——もう後の祭りだ。鹿は遠く逃げて行つたよ』

マルニチは立ちとまつて、念の爲め河上を眺めて見て、それから手を振つて歸つた。

射手達は彼を取り巻き、四方八方から見つめて、そして質問の雨を降らし始めた。

『何處に君行つたんだ？何をしゐたんだ？』と彼等は異口同音に質ねた。

マルニチは呼吸が平生に復してから、毛帽子を被り直ほし、そして語り始めた。ところで、彼が語れば語る程、彼の友人等は大きな聲で笑つた。

マルニチの事件は次のやうであつた。

狩りに出かけたはよいが、彼は銃に裝弾しないで、ケースの這入つた彈藥包をファルト製長靴の胸廻りに押し込んでおいた。

彼の連れて行つた一二匹の桶挽き用犬は始終ひどく手綱を引張つた。手綱が切れて逃げはすまいかと心配しながら、彼は都合良き時を見計つて、何かの樹木の所で押へつけ、そしてそれを自分のバンドに結びつけた。

残念なるかな、此の時近くの溪谷から鹿が登つて来た。マルニチは自分の銃が裝弾されてゐないことを想ひ出して、長靴の胸の中の彈藥包を探した。ところが、ケースは非常に下にさがつてゐたので、どうしても手では夫れにとゞかなかつた。

そこで彼は坐つて、長靴を脱ぎ、夫れを振つてケースを出した。此の瞬間、犬等は鹿を嗅ぎつけて、山から坂下に驅け出して行つた。

マルニチの語るには、犬共は、丸で木株を紐で引張るやうにして、彼を地面に引き倒した。彼は叫聲を出して、藪を掴み、石に抱きつき、手當り次第何でもかまはず握つた。

然し間もなく、隣り合つて生えてゐる二本の木の間に甘く挟まれた。そして遂に手綱は切れ、或る犬は只だ野獸を追ひ驅けて行つた。

斯くしてマルニチの足跡は地上に生々しく遺つてゐた。そこで彼は此の自分の足跡傳ひに引き返して容易く自分の長靴の所に戻つた。其處には鐵砲とそれから銃彈包には霽彈ケースも一所に置いてあつた。

銃に裝弾して、彼は、鹿を追ひつかうと思つて犬のあとを驅けて行つた。人間の聲や射撃の音や犬の吠え聲等のする方向に走つたらキウニタの小屋に來た。

マルニチは、鹿が逃げてしまつたと云ふことを知つた時、彼は怒つた。

『俺は幾時間犬と一諸に鹿を追ひかけたことか、而も君等はそんなに大勢ゐて、倒れてゐる奴を射留めることが出来なかつたんだ——と彼はいかにも不満な調子で語つた——俺も君等の爲めに狩りになんか行きやしねえ。』